
薔薇のマリア Ver2
この歌よ届けとばかりに僕らは歌っていた
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
Ver 2
角川スニーカー文庫


ああ、マリアンヌ。お願いだ。
僕のそばにきてくれないだろうか、
僕はきみを……。
the 4th song
小さな恋と裏切りのエレジー
CAST —— Marianne　Magi Vincent　Magician Edgar　Magi Magaro　etc.
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
Ver2


the 2nd song 月下砂海夜曲
……ねぇ……これは、
わたし、の……復讐なのよ。
……そして、裏切り……でも、あって……
CAST——Rurihakobe Sirok'ne Sorrel Jinnah etc.


CAST——Katari Coyoco Tatsuroo etc.
一緒にいたい。もっと顔を見たい。
笑顔を見たい。手料理が食べたい。
好きだ。好きだ。コヨコ、わし、お前のこと、
めっちゃ好っきやねん……！
the 3rd song 男が背中で歌うブルーズ

CAST——Tomatokun　Lilluco　Joker&Claudia　Rom Four　etc.



the 1st song 賢者が愚者に捧ぐダージュ

薔薇のマリア Ver2

この歌よ届けとばかりに僕らは歌っていた

十文字　青

角川スニーカー文庫

◆

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver2

— We were always wishing our songs carry a ways —

Ao Jyumonji

First published 2007 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

◆

illustration ： BUNBUN

design work ： designCREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver 2

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF
REDROSE
Ver 2

MAIN CHARACTERS



Jean-Jacques de Joker
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー

でたらめ貴族。



Tomatokun
トマトクン

悩めるお節介男。



Rurihakobe
瑠璃繁縷

最高傑作のアッサシン。



Lilluco
リルコ

薄着の超絶美人。



Rom Four
ロム・フォウ

深い森の黒真珠。



Jinnah
ジナ

囚われの姫君。



Shinone
羊蹄

少女アッサシン。



Sirok'ne
シロクネ

ラハンに名だたるアサシエン。



Tatsuroo
タツロー

ネリ族の青年。



Coyoco
コヨコ

ネリ族の娘。



Katari
カタリ

漢。



Magician Edgar
魔術士エドガー

狂気の魔術士。



Magi Vincent
魔術師ヴィンセント

盲目の魔術師。



Marianne
マリアンヌ

真紅の髪のメイド。

and the others

Claudia&Twaning
クローディア&トワニング

Dread Warrior&Q'bell-Adrus
魔導兵&きゅー

"Mega-Sage" Morg&Evangeline etc.
〝超賢者〟モーグ&エヴァンジェリン　他

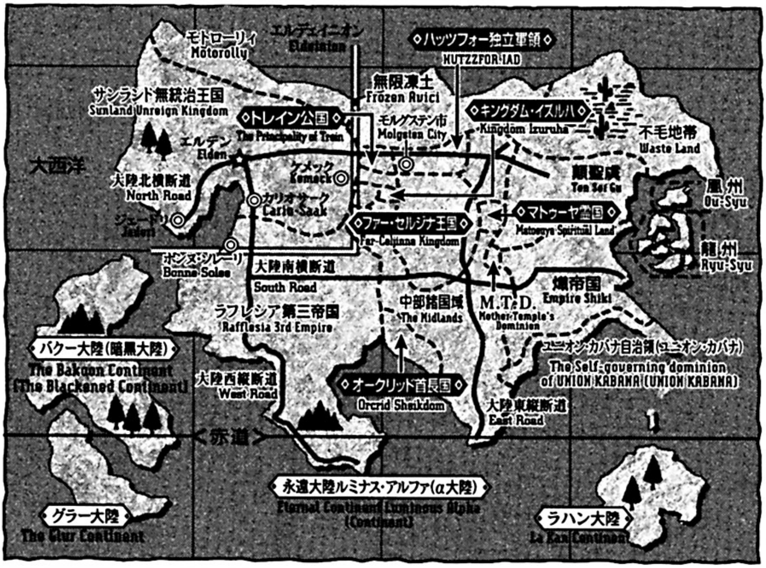
Prince of Daan
ダーン公

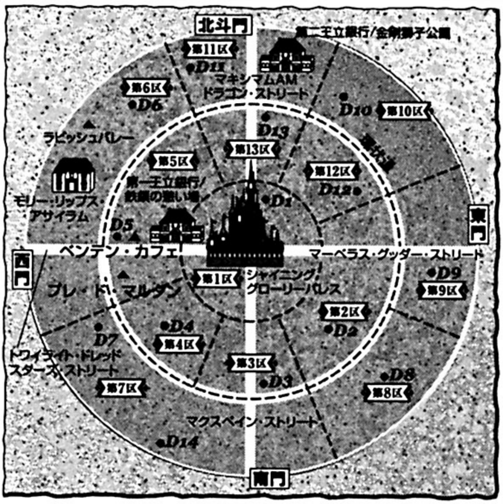
Yog Floo-Yo Maid'orf Psychengren 'Meiselch
ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ

Magi Magaro, Wizard Deus&Magi Heym
魔術師マガロ、魔導士デウス&魔術師ヘイム

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden: the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作/On Graphics

an overture

「──うん」

　ベアトリーチェがうなずいた。モリーも満まん更ざらでもないといった表情だ。たしかに、悪くない。キャラメリゼされていい焼き色がついた外側は適度に香こうばしいけれど、林りん檎ごの味わい自体はしっかりしていて、甘みと酸味のバランスもほどよいかんじだ。ただ、個人的な好みではあるものの、タルトタタンには是ぜ非ひともあって欲しいどっしり感がやや足りない。

「まあまあ、かな？」

「いや、そんなことはないだろう。わたしは十分おいしいと思うが」

「おいしいことはおいしいんだけどね。なんてゆうか、これだと、もう一つ別のケーキが食べたくなるっていうか」

「それは欲張りというものだ。だいたい、甘い物の食べすぎはよくない。なんでもほどほどにしておかないと、思いもかけない大変な結果を招いてしまうことだってあるんだ」

「気がついたら、びっくりするほど体重が増えてたり？」

「そうだ！　団にいたころは、増えるよりむしろ減るほうに注意しないといけなかったのに、わずか十日で一・三キルグラハムも──って、何を言わせるんだ、お前は！」

「や、でも、ベアトリーチェは細いし。まだ若いんだし、大だい丈じよう夫ぶだよ。気にしなくても」

「そうね。リーチェはまだ若いしねえ」

「か、母様だって若いじゃないですか！　年よりはずっと！」

「わたしもそう思いたいけれど、最近どぉーも疲つかれが抜ぬけづらかったり、お肌はだが変な荒あれ方しやがったりして、ね……忙いそがしくて、男日照りがつづいてるせいかしら」

「てゆうかさ、じつは前から訊ききたかったんだけど、モリーって本当はいくつ？」

「今年で六十三よ」

「え──」

「う、そ」

　モリーは謎なぞめいた微び笑しようを浮うかべてバスク茶を一口飲んだ。茶はユリカに習った淹いれ方で、マリアローズが淹れた。茶葉もユリカにもらった一級品だ。午後のひととき、仕事の合間のおやつタイムを、せっかく一いつ緒しよにすごすのだから、できるだけ美お味いしいスイーツと上質なお茶を用意したい。そう思って「アルヌイユ」という店で買ってきた評判のタルトタタンは、点数をつけるとするなら、まあ、七十点。お茶はユリカのおかげで、八十点といったところか。でも、モリーの診しん療りよう室しつにさしこむ日ひ射ざしはあたたかくて、空気のにおいはひどくやさしい。

「ま、いいけどさ。モリーはずっと二十四歳だもんね。永遠の二十四歳」

「そういうこと。余計な詮せん索さくは寿じゆ命みようを縮めるわよ？」

「……だけど、ベアトリーチェは知ってるんだよね？　モリーの実じつ年ねん齢れい」

「ん？　あ、いや、母様は見た目も自じ称しようしている年齢も、昔からまったく変わらないからな。とはいえ、時は確実に流れているわけだし、それなりに年はとっているはずだから、仮に実際、当時二十四歳だったとすれば、少なくとも──」

「リーチェ」

「に、二十四歳だろうな。うん」

「そ。二十四歳よ？」

「二十四歳、か……」

　ふと、自分が二十四歳になるまでの時間に思いをいたしてみた。想像もつかない。ここ数すう巡じゆん月げつの間に起こった出来事さえ、一つ一つ振ふりかえることすら難しいくらいだ。それが年単位になったらと考えただけで、気が遠くなる。

　二十四歳の僕は、どんな僕になっているだろう。

　とりあえず、生きているだろうか。

　生きて、笑えているだろうか。

　仲間たちの顔が脳のう裏りをよぎった。

　自然と顔がゆるみかけた。

　そのとき、笑っていられるかどうかなんて、今はまだわからない。

　ただ、笑っていられればと思う。

　そう強く願う。

「大事なのは、昨日よりも、今日と明日だよね」

「それはわたしも同感だ」

　モリーはベアトリーチェとマリアローズを眺ながめて微笑ほほえむだけで、何も言わなかった。

　マリアローズはタルトタタンのひとかけらを口に入れた。

　よく味わってみると、七十点よりは上かもしれない。

「──でも、やっぱり気にはなるけどね。昨日のことも……」







the 1st song

賢者が愚者に捧ぐダージュ

1

　私は朽くちかけた我が身を一心不乱に進ませた。我が唯ゆい一いつの友の力を借りつつ、人目につかぬよう闇やみ夜よを選び、静かに、少しずつ、慎しん重ちょうに、進ませた。

　かー。

　こー。

　ほー。

　私の呼吸は、すでに私の肉体の機能としてなされているのではない。心の臓すら私のものではない。それは常に一定の脈動を行うのみの粗そ悪あく品ひんだが、さらに高度な自律可変型のものは、度たび重かさなる試作と試験の結果、いまだ実用しうる段階にはないと結論づけざるをえなかった。

　我が身はおんぼろだ。私は不全者だ。

　私はもう正気を失っているのかもしれない。何をもって正気と呼ぶのかもよくはわからない。私は嘆なげきに支配されている。賢かしこく聡さとく天分に恵めぐまれて生まれついた私が、何なに故ゆえにこのような宿命を背負わされねばならなかったのか。私は私を生んだ親を恨うらむ。平へい凡ぼんながら壮そう健けんな世の人々を妬ねたむ。この私が、なぜ。私は疑問に冒おかされる。私は暗い激情と疑問が渦うず巻まく海に沈しずみそうになる。でも、私は戦わねばならない。私の知性を死守せねばならない。もはや、それこそが私が私であるただ一つの証明であり、我が唯一の友を友と認にん識しきするための手段だ。知性すらもなくしてしまえば、私はすべてを失ってしまうだろう。

　やがて私は、たどりついた背徳の街に見つけた暗がりの中で、澱おりのような闇の中で、身を横たえる。一度寝ねてしまえば、起きあがるのはたいそう難なん儀ぎだ。わかっていても、私は我が身を休めねばならない。崩ほう壊かい寸前のこの身を少しでも保もたせなければならない。かー。こー。ほー。私は異様な呼吸をして、我が手ならざる手を持ちあげる。持ちあげかけた右手が、がしゃり、

と音を立てて崩くずれ落ちてしまう。驚おどろきはない。悲しみもない。私はただ深い穴ぼこのような気持ちでいる。私はやむをえず左手を持ちあげる。

　友が左手にそっとふれる。

　壊こわしてしまわぬように、そっと。

「……それ、でも、わたしは……いきたい、のだ」

　私を浅ましいと思いますか、友よ。

　それとも私を憐あわれみますか、友よ。

2

　━━俺と他者を隔へだてるものは、結局、俺自身だ。

　一人きりの意味を考えていた。考える時間だけはあった。ありすぎた。気が狂くるいそうになるほど、ありあまっていた。それなのに、狂うことはできなかった。俺は狂わない。狂うことさえ叶かなわない。だが、一人きりの俺は、俺でいることに曖あい昧まいになる。俺は。ここは。どこだろう。砂。どこまでも、果てなくつづく、色のない砂。吹ふき荒あれる風。砂。味のしない砂。俺はたまに砂を嚙かんだ。ザリザリ嚙んだ。俺を、俺という存在を実感するためだった。そんなことでしか、俺は俺を確かめられなかった。俺は一人きりの意味を考えた。俺はとらわれていた。虜りよ囚しゅうだった。時折、無様な生き物が俺の前を通りすぎた。遠くから俺を観察するやつもいた。ただ、それだけだった。俺は一人だった。圧あつ倒とう的に一人だった。ここは、どこだ……？

「獄の獄だよ」

　そうだ。獄ジエのイル獄ネイル。俺はそこにいた。いつまでもいた。俺は虜とりこだった。

　誰だれだ。俺をとらえたのは、何ものだ。

「忘れたのかい？　ニンゲン、さ」

　ああ。そうだ。お前たちはそう名乗る。俺たちは、だが、別の名でお前たちを呼ぶ。

「いい様ざまだね。大量の死の上に立つ者よ」

　黙だまれ。黙れよ。黙れ。黙れ。

「知っていたかい。たまにこうして君を見物しているんだ。だって、愉ゆ快かいじゃないか？　暇ひまつぶしさ。我々に与あたえられた時間はじつに長いからね。長すぎるほどに、ね」

　知ったことじゃない。それより、お前は──俺は、誰だ……？

「そうだな。いうなれば、標本だ」

　声が、ケラケラと笑う。俺の頭の中だけで響ひびいている。

「楽しいね。大量の死の上に立つ者よ。君は今、とても喜んでいるだろう？　ずいぶん久しぶりだろうしね？　こうして何ものかの声を聞くこと自体。それが友や恋こい人びとの声でなくとも。君に友や恋人がいるかどうかは知らないが。間ま違ちがいなく、君は癒いやされている。君は、君の中から、奥底から、何かをたぐりよせて、とりもどしつつある。嬉うれしいことだね？　でも、ここまでだ。これでおしまいだよ。さようなら。もう声をかけるような野暮なことはしないよ。二度と、ね。だから、さようなら。ずっと一人でそうしているがいいよ。一人きりで、ね。大量の死の上に立つ者よ、さようなら──」

　声が途と切ぎれた。俺は依い然ぜんとして自分が何ものかわからず、あれが何ものの声かもわからなかった。俺は、だが、あの声がまた聞こえてこないだろうかと願っていた。声が聞きたい。なんでもいい。誰の声でもいい。俺に話しかけてくれ。聞かせてくれ。声を。ぬくもりをくれ。寒いんだ。ひどく寒い。俺は震ふるえている。身じろぎもできないはずなのに。とうにあきらめていたはずなのに。俺は求めている。声を。誰かを。何かを。俺以外のものを。

　いやだ。一人はいやだ。戻もどってきてくれ。誰でもいいんだ。耐たえられない。もう耐えきれない。この孤こ独どくには果てがない。すがるものがない。俺には、俺自身しか。俺はまた一人きりの意味を考える。その俺が、他者と俺とを絶望的なまでに隔てている

る。

　俺は、俺であるかぎり、一人だ。

　俺は、このままずっと、永遠に、一人きりだ。

　いやだ！

　もうたくさんだ。

　俺は。俺は、俺は、俺は、叫さけんだ。

　──誰か……！

「ッ……！」

　声が聞こえた。違う。彼が望んだ何ものかの声とは違う。息づかいだ。一いつ瞬しゆんで目が覚めた。わかっている。ここはあの場所じゃない。あれは、夢。そう、夢だ。彼は暗闇に向かって手をのばす。そいつを、つかまえる。わしづかみにした。「あ……くっ……！」そいつは短い呻うめき声をもらした。首だ。細い、首。俺の手に吸いついてくるような、皮ひ膚ふ。今の今まで寝ていた寝しん台だいの上で、彼はもう起きあがっている。そいつを押し倒たおして、寝台に押しつけた。そのまま握にぎりつぶしてしまってもよかった。だが、そいつが言う。かすれた、途切れ途切れの声をしぼりだす。

「……ころ、し……て……」

　彼の目は闇やみに慣れている。そいつの姿が見える。女だ。何一つ身にまとっていない、裸ら形ぎようの女だった。知っている女だ。

「なんのつもりだ」

　彼はまだ手の力をゆるめない。女は唇くちびるをなめて、彼の腕うでに、胸に冷たい指を這はわせた。そして、嗤わらってみせた。

「つ……ま、らない、おと……こ」

「貴様──」

「ふっ」

　息だ。女は唇をすぼめて、息を吹きかけてきた。その直後じゃない、直前だった。とっさに飛びのいた。頭上で何かがひしゃげる音がした。天てん井じようか。彼は転がるようにして寝台から下りて、壁かべに立てかけてあった大たい剣けんを手にとった。

　女は右手で喉のどのあたりを押さえて、浮うい
ている。寝台の上だ。女の長い頭とう髪はつがゆらゆらと揺ゆれている。女は彼を見つめている。見下ろしている。窓が開いていた。そこから月明かりがさしこみ、弱い風が吹きこんで、かすかにカーテンがはためいている。

「あなたを殺すか、さもなくば、あなたに殺されてしまおうと思っていたのに。つまらない、男」

「そいつはすまなかったな。だが、俺にはお前に殺されてやる義理もなければ、お前を殺す理由もない」

「あなたがあたくしを殺さなければ、あたくしがあなたを殺すわ。それでも、理由がないといえるのかしら」

「俺を殺やれると思うか」

「それを試ためしにきたのです。あなたを殺して、あなたを手に入れて、ひとりじめにするつもりだった」

「悪いが、誰だれかのものになってやる気はない」

「ええ」女は喉の奥を低く鳴らして笑った。「わかっています。わかっているのです。あなたは──夢を、見ていたのね。悪い、夢を。どんな夢だったのかしら。知りたいわ。うなされているあなたは、とても素す敵てきだった」

「悪あく趣しゅ味みだな。服を着ろ」

「あたくしに命令する権利があなたにあるとは思えないのだけれど」

「裸はだかのままここから叩たたきだされたいのなら、べつにかまわんが」

「あたくしを叩きだせると思う？」

「試してみるか」

　彼は大剣の柄つかを握る手に力をこめた。女がまた唇をすぼめた。息だ。上うわ掛がけが、シーツが、枕まくらが巻きあげられる。飛んでくる。それらを剣の平で叩き落とそうとしたときだった。女の双そう眼がんがあやしく輝かがやいて、細い手がしなやかに、鋭するどく舞まった。まるで、その動きに呼応したかのようだった。いや、実際、そうなのだろう。

「──む……！」上掛けが、シーツが、意志あるもののごとく襲おそいかかってきた。巻きついてくる。剣に、手首に、腕に絡からみついて、彼をとらえようとする。彼はそれを振ふり払はらおうとはしなかった。かまわず引きずって、猛もう然ぜんと女に迫せまった。女がふたたび息を吹ふきかけてきて、見えない力が押しよせてきても、彼は止まらなかった。「があああああぁ……！」正面から受け止め、押し戻されそうになったが、はねのけて、進んだ。突つき進んで、手をのばした。左手を。つかんだ。女の足首を。そして、力任せに引きずり下ろした。「──あ、ぅ……っ！」床ゆかに引き倒して、上掛けとシーツでぐるぐる巻きにされた大剣を振りかぶり、叩きつけようとした。

　そのとき、部屋のドアが開かなければ、彼は女を殺していただろうか。

　女は目をつぶっていた。目め尻じりにうっすらと涙なみだらしきものが浮かんでいた。死を受け入れようとしているかのようだった。俺はこの女に死を与あたえるべきだったのか。そうするつもりだったのか。わからなかった。わからないまま、何者かの手によって開けられたドアのほうを見た。

　人がいた。背は結構高いが、ほっそりしている。まだ若い、女だ。暗黒大陸で偶ぐう然ぜん知りあい、行き場がないというので、エルデンまで連れてきた。以来、一人で旅に出たり、戻ってきたりだが、エルデンでの滞たい在ざい場所はこの家と決めているようだ。

「……音が、したから。すごく、大きな音が」

「うむ」

　廊ろう下かの明かりが逆光になって、表情まではよく見えなかった。だが、声の調子がどうもおかしい。何やら気まずい雰ふん囲い気きだ。

「起こしちまったか。悪かったな」

「うん」暗黒大陸の娘むすめは力ちから一いつ杯ぱいうなずいてみせた。「悪いよ。夜は静かにして欲しいんだ。何をやっているのか知らないけれど」

「何って」

　彼はおのれが組み敷しいている恰かつ好こうの女を見下ろし、顔をそむけている暗黒大陸の娘を見て、自分の身体からだを見た。パンツだけの姿で寝ねていたもので、当然、そのままだ。裸同然といってもいいだろう。女にいたっては、完かん璧ぺきな裸形だ。

「──説明すると、少し長くなりそうなんだが」

「いいよ。いらない。説明なんて」

「そうか」

「おやすみなさい」

「ああ」

「ごゆっくり」

　最後の一言は、彼に向けたものか、あるいは、女に対して言ったのか。暗黒大陸の娘はバタンとドアを閉めた。遠ざかってゆく足音はやや荒あらっぽい。あいつらしくないな、と彼は思う。いつもは獣けもののように気配を消して静かに歩くのだ。なんのせいだ。俺か。

「まいったな」

　そう呟つぶやいて身体を起こすと、女が小さく吹きだした。

「何がおかしい」

「おかしいわ。あなたが困っているのですもの」

「俺だって困ることくらいある。お前、俺をなんだと思ってるんだ」

「わからないわ」女は起きあがろうとしない。惜おしげもなく裸ら体たいをさらしたまま、じっと彼を見上げている。「あなたのことがわからない。あなたは何ものなのかしら。あなたの瞳ひとみの奥でうずくまっているものの正体は何？　あたくしは、それが知りたいのです」

「知ってどうする」

　女は答えず、唇くちびるを笑う形にゆがめた。わけのわからん女だ。彼は大たい剣けんに巻きついた上掛けやらシーツやらを引き剝はがして、女の身体の上に放ほうった。

「出て行け、リルコ」

「いやだと言ったら？」

「夜は静かにしろとロム・フォウに言われたからな。俺もまだ眠ねむり足りん。これ以上、安あん眠みん妨ぼう害がいするつもりなら、できんようにするしかない」

「本気なのね」

「ああ」

「たしかに、あなたはそれができる人です」女はゆっくりと上半身を起こして、挑いどむような目つきで彼をねめつけた。「眉まゆ一つ動かさず、あたくしを殺あやめることもできるくせに。──あなたは、大おお嘘うそつきね」



たしかに、我が師は私の中に一つの可能性を見いだしていたのだ。

多くの魔ま術じゅつ士しが、それがまるで魔術士のたしなみであるかのように抗アンチ加エイ齢ジングに手を染めるなか、師は決して老いに逆らおうとしなかった。長い年月を生きた師の肉体はすでに朽くちかけていたが、精神はなお盛さかんだった。精神は肉体を超ちよう越えつする。それは師の哲てつ学がくであり、信念だった。そして、いくつかの臓器と筋骨格の異常を生まれつき抱かかえていた私にとっては、願望だった。

師に拾われなければ、私は五年と生きられなかっただろう。あるいは、寿じゆ命みようがつきる前に、処分されていたかもしれない。だから師は、我が師であるのと同時に、恩人でもあった。

師は私に生きる希望をくれた。生きるすべを教えてくれた。真っ白い毛もう髪はつと皺しわに埋うもれた師は、私にとって親より慕したわしい存在だった。敬愛していた。私は自分自身と師のために時間を惜しんで学んだ。なんでもした。百年に一人の才能と私を評してくれた師の期待を裏切るものかと思った。師は、いつか肉体が滅ほろんだあと、精神のみの存在となり、永遠に魔術の高みを追求しつづけるという気き宇う壮そう大だいな夢を持っていた。人並み外れた魔術の才を生まれ持ちながら、人として生きながらえる機能を十全には備えていない私が、どこまで到とう達たつしうるか。私が師とともに永遠の道を歩めるようになったとしたら、師の信念は証明される。そのときこそ、やはり精神は肉体を上回るのだと、二人で凱がい歌かを奏しよう。

私はいまだに師が職人に作らせた車くるま椅い子すの座り心ごこ地ちを忘れていない。やわらかい、だが、やわらかすぎない背もたれと、肘ひじ掛かけと、座面。私の左目が病やみ、それは医術式で治ち癒ゆしえないとわかったとき、師はみずからの手で悪性の腫しゆ瘍ように冒おかされた私の眼球を摘てき出しゆつした。そのあと、師は私のために眼帯を作ってくれた。まだ幼かった私は、眼帯に施ほどこされた愛らしい刺し繍しゆうを素す直なおに喜んだ。お師様。お師様。あのころ、私は師をそう呼んでいた。師は老いた身体で私を寝しん台だいに運んで寝かせてくれた。私は師の望みを叶かなえることを心から願っていた。だが、それは結局、果たしえぬ夢でしかなかったのだ。

私を弱き者よと嘲あざけりますか、友よ。

弱い私を慰なぐさめてくれますか、友よ。

4

翌朝、「また旅に出るよ」と暗黒大陸の娘が言いだした。いや、言いだすどころか、もう荷物をまとめていて、いつでも出発できそうだった。

彼が居間の床ゆかに寝ね転ころんだまま「む、そうか」と返事をするなり、彼女は「じゃ」と背負い袋ぶくろを背負って歩きだした。居間から出る前に、一度だけだった。彼女は立ち止まって振ふり返り、静かな、やけに静かすぎるエメラルドグリーンの瞳に彼を映した。

「見送りはいらないよ」

「む、そうか」床から起きあがりかけていた彼は、機先を制される恰かつ好こうになった。「……まあ、お前のことだから大だい丈じよう夫ぶだと思うが、気をつけてな」

「うん。気が向いたら帰ってくるよ」

「そうか」

「いってきます」

彼がいってらっしゃいを言う前に、彼女は居間から出て行ってしまった。落ちつきはらった身のこなしだったが、なぜか逃にげるような足どりにも見えた。「ロム・フォウ！」と彼は彼女の名を呼んだ。廊ろう下かで彼女が立ち止まる気配がした。彼は少しの間、頭の中で言葉を選んだ。選ぼうとしたのだが、それほど多くの言葉は思いつかなかった。

「──少しくらい気が向かなくても、帰ってきたくなったら、帰ってこいよ」

返事まではかなり間まがあった。

「……うん」

　彼女は小さく答えると、一人旅立っていった。暗黒大陸のワンドルン山で木々や動物たちを友として育ったあの娘こにとって、人が人のために作った街は、所しょ詮せん、いつになっても馴な染じむことのできない人工の荒こう野やなのか。彼女はときに山を、森を狂くるおしく求め、いたたまれなくなって街を飛びだす。しばらくすると、ふらりと戻もどってくる。この数年、そんなことをもう何度も繰くりかえしている。今回も同じだろう。そうは思うのだが、昨夜の一件がどうも引っかかる。あのときのロム・フォウは、なんだかおかしかった。とりあえず、それは間ま違ちがいない。

「──まいったな」

「何がだ」

　最近、昼食は庭でとっている。パラソルの下のテーブルには、彩いろどりも調理法も多種多様な料理がやたらめったらと並べられているが、そのうち半分ほどは彼の向かいの椅い子すに腰こしかけている黒くろ髪かみの男が作ったもので、残りの半分は男に付き従う女の手によるものだ。

　男はジャン・ジャック・ド・ジョーカーを名乗り、女はクローディアという名を持つ。

　この二人と出会ったのも、晩夏の暗黒大陸だった。

「いや、なんでもない」

「貴様という男は、その振る舞まいすべてで全世界をたばかっているくせに、たわいもない嘘うそは救いがたいまでに下へ手た糞くそだな」

「たしかに、嘘は得意じゃないが」

「ふん。ロム・フォウのことか」

　ジョーカーはグラスに手をのばして、ワインを喉のどの奥に流し入れた。すかさず、かたわらで直立不動の姿勢を維い持じしていたクローディアがアイス・バケツからワインのボトルをとりだして、濃こい赤あか紫むらさき色いろの液体をグラスにそそいだ。銀色とも金色ともつかない髪と目を持つクローディアは、ジョーカーの一

挙手一投足に絶えず目を光らせている。その献けん身しんぶりといったら、感心を通り越こして呆あきれるほどだ。だが、ジョーカーはクローディアには目もくれず、またワインを一口飲んだ。

「聞いたぞ。少しばかり耳を疑ったがな。朴ぼく念ねん仁じんの貴様が、昨夜、女と同どう衾きんしていたというではないか」

「そんな話じゃない。寝ね込こみを襲おそわれたんだ」

「わかっているさ。あの魔ま女じよだろう」

「魔女、か」

「クローディアがロム・フォウに尋たずねられたらしい。裸はだかの男女が寝しん室しつでばたばた暴れているというのは、やはり特とく殊しゆな間あいだ柄がらと考えてよいのだろうか、とな」

「どう答えたんだ」

　彼が視線を向けると、クローディアは一いつ瞬しゆんだけこっちを見て、「はい」と無感情な声で応じた。「一いつ般ぱん論ろんとして、そのように考えるのが妥だ当とうなのではないかと申しあげました」

「そうか」彼はため息をついて、首の骨をポキリと鳴らした。「――つまり、あいつは誤解してるってことか」

「だから、貴様は阿あ呆ほうだと言うのだ」

「どういう意味だ」

「愚おろか者め。いくらロム・フォウが年ねん齢れいより初う心ぶだといっても、貴様とあの魔女を見て相思相愛の仲だと思いこむほど馬ば鹿かではない。そんなことはあの娘とてわかっているだろうよ。わかっていたとしても、貴様はとにかく自らの口で否定すべきなのだ」

「よくわからんな」

「やはり貴様は朴念仁だな」ジョーカーはきれいに整えた顎あご鬚ひげをなでながら、首を少し傾かたむけて嘲ちよう弄ろうするような笑えみを浮うかべた。「人として欠くべからざるものを欠いてい

る。己おれが思うに、貴様は不完全か出で来き損そこないか、そのどちらかだ。いずれにしても、碌ろくなものではないがな」

　彼は言い返さなかった。何も言えなかった。

　いつかの彼は、人は一人のおのれとしてそこにあり、ありつづけるだけで、何ものかでいられると思っていた。餓うえや渇かわきを感じたのなら、ひたすら敵を求めればよかった。斬きり伏ふせる刃やいばを持つ手の感かん触しよくが、叩たたきつぶす力が、彼に彼を保証した。それにすがっていた。しがみついて、依い存ぞんしていた。そのことにさえ気づかなかった。

　俺は、ただ俺として一人きりでいるだけでは、俺でいられない。

　大量の死の上に立つ者よ、とやつが呼びかけてきたとき、俺は、探した。やつの姿を求めた。どうにかして見たかった。会いたかった。俺は一人じゃない。そのことが唯ゆい一いつの希望のように思えた。

　そうだ。哀あわれで無様な化ばけ物ものどもさえも、俺にはいとおしくてたまらなかった。たまに、ごく稀まれに、通りかかる化物がいると、俺は心の中で、こい、と願った。もっときてくれ、近くにきてくれ、頼たのむ、声を聞かせてくれ。哀あい願がんしてもいいくらいの気持ちだった。だが、彼らは決して近づいてはこなかった。俺は彼らを罵ば倒とうした。臆おく病びよう者ものどもめ。雑ざ魚こめ。糞くそ虫むしどもめ。なんでだ。どうしてこない。怖こわいのか。俺が怖いか。ふざけくさりやがって。殺してやる。八つ裂ざきにしてやる。粉こな微み塵じんにしてやる。畜ちく生しようめ。

　むろん、すべて無む駄だだった。

　どれだけみっともなく取り乱そうと、たとえようのないほど意気消しよう沈ちんしようと、何かをひどく後こう悔かいしようと、悔くい改めようと、徹てつ底てい的に無意味だった。

　俺は一人だった。

　何もかもが馬ば鹿か馬ば鹿かしくなるほど長い間、一人だった。

　嘆なげいても、泣き叫さけんでも、飽あいても、あきらめても、一人だった。

俺は思い知った。

俺はこの世界における一つの視点でしかない。

俺が俺であるだけでは不全だ。

だが、そうであるならば、どうしろと……？

「ウムー……」

と、廊ろう下かに面した板いた敷じきの縁えん側がわのほうから、妙みような呻うめき声が聞こえてきた。

目をやると、暗青スチール灰色ブルーと黒の僧そう服ふくを身にまとった巨きよ漢かんが、縁側から転げ落ちるようにして庭に下りてきたところだった。もともと髭ひげを生やしているが、普ふ段だん以上に髭まみれだ。目が腫はれぼったく、隈くまも浮きでていて、頬ほおは若じやつ干かんこけている。顔全体が垢あかじみているようにも見える。そういえば、数日会っていないような気がする。同じ家に住んでいる、というか、ジョーカーやクローディア、ロム・フォウと同じように、僧服の巨漢も勝手に部屋を確保して居い候そうろうしているのだが、それでも何日も顔をあわせないことは珍めずらしくない。

「は、腹が……ムム……」

髭ひげ面づらの破は戒かい僧そうはふらふらした足どりでなんとかテーブルまでたどりつこうとしたが、その手前で力つきて、バッタリうつぶせに倒たおれた。ジョーカーが「ふん」と鼻を鳴らして、ナプキンで口の周りをぬぐった。いつの間にか、テーブルの上の食事はおおかた平らげられていた。ジョーカーは細身だが、あれで結構な大食漢だし、その向かいに座っている彼もそれなりに食べるほうだ。デザートやら茶やらをとりにゆくつもりか、その場を離はなれようとしたクローディアを、ジョーカーが軽く手をあげて呼び止めた。

「ついでに何か持ってきてやれ。そうだな。炊たいた米が残っている。あれと漬つけ物ものでよかろう。あとは茶だ」

「かしこまりました」

「──で」ジョーカーはクローディアの後ろ姿だけではなく、髭の破

戒僧にもーいち瞥べつすらくれなかった。「何日寝ておらんのだ、貴様」

「……い、五日……ほどか」

「その間、飲み食いも殆ほとんどしておらんのだろう。それでよくも死なぬものだ」

「……む、向こう側が……見えた……」

「何の向こう側だ、戯たわけめ。そんなものは幻げん覚かくだ」

「……ム、ムウゥ……マグニデア・プールの……」

「蘇そ生せい式、か」

　ジョーカーは目を伏せて、かすかに眉まゆ根ねをよせた。髭の破戒僧トワニングが、祭さい壇だんと呼ばれる蘇生式用の大型機器をＭ．Ｔ．Ｄ．から取り寄せて、家の地下に搬はん入にゅうし設置してから、しばらくたつ。それ以来、トワニングは祭壇にこもって何やら作業している時間が長くなった。何日も飲まず食わずで徹てつ夜やしたあげく、今日のように幽ゆう鬼きのごときありさまで地上にさまよい出てくることもしばしばだった。

「人の愚ぐ行こうのきわみというべきだな。死者にふたたび生命を与あたえるなどと」

「ム……ムム……所しよ詮せん、人は……おのが愚おろかしさから……逃のがれられぬ……」

「黙だまれ、髭達磨だるま。愚ぐを知り、これを捨て去らんと自らを戒いましめず、重ねて愚を犯おかす者は、痴ち愚ぐを通り越こして無知にして無む恥ちと知れ。それは全まつたき人のあるべき姿ではない」

「……グ……ウウ……腹、が……」

「醜しゆう悪あく極きわまりないのだ」

「……な、何か……食べ物、を……」

「餓鬼か、貴様は」

　ジョーカーはいまいましげに舌打ちをすると、食べ残しのカリフラワーにフォークを突つき刺さし、ひょいと投げた。髭は素す早ばやく反応した。ぐるりと身体からだを回転させて仰あお向むけになり、落下してくるカリフラワーに目を剝むいて飛びついた。そうして口で受け止めるなり、ムシャムシャ高速で咀そ嚼しやくして嚥えん下かし、「ムウ」と唸うなった。

「……た、足りぬ……これでは……」

「だから、少し待てと言っているのがわからんのか」

「ウ……ム……」

　髭はまたひっくり返ってしまった。白目を剝いている。気絶したのかもしれない。

　ジョーカーは呆あきれたように少し肩かたをすくめて、優ゆう雅がな手つきで皿の上にフォークを置いた。

「そういえば」

「ん」

「少しばかり愉たのしげな話を小耳に挟はさんだ」

「ほう」

「もっと興味を持て。己おれがわざわざ話してやっているのだぞ」

「まだ内容を聞いてないうちから、興味を持てと言われてもな」

「馬ば鹿か者もの。この己おれが愉しげだと言っているのだ。底が見えんほど興味深い話に決まっているだろうが」

「そんなものか」

「愚図の相手をしていると肩が凝こる」

「べつに頼たのんでないぞ」

「いいから黙って聞け」

「ああ」

「──魔ま導どう兵へい狩がりが出るらしい」

「ふむ」

「貴様……」ジョーカーは大おお仰ぎように眉まゆをつりあげ、両手を広げてみせた。「なんだ、その薄うすっぺらい反応は。何かないのか。感じること。考えること。思うこと。なんでもいい。ないわけはなかろう」

「思う、か」

　彼はジョーカーの真ま似ねをして、眉をつりあげてみた。片方だけだった。

　ジョーカーが双そう眼がんをすぼめた。

　不ふ愉ゆ快かいそうだ。

　そういうつもりじゃないんだが。

「──そうだな。魔導兵狩り、か。誰だれがなんのためにそんなことをしてるんだ」

「いきなり核かく心しんを突く阿あ呆ほうがどこにいる」

「それが核心なのか」

「当然だ。それがわからんから、興味をひかれるのだろうが」

「まあ、わからんのなら、お前に訊きいても仕方ないな」

　彼はそう返しながら顎あごを撫なでてみた。

　これもジョーカーの真似かもしれない。

　それとも、髭か。別の誰かか。

　わからない。

「まったく、貴様というやつは──」ジョーカーは唇くちびるをゆがめて天を仰あおいだ。「好こう奇き心しんというものはないのか。何か確固たる欲求や目的を持って動くでもなく、何かに心こころ惹ひかれて揺ゆれ動くでもない。ただ何ものかに望まれ、求められれ

ば、風に吹ふかれたように飛んでゆく。まるで、凧たこだな。いったい何が楽しくて生きているのだ、貴様は」

「楽しい……？」

「大小は問わん、種類も様々だろう、とにかく、快楽だ。貴様を心ここ地ちよく満たすものだ。まさか、ないのか」

「いや──」

　彼はどこか遠くを見た。どこか、としかいえなかった。

「ないこともないと思うが」

「ふん。どうだかな」

「魔導兵狩り、か」

　俺はどこを見ているのか。見ようとしているのか。見たいのか。

　さながら、巨きよ大だいな穴の淵ふちに立って、下をのぞきこんでいるかのようだった。

　だが、俺の足がすくむことはない。いつでも飛び降りられるような気がする。

　ふと縁えん側がわに顔を向けた。髭のための飯だのデザートだの茶だのをトレイにのせて運んできたクローディアと目があった。しかし、ただそれだけだった。

　空を振ふり仰ぐと、西のほうからゆっくりと色の濃こい雲が垂れこめてきていた。

5

　おまえには友が必要であろうと言ってくれたのも師だった。それに対して、私はどう返事をしたのだったか。たしか、不要だと答えた。お師様がいるから、いい。私は師に対してそんな言こと葉ば遣づかいを平気でしていたのだ。思い返せば畏おそれ多いことだが、

師は私にそれを許していた。

　だが、師は頑がん固こだった。これと決めたら、その正当性に絶対の自信を持ち、論破されないかぎり譲ゆずらなかった。師は私の頭を撫でながら、友は必要だ、と繰くりかえした。それからしばらくして、師は私に友を与あたえた。いや、友よ、君の前でそんな言い方をするべきではない。師は、どこからか君を連れてきて、私と引きあわせた。友よ、あのとき、私はとても嬉うれしかったのだ。内心、私は恐おそれていた。師が新しく別の弟で子しをとって、そら、友だちになるがよい、とでも言いだすのではないかと思い、びくびくしていた。

　もし、その人が、私とは違ちがい、自分の足で歩くことができ、好きなものを好きなように飲食できたら、どうしよう。もし、お師様が私のために懸けん命めいに刺し繍しゆうしてくれた眼帯を見て、笑うような人だったら、どうすればいいだろう。

　私はじつにいろいろなことを想像し、煩はん悶もんしていた。

　もちろん、君の姿を目にして、驚おどろきはした。

　でも、友よ、君の目を見れば、君の聡そう明めいさや慈いつくしみ深さは、すぐにわかる。

　私は嬉しかった。君とならばきっと友だちになれるに違いないと思ったし、実際、そうなった。

　あれ以来、君はずっと私のそばにいてくれる。

　私の望みを、欲望を敏びん感かんに感じとって、頼たのまなくても、私のためになんでもしてくれる。

　私は君を利用しているのです、友よ。

　故ゆえに私は君を止めないのです、友よ。

　ちょうど、今こ宵よいと同じような──暗い空からぱらぱらと雨あま粒つぶが落ちて、あまねく地上をしっとり湿しめらせてゆく、ほとんど風のない夜だった。

　彼女は雨に打たれて夜道を歩いていた。ほんの少しだけ昂たかぶっていて、それが次し第だいに鎮しずまりかけていた。彼女はふと足を止め、顔を上げて、ふぅっ、と息を吐はいた。たちまち彼女の頭上でいくつもの雨粒がひとかたまりになって、水の珠たまを形作った。

　右手をあげて、それにふれた。

　水の珠は、ぱちん、と割れてしまった。彼女は少しだけ笑った。もうすっかり鎮まっていた。

「──いたぞ！」「あの女……！」「魔ま女じよめ！」

　彼女は声のほうを見なかった。近づいてくる足音も、彼女を揺るがすことはなかった。

　彼女は鎮まっていた。冷えていた。煩わずらわしささえ感じなかった。足音がばらばらと止まった。彼女を囲む男たちの荒あら々あらしい気配も、彼女の意識を乱すことはなかった。彼女は少しも恐れていなかった。恐れているのは男たちだった。

「この、魔女め……」「師父マスターツェイドを殺やったのはお前だろう」「お前しかいない」「許さんぞ」「どうしてだ」「なぜ殺した！」

　ドクター・ジドニー・ツェイド。クラン・偏執モノマ狂士会ニアクス会長。外げ道どうの錬れん金きん士しであり、魔術士でもあって、三十数名の会員とその数倍の準会員たちに〝師父マスター〟と尊そん称しようされていた。齢よわい百を超こえながら、外見はせいぜい三十代半ばにしか見えない怪かい人じん。作りあげた秀しゆう麗れいな面めん貌ぼうと洗練された微び笑しようの奥に深しん遠えんなる知識の一いつ端たんを隠かくして、容易に手札を見せない謎なぞめいた男。秘密の色を身にまとい、秘密の匂においで人を惑まどわし、秘密の味で人を酔よわせる。それはツェイドの人心掌しよう握あくの手練手管だったが、実際、よく手入れされた、大きいけれどもあの美しい手に、いくばくかの秘密を握にぎりしめていたことは事実だ。ある意味、その秘密こそが怪人ツェイドの正体だっ

たともいえるかもしれない。

　かつて、モトローリィのある山村で生まれ、流れ者の錬金士にかどわかされて、サンランドに入国したロバート・デン・チャールズという少年がいた。その後、彼は最初の師である錬金士と訣けつ別べつして錬金士Ａ組合Ｇに加盟し、短期間で第八階かい梯ていまで進んだ。第十階梯以上の錬金士たちは〝高こう弟てい〟と呼ばれ、錬金士Ａ組合Ｇの中ちゆう枢すうに関かかわる。彼はあと一息で〝高弟〟というところで、だが、禁きん忌きに魅み入いられた。そして、ためらわずにこれを犯おかした。

　やがて事が露ろ見けんすると、彼は錬金士Ａ組合Ｇに追われる身となった。追っ手から逃のがれるために、名を変えた。顔を変えた。職を転々とした。愚おろかな魔術師マギにとりいって魔術を学び、魔術士としての真名と仮名を手に入れた。その名を捨てて剣けん術じゆ家つかに師事し、また別人となった。それでも錬金士Ａ組合Ｇの追つい及きゆうからは逃にげきれなかった。彼は救われたのだ。少なくとも三百年の歴史を持つ、ある結社に。

　ＳＳ、と呼ばれる。

　機術士と錬金士たちが定めた絶対禁制品の研究、開発を目的として組織された、いわば秘密結社だ。正式名めい称しようは〝贖スカ罪ーレのツト緋・ス山ケープ羊ゴート〟という。

　彼のＳＳにおける最後の暗号名は〝廃デイセ帝ンペラ〟だった。大おお仰ぎような名だが、彼はそれほどＳＳの中で重要な地位にあった。そう短くはない時間をすごしもした。彼はそうしていくばくかの秘密を手に入れた。しかし、故郷を捨て、最初の師を捨て、錬金士Ａ組合Ｇを捨て、魔術や剣の師を捨てたように、彼はＳＳをも捨てた。まるで、捨てることが彼の習性であるかのようだった。

　いずれにせよ、地位と責務を捨てて、秘密だけを抱かかえて逃げた彼は、十年以上の潜せん伏ぷくの果てに、ジドニー・ツェイドとなって姿を現した。彼は秘密を武器にして次第に名をなしていった。今や、このエルデンでジドニー・ツェイドといえば、少し気の利きいた者なら知っている名前になっていた。

　いつか彼はジドニー・ツェイドの名さえも捨てただろうか。もはや知るすべはない。

　彼はＳＳを捨てたが、ＳＳは彼を捨て置かなかった。つまりはそういうことだ。

「彼は」彼女は誰だれに言うともなくつぶやいた。「知りすぎていたのです」

「知りすぎて……？」「いったいなんのことだ」「だが、やはり──」「貴様だな！　貴様がやったのだな……！」「よくも、我らが師父マスターを！」「仇あだ討うちだ！」「用心しろ、相手は魔女だ」「後ろに回れ」「殺せ」「魔女を殺せ……！」

　男たちが包囲の輪を縮めてこようとしている。十人か。それ以上いるだろうか。どうでもいい。彼女は男たちのほうなど見ない。男たちがそれぞれ剣を抜ぬき、杖つえを構えても、ほぼ垂直で落ちてくる雨粒をひたすら見つめていた。彼女にとっては、殺気をみなぎらせて自分に殺さつ到とうしてこようとしている男たちよりも、雨のほうが遥はるかに重要なのだ。彼女は思う。彼らを一人残らず消し飛ばしてしまうことなどたやすい。だが、この雨を今すぐやませることはできない。雨。雨よ。思うままにならぬ雨の中に立ちつくしていると、あたくしは何かを失ったような気分になり、同時に何かが欲しくてたまらなくなる。あたくしの身体からだは次第に冷やされ、そして、内側が徐じよ々じよに火ほ照てってくる。あたくしは欲しいのだ。手に入らぬものが欲しい。狂くるおしく求めたいのだ。求めつづけて、からっぽになりたいのだ。悲しみの果てに絶望を見たいのだ。絶望に切り刻まれてしまいたいのだ。おそらくは、あたくしにそれをもたらすものが──、

「女一人を、大勢で囲んで」

　現れる予感など、微み塵じんもなかったのに。

「穏おだやかじゃないな」

　ある雨の夜の出来事だった。

　彼女は男の声を聞き、包囲の輪の向こうから進みでてきた男の姿を見た。思わず、笑いそうになった。ひどい恰かつ好こうだったからだ。

　男は濃のう紺こん色の不思議な材質の全身鎧よろいを身にまとっていた。鎧を飾かざる橙だいだい色いろの炎フアイ模ヤーパ様ター

ンが異様だった。滑こつ稽けいにすら見えた。背の高い男だった。黄玉トパーズの瞳ひとみが、獣けものをとらえて喰くらう肉にく食しよく獣じゆうのようで、隙すきがなかった。それでいて、隙だらけにも見えた。男は口くち許もとに笑えみらしきものをたたえていたが、どこか空くう虚きよだった。まるで、誰かの笑顔を真ま似ねようとして、少し失敗しているかのようだった。ああ、と彼女は思った。

　あなたは、誰？

「……な、なんだ、貴様は」「珍ちん妙みような装しよう束ぞくを……」「邪じや魔まだてするな！」「これは、我々偏執モノマ狂士会ニアクスの問題だ！」「局外者が出しゃばるな！」「去れ！」「さもなければ──」

「ふむ」

　男は偏執モノマ狂士会ニアクスの者たちを一いち瞥べつしてから、彼女を見た。

　彼女はもっと前から男を見つめていた。

　先に目をそらしたのは男だった。

「まあ、見ちまった以上は知らんぷりもできん。とはいえ、どちらかに肩かた入いれする義理も俺にはないしな」

「──な……」「どういう……」

　偏執モノマ狂士会ニアクスの面々が互たがいに顔を見あわせた。男の真意を測りかねているのだろう。

　彼女にもよくわからなかったが、ともあれ、男は根を張ったようにその場から動く気配を見せなかった。男と彼女の間で、偏執モノマ狂士会ニアクスが揺ゆれ動いていた。彼らは追いつめられた幼子のようにたわいもない存在だった。

「どうした」男が軽く首を傾かしげた。「やれよ。俺はここで見ているだけだ」

「ふ……ふざけるな！　我々は……」「野次馬など」「そうだ！　師父マスターの仇討ちは、見世物ではない！」

「だが、どうなったか気になって、あとで戻もどってくるのも面めん倒どうだしな」

「か、からかっているのか！　我々を！」「愚ぐ弄ろうするな！　許さんぞ！」「──もしや、この男、魔女の一味ではないのか」「そうだ、妙みようではないか、おかしな理り屈くつを……」

「あいにく、俺はその女のことなど知らんが」

　男は一度、地面に視線を落とした。何かを隠かくそうとするかのようだったが、不完全だった。それは、あふれでた。彼女は胸の中心に手をあてた。苦しかった。ひどく、苦しかった。雨音が、消えた。消えたように感じた。偏執モノマ狂士会ニアクスの者たちが鼻白んで、ずっ、とあとずさった。一人や二人ではなかった。全員だった。

　男は右みぎ肩かたから突つきだしているものに手をかけた。

　剣けんの柄つかだった。

「──俺に刃やいばを向けるなよ。べつに恨うらみがあるわけでもないお前たちを、殺したくはない」

「嘘うそだわ」

　彼女は我知らず、そう口に出していた。

　自分自身の声でありながら、誰かのうわごとのようだと彼女は思った。

「嘘。あなたは、殺したくないなどとは思っていない。いくらでも、眉まゆ一つ動かさず、心揺らぐこともなく、あなたは殺せる。あなたの足許には、常に大量の死が。屍しかばねの山の上にあなたは立っている。あなたは──」

「黙だまれ」

　突とつ風ぷうを感じた。ここは断だん崖がいの縁ふちだ。落ちる。落ちて、死ぬ。さあっ──と、全身の血の気が引いた。この、悪お寒かん。震ふるえ。鳥とり肌はだ。初めてだった。怖こわい。これは、恐きよう怖ふ。べつに、威い圧あつ的な声こわ音ねだったわけではない。眼光を鋭するどくしたわけでもない。それなのに、男

の一言が彼女を恐おそれさせた。偏執モノマ狂士会ニアクスの連中にいたっては、短い悲鳴をもらす者がいた、頭を抱かかえてしゃがみこむ者もいた、尻しり餅もちをつく者さえいた。彼らは喉のど元もとに突きつけられたのだった。

　死を。

　男は死を身にまとっている。あるいは、死そのものだ。

　だが、男は何か戸と惑まどってでもいるかのように瞳を揺らし、彼女に背を向けてしまった。

　歩きだした。

　去ってゆこうとしていた。

　待って。

　行かないで。

　彼女は追おうとした。偏執モノマ狂士会ニアクスの者たちが一いっ斉せいに彼女を見た。

「━魔女め！」「逃にがすな」「殺せ」「殺せ！」

　彼らとて、ジドニー・ツェイドに鍛きたえられた戦士たちだった。群がってきた。彼女を止めようとした。師父マスターの仇あだである彼女を討つべく襲おそいかかってきた。後ろから。横から。前から。剣を振ふりかざす者がいた。杖つえを両手で持ち精神を集中させる者がいた。おのれを鼓こ舞ぶするために叫さけぶ者がいた。いずれも彼女を阻はばもうとしていた。彼女は目がくらみそうになった。背中から首の後ろあたりが痺しびれ、吐はき気がした。彼女は足を止めた。両手を顔の前で交差させて、一気に振り下ろした。

「おどきなさい」

　これは、怒いかり。あたくしは憤いきどおっている。生まれ持った超オー越バリ者ストの目に見えぬ異能力で偏執モノマ狂士会ニアクスの三、四人を吹ふき飛ばしながら、彼女は自身の胸の奥に怒りの火を見つけていた。彼女はひどく昂たかぶっていた。つい先ほど、ジドニー・ツェイドを殺害した瞬しゅん間かんよりも、遥はる

かに昂こう揚ようしていた。

　しかし、目を閉じれば、瞬時に高度な集中状態へと移行する。彼女の指は触しよく媒ばいをとりだし、彼女の唇くちびるが、舌が、無意識層に刻みこまれた呪じゆ文もんを詠えい唱しようする。疾とく。速く。数名の魔術士が無意識層共有領域を通して繰くりだしてきた攻性意スパク識体チユラは、彼女の無意識層に到とう達たつすることができない。防戦する必要などない。その前に、彼女は魔術を発動させた。

「蛮翅狂Ｉｇｎｅｉｍ虞隷Ｎａｙｄｏ」

　彼女の頭上に青あお紫むらさきの炎ほのおが現れた。だが、とどまって、渦うず巻まいていた。すべては彼女の意のままに。超オー越バリ者ストである彼女は、発動した魔術の力を、自在に、的確に操作することができる。彼女はその業わざに名前をつけた。ほんの戯たわむれにすぎないが、こう名づけた。

　息い吹ぶき、と。

「塵ご芥みは、塵芥らしく」

　彼女は右手を振った。青紫の炎がちぎれて舞まい、偏執モノマ狂士会ニアクスの二、三人に降りかかった。驚きよう愕がく。苦痛。悲鳴。死。振りまかれるそれらのものに、彼女はあくまで無む頓とん着ちやくだった。ただ無造作に左手を振るい、異能力によってさらに青紫の炎を投げつけた。

「おとなしく処理されなさい」

　偏執モノマ狂士会ニアクスの者たちは、彼女にとって敵ではなかった。単なる障害物でしかなかった。ゆえに、彼女はいくぶんかの苛いら立だちとともに、彼らを燃やそうとした。焼こうとした。焼き払はらってしまおうとした。彼らには二つの選せん択たく肢ししか与あたえられなかった。青紫の炎におとなしく焼かれるか。逃げるか。半分ほどが好むと好まざるとにかかわらず前者を選び、残りの半分は後者を選んだ。けれども、彼女は彼らのことなど見ていなかった。あの男だけを見ていた。

　男が足を止めて振り返った。その右手が、肩かたからのびている大剣の柄にかかった。青紫の炎に照らされて、黄玉トパーズの瞳ひ

とみが不ふ穏おんな輝かがやきを帯びた。彼女はおのれの首を絞しめてしまいたくなった。ああ、その眼まな差ざしだけで、あたくしを殺そうとする、あなたは、誰だれ？

「お前……」

　あたくしは。

　背を向ける者。虚きよ無むに魅み入いられながら、あらがう者。待ち望む者。絶望する者。切望する者。矛む盾じゅんする者。あたくしは世界の断だん片ぺんにして、世界のすべて。あたくしは何も知らない。知らないからこそ、知りたい。手に入れたい。

　あなたは、誰？

　あなたの名は？

「俺の名は──」

　それは彼の真の名ではない。彼にふさわしい、彼に冠かんされた名は別にある。彼女は偽いつわりの名で彼を呼ぼうとは思わない。だから、彼女は「あなた」と彼を呼ぶ。あの雨の夜に出会った男に、万ばん感かんの思いをこめて「あなた」と呼びかける。

　雨の夜の出来事だった。

　雨。今夜も雨だ。ゆるい、雨。細い銀糸のごとき雨が、しとしと降っている。

　彼女は雨の中を浮ふ遊ゆうし、雨を浴びながら、声をひそめて歌う。ひとりきりでさすらう寂さびしき魂たましいの歌を。雨に打たれ、ゆらゆらと空を漂ただよい、やがて鳥が羽を休めるように、だが、何かに誘いざなわれるように、彼女は建物の屋根に降り立った。第五区。第一王立銀行のある鉄てつ鎖さの憩いこい場ばにほど近い。彼女はしっとりと水気をふくんだ髪かみの毛をかきあげながら、地上を見下ろした。彼女の目が少しだけ見開かれた。

「あれは……」

私はぼろぼろと崩くずれ落ちていった。

左目を失ってしばらくしてから、私の左ひだり肘ひじが曲がらなくなった。すぐに左手の指も満足に動かせなくなった。言葉をうまく発音できない日がたまにあった。食べ物を嚥えん下かできず、吐きだすことが増えた。私は師と友に助けられて、心苦しく思わざるをえなかった。私はみずからの力だけでは自分自身を生かす栄養分を摂せつ取しゆすることができなかった。排はい泄せつさえも同様だった。師はそれでも望みを捨てることなかれと私を諭さとした。精神は肉体を超ちよう越えつしうるのだと力説した。私も師の信念にすがった。すがろうとしながらも、ひそかに何度となく友に弱音を吐いた。私は死を予感していた。死はいつだって私の身近にあった。だから死自体は怖こわくなかった。ただ、師を裏切りたくなかった。私が死ぬことで師の信念に傷をつけてしまう。そのことが私にとって最大の恐きよう怖ふだった。

生きたい。

生きのびたい。

死にたくない。

師は私の生存の方法を探さぐるために奔ほん走そうしていた。私も生き抜ぬくためのすべを求めて、友の力を借りつつ書をあさった。精神の鍛たん錬れんにも精を出した。

だが、私は日ごとに衰おとろえていった。私の精神は、肉体の衰すい弱じやくに引きずられて、どんどん衰退していった。師は、信ずることだ、まずおのれを信ずるのだ、と私に言い聞かせて旅に出た。古い友人に会ってくる、もしかしたら何か手がかりがつかめるやもしれぬ、と言い残して。

師を見送りながら、またお師様に会えるだろうか、と私は思った。

お師様が帰ってくるまで、生きていられるだろうか。

無理かもしれない。私は明日、いや、今日死ぬかもしれない。

いやだ。生きたい。お師様にまた会いたい。生きたい。私は生き

なければならない。

　私は書をあさっていたのだ。お師様の蔵書は膨ぼう大だいだった。失われたはずの古代に書かれた書物もいくつかあった。その中には、機械化王国ギアロゴスの支配者〝機エンジ関ンタ王イクン〟マハリク・ゴンドラゴナの魔術ギアロ工学ニクスや、人造生物創出の大家〝鴉グレ大イト帝クロウ〟ギュンツァーの生体バイオ工学ニクスに関する書もあった。

　じつは、それらの書の存在を、私はかなり前から知っていた。師に内ない緒しよで、何度も読んでいた。研究していた。

　師が見いだした私の中にある魔術のオ能に、私は誇ほこりを持っていた。

　私は凡ぼん庸ような魔術士ではないのだ。あとは決断するだけだった。

　生きるために。

　他ほかに手だてはなかったのです、友よ。

　あのときはそう思えたのです、友よ。

8

「──とにかく、驚おどろいたよ」

　オルフレッド・ダルフレッドソン（34）は、くるくる表情を変えながら、何かに追い立てられているかのような早口でまくしたてる、饒じよう舌ぜつな男だった。

「なんせ、相手はあの魔ま導どう兵へいだろ。泣く子も黙だまるキング・グッダーの魔導兵だぜ？　こいつは俺の知りあいの兄弟の友だちの従い兄と弟この話なんだが、鉄鎖の憩い場で死美憧シビドーの下したっ端ぱと揉もめちまって──知ってんだろ？　死美憧シビドーっていったら、闇やみ市いちをとりしきってる六つのクランのうちの一つだ。やばい連中さ。だが、頭の足りてねえやつだったん

だな。だから下っ端だったんだろうが。そこにたまたま魔導兵が通りかかって、そうなりゃもう見境なんかありゃしねえ。魔導兵が持ってる脅メナ威ス・大グレ使イブの破は壊かい力は、実物を一目見りゃあ想像がつくってもんだろ。しかも、やつらの装そう甲こうはＥＸＣｉＤメタル製だ。メイドインファクトリーの剣けんやら槍やりじゃ、突ついたり斬きったりしたところで傷一つつきやしねえ。ハンドメイドのモトロール刀でも、腕うでが悪けりゃさっぱりだ。つまり、太た刀ち打うちできる相手じゃねえ。死美憧シビドーも俺の知りあいの兄弟の友だちの従兄弟も、もろともさ。仲よくぶった斬られちまった。まっぷたつだったらしいぜ？　こう、頭のてっぺんから尻しりまで、ずばっとな。まあ、そんな話はエルデン市民にはお馴な染じみだろうからこのへんにしとくが、そう──、

　あれは、もう一時か二時か。そんな時間帯ともなると、鉄鎖の憩い場も、ずいぶん人通りが少なくってな。ん？　俺かい？　俺は知りあいのとこで飲んで、四区の貸し宿に帰る途と中ちゆうだったんだ。

　雨が降ってた。たいした雨じゃなかったがな。

　俺は傘かさをさして、多少酔よってはいたものの、千鳥足ってほどじゃなかった。だから、夢でも幻まぼろしでもねえ。俺はこの目ではっきり見た。とはいえ、俺もさすがに我が目を疑ったね。公園を抜けたあたりで、巡じゆん回かいの魔導兵とすれ違ちがって──べつに悪さなんざしてなくとも、やつらとすれ違う瞬しゆん間かんはちっとばかし緊きん張ちようするんだよな。もう身についちまってるのかね。で、何事もなくやつらが通りすぎていくと、なんとなくほっとする。あのときも同じだった。だが、その直後だった。ガシャガシャンッ……！

　そりゃもう、心臓が止まるかと思ったよ！　一瞬、魔導兵が俺に襲おそいかかってくるんじゃねえかと思ったんだ。俺は慌あわてて振ふり向いた。違った。俺じゃねえ！　何があったのかわからねえが、魔導兵は走って何ものかを追いかけようとしてた。その何ものかってのは何かって？　さあな。ただ、毛むくじゃらだったぜ。ああ、そうだ、たぶん、やつは毛だらけだった。それに、でかかった。でかいくせに、速かった。俺はとっさに魔導兵のあとを追った。危ねえ。やめとけ。引き返せ。宿に戻もどって布ふ団とんにくるまって眠ねむって忘れちまえ。もう一人の俺が俺にそう言って止めようとしてたが、あいにく俺はガキのころから事件ってやつには目がねえんだ。見とかねえと絶対に後こう悔かいする！　俺はその

一心で走った。酔いなんざ吹ふっ飛んじまってた。



　ところが、魔導兵もあれでなかなか足が速はええ。人間じゃねえから、体力は無む尽じん蔵ぞうだしな。俺はみるみるうちに離はなされた。何度も見失っちまいそうになった。それでも俺はあきらめなかった。毛むくじゃらと魔導兵の行く先にだいたいの見当をつけ

て、先回りした。そして、とうとう追いついた。いや──、

　そんときにはもう、何もかもが終わってたんだ。

　ベンテン・カフェの近くだったな。路地裏だ。転がってた。あの魔導兵が、だぜ？　倒たおれてるってよりは、転がってる。そんなかんじだった。頭と右腕がもげちまっててな。胸のところが、ガバッと開いてた。毛むくじゃらはいなかった。いなくてよかった。いたら、俺の命だってやばかっただろうしな。もちろん、毛むくじゃらの仕し業わざだって証しよう拠こはねえが、状じよう況きようからして、やつが一番の容疑者ってことは間違いねえだろ。俺は毛むくじゃらの姿が見あたらねえことを確かめてから、ゆっくりと魔導兵に近づいた。死んだ魔導兵をじっくり拝おがめるチャンスなんか、そうそうあるもんじゃねえ。この機会を逃のがしたら、一生無理かもしれねえ。俺はなんとしても見たかった。魔導兵の中身は、いったいどうなってるんだ？　からっぽだって説。古い高等魔術で作られた人造人間が入ってるって説。いろいろまことしやかに語られてはいるが、どれが本当でどれが嘘うそやら、わかったもんじゃねえ。それを、俺が、この俺が、この目で、この手で、確かく認にんできる……！

　──でもな。ここが俺のすげえところさ。たしかに俺の気は逸はやってた。魔導兵魔導兵。それしか目に入ってなかった。それなのにな。気づいたんだ。後ろから近づいてくる足音に！

　俺はすかさず足を止めて壁かべにひっついた。頭の中を真っ白にしようとした。ありゃ本能ってやつだな。人じん畜ちく無害を装よそおう俺のすぐ脇わきを、魔導兵どもが走っていった。三、四……そうさな、五体はいただろうな。やつらはお仲間の死体──といってよければ、だが、でかいガラクタみたいな有様の死体を担かつぎあげて、あっという間にどっか行っちまった。あきらめきれねえで、すれ違う瞬間にじっと目を凝こらして見てみたんだがな。結局、魔導兵の中身はよくわからなかったよ。謎なぞは謎のままってわけさ。あの毛むくじゃらの正体もふくめて、な……」

　語り終えたオルフレッド・ダルフレッドソンは、深々とため息をついてから、思い出したようにジョッキの麦酒ビアを一口あおって、顔をしかめた。「──うえっ、ぬるっ……」

　第九区クァラナド歓かん楽らく街がいのほぼど真ん中にある「アウトルマ」は、「ベラドリア」という店と並び称しようされる最高

級クラブらしい。外装も内装も、従業員の質も数も、供される飲食物も、料金も、すべてがエルデンーと目されているようだが、特筆すべきは警備の厳重さだろう。通用口はもちろん、フロアの要所要所に配置された大勢の男女は、全員、剣けん術じゅつ、体術、または魔術の熟エキ練スパ者ートだという。なんでも、この店の経営者である、明るく楽しいクァラナドを作る会会長リンダ・H□エログローニャという女は、異常なほど用心深くて、客よりもたまに店の様子を見にくる自分の身を守るために、これほどの警備態勢を敷しかせているのだとか。

　そのエログローニャと面識があるおかげで、この店では賓ひん客きやく扱あつかいのジャン・ジャック・ド・ジョーカーが、気け怠だるそうに首を傾かたむけて、侮ぶ蔑べつに満ちた冷たい眼まな差ざしをオルフレッド・ダルフレッドソンにそそいだ。

「──で、貴様の話はそれでおしまいか」

「あ、ああ」オルフレッド・ダルフレッドソンは、空のジョッキをもてあそびながら、きょろきょろとあたりを見まわした。自分の話に熱中していたときとは打って変わって、落ちつかなげだ。「な、何か質問があるなら、答えてやってもいいぜ。俺に答えられることなら……」

「べつにないな」ジョーカーがちらりとこっちを見た。「貴様はどうだ」

「いや、俺もない」

「ということだ」

　ジョーカーは斜ななめ後方に手をさしだした。間かん髪はつを入れず、ソファの後ろに控ひかえていたクローディアが、ジョーカーの掌てのひらの上に一万ダラーＧＭ合金貨をのせた。

「駄だ賃ちんだ。くれてやるから、とっとと失うせろ」

「──っと」ジョーカーが放った合金貨を、あやういところでキャッチしたオルフレッド・ダルフレッドソンは、状況を把は握あくできていないようで、「え？」と目をしばたたかせた。

　ジョーカーはわざとらしいため息をついてみせた。

「二度は言わん。よく聞け。貴様の無む駄だに糞くそ退たい屈くつな長ちよう広こう舌ぜつがそれで終わりだというのなら、もはや貴様ごとき五流講談師に用はない。気の抜ぬけた炭酸水のような貴様の阿あ呆ほう面づらをこれ以上拝んでいるのも、耐たえがたい苦痛だ。よって、貴様が選ぶことのできる道は二つ。自らの意志でただちにこの場から立ち去るか。貴様自身以外の手によって排はい除じよされるか。どちらを選ぶのが賢けん明めいかは、自明の理だと思うがな」

「え……あ？　え？」

「おい、この鈍のろ間まの阿呆をつまみだせ」

　ジョーカーが指を鳴らすと、個室の外から三人の男女が駆かけつけてきて、オルフレッド・ダルフレッドソンを羽は交がい締じめにした。手慣れているのだろう。抵てい抗こうする間を与あたえない、洗練されてさえいる手口だった。オルフレッド・ダルフレッドソンは、荷物が運びだされるように連行されていった。

「──今ので四人目、か」ジョーカーは顎あごをつまんで、今度は物もの憂うげなため息をついた。「どれも似たり寄ったりの話だな。共通しているのは、鉄てつ鎖さの憩いこい場ばから単独の魔導兵を誘さそいだして、他ほかの魔導兵どもが駆けつける前に、殺害あるいは破は壊かいというべきか、そうして逃にげ去る。魔導兵狩りの姿をはっきりと目もく撃げきした者はいない。ただ、標準的な人間よりも大きく、毛むくじゃらだったという証言が二人からえられた。もっとも、その正体は風ふう貌ぼう奇き怪かいな化ばけ物ものだとか、数人から数十人の集団だとか、魔導兵狩りについてはすでに様々な巷こう説せつがある。そのうちの一つを引用しているのだとも考えられるしな。ようするに、深夜、魔導兵を狙ねらって破壊し、これを繰くりかえしているものがいる。事実らしきものといえば、ただそれだけというわけか」

「主様マスター」

　クローディアがジョーカーに声をかけるタイミングは絶ぜつ妙みようだ。おそらく、クローディアの頭の中にはジョーカーのことしかないのだろう。そうは思うのだが、それがどういうことなのか、彼にはよくわからない。どうも俺はよくわかっていないらしいということしか、わからない。

「別室に情報提供者があと三名いらっしゃっています。どうなさいますか」

「もういい。冗じよう長ちよう論外な話ばかり聞かされて耳が腐くさりそうだ。追い返せ」

「かしこまりました」

　クローディアは一礼して別室へと向かった。ジョーカーに命じられて、エルデン中から情報提供者を募つのり、今度はそれを追い返す仕事を言いつけられたわけだ。それでも、クローディアは不平一つもらすでもない。だが、ジョーカーのほうは不満たらたらというかんじだった。

「つまらん。あのキング・グッダーの魔導兵を狙って破壊するとは、なかなか愉ゆ快かいなことをやらかすやつもいるものだと思っていたのだがな。こうも具体性を欠いた証言しか集まらんのでは、単なる風聞にすぎんとの可能性も捨てきれん。何しろ、魔導兵狩りの正体はともかくとしても、魔導兵が間ま違ちがいなく破壊されたという証しよう拠こがない。事実らしきものと先刻己おれは言ったが、これではまさしく、らしきもの、だ。確定的な事実と認にん定ていすることなど到とう底ていできん」

「──魔導兵、か」

　魔導王〝原アトミ子ツクの・マ極キシ大マム魔・ド術レツド士スター〟キング・グッダー麾き下かの魔導ドレツド兵団ループスは、大邪竜ドラグ兵団ルーンや蜥蜴とかげ人の精せい鋭えい部隊〝黒ジヤきシユ鱗ギシユ〟、亜人大同ヘルド団結軍ウズなどとの戦いで半ば壊かい滅めつした。現存している魔導兵の大半は主力型ではない。それでも、一体が斃たおれれば複数体がカバーする彼らの連れん繋けいは健在だろう。魔導兵狩りが本当にいるのだとしたら、少なくとも、そうした魔導兵の特性については理解しているものと思われる。それなりの知能はあるというわけか。しかし、ジョーカーはいったい何がしたいんだ。

「貴様、まさか──」

　そんなことを考えてたら、ジョーカーに図星を指された。

「この見み目め麗うるわしく聡そう明めいにして明めい敏びんな男

はいったい何をしたいのか、などと考えていたのではなかろうな」

「どうしてわかるんだ」

「貴様の腑ふ抜ぬけた間抜け面づらを見れば、そのくらい容易に想像がつく」

「そんなものか」

「いいか」ジョーカーは眉まゆをひそめて人差し指を振ふった。「己おれは魔導兵狩りなどという戯たわけた所業に及およぶものの意図が那な辺へんにあるのか、それが知りたいのだ。好こう奇き心しんだ」

「ふむ」

「貴様にはわからぬのかもしれんがな。所しよ詮せん、貴様のごとき独う活どの大たい木ぼくが十全に理解しうる他者の行動原理は、食欲だとか睡すい眠みん欲だとか生存を確保するためだとか、その程度のものだろう。だがな。人は何も必要に駆られてのみ動くものではない。余人から見ればくだらぬ、無駄な目的のために命を投げだす者すらいる。畢ひつ竟きよう、客観に立って生きることは能あたわず、主観の道を往ゆくことしかできぬ人は、おのれが欲ほっし、希求するものに従うしかないのだ」

「なるほどな。で、お前はお前に従っているわけか」

「そうだ。人として、おのれを裏切ることほどの愚ぐ行こうはそうそうない」

「じゃあ、お前が自分で調べたらどうだ」

「なんだと？」

「知りたいんだろう。魔導兵狩りの正体と目的を。だったら、他人に話を聞くより、お前が待ち伏ぶせでもなんでもして、直接、現場を押さえたほうが手っ取り早いんじゃないか」

「ふん」ジョーカーはソファの背もたれに身体からだを思いきり押しつけ、腕うで組ぐみをした。「──わかっている。貴様に言われるまでもない。己おれもそうしようと思っていたところだ。しかし、物事には順序というものがある。何か事件が起こり、それを心ゆく

まで堪たん能のうするためには、踏ふまねばならん手順というものがあるのだ。情じよう緒ちよを解せぬ木で偶くの坊ぼうに言っても無む駄だだろうがな」

「無駄だと思うなら言うなよ」

「黙だまれ。己おれは出で来き損そこないの貴様をわざわざ教育してやっているのだ。そんなこともわからんのか。だから朴ぼく念ねん仁じんだというのだ、貴様は」

「そうか。そいつは悪かったな」

　彼は片方の眉をつりあげて、唇くちびるをゆがめてみた。

　それがこの状じよう況きように適切な表情なのかどうか、よくわからないが。

9

　師のすさまじい怒いかりを、私は懐なつかしく思い出す。

　怒りさえも今は愛いとおしく、慕したわしい。

　師との決けつ裂れつを、訣別を思うたびに、私は我が身が粉々に砕くだけてしまいそうな心持ちになる。師は私のすべてだったし、おそらく、少なくとも一時、私は師のすべてだった。だが、だからこそ、私は決断したのだ。私はぼろぼろに崩くずれて朽くちかけていても、あくまで魔術士だった。魔術士の才を私の中に見いだし、魔術士として私を育てたのは師だった。私は魔術士としてあることに忠実でなければならなかった。魔術士としての私を捨て去ることは、師が救い、育成してくれた私という存在を否定することに他ほかならなかった。そして、魔術士であるならば、私はなさねばならなかった。なぜなら、私にはそれが可能だったからだ。いかなる理由があろうと、みずからに可能であることを、躊ちゆう躇ちよして行わないのは、魔術士にふさわしい態度ではない。しかも、私は生きたかったのだ。おのれが欲することを、おのれが求めるがままになせ。それが魔術士だ。私は後こう悔かいしてなどいない。ただ、悲しく思うだけだ。

弱った心しんの臓を補助するごく単純な魔導機械ギアを短期間で完成させ、それを自分に埋うめこんだ私に向かって、師は「そんなものは我々の魔道ではない」と怒ど鳴なった。師が大声を出すと空気が震ふるえ、細かい稲いな妻ずまが散った。私は、しかし、退ひかなかった。お師様のために生きようとしているのに、との幼い不満も私にはあったのだろう。師と私は激しく口論した。私が疲ひ労ろう困こん憊ぱいして昏こん倒とうするまで、それはつづいた。目が覚めると、私は寝しん台だいに寝ねていて、師が私の額をなでていた。「精神で肉体を超ちよう越えつすることは可能なのだ。エヴァンジェリン、なぜそれがわからぬ」そう言いながらも、老いた師は深い悔かい恨こんと無力感とに襲おそわれているようだった。だが、それでも信じることを、私に信じさせようとすることをやめない、不ふ屈くつの精神を師は持っていた。

私は打ちのめされたのだ。私は歩くことのかなわない我が身を嘆なげいた。動かない腕を呪のろった。失われた左目のために泣いた。死にかけた私の肉体を憐あわれんだ。私は師に言った。「お師様にはわからない」と。「どうせ、お師様には、わからない。私のことなんて」と。「私は、お師様みたく、強くない」と。

あの訣別を思うたびに、私は心が軋きしむ音を聞く。

私は身体中を作りかえて、ときにそのための技術を論文の形で発表し、それなりの反はん響きようを呼んだこともあったが、今、私の全身は軋んでいる。私は自分の過あやまちに気づいている。それでも、私は止まるわけにはゆかない。私の魔道を途と切ぎれさせてしまいたくはない。一つだけなのだ。あのとき、訣別のあと、私はひそかに誓ちかった。それだけが、私と師を繋つなぐものであるかのような気がしている。

私は生きる。私の魔道を貫つらぬいてみせる。最さい期ごの瞬しゆん間かんまで、魔術士として、師が教えてくれた、あるべき姿の魔術士として、生きる。

私は口を開ける。友が細かく砕いた赤い石のようなものを私の口にそっとふくませる。それは私の口こう腔こうで脈動している。私は唾だ液えきが分ぶん泌ぴつされるのを待って、ゆっくりと、時間をかけて、吐はきだしてしまわぬよう注意して、それを嚥えん下かする。私は身体の奥底にぼんやりとした熱を感じながら、また口を開ける。

むなしくはありませんか、友よ。

私はまだまだ大だい丈じよう夫ぶです、友よ。

10

──かつての俺が、何を求め、何を目指していたのか、俺にはわからない。思い出せないんじゃない。どうしても、わからない。

たしかに俺は、強きよう烈れつに餓うえ、渇かわいていて、それを満たすために、剣けんを振ふるっていた。

だが、俺は何に餓えていたのか。どうして渇いていたのか。

俺にはわからないし、あのときもわかっていなかったに違ちがいない。

ただ敵がいればよかった。ぶちのめす相手が必要だった。立ち向かって倒たおし、また別のやつに立ち向かう。前進する。ふと思う。ひょっとして、俺は恐おそれていたんじゃないか。走りつづけないと、止まってしまう。止まってしまったら、もう走りだせない。だから敵が必要だった。俺に刃は向むかう者が。俺を殺そうとする者が。俺に襲いかかってくる殺意が。

それなのに、りりぃ、俺はお前に言った。

「──もうよせ。俺にはお前とやりあう理由がない」と。

何十回、何百回と斬きりかかってきたお前を、お前のようにどこまでもあきらめない、どんどん強くなってゆく、粘ねばり強く、真しん剣けんな敵を、俺はあれほど必要としていたはずなのに。

今の俺は、いらないんだ。

もう俺の足は、一度、止まってしまった。今も、止まったままなのかもしれない。

敵。敵。敵。次なる敵、新たな敵、手て強ごわい敵、絶望的なま

でに強大な敵が行く手に立ちふさがるごとに、打ち鍛きたえられ、とぎすまされた一本の刃やいばとなって、斬る、突つく、殺す、殺しつくす、鏖みな殺ごろしにする、それだけに集中して、大量の死の上に立つ者の名を屍しかばねの山に刻み、叫さけびつづけた俺の手に、足に、杭くいが打ちこまれ、喉のどは嗄かれ、血は薄うすまって水となり、皮ひ膚ふは乾かん燥そうして、骨はすかすかになった。俺は案か山か子しみたいな腑ふ抜ぬけになりさがった。あの監かん獄ごくで、何度も、何度も、何度も繰くりかえした問いが、いつも俺の中のどこかにある。

　俺は、誰だれだ？　俺は、何ものなんだ……？

　今だって、少し濁にごったエルデンの星空を眺ながめながら、考えている。いや、考えてなどいない。いくら考えたところで、答えなど浮うかんでこないことは、もうわかっている。俺はその問いを、ただ見つめている。俺自身を。俺と他者を隔へだてていた、そして、いまだに隔てているのかもしれない、俺自身を。

　剣の柄つかを握にぎった。

　最初に剣を握ったとき、何に向けて振り下ろそうとして、実際、振り下ろしたんだったか。不意にそんなことを思った。

　鉄てつ鎖さの憩いこい場ばの、ベンチや花か壇だん、芝生しばふを備えた公園の片かた隅すみにある大樹の陰かげに、彼は身をひそめていた。夜よ更ふけというより、すでに早朝に近づきつつある。少し前まで、魔導兵狩がりの噂うわさの影えい響きようか、そこらをうろつく者の姿が結構見受けられたが、いいかげん彼らもあきらめたらしい。人通りはずいぶん少なくなった。やつは、人目をさけるために、待っていたのか。

　一体の魔導兵が歩いてくる。巡じゆん回かいだ。公園に足を踏ふみ入れようとしている。その前を、二人の男が肩かたを組んで何かわめきながら横切った。酔よっているようだ。二人は少ししてから魔導兵に気づき、慌あわてて足を速めた。そのときだった。魔導兵が立ち止まって、首を巡めぐらせた。「わあっ」と二人が走りだした。彼は大樹の陰からゆっくりと進みでた。大剣はまだ抜ぬいていない。この、におい。ただの殺気じゃない。妙みようなにおいだ。彼はその方向を見た。魔導兵も動いた。くる。きた。そいつはジグザグに闇やみを引き裂さいて走ってきた。なんだ？　でかい。人間じゃない。獣けもの。前ぜん肢しと後肢を駆く使しして、とんでも

ない速度で近づいてくる。まるで稲いな妻ずまみたいだ。事実、そいつはぼんやりと光っている。金色の毛皮をまとった、巨きよ大だいな獣だ。魔導兵は、急接近してきたそいつに向かって、脅メナ威ス・大グレ使イブを叩たたきつけようとした。だが、かわされた。そいつは右に大きく跳とんで、後肢のみで着地し、身体からだを起こした。

　立った。

　威い嚇かくするように立ちあがって、咆ほう吼こうした。

　ＧＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！

「む……！」

　これまでの魔導兵狩りの手口は、証言者を信用するなら、鉄鎖の憩い場から魔導兵を誘さそいだして、離はなれた場所でしとめるというものだった。だが、彼はとっさに、違う、と思った。やつはここでやるつもりだ。今、この場所で片づけてしまう気だ。

　そのとおりだった。

　やつは、前肢を━というより、あれは腕うでというべきだろう、両腕を広げて、魔導兵に襲おそいかかった。もちろん、魔導兵は迎むかえ撃うった。巨大な斧おののごとき穂ほ先さきを持つ脅メナ威ス・大グレ使イブで、やつを叩き斬ろうとした。驚おどろいたことに、やつはそれを左腕で軽々とはたき落として、魔導兵の懐ふところに飛びこんだ。ほんの一いつ瞬しゆんの出来事だった。四本指のやつの右手が、魔導兵の頭部をザガッとねじ切って、ズガシュッと胴どう鎧よろいの表面を引っぺがした。どうやら、やつの狙ねらいはその奥にあるようだった。

　魔導核Ｄ□コア。第五クイン要素石トウラとも呼ばれる。魔導兵の動力源だ。目もく撃げき証言を聞いていて、なんとなくそうではないかと思っていたが、やはりか。しかし、見事な手て際ぎわだった。やつは魔導兵を押し倒して、装そう甲こうを剝はがした胸きよう部ぶから魔導核Ｄ□コアをほじくり出すと、もう逃とう走そうする態勢になっていた。やつが今までと異なるやり方を選んだ理由も、すぐにわかった。

　駆かけつけてきたのだ。魔導兵の増ぞう援えんだ。現在、エルデンの警護にあたっている魔導兵は、大半が工兵型サパーズの武装を換装した自律意思のない半歩デミポ兵型ーンズだが、それらを統とう率そつする騎士型ナイツはある程度の判断力を持っている。連夜の魔導兵狩りを受けて、連中もいくらか警けい戒かいを強めていたのだろう。やつはそれを見み越こして、素す早ばやく魔導兵を襲い、そして、すぐさま逃走することにした。つまり、そういうことじゃないのか。

「ふむ」

　やつはべらぼうに足が速い。その後ろ姿は、もうかなり小さくなっている。追っても無む駄だだろう。魔導兵たちも追いつけまい。

「まあ、やむをえんな」

「──何がやむをえん、だ！」

　遠くから怒ど鳴なり声がした。他ほかの場所で張りこみをしていたはずだが、騒さわぎを聞きつけてやってきたのだろう。ジョーカーだ。クローディアを従え、漆しつ黒こくのマントをなびかせて走ってくる。

　ちなみに、今日のジョーカーは、帽ぼう子しも黒だし、マントの下も黒ずくめで、クローディアまで黒い服を着せられていた。夜の張りこみなのだから、これくらいやらんでどうするというのがジョーカーの主張だ。

　そこまで準備万ばん端たん調ととのえて、当たりくじを引けなかったのだから、さぞかし残念だろう。

　ジョーカーは彼のそばで足を止めると、あたりを見まわして、いまいましげに舌打ちをした。

「出たのだな、魔導兵狩りが」

　やつにやられた魔導兵の残ざん骸がいは、早くも別の魔導兵たちによって運び去られようとしている。やつを追つい跡せきしていった一隊は、もうここからだと姿が見えない。

「ああ」

「見たのか、貴様」

「見た」

「だったら、なぜ追わん！」

「たぶん、俺の足じゃ無理だ。やたらとすばしっこいやつだったぞ」

「貴様は諦あきらめがよすぎる」

「悪かったな」

「悪いなどと思ってはおらぬだろう」

「まあな」

「貴様──」

「だが」

　彼は何かを言おうとして、口ごもった。俺は何を言おうとしていたのか。俺は何を感じたのか。そう──あのときだ。逃にげ去る間際のやつと、ほんの一瞬だが、目があった。あの、目。黒々とした、目。敵意はなかった。やつは俺を敵とは見なさなかった。いや。むしろ、どうか自分の敵には回らないで欲しい、と願っているかのように思えた。魔導兵を瞬時に斃たおしてみせた生き物の目には、狂きよう気きや殺気どころか、戦意さえもなかったのだ。本当は、戦いたくなどない、と言っているかのようだった。でも、やむをえない、こうするしかない、と。

「それほど悪いやつでもなさそうだったが」

「はあ？」

　ジョーカーは眉まゆをつりあげて首を傾かしげた。クローディアさえも、少し怪け訝げんそうに彼を見ている。珍めずらしいこともあるもんだな、と思いながら、彼は後ろ頭をかいた。

「なんとなく、そんなかんじがしたんだ」

「ふん。貴様が抱いだいた印象など知ったことか。とにかく、この

己おれが一度狙った獲え物ものだ。絶対に逃のがさん。次は捕つかまえるぞ」

「まだやるのか」

「当然だ」

「そうか」

　彼は少しだけ唇くちびるをゆがめてみた。

　やつを、捕まえる。どうもぴんとこないが、もう一度、やつに会ってみたい気はする。なぜだろう。あの目か。やつがどうしてあんな目をしているのか、俺は気になっているのか。

　だとしたら、俺はやつに会うべきなのかもしれない。

　漠ばく然ぜんとした理由でも、俺自身が欲ほつすることを、俺はやるべきなのかもしれない。

「──まあ、お前がやるというなら、俺もつきあうさ」

11

　なぜ我々魔術士が不死を求めるのか。そこにはむろん、単純に長く生きたいという欲望があるだろう。時間が多く与あたえられれば与えられるほど、魔道の追求に捧ささげられる時間も多くなる。魔術は無限だ。魔導王時代の古き偉い大だいなる魔術を復活させ、さらにそれを前進させようとすれば、時間はいくらあっても足りない。それゆえに、名だたる天才魔術士たちは不死を切望したし、その手段として不老の法に取り組んだ。我が師は不老ではない、別の方法で不死に近づこうとしていた。

　だが、それだけではないのだ。我々は、何よりも生の果てを見たいのだ。生命の超ちよう越えつという、今まで誰だれも解決しえなかった難問に挑ちよう戦せんしつづけているのだ。我々魔ま術じゆつ士しは敗残者である。ずっと敗北しつづけてきた。しかし、累るい々るいたる死し屍しの上に、いつか勝利の旗を打ち立てることを

夢見ている。師がおっしゃっていた。「魔術士は情熱的でなければならぬ。ある面はロマンチストであったほうがよい」と。我々魔術士は、異様なる情熱をもって、延々と不死を目指しつづけている。「決してその火を絶やしてはならぬ」と師はおっしゃっていた。かつて魔術士は心に不死を抱いて死んだ。今も魔術士は心に不死を抱いて生きているのだ。

　私は生きたい。もっと生きたい。生きていたい。私の身体からだに生じる不具合。魔導機械ギアの消しよう耗もう。劣れつ化か。故障。生の器官の機能不全。私はどんどん追いつめられている。
かー。こー。ほー。呼吸が、時折、止まる。目が回る。世界が暗くら闇やみに包まれてゆく。私は心に不死を抱いたまま死を覚かく悟ごする。お師様。ああ、せめて、せめて一目だけでもいいから、会いたかった。会いたい。お師様。お師様。私は死の寸前まで追いこまれる。もうだめ。だめだ。終わりだ。急に遠くから光が射さしこんでくる。友の声がする。私を呼ぶ声。私は必死に戻もどろうとする。もがく。あがく。私は生きたい。もっと生きたい。お師様に会いたい。友が私の口を開ける。口にふくまされた第五クイン要素石トウラを、私は懸けん命めいにのみくだす。呼吸も満足にできないのに、のみくだす。それは賢けん者じやの石の一種であるとされ、魔力そのものを宿している。私の魔力はすでに涸かれかけている。もはや、そうして外から取りこむことで補ほ充じゆうするしかない。魔導機械ギアは魔力によって作動しているのだから、生命を維い持じするために、私はそうするしかない。

　いや、私自身の手ではもうできない。友に頼たよっている。友が私を生かしてくれている。徐じよ々じよに、より頻ひん繁ぱんに、より多くの第五クイン要素石トウラを必要とするようになってきている私を、友が支えてくれている。おそらく、その時は刻一刻と迫せまっていると、もう猶ゆう予よはほとんどないと知りながら、友は—。

　ごめんなさい、と私は思う。

　謝らないで、と友は言う。

「今度こそ万ばん全ぜんだ」とジョーカーは自信ありげに胸を張ってみせた。

　なんでも、もう一度、クローディアに目もく撃げき者しやの証言を集められるかぎり集めさせて、魔導兵狩りを見た時間、場所などを地図に書きこみ、それらの情報を総合して分ぶん析せきした結果、とうとうやつの行動に一つのパターンを発見することができたのだという。よくもまあ、そんな七しち面めん倒どうなことをするものだと思うが、とにかく、ジョーカーに言わせると、魔導兵狩りが鉄てつ鎖さの憩いこい場ばを「狩り場」にしていることは間ま違ちがいない。もっとも、鉄鎖の憩い場といっても狭せまくはないし、実際に今まで魔導兵を襲おそった地点も、公園、市場など、広こう範はん囲いに散らばっている。昨夜はたまたま公園だったが、今夜、また公園かどうかはわからない。また、そこから魔導兵を誘さそいだし、離はなれた場所でしとめるのがこれまでのやり口だったが、昨夜は違った。

　つまり、やつはちゃんと魔導兵の出方を見て、臨機応変に対応している。狩り場はだいたい定まっていても、狩り方は一定ではないのだ。ただ、ジョーカーはあることに気づいた。

　退路だ。

　魔導兵狩りは、常に、西へ逃にげる──。

「ベンテン・カフェ付近、またはその以西でも、やつは何度か目撃されている。だが、鉄鎖の憩い場より東で見たという情報は二つしかなかった。この二つは又また聞ぎきの又聞きで、ようするにガセネタの可能性がきわめて高い。そして、もっとも西の目撃情報は、第六区の手前。深夜、環かん状じよう通を渡わたる大型の光る獣けものを見たという話だ。また、やつは必ず夜半から早朝にかけて現れる。他ほかの時間帯は何ど処こかに身を潜ひそめているわけだ。そこから己おれが導きだした結論は──」

　やつは、第六区に潜せん伏ぷくしている。その潜伏場所と、狩り場である鉄鎖の憩い場を往復するのが、やつのおおまかな行動パターンだ。

　さらに、ジョーカーはやつのルートをいくつか予測して、四つに絞しぼった。いずれも環状通を横断するので、それぞれの場所に、ジョーカー、クローディア、祭さい壇だんから無理やり引っぱりだ

された髭ひげ、そして彼がついて、やつの姿を見たらすぐ、追つい跡せきしつつ、声を出して他の者に知らせる、という手て筈はずが調ととのえられたのだが。

「──なんでお前がここにいるんだ」

「いけない？」

「まあ、いけなくはないが」

「じゃあ、いいでしょう。あたくしのことは気にしていただかなくて結構です。べつに邪じや魔ましたりはしないから」

「そう願いたいな」

　彼は環状通に面した第六区側の建物の外がい壁へきに背中をあずけて息をついた。俺はこの女が苦手なのか。少なくとも、迷めい惑わくではある。今も、邪魔しないと言いつつ、彼に身体をよせてきて、麝じや香こうのような香かおりが鼻について仕方ない。鎧よろいのおかげで、肌はだざわりやぬくもりは感じないが、その匂においがたまらなくて少し離れると、さりげなくまた距きよ離りを縮めてくる。根負けしてそのまま放ほうっておいたら、徐々に体重までかけてくる始末だ。

「いったい、なんのつもりだ、と思っているのでしょう？」

「まあな」

「ふふ。寒いのです」

「そんな恰かつ好こうをしているからじゃないか」

　女のドレスは、胸むなもとが思いきり大きく開いているだけでなく、肩かたや背中が大だい胆たんに露ろ出しゆつしている。もう朝晩は吐はく息が白くなる季節だ。わざわざそんな服を着て、寒いも何もないだろう。

「違うわ」

　女は、だが、即そく座ざに否定して、すうっと目をすぼめた。

　この女は、なぜ時折、俺をこんな目で見るのか。

　俺を憎にくむような、俺に挑いどむような、それでいて俺にすがるような、目で。

「寒いのは、からだではないのです。こころ。あたくしのこころが冷えて、冷えきって、凍こおりついていて、とても寒いのです」

「意味がわからん」

「わからなくても、いいわ。あたくしはわかっているから」

「まあ、お前のことだからな」

「あなたは、あなたのことを、きちんとわかっているのかしら」

「……どうだかな」

「あたくしも、あなたのことがわからない。おあいこね」

「ああ」

「いいえ。そうじゃない。あたくしはあなたを知りたいけれど、あなたはあたくしのことを知りたいと思ってなどいない。おあいこではないわ」

「そうか」

「そうよ」

「で、なんでお前がここにいるんだ」

「あたくしもこの目で見たのです。魔導兵狩りとやらを」

「ほう」

「興味があって。個人的に」

「好こう奇き心しんってやつか」

「そう。あれは、ただの獣ではないわ」

「つかまえて、解かい剖ぼうでもする気か」

「あなたは、どうしたいの？」

「さあな」

「殺す気はなさそうね」

「わからん」

「第五クイン要素石トウラ。魔導兵の動力源は、本当にあの賢けん者じゃの石だったのね」

「ああ」

「あなたは、どうしてそんなことを知っているのかしら。魔術士でもないのに」

「知りあいくらいはいる」

「たとえば、キング・グッダーとか？」

「グッダーは──」

　彼は地面に視線を落とし、ゆっくりとまばたきをしてから、女を見た。

「お前は何を知っている」

「何も。ただ、しばらく前、あなたが王の城へ入ったということしか」

「つけたのか」

「どうかしら」

「悪あく趣しゅ味みだな」

「よく言われるわ」

「だろうな」

「でも、気にしないことにしているのです。あたくしはあたくし以外のものに従うつもりはない。あなたもそうでしょう？」

「時と場合による」

「本当に？」

「よく喋しやべるやつだ」

「だって、楽しくて。あたくしと、あなた。二人きりで」

「俺はそうでもないが」

「残念だわ」

「そろそろ黙だまれ、リルコ」

　あのにおいがする。殺気のようで、殺気ではない。人とも獣けものともつかない。彼はそれをにおいと呼んでいるが、嗅きゆう覚かくでとらえているわけではない。手ざわりのような、頭の隅すみをびりびりと刺し激げきするような、自分でもうまく説明できない感覚だ。

　それが、夜気を引き裂さいて迫せまってくる。やつだ。やつがくる。もう遠くない。近い。すぐそばだ。ジョーカーの予想は的中したということか。だが、当たりを引いたのは、ジョーカーではなく、クローディアでも髭ひげでもなく、またもや彼だった。きっと、あとでさんざん嫌いや味みを言われるだろうが、それはそれとして――俺は、どうする？　どうするつもりなんだ？

　彼が自問している間に、きた。彼とリルコが背にしている建物の脇わきから、やつは弾だん丸がんのように飛びだしてきた。全身の毛皮が金色に輝かがやいている。四つん這ばいの姿勢だが、犬や猫ねこより、猿さるが腕うでと脚あしを使って全力疾しつ走そうしている恰かつ好こうに近い。昨夜、見たとおり、二本脚で直立歩行することもできる生き物なのだろう。しかし、あれだけ速くて、図ずう体たいもでかいのに、足音はほとんどしない。やつはまっすぐ環状通を突つっ切って、もう第五区に入ろうとしている。

　今から走って、追いつけるか。無理だろう。どこかで、それでいいのかもしれん、と思っている自分がいる。俺は何を欲ほつしているのか。何がしたいのか。考えれば考えるほど、何もない、無のような地平に迷いこむ。

　ずっと昔、かつての俺は、それを虚きよ無むだと思い、虚むなしさに苛いら立だち、憤いきどおって、敵を求め、敵を壊こわし、殺して、巨きよ大だいな穴を埋うめるために、ひたすら土を投げ入れ

るような作業を延々繰くりかえしていた。だが、ちっとも埋まらなかった。虚無はいつまでも虚無としてそこにあった。捕とらえられて、牢ろうに繋つながれた俺は、長い、長い、長い、長い時間をかけて、とうとうその虚無に名前をつけることができた。

　俺、だ。虚無とは俺自身だ。虚無である俺自身が、俺と他者とを隔へだてている。そうとも知らず、俺はその存在に苛立っていたんだ。今は少し違ちがうようだ。ときに迷いこむその無のような地平とは俺自身だと、俺は理解している。だから俺は、怒いかりや焦あせりを抑おさえて、見つめている。じっと無のような地平を眺ながめている。目を凝こらせば、何かが見えるんじゃないかと。何もないようにしか思えないが、何かあるんじゃないかと。今も探している。その最さ中なかだった。

「ふぅっ……！」と、リルコが右手で空を薙なぎながら息を吐はいた。彼はとっさにリルコを止めようとしたが、間にあうはずもなかった。ただ、さいわいなことに、やつの速さはリルコの予測をわずかに上回っていたようだ。やつが直前に通りすぎたばかりの地面がボグンッとめくれあがって、破は片へんと粉ふん塵じんが舞まった。やつは第五区に進入した。

「惜おしかったわ。もう少しだったのに」

　そう言いながらも、リルコはさして残念そうでもない。それどころか、笑えみさえ浮うかべている。わからん女だ。彼はリルコを置いて走りだした。

「ジョーカー！　クローディア、髭……！　出たぞ！　やつだ……！」

　三人とも環状通沿いにいる。すでに異変を察知しているかもしれないし、そうでなくとも、彼の声を聞けば動くだろう。彼はやつを追った。追いつけなくても、行く先はわかっている。鉄てつ鎖さの憩いこい場ばだ。やつはそこで魔導兵を襲おそい、第五クイン要素石トウラを奪うばって、持ち帰ったそれを、どうしているのかは知らない。だが、やつは何がなんでも第五クイン要素石トウラが欲しいのだろう。欲しがっているというよりも、必要としている。そんなかんじがする。

　環状通を渡わたって、第五区に入った。リルコはついてきているようだ。走ってはいない。身体からだを浮かせて、飛んでいる。超

オー越バリ者ストか。彼の知るかぎり、その異能力と魔術とをこうまで見事に融ゆう合ごうさせる者は、あの時代にもいなかった。
グッダーが言っていた。時は満ちつつあり、花は咲さきつつある、と。俺にとってはどうでもいい話だ。興味がない。だが、だからといって、無関係でいられるのか。俺を呼びつけたグッダーは嗤わらっていた。

　無む駄だだ。逃のがれることなどできぬ。逃さぬ。汝なれを欠くわけにはゆかぬ。それに、汝なれは逃にげぬ。なればこそ、いまだそのような様ざまであがいておるのであろう。所しよ詮せん、我ら七人は同じ穴の狢むじななのだ、と。

　今の俺は、グッダーを否定する言葉を持たない。あいつが正しいのかもしれない。間違っているのかもしれない。それを判断するためにも、俺は見つけたい。何もかもを失って、あまりにもちっぽけな、裸はだか同然の身となった俺とは、いったい何ものなのか。俺のこの腕はなんのために剣けんを振ふり下ろすのか。俺の目は何を見て、俺の耳は何を聴きいているのか。俺は何を思い、何を感じて、何に重きを置き、何に憤って、何を悲しむのか。あの何もない地平、俺自身の果てに、何があるのか。何かあるはずだ。

　俺はそれが知りたくて、走っている。やつを追いかける。

　間もなくジョーカーが合流した。

「まったく、貴様という男は悪運が強い……！」

「お前にツキがないだけではないのか！」

　ジョーカーの後ろには髭もいる。クローディアの姿は見あたらない。別行動か。

「──その髭ひげ臭くさい口を謹つつしんで塞ふさげ、髭め！　己おれの強運はつとに有名だ！　己おれほどありとあらゆるものに恵めぐまれて生まれつき、また祝福された運命を歩んでいる者は他ほかにいない！」

「増ぞう上じよう慢まんもここに極きわまれり！　お前は昨夜も魔導兵狩りとやらを見み逃のがしたのであろう！　それで強運を主張するとは、片腹痛いわ！」

「髭まみれのくせに五う月る蠅さい！　だいたい、なぜその女がい

るのだ！　魔ま女じよめ、飛べるのなら、一っ飛びしてさっさと魔導兵狩りを捕つかまえてみせろ！」

「これ以上、速く移動しては疲つかれてしまうわ」

「疲れるくらいなんだ！　できるのなら、勿もつ体たいぶらずにやってみせるがいい！」

「冗じよう談だんでしょう。あなたごときの言うことを聞かなければならない理由がどこに？」

「そんなもの、あるに決まっているだろうが！　なぜなら、他の誰だれでもない、この己おれの命令だからだ！」

「よくわからない理り屈くつね」

「わからんでいい、とにかく行け！」

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー。あたくしはあなたが嫌きらいだわ」

「己おれとて貴様のような女は願い下げだ！」

「ムハハッ！　拙せつ僧そうから言わせてもらえば、お前たち、なんのかの言ってすこぶる気があうようではないか！」

「──黙だまれ腐ふ乱らん髭ひげ！」「髭に埋うもれて腐れ死にたいのですか？」

　たしかに、髭の言うとおり、少なくとも息はあっているように思える。彼が足を止めると、ジョーカーも立ち止まり、リルコは地面に降りて髪かみをかきあげた。髭は彼を追い越こしたところで急停止を試みて、ようやく止まった。

　前方だ。鉄鎖の憩い場まではまだ距きよ離りがある。

　それなのに、魔導兵がいた。しかも、一体ではない。何体もいる。瞬しゆん時じにはかぞえられないほどの数だ。見たところ、半歩デミポ兵型ーンズだけではなく、騎士型ナイツもいる。一小隊まではゆかないにしても、分隊規模か。二十かそこらはいるだろう。

　それだけの魔導兵を向こうに回して、やつは戦っていた。ひとり

きりで、右へ、左へと駆かけまわって、逃げようと思えば逃げられるだろうに、退ひこうとしない。それどころか、やつは時折、突とつ出しゆつしてきた魔導兵に攻こう撃げきさえ加えようとする。だが、あれは明らかに誘さそいだ。意図的に隙すきを作って、やつが出てきたところへ、数体の魔導兵が脅メナ威ス・大グレ使イブを一いつ斉せいに突つきだす。そうなると、やつも後退せざるをえない。そこに別の魔導兵が殺さつ到とうしてくるのだから、たまらない。やつはかろうじてこれをかわし、ものすごい脚きやく力りよくでなんとか距離をとって──しかし、やはり、逃げない。機会をうかがっているのだ。

　魔導兵をしとめる。必ず第五クイン要素石トウラを手に入れる。やつは覚かく悟ごしているかのようだ。それまでは絶対に退かないと。どうして、そこまでして？

　状じよう況きようから考えるに、魔導兵どもは昨夜よりもさらに警けい戒かいを強めて、分隊規模の巡じゆん回かいまで始めた。そして、やつはここで魔導兵の群れと出くわしてしまった。あるいは、魔導兵も予測を立てて、ここで待ち伏ぶせしていたのかもしれない。

　だったら、今回はいったん退いて、ほとぼりが冷めるのを待てばいいんじゃないのか。

　そうできない理由があるのか。

　何がやつを急がせているのか。

　彼は我知らず歩きだしていた。大剣の柄つかに手がかかっている。そうか、抜ぬくのか、と、他ひ人と事ごとのように思った。ジョーカーが目を剝むいた。「おい、貴様──」「待て、トマト！　いったい何を……！」髭も叫さけんだ。リルコはぽかんとしていた。俺も半分くらいお前たちと同じ気持ちだと言ったら、どう思う？　自然と口くち許もとがゆるんだ。でもな。どうやら俺は、こうしたいらしい。こうすると決めたら、誰がなんと言おうと、俺はやっちまうみたいだ。

「お前たちはつきあわんでいいぞ」

　一応、そう言ってから大剣を抜いたが、ジョーカーたちが尻尾しつぽを巻いて逃げるとは微み塵じんも考えていなかった。俺はあい

つらのことが結構気に入っているのか。わからないが、たぶん、嫌いじゃない。リルコはまた別だが。

　魔導兵どもが彼に反応した。隊列がほんの少しだけ乱れかけた。さあ、どうする。俺とやるか。それとも、俺を無視して、やつの相手をしつづけるか。両方か。騎士型ナイツは決断したようだ。魔導兵が二手に分かれた。しかし、そのときにはもう、彼は突とつ進しんしていた。一息だった。彼は最前列の魔導兵に肉にく薄はくして、大剣を右下から左上へ振ふりあげた。ＥＸＣｉＤメタルだかなんだか知らないが、彼の大剣を弾はじくことはできなかった。魔導兵の左ひだり腕うでと頭部が吹ふっ飛んだ。間かん髪はつを入れず、左ひだり隣どなりの魔導兵の肩かた口ぐちに大剣を叩たたきこんで、斜ななめに斬きり下ろした。間を置かず、今度はいったん大剣を胸むなもとに引きよせてから、突きを放った。「つあっ！」大剣は右側の魔導兵の土手っ腹にぶっ刺さった。彼はそのままの状態で力任せに大剣を振りまわし、魔導兵どもを撥はね飛ばして、蹴け散ちらした。「──でえええええええぇぇい……！」

「くっ、貴様というやつは……！」

「詮せん方かた無し！　ここに至ってはもはや闘たたかうのみ！　拙僧の筋肉に懸かけて……！」

　ジョーカーが腰こしの剣けんを抜き、髭は僧服を脱ぬぎ捨てて上半身裸はだかになった。彼は大剣で串くし刺ざしにしていた魔導兵を放ほうり投げて、かすかに笑った。こうなるだろうと予想していた自分がいて、そのとおりになった。痛快だった。痛快、か。そうだ。俺は妙みようにいい気分だ。どんな強敵をぶっ倒たおしても、こんな気持ちになったことは、おそらくない。俺はやけに気分がいい。通りの向こうに魔導兵の援えん軍ぐんが見えても、べつになんとも思わない。こいよ。きてみろ。くるがいい。彼は足許に転がっている魔導兵の残ざん骸がいに大剣を突き立て、胸きよう甲こうを剝はぎとって中身を露ろ出しゆつさせた。なんとかフレッド・なんとかフレッドソンだったか。あの男が見たかったという、これが魔導兵の中身だ。といっても、ＥＸＣｉＤメタル製外装甲の中を、黒っぽい繊せん維い状の物体が埋めつくしているだけで、何かとんでもないものを想像していたとしたら、拍ひよう子し抜ぬけするかもしれない。ただ、胸部のだいたい中心あたりだ。そのあたりを剣先で切り開くと、こぶし大の透とう明めいなジェル状のものにつつまれた、赤く明めい滅めつする物体が現れた。彼は屈かがんで左手でそれをつかみ、抜きとった。脈動パルセするト・ス石トーン。賢

ラピス者・フイのロソフ石オラムの一つ。第五クイン要素石トウラ。彼はやつを見た。多数の魔導兵どもに囲まれながらも、やつはまだ無事だった。

「おい」彼はやつに向かって、第五クイン要素石トウラを投げた。「──受けとれ！」それと同時に、やつを包囲している魔導兵どもに突とつ撃げきした。彼に押しよせてこようとしていた魔導兵どもは無視した。まあ、そっちはジョーカーや髭がなんとかするだろう。

「ぬう、貴様はまた勝手に……！」

「グハハハッ！　鵺ヌエ流古式戦せん闘とう術じゆつ奥おう義ぎ〝尖セン騰トウ気キ〟ィィィ……ッ！」

　あいつらのことだから、なんとかなる、はずだ。

　大剣を横よこ薙なぎに振るう間ま際ぎわ、やつが第五クイン要素石トウラを口でバクッと受け止める姿が目に入った。彼はこっちに対してはほとんど無警戒な魔導兵どもを斬って、ぶった斬って、撫なで斬ぎりにした。やつも一、二体の魔導兵を薙ぎ倒し、そいつらからも素す早ばやく第五クイン要素石トウラを回収したようだ。

「破ァッ！　怒ぬ羅らァッ！　ダワハハハァッ！　筋肉の威い力りよくを思い知れい！」

「──トマト！　この考えなしの阿あ呆ほうめ！　敵の増ぞう援えんがくるぞ！」

　ジョーカーにうながされて、通りの向こうにちらりと目をやった。魔導兵の増援はもうすぐそこに迫せまっている。どれくらいいるだろう。残存の魔導兵とあわせれば、一小隊くらいにはなるか。やばいとは思わないが、面めん倒どうといったら面倒だ。何しろ、魔導兵はあれですべてじゃない。まだまだいる。時間がたつごとに、どんどん数が増えてゆくだろう。

　さて、どうしたものか。

　ままよ、と、思ったときだった。

「Ｓｅａ櫓Ｇｅａ虞Ｒｅａ出Ｎｅａ芯Ｌｅａ怒Ｃｅａ宴Ｋｅａ辯Ｍｅａ尽ＳｅａＹｄｅｏＬ観星冥凌ＧｕｎｄａｅＬ陰性ＭａｘｉＧＺＧ驗廟乘廼稟坤靜匪ＱｙＱｙＢｅＬ銑翫ＨｉｄｅＬ拇Ｒｕ狗ＹＬＹ

ＬＶｏｕｓＲａｙｅｓ蹈暉喘快楽ＧｙＧｙＤｙＬ怨霊ＶＡ」

　呪じゆ文もんだ。リルコか。

　振りかえると、リルコは宙に浮ういたまま、両手をゆらゆらと舞まわせていた。

　その右手が向かって右側の建物を、左手が道を挟はさんで反対側の建物を指し示し、唇くちびるは最後のワンフレーズをつむいだ。

「□□ＧｅＢａＬＴ」

　魔術がもたらしたものは、単純な形の破は壊かいだった。パンッというかんじの、やや軽い、だが、とてつもなく大きな音がして、道の両側の建物が内側から破は裂れつするように吹っ飛んだ。冗じよう談だんみたいに呆あつ気けない壊こわれ方だった。彼はとっさに大剣で顔面をかばった。飛んできたからだ。破は片へんが。大小様々の瓦が礫れきが。粉ふん塵じんもすごい。あっという間に何も見えなくなった。視界がゼロだ。

「──馬ば鹿か者が！　魔女め、やりすぎだ！」

「グフォッ！　ゴホッボホッ！」

　そんな中でも、魔導兵は動いている。やつらは人間のような視覚や聴ちよう覚かくを持っているわけではないので、運動機能が損傷してさえいなければ行動できるのだ。とはいえ、瓦礫に埋うずもれてしまった魔導兵もいるだろうし、増援は行く手をふさがれて足止め状態だろう。彼はでたらめに大剣を振りまわし、あたるをさいわいに数体の魔導兵を吹っ飛ばしながら叫さけんだ。

「──退ひけ……！」

　身をひるがえしながら、たぶんやつはもう逃にげにかかっているだろうと思った。濃こい煙えん霧むを突とつ破ぱすると、案の定、やつの後ろ姿が見えた。ジョーカーは、髭ひげは、ついてきているか。確かめるまでもなかった。

「チィッ、素早い奴やつだ！　みすみす逃のがすとは！　もとはといえば、トマト、貴様のせいだぞ、虚うつけ者め……！」

「ムムムッ！　暴れ足りぬ！」

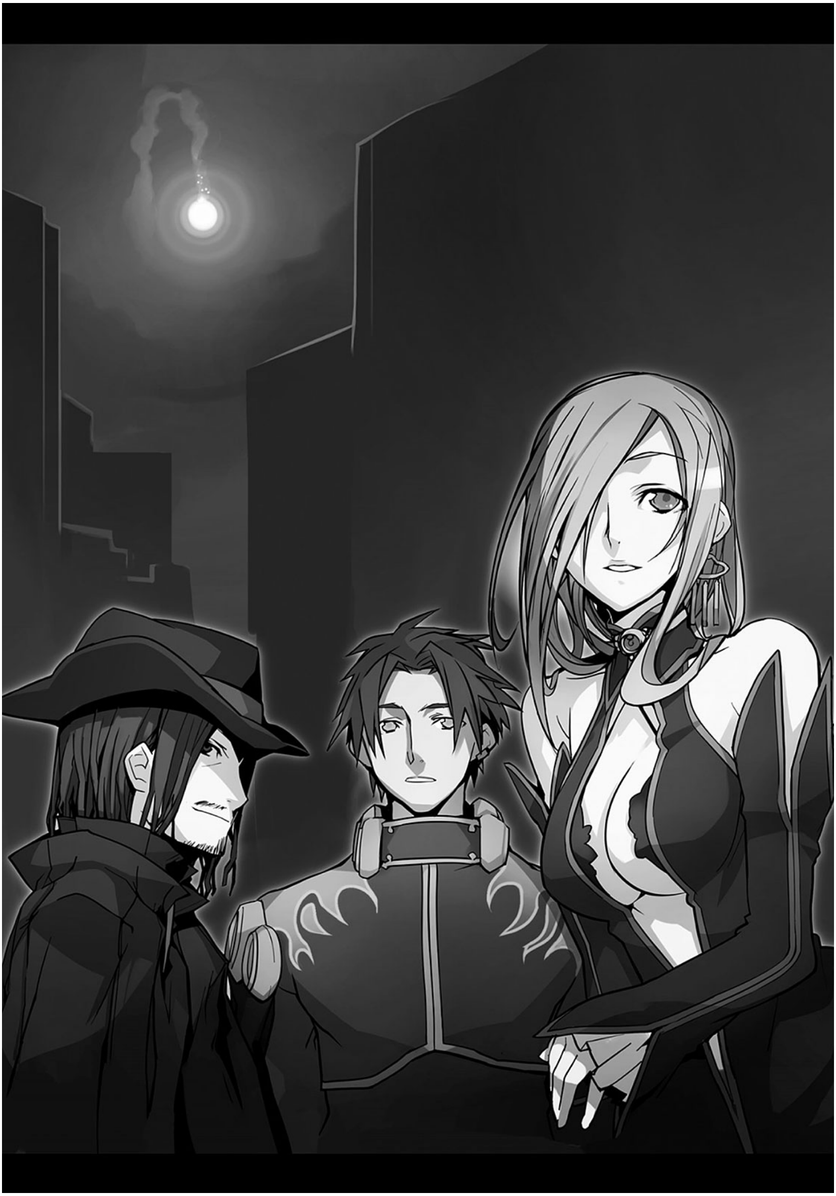
「だったら貴様は一人で一生魔導兵どもと戯じやれていろ、筋肉脳！」

「ウム、それはそれで一考に値あたいする選せん択たく肢しではあるが！」

　二人とも元気なようだ。リルコも、いつの間にか彼の隣となりで低空飛行している。だが、やつは本当に速い。もうほとんど見えないくらい遠くにいる。このままでは間もなく見失ってしまうだろう。それでいいような気もする。俺はやつを捕つかまえたいとは思ってない。ただ、気になるだけだ。自分でもよくわからないが、放っておけないと感じて、手を貸すような真ま似ねをした。お前はべつに恩に着る必要はない。俺が勝手にやったことだ。お前はお前がしたいことを、したいようにすればいい。俺はべつにお前を追っているわけじゃない。魔導兵どもから逃げているだけだ。だから、やつの姿が完全に見えなくなっても、彼はなんとも思わなかった。走りながら、さかんに彼を罵ののしっているジョーカーにしてみれば、苦々しい展開なのだろうが──そこは、ジャン・ジャック・ド・ジョーカーだ。一ひと筋すじ縄なわではゆかない。

　環かん状じよう通に出て、第六区に入り、屑くず街まちとも呼ばれる貧民窟スラムの入り組んだ道を右折左折しつつ走っているうちに、追っ手の気配が絶えた。ようやく振ふりきったか。そう思い、足をゆるめようとした。いや、立ち止まった。

　それは夜空で炸さく裂れつして、激しい光を発しながら、ゆっくりと降下していった。



「きれい」と微笑ほほえむリルコの顔も、その光に照らされている。

「あれは……」

　彼はジョーカーの様子をうかがった。ジョーカーは真しん剣けん

な表情で、光の降下地点を見きわめようとしているようだ。なんのために？

　そうか。クローディアがいないのは、そういうわけか。

「照しよう明めい弾だん、か」

「ふん。正直、やつを取り逃がす可能性も五割程度はあろうと踏ふんでいたのでな。手を打っておいたのだ。ともあれ、場所はおおよそわかった。行くぞ」

「行って、どうする」

「貴様はどうしたいのだ」

「俺は……」

「己おれとて、何もとって食おうというのではない。ただ、己おれは知りたいだけだ。真実とは言わぬ。己おれにとっての、己おれが納なつ得とくしうる、事実をな」

　ジョーカーは、あとはもう、行くぞ、とも、ついてこい、とも言わずに駆かけだした。

　髭がこちらを静かに見つめている。問いかけるでもない。指示を待っているのでもない。じっと観察している。それは、彼が無のような地平にたたずみ、彼自身を見つめているときの眼まな差ざしにどこか似ているかもしれない。

「まあ、行ってから考えるか」

「お前の思うとおりにするがよい。拙せつ僧そうもみずから望んでこうしておる」

「あたくしは、あなたについてゆきます。そうしたくてたまらないのですもの。少なくとも、今は」

　彼は眉まゆをつりあげ、唇の片かた端はしをゆがめてみせた。ジョーカーはまだそれほど先に行ってはいない。追いつくのは難しくても、あとを追うことはなんとかできた。照明弾の落下地点は、そう遠くなかった。北西を目指してしばらく進んだあと、角を左へ曲がったジョーカーにつづくと、その先にクローディアが立ってい

た。小こう路じの入り口の前だ。ジョーカーはクローディアを下がらせて、小路に足を踏み入れようとした。ざわり、と皮ひ膚ふが粟あわ立だった。

　リルコが口を開いて何か言おうとした。

「──主様マスター！」

　クローディアが珍めずらしく声を張りあげて、ジョーカーを突つき飛ばした。あれは。風。強い、きわめて強い、風だ。ビュウビュルルボウボボウ渦うず巻まいている。竜たつ巻まきだ。もっとも、竜巻といったら地上から雲底めがけて立ちのぼるようにして起こるものだが、あれは違ちがう。小路の先から、出口に向かってのびていった。ジョーカーはクローディアに救われた。間か一いつ髪ぱつ、クローディアが危険を察知していなければ、二人ともあの横向きの竜巻をまともに食くらっていただろう。そして、そうなっていたら、無事ではすまなかったはずだ。

　小路はあっという間に小路ではなくなっていた。

　竜巻が両りよう脇わきの建物を盛せい大だいにぶっ壊こわしたせいで、道が広がってしまったのだ。

「魔術、か」彼は目をすぼめて大剣の柄つかに手をかけた。
「ジョーカー、クローディア！　平気か……！」

「はい」「当然だ、阿あ呆ほう！」なんとか竜巻をやりすごした二人は、すぐに態勢を立てなおして、拡張された小路の入り口から少し距きよ離りをとった。

「並みの魔術士ではなさそう」リルコはなんだか愉たのしげだ。

「少なくとも、魔導兵狩りの仕し業わざではあるまいな」髭は眉まゆ根ねをよせて身構えている。

「べつに、問答無用でやりあおうというんじゃないんだがな」

　彼は一つ息をついてから、小路に向かってゆっくりと足を進めた。リルコが、髭が、二、三歩後ろをついてくる。ジョーカーとクローディアも彼にあわせて動きだした。彼は大剣の柄から手を離はなした。安全だと思ったからではない。逆だ。疑いようのないほど明確な敵意のにおいがする。だが、やつだ。わかる。これはやつの

においだ。くるのか。なんでだ。どうしてお前はそんなに殺気立っている。彼は息を吸いこんで、一気に小路へ飛びこんだ。ＧＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……！　やつがいきなり咆ほう吼こうしながら突っかかってきたが、彼は驚おどろかなかった。やつは金色に輝かがやく毛皮をなびかせながら、四本指の右手を叩たたきつけてきた。彼は両りよう腕うでを前に出して交差させ、これを受け止めたが、重い、重いーいち撃げきだった。腰こしが沈しずむほどに重かった。さらに、ほぼ同時に左手が横から襲おそいかかってきた。彼はとっさに右手を横にずらして防ごうとしたが、無む駄だだった。なんて力だ。ガードごと吹ふき飛ばされてしまった。「──ぐうっ……！」

「拙僧が相手だ……！」すかさず髭ひげが飛びだしてきて、鋼はがねの拳こぶしを次々と打ちこんだ。しかし、やつはじつに巧たくみにこれをかわし、また、受け流してみせた。格かく闘とうで髭と互ご角かくにわたりあってみせるとは、並なみ大たい抵ていじゃない。髭はむしろ嬉うれしそうだった。「──ムハハッ！　やるな、では、これはどうだ！」髭の上半身が急に一回り大きくなった。髭は両手で手刀を作って、蟷螂かまきりみたいなポーズをとった。「鵺ヌエ流古式戦闘術秘闘法〝荒アラ波ハ刃バ気キ〟！」そして、その手刀を矢や継つぎ早ばやに、縦じゆう横おう無む尽じんに繰くりだした。ヒュンヒュン空気を切り裂さく音がする。それだけじゃない。髭の手刀を受けとめたやつの右腕の毛皮が切れ飛んで、その下の皮膚がビシッと裂け、赤い液体が飛び散った。「遮シャ！　遮！　遮遮遮遮遮ァァッ……！」こうなると、やつは逃にげまわるしかない。まあ、髭の絶え間ない連撃をかわしつづけているだけでもたいしたものだが──何か、変だ。おかしい。鼻の奥がちりちりする。彼はあたりを見まわした。ジョーカーとクローディアが小路の奥に目をやっている。リルコがいない。いや、上か。リルコはゆらゆらと髭とやつの向こうに降り立とうとしている。突とつ然ぜんだった。やつがぶっ壊れた建物のほうへと駆けだし、髭を置き去りにした。彼は小路の向こうに顔を向けた。目を凝こらしてみた。

　暗がりに、何かがいる。何か。なんだ？　人……？　たしかに、人のような形をしている。足がある。片方だけだが、腕がある。胴どう体たいがあって、頭がある。でも、不自然だ。輪りん郭かくが人のものじゃない。彼はかつてあれに近いものを見たことがある。機械化兵。そう、あれは機械だ。魔導機械ギアか。そんなものが、どうしてここに。しかも、そいつはぎこちなく左腕を動かし、魔術まで発動させた。

それは、轟ごう音おんとともに地面を這はってきた。

衝しよう撃げき波はだ。

といっても、きた、と思った瞬しゆん間かんにはもうすぐそばまで達していた。ただ、彼のところまでは届かなかった。リルコだ。リルコが「はああっ……！」と大きく息を吐はきながら思いきり両腕を振ふり下ろして、超オー越バリ者ストの目に見えぬ異能力を衝撃波にぶつけたのだ。

もっとも、リルコも無事ではすまなかった。リルコの髪かみが逆立つようにはためいて、ドレスがちぎれ飛んだ。リルコ自身も、弾はじかれたように宙に舞まった。彼は即そく座ざにその落下点を見きわめてリルコを抱だきとめ、すぐさま小路の奥へと向きなおった。

「……ふふ。あなたが抱いてくれるなんて、嬉しいわ」

「そいつはよかったな」

「クローディア！」「はい、主様マスター」ジョーカーに命じられて、クローディアが体内から黒色物質を放出させ、それで巨きよ大だいな鎌かまを作りだした。髭は魔導兵狩りを目で追っている。魔導兵狩りは、機械化兵めいた魔術士のそばへ行こうとしているようだ。守ろうとしているのか。守りたいのか。すべてはそのためか。リルコが彼の腕の中で呪じゆ文もんの詠えい唱しようを始めた。あの魔術士もだ。声が聞こえる。かぼそい、消え入りそうな声だ。ジョーカーが、クローディアが、髭が走りだした。彼は動かなかった。魔導兵狩りが、やつが、おのれを盾たてとするべく、魔術士の前に仁に王おう立ちして絶ぜつ叫きようするように吼ほえた。ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！

ジョーカーたちがやつを排はい除じよして、機械化兵もどきの魔術士をしとめるのが先か。その前に、魔術士が魔術を完成させるか。それとも、リルコの魔術のほうが早いか。

そのどれでもなかった。

魔術士の左腕が、ぼろり、と肩かたから外れて落ちた。

　立てつづけに、右足が膝ひざのところで曲がって、魔術士の身体からだ全体が前のめりになった。

　彼はかすかに奥歯を嚙かみしめた。そのときだった。

（──よすがよい……！）

　声だ。声……？　いや、だが、音じゃない。何ものかの思念が直接脳に響ひびいてきた。そんなかんじだった。彼だけではない。誰だれも彼もだった。魔導兵狩りも、もうほとんど倒たおれる寸前の魔術士さえも、リルコすらも、それを見上げた。

　空だ。

　浮ういている。

　ぼんやりと輝く、青白い、光の粒りゅう子しでできた、絵か何かのような──杖つえを持ち、長衣を身につけた、皺しわ深ぶかい老人だ。

（よすがよい……もうよい。もうよいのだ、エヴァンジェリン。そして、キューベルアドラスよ。これ以上、いとしきその身にいたましき苦しみを刻むことなかれ）

「……お、し……さま……」

　そう呻うめくように言った声は、あの魔術士のものか。

　老人は魔術士に向かって、ゆっくりと降りていった。

（エヴァンジェリン。我が弟で子しよ。否いな。我が娘むすめよ……）

「……この、わ、たし……を……むす、め……と……」

（我が精神が肉体を超ちよう越えつしても、おまえを思わぬ日はついぞなかった）

「……あ……ああ……」

　そして、老人は魔術士のそばに降りたつなり、手にした杖を振った。たったそれだけで、魔術士の身体をつつんでいた魔導機械ギアが引きはがされ、四散した。

（エヴァンジェリン）

「……おし、さ、ま……」

　魔術士の正体は、あたりまえだろうが、人だった。かなり小こ柄がらで、枯かれ木のごとく瘦やせている。女だ。体格だけを見ると、少女のようにさえ思える。顔の造作は、真っ白い髪の毛と、左目の眼帯のせいで、よくわからない。その眼帯に、老人が手をのばした。

（おお……これは……）

「……お、しさま、だと、おも、って……」

　眼帯には刺し繡しゆうが施ほどこされていた。ただ、動物か、花か、それ以外のものか、正直、判別しがたい。ありていにいえば、えらく下手くそだ。

　老人は眼帯にふれた手でみずからの額を押さえ、瞑めい目もくして天を仰あおぎ、深々と息を吐いた。

　その息さえも、ごく微び細さいな光の粒子でできていた。

（おまえを連れてゆこう。師がたどりついた境地を、せめておまえに見せよう、エヴァンジェリン）

「……ああ……」

（さあ）

　老人の左腕一本で抱きあげられた魔術士の右目から、涙なみだがこぼれ落ちた。

　老人は右手の杖で地面を軽く叩たたいて、魔導兵狩りに顔を向けた。

（キューベルアドラスよ、すまなんだ。おまえにはいくら謝罪し、感謝してもしたりぬ。だが、おまえは連れてゆけぬのだ。我らは遠

い、遠いところへ行かねばならぬ）

「きゅう……」

　キューベルアドラスと呼ばれた魔導兵狩りは、老人の前にしゃがんで、しょんぼりしている様子だった。声にも元気がなかったし、さっきまで金色に輝かがやいていた全身の毛皮も今は発光していない。老人はそんなキューベルアドラスをいたわるように、杖を持ったまま、右みぎ腕うでで抱ほう擁ようした。

（キューベルアドラス、おまえは我と我が娘にとって、唯ゆいーいつ無二の友であった。そして、これからもそうありつづけるであろう）

「くう」

（さらばだ）

　光でできた老人の身体がゆらゆらと上じよう昇しようしはじめた。老人に抱だかれたエヴァンジェリンは、眠ねむっているのか、それとも息絶えているのか、微び動どうだにしない。キューベルアドラスがじっと二人を見つめている。静かに見送ろうとしているようだ。彼はふと思い立って、リルコを下ろそうとしたが、ぎゅっとしがみついてきて、離はなれようとしない。

「い、や。もう少しこのままでいさせて」

　何か言い返そうとしたら、その声を聞いて我に返ったのか、
ジョーカーが老人に向かって叫さけんだ。

「おい、待て！　この己おれに断りもなく、いきなり現れるなり、美お味いしいところをさらっていくとは何事だ！　だいたい、貴様は何ものなのだ！」

（━我、か……）

　老人は物もの憂うげに目を伏ふせた。

（我が名は、モーグ。我をして超メガ賢セイ者ジと呼ぶ者もある）

「……モーグ、だと」

ジョーカーが眉まゆをひそめて、リルコが「まあ」と目を見開いた。知っているのか、と訊きこうとしたときだった。モーグと名乗った老人が杖を振ふると、まばゆいばかりの光が発せられて、すぐに何も見えなくなった。光の中にキューベルアドラスの鳴き声が響ひびき渡わたった。長く、悲しげな、惜せき別べつの声だった。

視力が回復するまで、どれくらいかかっただろう。

たぶん、たいした時間ではない。

だが、そのときにはすでに、モーグとエヴァンジェリンの姿はどこにもなかった。

ジョーカーが苛いら立だたしげに首を振って呟つぶやいた。

「なんだったのだ、いったい……」

13

──あの果てのない牢ろう獄ごくから抜ぬけだして、地上にさまよい出た俺は、歩くことさえままならないようなざまで、空気すら重く感じた。もどかしさなんて通り越こしていた。なんだかもう、すべてがどうでもよくて、なんで俺は生きているんだとか、そんなことも考えなかった。意識は朦もう朧ろうとしていて、そこがどこかもわからず、わかろうともしなかった。

俺は、どうやってあの家族に救われたんだったか。

覚えていないが、気がつくと、俺の上には屋根があった。

そこは小さな、小さな山村だった。数家族が山奥でひっそりと畑を耕して暮らしていた。おそらく何か事情があったんだろうが、わからない。もう永遠に、わからない。

俺の世話係は、七つだか八つのこどもだった。十五、六の兄と、その一つ下の妹もいたが、そいつらは親と一いつ緒しよに朝から晩まで働きずくめだった。

生きてゆくためには、絶えず何かしていないとならない、そんな場所だった。

俺を食わせる余よ裕ゆうなんてなかったはずだ。

それなのに、彼らはまるでそれが義務であるかのように俺を助けた。俺はろくすっぽ動けず、こどもにあれこれ尋たずねられ、それにぽつぽつ答えるくらいが精せい一いつ杯ぱいだった。それさえも正直つらかったが、こどもはたまに冗じよう談だんらしきことを言って、笑えよ、と俺に要求した。俺にはよくわからなかった。笑う。どうやるんだ。俺はそう尋ねたんだろう。すると、こどもが笑ってみせた。口を左右に思いきり開いて、歯を見せて、目を細めて、「シシシ」とも「ヒヒヒ」ともいえない、そんな音を出す。それが笑うってことなのか。そうだ。おまえも笑えよ。笑ってみせろよ。俺は笑ってみた。「ヒヒヒ」「シシシ」「ヒヒヒ」「シヒヒ」そんなことをやっているうちに、何か胸のつかえがとれたような気分になって、楽になった。

笑う。

そうか。笑うってのは、こういうことなのか。

それから、何日かたった。何日もたった。俺はまだ、起きあがることさえやっとだった。夜だった。物音を聞いて目が覚めた。声もした。悲鳴だった。怒ど号ごうも聞こえた。誰だれかが何か叫んでいた。俺はこどもの名を呼んだんだったか。そう。呼んだ。返ってきた声は、助けて、だった。助けて！　助けて！　あのとき何を感じて、何を思ったのか、どうしても思い出せない。とにかく俺は必死だった。俺はおそらく、助けようとした。助けようとしたんだ。

だって、助けて、と求められたから。

俺は──俺は、助けるために、殺した。あの小さな、ちっぽけな山村を、何が目的か知らないが、襲おそって、方々に火をつけて、女こどもまで皆みな殺ごろしにしようとするやつらを、殺す。殺しつくす。そのために、俺は這はいずりまわって、武器になりそうなものを探し、あやしいやつを叩たたき殺して、斬きりつけられ、絞しめ殺して、ぶん殴なぐられ、蹴けられつつ、殺した。殺せるやつはぜんぶ殺した。殺しながら、おれはあいつを探した。俺に笑うことを教えてくれたあいつを。俺に助けを求めたあいつを。

探したんだ。

探さないといけない気がして。

血だらけのあいつを見つけて、俺は、どうしていいかわからず、ヒヒヒ、と笑った。

違ちがうな、と思った。

こんなときは笑うんじゃない。

じゃあ、どうすればいいんだ。

俺にはわからなかった。

玄げん関かんポーチの前に腰こしを下ろして、昼すぎの空を眺ながめている今も、正直、まだわからない。

あのとき、俺はどうすればよかったのか。

いつかわかるときがくるのか。

ただ、門を開け、玄関までつづく舗ほ装そうされた小道を歩いてくる少女の姿を見て、どうすればいい、なんて考えたりはしなかった。

黙だまって待っていた。少女が近づいてくる。目をあわせようとはしない。だが、足どりはきびきびしていて、一定だ。すぐ前で立ち止まるまで、それは変わらなかった。少女は背負い袋ぶくろを地面に下ろして、隣となりに座って膝ひざを抱かかえた。

しばらくの間、互たがいに無言だった。

先に口を開こうとした。

それを制するように、少女がちょっと不ふ機き嫌げんそうな声を出した。

「なんだか、帰ってきたくなったから。だから──帰ってきたんだ。今回はちょっと、短い旅だったけれど」

「そうか」

　ロム・フォウの頭に軽く右手を置いた。

　ロム・フォウは少し首をすくめたが、嫌いやがるようなそぶりは見せなかった。

　一つ息をついて立ちあがり、ロム・フォウの背負い袋を手にとった。

「そういえば、お前がいない間に、居い候そうろうがまた増えてな」

「え」

「一人、じゃないな。なんて言ったらいいんだ。一頭なのか、あれは」

「一頭……？」

「まあ、会ってみればわかるさ。お前なら、仲よくできるんじゃないか」

「う、うん」

　ロム・フォウは少々不ふ審しんそうな顔つきでうなずくと、腰を上げて、手をさしだしてきた。

「自分の荷物は、自分で持つよ」

「そうか」

「……トマト」

　背負い袋を受けとったロム・フォウは、一度うつむいて、顔を上げた。

　少しだけ照れくさそうな、だが、安あん堵どしているような、かすかな笑えみを浮うかべて。

「ただいま」

「おかえり」

　俺は今、自然に笑えているだろうか。

そうだといい。

そうありたいと願っている。

the 2nd song

月下砂海夜曲

1

　覚えている。

　首筋にふれた手の冷たさを覚えている。

　時間の感覚はあまりない。あれからどれくらいたったのか、とか、あれはいつの出来事なのか、とか、考えてもよくわからないし、考えることもほとんどない。

　ただ、覚えている。

　こわごわとふれた指や、やがてあたたかくなっていった掌てのひらや、耳じ朶だにかかった息のやわらかさや、それがくすぐったかったこと、あなたに名前を訊きかれたこと、でも、頭をすっぽり覆おおう目め隠かくしと猿さる轡ぐつわを兼かねた器具をつけられていたから、答えようもなかったこと、あなたが、ごめんなさい、と謝ったこと、謝らなくていい、と思ったこと。

　ジナ。

　と、あなたは言った。

　わたしは、ジナ。

　ジナ。

　と、呟つぶやいてみた。器具のせいで、ちゃんと発音できなかった。あなたがどうして現れたのか、そんなことはわからなかったし、考えても無む駄だだろうとたぶん思ったのだろうし、もしかしたら無駄だとかなんだとか、それ以前の問題で、何も感じていなかったのかもしれない。

　ただ、覚えている。

　あなたはひとしきり首筋や肩かたや胸や腕うでをなでてから、こう言った。

　わたしは、いじめないわ。

　あなたをいじめたりなんか、しないわ。

「瑠ル璃リ繁縷ハコベ」

　揺ゆれを感じる。音も聞こえる。

　声だ。

　あなたの声ではない。でも、知っている声だ。よく知っている。その声で何度となく名を呼ばれたし、初めてこの名を呼んだのもその声だった。もとより、手て枷かせ、足枷、首輪をつけられ、ごく短い鎖くさりで壁かべに繋つながれているから、身動きはほとんどとれないが、その声を聞くと、手が、足が、すくむ。身体からだ全体が急激に冷えて、動きが鈍にぶるような感覚にとらわれる。

「瑠璃繁縷。ジナのことを考えていたのかい？　違ちがう？　違わないね。そうだろう？　わかるんだよ。おまえのことは、なんでもね。わからないはずがないだろう？　だって、わたしはおまえの親みたいなものだ。おまえのことはなんでも知っているよ。そう──なんでも、ね」

　声の主は囁ささやくように言う。ひたひたと耳の穴に浸しん入にゅうしてくる低い声のせいで、溺おぼれてしまいそうになる。じっとりと汗あせがにじみだしてきた。肌はだが粟あわ立だっているような気がする。

　声の主には奇き妙みょうな体たい臭しゅうがある。強きょう烈れつな、甘い、だが、刺さすような、とりこんで、かき乱すような、独特の匂においだ。その匂いが、ふっと近づいてくる。どんどん近づいてくる。距きょ離りが狭せばまるごとに、呼吸が乱れる。声の主の髪かみの毛が、肩にふれた。今、右耳のすぐそばに声の主の顔がある。声の主は、口こう臭しゅうさえもひどく甘い。思わず身をよじって、左側に首を傾かたむけた。冷たく、湿しめった何かが首筋に押しつけられた。総毛立った。

「何も逃にげることはないだろう、瑠璃繁縷？　我が愛いとし子ごよ。べつに、皮肉で言っているわけではないよ。わたしの本心だよ」

　熱い、何かうごめくものが、皮ひ膚ふの上を這はいまわる。身体

が小刻みに震ふるえる。止めようとしても、止められない。

「瑠璃繁縷。わたしはおまえをとても大切に思っているよ。嘘うそではないよ。おまえだって本当はわかっているだろう？　わかっているはずだよ。瑠璃繁縷。おまえはちゃんと、知っているはずだよ。そうだね？　知っているね？　わかっているだろう？　ほら、うなずいてごらん。素す直なおに答えてごらん。瑠璃繁縷」

　わからない。知らない。だが、首がガクガクいいながら縦に振ふられようとしている。止まらない。気が遠くなってゆく。この場から遠ざかる。ジナ。あなたの形を思い出す。あなたのぬくもりが蘇よみがえる。心臓が最初は早はや鐘がねを打って、だんだんと鎮しずまってゆき、血流が、時間までもが止まったかのような、静かな、えらく静かな、あなたと自分の他ほかには誰だれもいない、何もないかのような、狭せまいとも広いともいえないあの世界のことが思い出される。あれはなんだろう。どう呼べばいいのだろう。とにかく、あの世界があればいい。あの世界があれば、何もいらない。他には、何も。

「──おい」

　頭を揺すられた。全身がわなないた。

「瑠璃繁縷。瑠璃繁縷。おまえ、今、目の前にいるわたしのことを忘れていただろう。ジナのことでも考えていたのかい？　隠かくしても無駄だよ。わかるんだよ。わたしにはわかるんだ。わからないと思ったかい？　ばれないとでも？　愚おろかだね。おまえはどうしようもない愚か者だね。おまえは、愚かだ」

　表皮に吸いついてくるような五本の指で、首を絞しめられた。息ができない。鼻の奥がヅンッとする。眼球が押しだされてゆくようなかんじがする。耳鳴りがする。

「お仕置きをしようか。わたしの前ではどうするべきか、どうふるまうべきか、おまえは知らなければならない。今さら、という感はなきにしもあらずだけれどね。仕方ないね。おまえは愚かなんだから」

　次に何をされるか、言われなくても理解している。身体が、精神がそれに備えようとする。逆らうのではない。受け入れる。そうする以外どうしようもないと知っている。とうに思い知らされてい

る。もうすぐだ。くる。ああ。きた。

　首の付け根あたりだった。チクッとした。始まった。皮が剝はがれる。バリバリ剝がされてゆく。剝むきだしになった肉が空気にふれる。空気が何百何千何万の棘とげとなって肉に突つき刺さる。ぐじゃぐじゃになる。ぎじゅぎじゅになる。爪つま先さきから頭のてっぺんまで駆かけめぐる。悲鳴がもれる。おおおおお、おおおおおお、おおおおおおお。おおおお、おおおおお、おおおおおおお。ぜんぶとけてゆく。とかされる。しゅうしゅう煙けむりを立てながらとけてゆく。

「わかったかい、瑠璃繁縷？　おまえは間違っている、おまえはあやまちを犯おかした、おまえは愚かだということが、わかったかい、瑠璃繁縷？」

　首を振る。縦に、何度も、何度でも振ってやる。器具をつけられていなければ、声に出して言っただろう。はい。そうです。間違っていました。あやまちを犯しました。愚かです。許してください。許して。どうか、許して。もうしません、絶対にしません、だから、許してください。身体が動くのなら、這いつくばって、額を床ゆかにこすりつけただろう。

「本当かな。疑わしいね。だって、おまえは愚かだからね。何度言ってもわからないしね。これくらいでわかったのかな？　本当に？」

　本当に。本当です。だから、どうか。

「いや、駄だ目めだ」

　息が止まりそうになった。止まりかけた。止まらなかったのは、おそらく、コン、コン、と扉とびらを叩たたく音がしたからだ。

「──なんだ。残念だね。もうそろそろ到とう着ちゃくらしいよ。瑠璃繁縷。残念かい？　それとも、嬉うれしい？　そう。嬉しいに違いないね。仕事だよ。瑠璃繁縷。もうすぐだよ。仕事だよ」

　首の付け根に打ちこまれていたものが抜ぬかれた。のたうちまわっても足りないような痛みが消えた。あっという間に消えてしまった。同時に、胸の奥にかすかな熱が生じた。それはすぐに身体中へ広がっていった。

ジナ。

ああ、ジナ。

またあなたに会える。

あなたに──と、また髪の毛をつかまれた。

あの匂いが鼻び腔こうを刺し激げきした。

「気にくわないな。でも、許してあげるよ。瑠璃繁縷」

そして、嚙かまれた。

首を。

たぶん、嚙まれたのだと思う。

「わたしはおまえを大切に思っているからね。しょうがないから、今はこれで許してあげるよ。瑠璃繁縷」

2

大砂牛バーラは、肩かたの高さが四メーテルに達することもあるラハン大陸最大の陸りく棲せい動物だ。そんな生き物が六頭がかりで引く二階建ての大砂牛車ギヤリカが陣じん地ちに入ってきたとなれば、兵どもが騒さわぎたてるのもやむをえないだろう。

その大砂牛車ギヤリカを呼びよせた張本人であるダーン公の胸中も、正直、平らかとはいいがたい。それゆえに、赤せき砂さ王国の武の要かなめ、最さい精せい鋭えいの砂ア斑ズ犬ゼ師ラ団ン師団長にして征せい南なん将軍であり、現世国王の兄の嫡ちゃ男くなんであって、次世国王の呼び名も高い公みずから、野営地後方までわざわざ出向き、こうして迎むかえ入れる態勢を整えているのだ。

「──シロクネ。ルエミタージ以来だ」

公が呟つぶやくと、隣となりに侍はべっている近習が顔をこちらに向けた。まだ十五歳の少年だ。名家の子息で、紅顔の美少年と

いってもさして大おお袈げ裟さではないが、稀まれなほどすぐれた容色ではない。

　公は近習に一いち瞥べつをくれて、突き放すように「いい」とだけ言った。ややあって、横目で様子をうかがうと、近習は青ざめた顔でうつむいていた。

　愛うい奴やつ、とは思う。

　だが、所しよ詮せんは我から尻尾しつぽを振ふりながらすりよってきて、さしたるためらいもなく腹を見せ、その見返りに将来の栄達を求める男だん娼しよう同然の稚ち児ごにすぎない。

　権力者になるべくして生まれ育ち、若くして軍事で頭角を現した公は、そのような者たちにはとうに飽あいていた。時々の慰なぐさみ者にするにはいい。多少なりとも能力があれば、少々色をつけた地位くらいは見つくろってやる。彼らは子飼いの臣しんとなって、公を支持する派は閥ばつの力となるだろう。しかし、物足りない。彼らは公の愛あい玩がん動物であったり、手て駒ごまであったり、たまには手足であったりする。ただ、それだけだ。結局、それ以上でもそれ以下でもないのだ。

　大砂牛車ギヤリカが止まり、側面の扉が開いて、手すりのついたデッキに、まず二人の男が出てきた。陰いん気きくさくて性しよう根ねがねじ曲がっていそうな顔も、中肉中背の背せ恰かつ好こうも、そっくりだ。二人は間ま違ちがいなく兄弟だろう。

　彼らは開閉可能な仕組みになっている手すりの一部を開け放ち、そこに渡わたし板を設置した。公は胸の高鳴りを抑おさえられなかった。この時をどれだけ待ったことか。そう。待ち焦こがれていた。最初は白はく岩がん王国の王都ルエミタージ攻こう略りやく戦せんだった。二度目の機会はなかなか巡めぐってこなかった。消息が絶えるたびに、人を使って捜さがさせた。見つけるたびに、破格の待たい遇ぐうでもって雇やとおうとした。そのたびに、焦じらされるように断られた。非公式の申し出だったから、公の体面に傷がつくことはなかったが、自尊心はずたずたにされた。地位だろうと、名めい誉よだろうと、富だろうと、人だろうと、領土だろうと、欲しいものはほとんどすべて手に入れてきたのだ。思いあまって、いっそ殺してしまおうと考えたこともある。もっとも、あの者を殺せるかどうか。むろん、公直属の砂ア斑ズ犬ゼ師ラ団ンの全軍をもってすれば、できないことはないだろうが、いくら公でも私し

怨えんで軍を動かすわけにはゆかない。否いな、それは私怨ですらない。

愛だ。

愛であろう。

愛に相そう違いあるまい。

俺はあの者が欲しい。

なんとしても、あの者を手に入れたい。

ホゥ……と、ため息がもれた。公だけではない。その場に居あわせた者たちのほぼ全員だ。

姿を現したからだ。

あの者を一言で表現するとしたら、いかなる言葉を選ぶべきか。公は武人であって、詩人ではない。ゆえに言葉遊びの趣しゅ味みは持たないが、ついそんなことを考えてしまう。それほど、あの者は特異だ。少なくとも、公の知る人間の中には、あの者に匹ひつ敵てきするほどの妖よう気きを放つ人物はいない。さもありなん、まさしくあれは一種の妖気だろう。

してみれば、あの者は人ではないのかもしれない。あやかしのたぐいか。妖人か。馬ば鹿かな、と笑い飛ばすことのできない何かが、あの者にはある。

いや、それどころか、一見しただけでそれとわかるほど、あの者は異様だ。

「変わらぬ」

あれから何年たっただろう。

人づてに聞いてはいたものの、実際、目まの当たりにすると、信じるしかないのだが、とうてい信じられない。

内心、案じるところもないではなかったのだ。あの者を夢に見ることもあった。会わぬうちに、記き憶おくに棲すむあの者の姿が、いや増しに美化されているのではないか。実物と再会すれば、落ら

く胆たんする結果になるかもしれない。だが、杞き憂ゆうだった。

　赤と黄と橙だいだいの美び麗れいな着物があのときと同じだ。手に持っている緋ひ色いろの編み笠がさも同じだ。笠を脱ぬぐと、長くのばした金色の頭とう髪はつがあらわになった。右半分だけ結ゆいあげて、左半分は垂らしている奇き妙みような髪かみ型がただ。あれも同じだ。うっすらと朱しゅを引いた唇くちびるにくわえている金の煙管キセルも同じだ。何より、男とも女ともつかない美び貌ぼうがあのときのままだ。

　あの者は以前と変わらず、あるいは、あのとき以上に、あやしく、美しい。

「これは、これは」

　煙管を離はなした唇が細い煙けむりとともに紡つむぎだしてみせたのは、極ごく上じようの弦げん楽がつ器きが奏かなでる音のような声だった。

　あの者の涼すずやかでありながら艶つやのある切れ長の目が、漆しつ黒こくの瞳ひとみが、公を見た。

「ダーン公御おん自みずからお出で迎むかえいただけますとは、お心こころ遣づかい勿もつ体たいなく存じます」

「俺の誘さそいを再三断っておきながら、よくもぬけぬけと」

　しかも、あの者はデッキからなかなか降りてこようとしない。公を見下ろして、笑えみを浮うかべている。王族であり、大おお鷹たか国を望むこのダダラスの野に展開している赤砂王国軍の司令官であるダーン公を、だ。とてつもなく不ふ遜そんな態度だが、気色ばむ者は一人もいない。皆みな、あの者に魅み入いられているのだ。もしくは、呆あつ気けにとられている。

　なるほど、この世にあの者のような生き物がいようとは、我が目で見るまでは誰だれも想像だにできまい。その妖人を、俺は、とうとう捕つかまえた。いや。まだだ。捕まえようとしている。捕まえつつある。公はひどく昂たかぶっていた。しかし、兵どもがいる。今は悠ゆう然ぜんとあの者を迎むかえねばならない。公は傲ごう然ぜんと胸を反らして、口くち許もとにかすかな笑みさえ刻んでみせた。

「存分に使ってやるぞ、シロクネ。働いてみせれば、成果に見あう以上の金はくれてやる。否やはあるまいな」

「むろんです」

　あの者が、シロクネが嫣えん然ぜんと微笑ほほえむと、扉とびらの向こうから黒い編み笠をかぶった少年が進みでてきた。シロクネとは色違いの、青と赤と黒の着物を着ている。いや、違う。よく見れば、胸がわずかにふくらんでいる。少年ではない。少女だろう。だが、ただの少女ではない。

　シロクネを追い越こして地面に降り立った少女は、指で笠を少し持ちあげて、あたりを見まわした。兵たちがざわめいた。少女の眼光があまりに鋭するどかったせいだ。あれは警けい戒かい心しんなどではない。殺気がこもっていた。もしや、あの少女も、シロクネが率いるアッサシンのうちの一人なのか。

「止よしなさい、羊蹄シノネ。しばらくここにご厄やつ介かいになるのだからね」

　ようやく渡し板を下りたシロクネが、みずから羊蹄シノネと呼んだ少女の笠の上に手を置いた。

「申し訳ありません。不調法者で。少しずつ教えているのですが、礼れい儀ぎのほうはまだまだのようですね。仕事の面ではすこぶる優ゆう秀しゅうな子なのですが」



　さすがにあとずさりこそしなかったものの、明らかに兵どもの腰こしが引けた。情けない話ではあるが、やむをえないかもしれない。仕事ぶりが優秀ということは、それだけ大勢の人間を殺してきたということだ。女のアッサシンは珍めずらしいが、外見など問題ではない。アッサシンは人であって人ではない。人を素材にして作

られた、殺人や破は壊かい工作のための道具なのだ。

　とはいえ、本当に人が道具になりきれるものなのか。公はふと興がわいて、少女の顔をうかがってみた。さながら、鋼はがねでできているかのような硬かたい表情だ。その顔つきからは何も読みとることができない。道具。道具、か。

　だが、道具として作ったものを道具として使って、何がおもしろいものか。

　公はふたたびシロクネに視線を戻もどした。

　あのような稀け有うなる妖人を組み敷しくことこそ、人生の快たる快ではないか。

3

　胸の真ん中に手をあてると、硬いものが掌てのひらにふれた。

　それは身にまとっている闇やみ色の衣服の下にある。

　金属だ。

　細いけれども頑がん丈じような鎖くさりに通して、首から下げている。

　使わなくなった金の煙管の吸い口だ。

　ある日、なんとなく新しいのを使いたくなったんだよ、と、あの人が言った。ください、という言葉が口をついて出た。理由はわからない。理由を考える習慣もない。あまり物事を難しく考えてはいけないと言われている。考えるのではなく、反応して、即そく座ざに動く。一いつ瞬しゆんの遅おくれが命取りになってしまいかねないからだ。だから、どうするの、と訊きかれて、すごく困った。どうしよう。でも、それを持っていれば、もっとうまく仕事ができるような気がした。それで、持っています、と答えた。くれるなら、持っています。持って、仕事をします。おかしな子だね、とあの人は言った。けれどね。邪じや魔まだよ。こんなもの。ああ、そう

だ。こうしよう。あの人は、吸い口を鎖に通してみせ、ほら、これでいい。これなら邪魔にならない。さあ、手を出して。あげるよ。いいんですか。いいよ。あげるよ。だって、欲しいんだろう。あげるよ。欲しがる者がいるのに、捨ててしまうのもなんだしね。羊蹄シノネ。おまえにあげよう。

それからずっと、肌はだ身み離はなさず持っている。

仕事の前に、服の上からそれにさわると、すべてがうまくいくような気がする。

自分はなんでもできる。どんなことだってできる。できないことは何もない。いやなことも、苦しいことも、耐たえられる。実際、耐えてきた。自分一人で。一人で、いいのに。

今日は一人ではない。自分以外に、もう一人いる。あの人にその旨むねを言い渡わたされたとき、逆らうことなんて思いもよらなかったけれど、内心、不満だった。たしかに、簡単な仕事ではないかもしれない。でも、自分一人でやってみたい。もっとあの人の役に立ちたい。期待に応こたえたい。

だけれど、あの人の命令は絶対だ。わがままを言ったら、嫌きらわれる。きっと、悲しそうな顔であの人は言う。言うことを聞いてくれないのかい、羊蹄シノネ？　わたしの言うことを聞いてくれないの？　それは残念だね。残念だ。わたしはおまえのことが嫌いになってしまいそうだよ。嫌いになんかなりたくないのにね。残念だよ。羊蹄シノネ。あの人を悲しませたくない。嫌われたくない。だから、はい、と答えた。わかりました。やります。

でも、本当はまだ少しだけ不満だ。またこの男と一いつ緒しよに仕事をしないといけないなんて。

瑠璃繁縷。

この男は、あの人に大切に思われている。評価されている。信しん頼らいされている。うらやましいほどに。

理由はわかる。瑠璃繁縷の肉体はかなり高い水準で均きん衡こうしている。欠点というものが見あたらない。アッサシンとして非の打ち所がない、理想的な素質を持ちあわせている。それが瑠璃繁縷のたぐいまれな身体能力として見事に結実している。

　いつかあの人が言っていた。鳥という生き物はね。黙だまっていても、そのうち飛べるようになる。でも、人はいくら努力しても飛ぶことができないね。その差はどうやっても埋うまらないよ。人の中にもそうした差はある。羊蹄シノネ。おまえはとても優秀だよ、まるで鳥のようだよ。あの人はそう言ってくれたけれど、瑠璃繁縷はもっと高く飛べる鳥なのかもしれない。そんなふうに思ってしまう。瑠璃繁縷はそれくらいすぐれたアッサシンだ。自分は、果たして、瑠璃繁縷を殺せるだろうか。この男に勝てるだろうか。

　つい、そんなことを考えていた。

　考えてはいけないと言われているのに。

「羊蹄シノネ、ついてきて」

　声をかけられた瞬間、頭に血が上って、唇くちびるを噛かんだ。どうして、あの人以外に命令されなければならないのか。従いたくはないけれど、瑠璃繁縷はすでに音もなく敵てき陣じんの柵さくを乗り越こえようとしている。それに、これは仕事だ。あの人から命じられた、大事な仕事なのだ。

　羊蹄シノネは気持ちを切りかえて、瑠璃繁縷につづいた。獣じゅう皮ひで補強されている丸太組みの柵の高さは一・五メーテルくらいなので、簡単に越えられる。その向こうに柵がもう一つあって、そちらはおよそ二メーテルといったところか。二番目の柵の上には、一定の間かん隔かくで簡素なやぐらが組まれ、篝かがり火びが焚たかれていて、見張りが配置されているが、それだけならば侵しん入にゅうはそう難しくない。厄やつ介かいなのは、一番目の柵と二番目の柵の間に横たわっている堀ほりだ。

　堀の幅はばは八メーテルほどで、腐くさり水や汚お水すいが流しこまれている。深さは五十サンチ程度だろうか。中ちゅう途と半はん端ぱに浅いから、かえって足音を消しづらいし、とてつもない悪あく臭しゅうのせいもあって、潜もぐって進むのも困難だ。ただ、困難ではあるが、不可能ではない。

　羊蹄シノネは闇と同化して慎しん重ちように柵を越え、ゆっくりと、そっと、たっぷり時間をかけて、少しずつ、少しずつ、汚水に身をひたしていった。先行している瑠璃繁縷のあとを追う恰かつ好こうなのが癪しやくだが、焦あせりはない。汚水に対する嫌けん悪お感もべつにわいてこない。呼吸も問題ない。自分自身を完全に制

せい御ぎよできている。

　それが確かく認にんできたら、堀の底に手をつけて、ゆったりと、じっくりと進む。さすがにこの水の中で目を開けることはできないが、感覚的に距きよ離りはだいたい把は握あくできるし、進むたびに手を前にさしのべて、何かふれるものがないか確かめている。浮ふ遊ゆう物ぶつにも注意しなければならない。底に沈しずんでいる武具もあるだろう。赤砂兵の死体が横たわっていてもおかしくはない。その他、さまざまな障害を、前もって予測するのではなく、即そく断だん即そつ決けつで対処しながら、進んでゆく。

　そろそろだ。おそらく、もう少しだ。でも、油断せずに。

　前方へのばした手に、硬かたいものがふれた。堀が終わる。入ったときと同じように、いや、それ以上に時間をかけなければならない。窒ちつ息そく寸前でも、決して急いではならない。

　まず、頭を出す。頭のてっぺんを。それから、徐じよ々じよに身体を起こしてゆく。

　水から出ても、まだ安心はできない。黒い衣服と覆ふく面めんには撥はつ水すい加工が施ほどこされているので、ずぶぬれになることはないが、水が切れるまで待たなければならない。目の前には柵がそびえていて、ちょうど頭上にやぐらがある。そのそばには兵がいる。兵は鼻歌を歌っている。たまにくしゃみをする。熱心な見張りではないようだ。とはいえ、少しでも音を立てれば、当然、気づかれる。すぐ隣となりに瑠璃繁縷がいる。瑠璃繁縷は柵に張りついていて、いつでも動きだせそうだ。待っている。自分が待たせているのだ。歯がゆいけれど、心を揺ゆるがせてはならない。水すい滴てきが衣服の表面を伝い落ちてゆく。落ちきるまで、じっとしている。こんなこと、苦でもない。あの人に誉ほめてもらうためだ。あの人に認めてもらい、あの人を喜ばせて、証明してやる。自分が最高のアッサシンだということを。瑠璃繁縷には負けない。絶対に、負けたくない。

　だから、また先に動こうとしているのだろう瑠璃繁縷に先んじる。瑠璃繁縷より早く、柵をするする登って、槍やりを手に篝火のそばに立っている大鷹の兵に絡からみつく。兵は何が起こったのかわかっていない。わかる前に、口を塞ふさがれて、背中から腎じん臓ぞうに達する致ち命めい傷しようを負っている。アッサシンは、どうすれば人の生命を破は壊かいできるか、よく知っている。その

ための技術を無数に身につけている。今、兵は死のうとしている。もう死ぬ。死んだ。

　けれども、殺すだけではダメだ。兵の腰こしから鞘さやごとの剣けんを抜ぬきとって、その身体を座らせ、ベルトと紐ひもで素す早ばやく槍にくくりつける。剣をつっかえ棒がわりにして槍に固定しておけば、とりあえず倒たおれない。すぐに異状を察知する者がいるかもしれないが、いくばくかの時間稼かせぎにはなるだろう。

　細工を終えると、瑠璃繁縷が上がってきたので、やぐらから降りた。敵陣の地図は頭に入っている。仮に多少違っていても、見当はつく。警けい戒かいの薄うすい、多くの兵が寝ね静しずまっている真夜中の陣地内で見つかるほど間ま抜ぬけではない。瑠璃繁縷なんかいらない。一人でやれる。二人でやっても、一人でなしとげても、仕事は仕事だ。瑠璃繁縷を置いていってやる。

　そのつもりで、天幕の陰かげから陰へ、闇やみから闇へ、最短ルートを選んで進んでいるのに、瑠璃繁縷はぴったりとついてくる。離はなれない。どうやっても、距離が開かない。不意に姿が見えなくなっても、次の瞬間にはすぐ横に現れる。こちらは一いつ杯ぱい一杯なのに、瑠璃繁縷には余よ裕ゆうさえありそうだ。先回りしようと思えば、できるに違いない。あえて、そうしないのだ。きっと、わざとだ。

　侮あなどっているのか。馬ば鹿かにして。それとも、ただ二人一組でやれという命令に従っているだけなのか。そうかもしれない。

　瑠璃繁縷とは今までも何度か組んだけれど、必要最低限の言葉しか交かわしたことがない。ほとんど何も知らない。あの人が瑠璃繁縷のことをたまに話す。それを聞いただけだ。聞いて、いろいろと考えてしまった。今も考えている。考えてはいけないのに。

　そうだ。考えてはいけない。頭をからっぽにして、目の前の仕事に集中しないといけない。

　瑠璃繁縷と肩かたを並べて、ひたすら陣地の中を縫ぬうように進んでゆく。二万からの軍勢の陣営だ。それ相応の広さはあるが、尋じん問もんされて自白した捕ほ虜りよが大おお嘘うそをついていなければ、指揮官の天幕がある場所はおおよそわかっている。あれだ。ひときわ大きな天幕が七つ並んでいる。七つのうち、一番大きい天幕ではない。その隣の天幕だ。ここから見えるだけでも、九人

の衛兵が周りに配置されている。巡じゅん回かいしている衛兵もいる。

　同じ天幕の陰に身をひそめている瑠璃繁縷が、ベルトの物入れから小こ瓶びんを抜きとった。瓶にはデーユという植物から採取されて加工された可燃性の粘ねん液えきが入っている。口を開けて火打ち石で点火すれば、あっという間に小型火か炎えん瓶びんのできあがりだ。こちらも同じものを持ってきているので、手早く準備して、瑠璃繁縷とほぼ同時に投げた。すかさずもう一本ずつ用意して、一本目よりも遠くへ投げた。狙ねらいはあえて分散させた。一本が目標の天幕に、他ほかの三本はそれぞれ別の天幕に命中した。火打ち石で点火するときの音を聞いて、数人の衛兵があたりを見まわしていたが、間もなくそれどころではなくなるだろう。もうすぐだ。

　そのときに備えるため、腰の後ろに手をやって、あの人がくれた鬼の角を抜いた。二振ふりで一組の鬼の角は、ずいぶん昔に作られた武具らしいが、驚おどろくほど軽いのに抜ばつ群ぐんの斬きれ味を誇ほこり、小こ振ぶりなので、取り回しもいい。瑠璃繁縷も、ジュピケルと呼ばれる鈍にぶい金色の短たん剣けんを二本、両手に持っている。あれは、でも、遠い昔、どこか遠い国の王が大量生産したものだ。あの人がそう言っていた。ジュピケルの名を持つ武器は、瑠璃繁縷の短剣だけではなくて、たくさんあるのだ。鬼の角のほうが貴重だ。あの人は、その鬼の角を瑠璃繁縷に与あたえなかった。

　なぜだか、金の煙管キセルをさわったときと同じような気持ちになった。

　大だい丈じよう夫ぶだ。

　やれる。

　絶対に、うまくやれる。

「──お、おい……煙けむりが……！」

「か、火事だ……！」

「なんで火なんか……！」

　衛兵たちが火に気づいて騒さわぎはじめた。目標の天幕ではな

い。別の天幕だ。何人かの衛兵が火を消そうと駆かけていったが、あの粘液はシロクネ門の秘中の秘といってもいい。燃えるとかなりの高熱を発するし、燃え広がるのも速い。空気を完全に遮しや断だんしないかぎり、そう簡単には消せない。

　しかも、火元は一つではない。複数だ。

「火事だ！　け、消せ！」

「駄だ目めだ、あっちも……！」

「手を！　手を貸してくれ！　誰だれか！　誰でもいい、火を消さないと！」

「主将の天幕も！　は、早く！　こっちが先だ、急げ！　今なら外側だけだ……！」

「──ええい、何事だ！　騒そう々ぞうしい！」

　そして、ついにその瞬しゅん間かんが訪おとずれた。

　目標の天幕から飛びだしてきたのは、恰かつ幅ぷくのいい中年の男だった。おそらく、眠ねむっていたのだろう。丈たけの長い厚手の上着を羽織って、剣を帯びただけの姿だ。髭ひげの形。はりだした顎あご。際きわ立だって大きい耳。幅はば広ひろだが細い目。鷲わし鼻ばな。左目の下に傷きず跡あとがある。人相書きと寸すん分ぶん違たがわない。あれだ。間ま違ちがいない。あの男が標的だ。標的は自分がしとめる。なんとしても。瑠璃繁縷のことは、あえて頭から追い払はらった。とにかく殺す。早く殺す。この手で始末する。身体からだが動いた。隠かくれていた天幕の陰から低い姿勢で飛びだして、一直線に標的を目指した。衛兵たちは火に気をとられている。こちらに気づかない。標的も天幕が燃えているのを見て泡あわを食っている。殺やれる。余裕だ。なんて無防備なのだろう。

「大鷹国軍上将モルデ侯こう……！」

　名前を呼んでやったら、ようやく標的が顔をこちらに向けた。名将の誉ほまれ高く、かなりの戦いくさ上手らしいが、ここは戦場で、今、その最前線になったということを理解していないのか。

「──な、何なに奴やつ……！」

「覚かく悟ご！」

しかし、モルデ侯には覚悟を決める暇いとますらなかったかもしれない。

侯が引きつった顔で剣けんの柄つかに手をかけるよりも早かった。

左の鬼の角が侯の腹部に突つき刺さり、右の鬼の角がその顎の下に滑すべりこんで、身体を回転させると、血ち飛沫しぶきが舞まった。それだけだった。

終わった。やった。楽勝だ。これであの人に誉ほめてもらえる。あの人もわかってくれる。今はまだまだかもしれないけれど、いつかきっと、必ず一番になる。なれるだけの力が自分にはある。誰よりも働いて、誰よりもあの人の役に立つ。それが自分の望みで、それ以外には何も欲しくないのだということを、あの人もわかってくれるに違いない。

さあ、あとは帰ろう。あの人のところに帰ろう。消火作業をやめ、剣を振りあげて襲おそいかかってくる衛兵を、斬って。突いて。斬り捨てて。あの人がくれた鬼の角は、斬っても斬っても斬れ味が落ちない。あの人の教えはしっかりとこの身に染みついていて、目をつぶっていても人を殺せる。一人。二人。三人。ほら。瑠璃繁縷なんかいらなかった。やっぱり、一人で大丈夫だった。心の底からそう思った。そのときだった。

「伏ふせて」

「え」

思いきり突き飛ばされた。

瑠璃繁縷だ。

今の今まで、少し離はなれた場所で、周りの天幕から駆けだしてきた兵隊たちを相手にしていたのに。いったい、なんのつもりだろう。かっとなったが、事情はすぐに理解した。振り仰あおぐと、瑠璃繁縷が二本のジュピケルで次々と何かを叩たたき落としていた。矢だ。狙われていた？　自分が？　気づかなかったのか？　気づかなかった。どうして？　油断していたのか。調子に乗って、注意力が散さん漫まんになっていたのか。こんなこと、今までなかったの

に。

　瑠璃繁縷のせいだ。

　この男がいるから。この男と一いつ緒しよでなければ、自分はもっと冷静でいられたはずだ。

　でも、あの人の前で、そんな言い訳ができるだろうか。

　できない。嫌きらわれる。あの人に嫌われてしまう。それは、いやだ。絶対に、いやだ。

　起きあがって態勢を立てなおすと、瑠璃繁縷がこちらを見て、首を振ってみせた。先に行け、ということか。

　従いたくはなかったけれど、もう仕事はすんだ。あとは帰るだけだ。そうだ。帰りたい。早く帰って、あの人に会いたい。その一念で走りだして、行く手をさえぎろうとした兵隊を二人、立てつづけに斬った。後ろには瑠璃繁縷がいる。その気配を感じて、かすかに安あん堵ど感かんを覚える自分がいやだった。こらえきれなくなり、振り向いて、吐はき捨てるように言った。

「助けてくれなんて、頼たのんでない」

　瑠璃繁縷に聞こえたかどうか。

　たぶん、聞こえていないだろう。そう思おうとしている自分がみじめだった。

4

　白岩という名の国があった。そう、あったのだ。なくなった。滅ほろぼされてしまった。

　白岩の王都ルエミタージを陥かん落らくせしめたのは、ダーン公率いる砂ア斑ズ犬ゼ師ラ団ンを中心とした赤砂王国の軍勢だった。

　五十七日に及およぶ籠ろう城じよう戦の果てに、とうとう城じよ

う壁へきの一部が突き壊こわされ、蹂じゆう躪りんされたルエミタージは、美しい都だった。大きくはないが、戦乱のラハンにおいて、ひっそりとした輝かがやきを放つ小こ粒つぶの宝石のような、国名の由来である白い岩でつくられた静せい謐ひつな街だった。民たみは総じて穏おだやかで実直だった。王家の者たちは皆みな、責任と義務とを第一とする謹きん厳げんさを教えこまれた。白岩にはこれといった資源も肥ひ沃よくな土地もなく、暮らし向きはあまりよくなかった。ただ、レアラク族の単民族国家だったから、国に対する民の帰属意識は強かった。白岩の王家は、昔々、レアラク族を襲った未み曽ぞ有うの災難から人々を救い、ルエミタージに導いたというイリ・ノアクの末まつ裔えいだと信じられていた。もちろん、民のすべてが王家に心からの忠誠を誓ちかっていたとはいうまい。しかし、ほとんどの民は、自分たちと王家と白岩とルエミタージは一体だと考えていたはずだ。彼女の父は、母は、民に敬われていた。民は、兄たちを、姉たちを、弟たちを愛していた。祭典や祝い事で王族が露ろ台だいに出ると、民は、父、母、兄、姉、そして、彼女、弟の名を順々に呼びながら、笑え顔がおで手を振ふってくれた。

　あの光景が目に焼きついて離れない。わたしの頭を撫なでてくれたお父様、わたしを抱だいてくれたお母様、わたしと遊んでくれた兄様たち、姉様たち、わたしが抱いてあげた弟たちのことを、わたしは忘れられない。わたしたちを讃たたえてくれた者、わたしたちを守ってくれていた者、あたたかい光につつまれているたくさんの思い出、それらを、わたしは忘れない。

　何もかもが大切で、しあわせで、そんな日々がいつまでもつづくのだと、なんの疑いもなく思っていた、黄金よりも貴重な、無む邪じや気きで、愚おろかな、でも、愚かでも許されていた、わたしの大事な記き憶おく、祖国、わたしのすべて。

　壊されてしまった。

　どうして？　なんのために？

「──わから……ない、わ、どう……して……」

　いつものように、彼女は囁ささやく。頭を覆おおう器具からのぞいている彼の耳みみ朶たぶを軽く嚙かんで、舌を這はわせながら、彼にしか聞こえない低い声で囁きつづける。彼は彼女の中でしきりに動いている。彼の息が彼女の耳をくすぐる。彼女も彼にこたえて

動く。彼は少し汗あせをかいている。彼女の身体からだもかすかに汗ばんでいる。

　いつからだろう。もう覚えていない。ずっと前からだ。

　彼女は彼に、少しずつ、少しずつ、話して聞かせている。彼女のことを。

　さながら、物語のように。

　もしかしたら、本当に物語にすぎないのかもしれないと、彼女自身、思うこともある。

　わたしは誰だれなのだろう。どこで生まれて、どうやって育ち、どうして今、こんな場所にいるのだろう。なぜこんなことをしているのだろう。

　直接的な理由は、すぐに思い浮うかぶ。わたしは彼を抱いて、彼に抱かれなければならない。彼を愛あい撫ぶしなければならない。彼を昂たかぶらせて、慰い撫ぶしなければならない。

　そうしなければ、わたしは罰ばつを受ける。恐おそろしい方法で痛めつけられる。わたしは、あの美して汚けがらわしくて恐ろしい、シロクネという名の男に従わなければならない。生きるためにはそうするしかない。

　それが、わたしだ。

　わたしはそれだけの存在だ。

　あれは、だから、物語にすぎない。

　あの思い出も、わたしが頭の中で作りあげた絵空事なのかもしれない。

　たとえば、ルエミタージが落ちた日に捕とらえられ、餌えさか何かのようにダーン公からシロクネに与あたえられたわたしが、知っているはずのないことを、わたしは語る。あの戦いの経過なんて、こどもだったわたしが知るはずもないのに。王宮に住んでいたわたしに、民の暮らしや彼らの考えがどうしてわかるだろう。それに、立場上、お父様やお母様はかなり忙いそがしかったはずだ。わたしには兄弟も多くいた。わたしは、物語の中のわたしほど、お父様や

お母様に愛されていただろうか。兄様や姉様は本当にやさしかっただろうか。意地悪な姉様が一人くらいいなかったろうか。弟は二人とも愛らしかっただろうか。片方の弟が憎にくらしかったりはしなかったか。

　お父様やお母様、兄様、姉様、弟たちの顔は覚えている。でも、それが本当にわたしの両親であり、兄弟たちであったと証明することは、もはやできない。わたしはルエミタージにいたことがあると思う。でも、あれは間ま違ちがいなくルエミタージだったと、誰が言えるだろう。あのルエミタージはもうないのだ。今は赤砂の要よう塞さい都市になっているという。その話も、いつ、誰から聞いたのだったか。何もかもが薄うすらいでゆく。

　今、わたしの中でさかんに動いている彼のことを、わたしは嫌きらいではない。わたしの腕うでが彼を抱きしめる。わたしの指が彼の背中をなぞる。わたしの舌が彼の汗をなめとる。わたしはそれが決していやではない。わたしは何も感じないわけではない。わたしは身体の奥で疼うずく熱を感じている。目を閉じて囁くことをやめれば、わたしは快楽に埋まい没ぼつしてしまうことさえできる。わたしは呟つぶやいてしまいそうになる。

　好きよ。

　あなたが好きよ。

　だから、もっと、もっとして。やめないで。絶対にやめないで。わたしを壊して。

　でも、わたしは知っている。

　わたしは彼のことなんか好きではない。好きでこんなことをしているのではない。

　やらざるをえないから、やっている。

　命じられて、やっている。

　生きるために、やっている。

「……ねえ……これは、わたし、の……復ふく讐しゅう、なのよ……」

　わたしは彼に囁くふりをして、自分に言い聞かせているだけなのかもしれない。

「……そして、裏切り……でも、あって……」

　彼の動きがいっそう激しくなる。わたしも動く。わたしは彼の背中に回した手に力をこめる。ああ、と、声を出す。わたしと彼はとけあって、どこからどこまでがわたしで、どこからどこまでが彼か区別できなくなり、一つになって、ここではない、どこか違う場所へと向かう。

　でも、わたしは知っている。

　わたしはどこにも行けない。ここから逃にげられない。

　たぶん、彼も同じだ。

　わたしたちはどこにもたどりつけない。

　こんな物語がなんになるだろう。人殺しの道具として、ただそれだけのために育てられた彼に、どんな未来があるというのだろう。彼を操あやつるための道具でしかないわたしが、彼にどんな言葉をかけてあげられるというのだろう。

　愛していないわ。

　あなたのことを、愛してなんかいない。

　わたしは誰かに言いつけられてあなたに抱だかれるだけの道具にすぎない。

　不意に、彼が動きを止めた。

　目を開けると、彼がわたしを見下ろしていた。

　彼は頭を覆おおう目め隠かくしと猿さる轡ぐつわを兼かねた器具をつけられている。それは錠じよう前まえ付きで、頑がん丈じようで、鍵かぎがないと外せない。わたしは彼の顔を見たことがない。彼もわたしを見たことがない。でも、わかる。今、彼はわたしを見ている。少なくとも、見ようとしている。そして、彼は声を出す。もごもごと、耳をすましても聞きとれない、言葉を。

「×××××」

　泣かないで。

　たぶん、彼はそう言ったのだ。

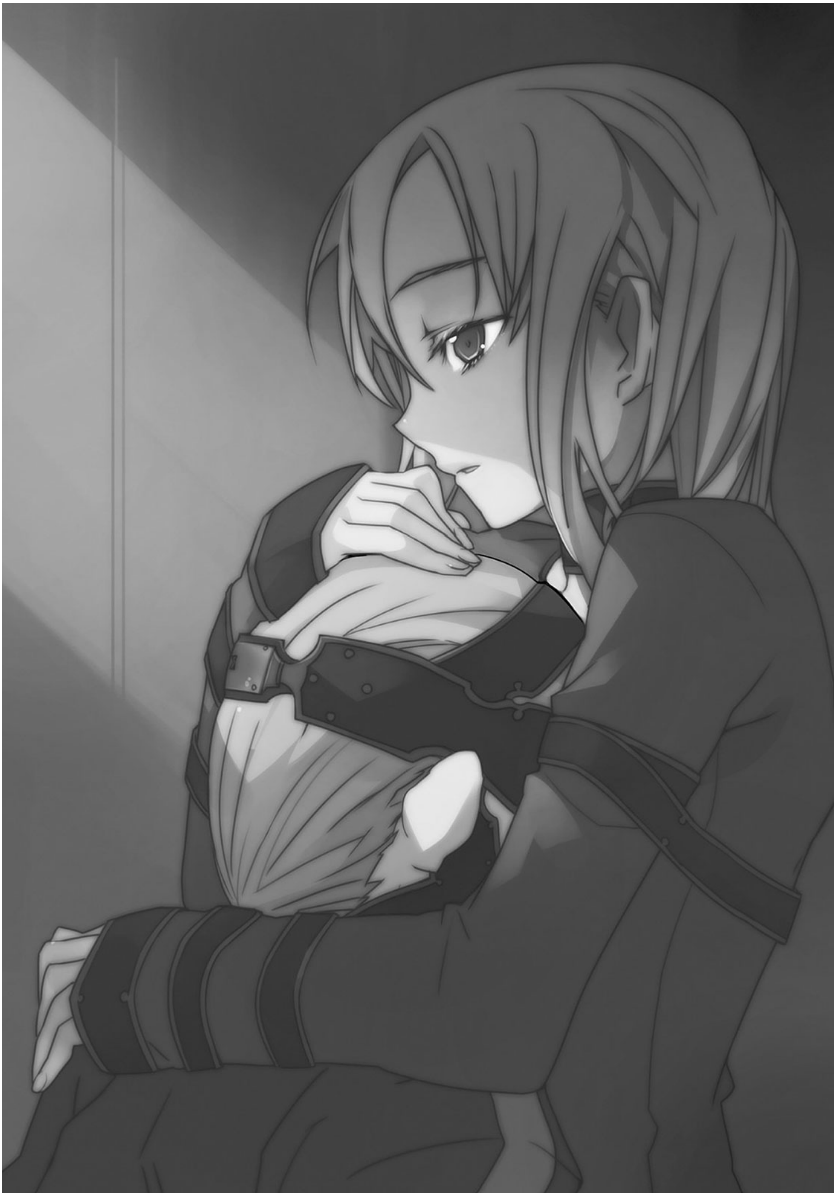
　あなたを愛してはいないわ。

　ただ、かわいそうだと思ったの。道具みたいに扱あつかわれて、囚とらわれていて、人間なのに人間じゃないみたいで、とてもかわいそうだと思ったの。

　あなたは、まるで、わたしみたいに、かわいそう。

「ごめんなさい、瑠璃繁縷」

　彼女は彼の頭を抱いて、自分の胸に押しつけた。彼の頭を、髪かみの毛を、顔を、直にさわりたいと強く思った。彼はじっとしていた。いつもそうだった。今まで一度も彼のほうから手をのばしてきたことはない。どれほど彼女を求めていても、自分からは動かない。シロクネの言いつけだから、彼女は彼を導かざるをえなかった。彼女は彼を抱いた。みずから身をさしだして、抱かせた。いっそ、めちゃくちゃに抱いて、殺して欲しいと思うことさえあるのに、彼はそうしない。



「……弟が、ね。下の弟が、とても、わたしになついていて……」

　わたしはあなたを愛していないかもしれない。愛する資格すらないかもしれない。愛したところで、たぶん、何がどうなるわけでもない。でも、せめてわたしはあなたに語ろうと思う。

「乳う母ばが抱いても泣きやまないときは、わたしが抱いたの。すぐに泣きやんだわ。かわいかったの。重かったけれど、抱いて歩いたわ。世界中に見せてあげたかった。わたしの弟、かわいいでしょう、どう、って。自じ慢まんしたかったの。そうしたら、上の弟が、ぼくもだっこしろって。わたしは、身体からだが大きいから、もう無理だって。赤ちゃんだから、抱けるのよって。そうしたら、上の弟は、ぼくも赤ちゃんになりたいって。なれるはずがないのに。わたし、上の弟と一いつ緒しよに寝ねてあげたわ。ばかな子。どっちも弟だもの。同じくらいかわいいに決まっているのに。かわいくて、仕方なくて、わたし……でも、弟たちは、わたしの目の前で──」

　物語なんかじゃない。本当のことだ。わたしの、本当の思いだ。

「殺されたわ。兵隊に、殺されてしまったわ。男はみんな殺されたの。お父様も、兄様も、弟も。女はつかまえられて、そのあと、どうなったかわからない。わからないの。でも、弟は死んだわ。わたしの目の前で。血まみれになって。死んだわ。わたし──」

　悲しいわ。

　とても悲しくて、寂さびしくて、つらくて、気が狂くるいそうで、何もかもどうでもよかった。

　胸の上で、彼がまた何か言った。

　きっと、やさしい言葉だろうと彼女は思う。

5

　最初から疑う余地はなかった。この者はアッサシンとして最高級の素質を持っていた。アッサシン育成と運用を生なり業わいとするアサシエンであれば、誰だれもが喉のどから手が出るほど欲しがるであろう、極ごく上じようの素材だった。

　ただし、素材はあくまで素材でしかない。重要なことは、その素材をどう育て、いかに鍛きたえるかだ。

体術や殺人術、破は壊かい工作術を効率よく確実に習得させる方法については、膨ぼう大だいな先人の蓄ちく積せきがある。それらを活いかしつつ、自分自身の経験と閃ひらめきにもとづいて工く夫ふうをこらし、適切な訓練を課してゆけばいい。

問題は精神だ。もっとも、アッサシンにふさわしいメンタリティを植えつけることは、さして難しくない。彼らにはそもそも人じん倫りんなど教えないし、情感も極力抑おさえるよう厳しくしつける。ある行こう為いを快に、ある行為を不快に結びつける条件付けを繰くりかえすことで、命令への服従や殺人の欲求などを刷りこんでゆき、ひとたびそれらが定着して安定してしまえば、一見、アッサシンは完成したかに見える。

ところが、そうしてできあがったアッサシンが、徐じよ々じよに、あるいは、突とつ然ぜん、崩ほう壊かいする。

そのような事例が数かぎりなくあるのだ。

どのようにして、完成品のアッサシンを使用可能な状態のまま維い持じするか。

おそらく、もっとも多用されているのは、薬物を利用してアッサシンの精神を制せい御ぎよする手法だろう。

大半のアサシエンは、実際上の理由から鍼しん術じゆつや外科手術、薬術にも通じている。近ごろはα大陸由来の医術式も広まってきているが、いまだラハンでもっとも信しん頼らいされ、一いつ般ぱん的に用いられているのは、この地で伝統のあるそれらの治ち療りよう法だ。つまり、医者でもあるアサシエンが、精神を鎮ちん静せいさせるヘポルや、極度の興奮と幻げん覚かくをもたらす抽ちゆう出しゆつ合成薬メトメ、強力な催さい眠みん効果のあるアンゴロ等を効果的に用いれば、アッサシンを仕事や訓練のときだけ活動させ、他ほかの時間は眠ねむらせておくことも不可能ではない。ただ、種類にもよるが、同じ薬物を継けい続ぞくして摂せつ取しゆしつづければ、耐たい性せいがつく。効果が低下すれば、投とう与よする量を増やすしかない。増やしつづければ、やがては中毒に陥おちいる。そうなれば、アッサシンとしての機能は極きよく端たんに落ちるし、錯さく乱らんして事故を引き起こす場合もある。いずれにしても、最後には致ち死し量を超こえて、死に至る。

ようするに、薬物を用いたアッサシンの制御は、消しよう耗もう

を前提とせざるをえない。

　どれだけ優ゆう秀しゆうなアッサシンでも、万ばん全ぜんの状態で使える期間は平均五年程度、長くてもせいぜい七、八年、最長で十年といったところだ。

　一人前になるまで約十年かかることを思えば、この時間は短い。あまりに短すぎる。

「ねえ、瑠璃繁縷」

　シロクネは瑠璃繁縷の顎あごを左手でそっと持ちあげた。

　瑠璃繁縷は例の器具をつけられて、手足と首が鎖くさりで壁かべに繋つながれている。たとえ目を塞ふさがれていて見えなくても、身体さえ自由に動かせる状態ならば、瑠璃繁縷はシロクネを殺してしまえるかもしれない。

　今、枷かせを解いたら、瑠璃繁縷はシロクネに襲おそいかかるだろうか。

　できまい。できないのだ。見るがいい。実際、こうして鎖を外してやっても、瑠璃繁縷はおとなしくしている。

　わたしを殺したら、あるいは、わたしの命令に従わなければ、あの女を殺すよ。

　明言したことはないが、瑠璃繁縷は理解しているだろう。シロクネも準備はしてある。シロクネに仕えているのは、アッサシンだけではない。もしシロクネが死ねば、シロクネを名乗る者に代々付き従ってきたゾネ家のマエルとドエルの兄弟や、大砂牛車ギヤリカの御ぎよ者しやをやっているジョコロや、元農夫で殺人者のケバミなどが、あの女を殺すだろう。瑠璃繁縷はシロクネに逆らえない。だが、逆らわなければ、あの女と会わせてやる。シロクネに従っていれば、瑠璃繁縷はあの女を抱だくことができる。あの女も、唯ゆい一いつ、自分を必要としている、自分だけを求めている瑠璃繁縷を、喜んで慰なぐさめるだろう。それだけがあの女の価値であり、存在理由なのだ。

　捨てることはできない。

　何かにすがらなければ、生きてゆけない。

　おのれを生かすためなら、なんでもする。

　人とは結局、そのようなものだ。

「瑠璃繁縷。わたしはおまえのことを、とても大切に思っているよ。わかるかい？　わたしはおまえを手放したくない。おまえには長く、長く、ずっとわたしのもとで働いて欲しい。おまえもそう思ってくれているといいのだけれどね。シロクネの、シロクネだけの瑠璃繁縷でいたい、とね。そう願っているよ。瑠璃繁縷。ともあれ、ご苦労だったね。くわしいことは羊蹄シノネから聞いたよ。羊蹄シノネはすべて、ありのままに話してくれた。瑠璃繁縷。すべてを、だよ。瑠璃繁縷。おまえ──」

　シロクネは懐ふところからとりだした包みを開けて、中におさめられていた鍼はりを一本、手にとった。

「羊蹄シノネを助けてあげたんだって？」

　それを、打ちこんだ。瑠璃繁縷の右みぎ肩かたと首の境目あたりだ。立てつづけに、左のほうにも打った。両りよう腕うでの上じよう腕わん部ぶにも打った。胸にも打った。腰こしの両側にも。次々と打ちこんでいった。でたらめではない。運動神経の働きを阻そ害がいする経けい絡らくだ。

「やさしいね。瑠璃繁縷。存外、やさしいところがあるんだね。知らなかったよ。でも、どうかな？　そんなことをする必要はあった？　わたしはおまえにそんなことを教えたかな？　どうだろうね。考えてみたんだ。考えてみた。けれど、ないね。教えていない。おまえにそんなことを教えた覚えはないよ。仕事の最さ中なかに、誰だれかを守る、かばう、そんなことはしなくていいよ。してはいけないよ。余計なことを考えるなよ」

　シロクネは瑠璃繁縷の首の付け根に鍼を打ちこんだ。瑠璃繁縷の身体からだがぐらっと揺ゆらぐように震ふるえた。

「わたしはね。羊蹄シノネをかばったことが、羊蹄シノネを命拾いさせてやったことが、いけないと言っているのではないよ。そうではなくて、わたしが命じたこと以外をしてはいけないと言っている。わかるかい、瑠璃繁縷？　わたしはおまえにそんなことを教えていない。仲間をかばうという選せん択たく肢しがおまえにあってはならない。おまえは自分で考えてそうしたのかい？　それはいけ

ないことだ。じゃあ、今後、わたしがそのための方法を教えて、そうしろと命じたら？　そのときはやらなければならない。わかるかい？　わたしが言っているのはそういうことだよ。瑠璃繁縷。おまえは間ま違ちがいを犯おかした。許せないな。許せない。絶対に、許せない」

　シロクネは話しながら、瑠璃繁縷の身体に鍼を打ちこんでいった。

　一本。二本。三本。

　そのたびに、ろくすっぽ動けないなりに、瑠璃繁縷がかすかに身をよじる。シロクネの鍼は痛覚を刺し激げきしている。シロクネは瑠璃繁縷にさまざまな痛みを与あたえる。ありとあらゆる種類の痛みを与える。痛みを与えることは、むしろ奪うばうことだ。痛みが人からじつにいろいろなものを奪い去ることを、シロクネは知っている。耐たえがたい痛みが、人から平常心を奪う。自尊心を奪う。情を奪う。絆きずなを奪う。何もかもを奪う。瑠璃繁縷は器具の合間から泡あわ状じようの唾だ液えきをもらしている。器具越ごしの叫さけび声は獣けものの咆ほう哮こうのようだ。身体中がびくびくぴくぴく震えている。痛みは瑠璃繁縷から「人であること」を奪う。理由など些さ細さいなものでかまわない。こじつけでもいい。正当でなくていい。むしろ、理り不ふ尽じんなほうがいい。痛みを与えて、奪うことが重要なのだ。シロクネは奪う。徹てつ底てい的に瑠璃繁縷を人ではなくアッサシンとして扱あつかう。

　だが、それだけではいつか壊こわれてしまう。

　少なくとも、その可能性が高いことを、経験上、シロクネは知っている。

　だから、与える。

　瑠璃繁縷にあの女を、快楽を、希望を与えて、期待させ、決して崩ほう壊かいさせない。

　人は意い地じ汚きたないものだ。

　先に何もないとわかれば、途と端たんに一歩も進めなくなる。

　何かあると知っていれば、這はってでも進む。

「やれやれ。瑠璃繁縷。みっともないね。失禁しているじゃないか。瑠璃繁縷。ああ。気を失ってしまったのかい？　つまらないね。でも、こんなに耐えられるのは、おまえくらいだよ。おまえは強い子だね。いい子だから、これからもわたしの言うことを聞くんだよ。いいね。瑠璃繁縷。もっとも、それ以外の選択肢は、おまえには与えないけれどね」

6

　顔。女か。男の顔。手をのばす。だが、届かない。

　午後の太陽が黄色い光を投げかけている。影かげ。

　石ころを拾って、投げた。遠くへ。

　ここはどこだろう。冷たい石の床ゆか。逃にげだそうとした。どこへ……？

　いつか見上げた空の色や、砂の景色や、街の風景や、ぼんやりとした人の顔などが、ぱっと思い浮うかんで、すぐに消えてしまう。

　そんなことが、たまにある。

　気がつくと、瑠璃繁縷は床の上で横になっていた。

　後ろ手に丈じよう夫ぶな革かわ製せいの手て枷かせをはめられて、足枷をつけられている。

　目め隠かくしと猿さる轡ぐつわを兼かねた器具も、そのままだ。

　あの女は誰だろう。あの男は。あの路地はどこにあるのだろう。逃げようとしていた。どこからどこへ逃げようとしていたのだろう。なぜ逃げる必要があったのだろう。どうして自分は、ここで、こうしているのだろう。何があって、どうなったのだろう。

　痛み。あの痛みを思い出す。皮ひ膚ふを剝はがれるような、痛み。氷の針で神経を引っかかれるような、痛み。瞼まぶたを開かせられたまま、目玉を焼かれるような、痛み。痛みは瑠璃繁縷から何

かを奪う。それは記き憶おくだったり、思考だったり、感情だったりする。ときに過去の縄なわに手をかけて引きよせようとすると、すぐに手て応ごたえがなくなる。それでも、またどこかに転がっている縄の端はしを探して引っぱってみる。それは切れ端にすぎない。見まわすと、過去の切れ端ばかりが瑠璃繁縷の周りに散らばっている。

　わたしはだれ？

　ぼくはだあれ？

　おれはなにものだ？

　あなたは、あなたよ。

　そう囁ささやきながら、彼女は（誰か）を胸に抱だいた。（誰か）は次し第だいに形をなしていった。彼女の中はあたたかくぬれている。彼女の中はぬるぬるしていて気持ちいい。（誰か）は彼女の中に自分を見つけた。（誰か）は思った。

　あなたが必要だ。

　あなたのそばにいたい。そばにいて欲しい。あなたに抱きしめられたい。あなたを抱きしめたい。あなたの中にいたい。

　彼女は（誰か）に囁く。そうね。そうだといいわね。でも、無理なの。できないわ。許されないの。わたしがあなたに会えるのは、定められた時間だけだから。そう決められているのよ。ねえ、あなたはわたしと繋つながっていたい？　わたしはあなたを愛していないわ。でも、もしあなたが望むのなら、あなたと一いつ緒しよにいてあげてもいいわ。（誰か）は考える。あい？　あい。アイ。Ａｉなど知らない。ただあなたといたい。あなたの中にいたい。ずっと。そう――と、彼女は囁く。でも、不可能なの。できないわ。だって、わたしは自由ではないもの。あなただって、自由ではないもの。わたしとあなたは、望むことはできても、望むままに何かをすることはできないのよ。できない？　できないのだろうか。できないのだろう。あなたが。あなたは。（誰か）は。（誰か）が。（誰か）には。（誰か）……？

　瑠璃繁縷はゆっくりと頭を持ちあげて、床に打ちつけた。

　鈍にぶい、濁にごって、ぼんやりとした、痛みだった。

7

自分は他ほかとは違ちがう、と思っている。

自分以外のアッサシンは、仕事や訓練や食事のときだけ、あの頭全体をほとんど覆おおってしまう器具から解放される。自分以外のアッサシンは、だいたい狭せまい個室に閉じこめられている。自分以外にも、拘こう束そくされることの少ないアッサシンがいるけれど、彼らは薬物を投とう与よされないと、立って歩くことさえままならない。自分だけは、他のアッサシンと違って、あの人のそばにいさせてもらえる。あの人は他のアッサシンにするように、自分にも鍼はりを打つこともある。でも、あの痛みを、さまざまな痛みを我が慢まんすれば、あとであの人が誉ほめてくれる。抱きしめてくれる。よく耐たえたね。羊蹄シノネ。いい子だ。おまえは特別だよ、と言ってくれる。羊蹄シノネ。わたしはおまえのことを一番大切に思っているよ。あの瑠璃繁縷にさえ、そんなことはしない。

涙なみだが出るほど嬉うれしい。

胸がぐちゃぐちゃになるくらい嬉しい。

あの人のためならなんでもする。どこにでも行く。あの人を守る。あの人も言ってくれる。わたしを守ってくれるかい。羊蹄シノネ。ついてきて。そこにいて。何かあったら助けておくれ。わたしはおまえを信じているからね。羊蹄シノネ。これはおまえにしか任せられない仕事だよ。そこでいい子にしておいで。

天幕の中には入れてくれなかった。あの人が出てくるまで、外で待っていなければならない。少しだけ不満だけれど、あの人がそうしろと言うのなら、そうする。それ以外の選せん択たく肢しはない。あの人に嫌きらわれたくない。期待を裏切りたくない。

だから、天幕の出入口の前で、黙だまって立っている。左右に槍やりと楯たてを構えた赤砂の衛兵がいて、たまにこちらをちらちらうかがう。うっとうしいけれど、気にしない。気にしていられない。仕事に集中しなければならない。今、ダーン公に呼ばれて天幕の中にいるあの人の身が、万が一にも危険にさらされるようなこと

があってはならない。

　陣じん地ちのそこかしこで、まだ宴うたげがつづいている。あれで有能な指揮官だったらしいモルデ侯こうが暗殺されて浮き足だった大おお鷹たかの軍勢は、未明に赤砂の全軍による突とつ撃げきを受けると、呆あつ気けなく崩くずれ、陣地を捨てて逃げだした。十日以上、一進一退の攻こう防ぼうを繰くりかえした果てに、ようやく勝利したのだ。明日には大鷹国ペルメ郡の郡都ハウロバの街に向けて軍を進めるようだし、今夜は多少羽目を外すことも許されているのだろう。

　あの人も、天幕の中で、ダーン公からお褒ほめの言葉でも賜たまわっているのだろうか。上等な酒や食べ物もふるまわれているに違いない。いいことだと思う。この身はまだ未熟ではあるけれど、あの人のために、あの人のためだけに働いているのだ。その対価として、あの人が報ほう酬しゆうを受けとることは喜ばしい。火を囲んで馬ば鹿か騒さわぎをしている連中を眺ながめていると、妙みように胸がざわついたりもするけれど、自分には関係ないし、興味もない。

　ただ、こういうときが意外と危ないのだ。

　ラハンには、砂の数ほどのアッサシンがいる。国家に仕えているアサシエンもいるらしい。敵方にもアッサシンがいて、何か仕し掛かけてくるかもしれない。ダーン公や赤砂の者たちがどうなろうと知ったことではないけれど、あの人に危害が及およぶようなことがあってはならない。そんなことは、絶対にさせない。

　それにしても、あの人はいつになったら出てくるだろう。もう三時間もたった。どれだけ長かろうと、それが永遠だろうと、ひたすら待っているしかないけれど、少しだけ気がかりだ。いや──気になる、といったほうが正確かもしれない。中で、何をやっているのだろう。ただ食べたり飲んだりしながら、語らっているだけなのか。

　そんなはず、ない。

　わかっているのだ。

　本当は、わかっている。

　あの人は、人前では食べることも飲むこともしない。何を出され

ても、手をつけない。羊蹄シノネ。雇やとい主に珍めずらしいものをもらったよ。さあ、おあがり。そう言って、甘い菓か子しをくれたりすることもある。でも、あの人は決して口をつけない。食べないのですか。そう訊きくと、わたしはいらないよ、と答える。小心者でね。わたしは決めたものしか食べない。これは大だい丈じよう夫ぶだと知っているものしかね。ほら。羊蹄シノネ。それにだって毒が入っているかもしれないよ。嘘うそだよ。冗じよう談だんだよ。あの人は用心深い。よほどのことがないかぎり、他人を信じない。飲み食いするとき、人は無防備になる。あの人はそんな姿を他人にさらしたりしない。

　でも、たまに、こうして雇い主に呼ばれて、何時間も二人きりになることがある。

　相手は、男のときもある。

　女のときもある。

　あの人は、いったい何をしているのだろう。

　──考えるな。

　考えてはいけない。

　自分で考えることなんて、あの人は望んでいない。従うのだ。ただ従えばいい。それがあの人の望みだ。あの人が喜ぶことだ。

　あの人に喜んでもらいたい。

　少しだけざわつくこの胸に息づいている願いは、ただそれだけなのだから。

8

　ジョコロの世界には音がない。

　生まれつきではないので、音が何かは知っている。

自分がそれを失ったこともわかっている。

それが大切なものだということも理解している。

音をなくしたせいで、ジョコロは家族にも隣りん人じんにも疎うとまれたのだ。

ジョコロが生まれ育った村は貧しかった。

皆みなで力をあわせて痩やせた土地を耕し、なんとか生きのびるだけの糧かてをえて、足りなければ弱い者から順に死んだ。働けない大人には居場所がなかったし、働ける大人になれそうもないこどもは落らく胆たんの種でしかなかった。ジョコロは音が聞こえないだけで、体つきは人並みだったが、兄や隣となりの家のオロイやトデルーと同じようには大人の手伝いができなかった。あれをやれ、これをやれと言われても気づかなくて、叩たたかれる。何か言われているのはわかるのだが、何を言われているのかわからなくて、苛いら々いらさせてしまい、叩かれる。身み振ぶり手振りでも理解できなくて、怒おこらせてしまい、やはり叩かれる。そんなことの繰りかえしで、ジョコロも周りも疲つかれてしまった。

ジョコロはやがて、仕事をさぼり、砂さ漠ばくが迫せまる村はずれで砂に絵を描かいてすごすようになった。毎日さんざん怒られ、殴なぐられ、蹴けられたが、どうせ目をつぶっていれば何がなんだかわからない。ただ痛いだけだ。痛いのを我が慢まんすればいい。空腹で死にそうなときは、夜中に畑を荒あらしてなんでも口に入れた。いつまでもつかな。そのうち殴り殺されるかな。まあ、いいか。しょうがない、と、ぼんやり考えていた。そんなある日のことだった。

いつものように指で砂に絵を描いていたら、不意に大きな影かげがさした。振りかえると、とんでもなく大きくて、背中や四し肢しに長い毛が生えていて、皮が硬かたそうで、顔が長い生き物がいた。そいつが口をあんぐりと開けた。食べられるかと思った。違ちがった。なめられた。べろん、べろんと顔中をなめられた。群れからはぐれたらしい大砂牛バーラだった。

ごく稀まれに、どういうわけか大砂牛バーラに好かれる人間が生まれるという。ジョコロはそれだった。その才能を見こんで、シロクネはジョコロを雇った。大砂牛車ギヤリカを御ぎよせるのは、ジョコロのような者だけだからだ。

　でも、シロクネがジョコロの噂うわさを聞いて村を訪ねてこなければ、どうなっていただろう。たぶん、砂に絵を描いたり殴られたり怒られたりするだけの日々をすごして、そのうちくたばっていたに違いない。だから、シロクネには恩を感じている。好きなときに好きなだけ食べられるだけでも十分なのに、何頭もの大砂牛バーラと大陸中を旅して回れるのだ。あの村で厄やつ介かい者ものとして死んだら少しばかり無念だったろうが、今なら死んでもそれほど悔くいは残らないと思う。残される大砂牛バーラのことは心配だが。おそらく、自分はしあわせなのではないかと思う。

　ただ、こういう仕事はあまり好きではない。

　ジョコロは鍵かぎ束たばから一本の鍵を探さぐりあて、錠じようを外して扉とびらを開けた。部屋ともいえない狭せまい部屋だ。とろんとした匂においがして、少しだけ頭がくらくらする。なんだか変な気持ちになるので、この匂いを嗅かぐのもいやなのだが、部屋の様子を目にするのもいやだ。なんとなく息苦しくなるのだ。

　部屋の中では、女が一人、身体からだを丸めて横になっている。女はシロクネが作った器具を頭にかぶせられているので、何も見えないし、ちゃんと喋しやべることもできない。後ろ手に手て枷かせをはめられているから、両手は動かせないだろうが、足は自由だ。いや、この女の足では、自由だろうと自由でなかろうと、大差ないかもしれないが。

　ジョコロは持ってきた皿を床ゆかに置いて、女の肩かたをつついた。女が首を持ちあげたので、頭の後ろに手を回して、器具についている三つの錠のうち、一番下の鍵穴に鍵を突つっこんで回し、口を覆おおっている部品を外してやった。女が何か言ったようだ。はっきりとはわからなかったが、ありがとう、とか、唇くちびるの動きからすると、たぶんそんな言葉だろう。ジョコロは答えるつもりで適当に声を出して、女の顎あご先さきに移動させた皿の端はしを軽く叩いてみせた。シロクネの命令で、器具をすっかり脱ぬがせたり、手枷を外してやったりすることもたまにあるのだが、今日はこのままだ。べつに、何日おきとか、何回に一回とか、そういう決まりはないようだから、女にしてみれば、期待したりがっかりしたりで、忙いそがしいかもしれない。それでも、女は皿に顔を突っこむようにして、スープにひたしたパンを少しずつ食べている。上手なものだ。この大砂牛車ギヤリカには、同じような女が他ほかにもいるが、この女みたいに顔を汚よごさず食事をする者はいない。なんというか、しっかりしている。他の女のように投げやりではな

い。必死で生きている、というかんじがする。ジョコロにしてみれば、だから余計にいやなのだが。

ジョコロは女の足首を見た。両方だ。足首の裏側に、おぞましい傷きず跡あとがある。なんでも、足首の大事な腱けんを切ってしまっているので、もう二度と立って歩くことはできないのだそうだ。ちょっと気の毒だとは思うが、まあ、しょうがないのだろう。人間なんて運が悪いとそんなものだ。ジョコロも運悪く妙みような病気にかかって、音を失った。あきらめるしかないのだ。

それに、そのうち運が巡めぐってきて、何かいいことが起こるかもしれない。

たとえば、ジョコロがシロクネに拾ってもらったように。

9

どこまでも深くて粘ねばつく濃のう厚こうな闇やみに手を突っこんで引っかきまわすように、左手の短たん剣けんで喉のどを掻かき斬きるのと同時に、右手の短剣を背後から腎じん臓ぞうめがけて突き入れた。ぱっくり開いた喉からヒュルゥと空気がもれた。身体がピクンピクン震ふるえた。ああ、死ぬ。もうすぐ死ぬ。全身から力が抜ぬけてゆく。死のうとしている。

こうしてこの手で生命を破は壊かいするたびに、鼻の奥がすっとして、視野がぐっと広がり、聞こえる音が明めい瞭りようになって、指先の感覚が鋭するどくなり、分ぶん泌ぴつされる唾だ液えきにさえもしっかりした味を感じるようになる。

瑠璃繁縷は、今やかぎりなく死体に近い庭回りの衛兵が地面に崩くずれ落ちるまで、待つことはしなかった。後ろについてきているだろう羊蹄シノネを振りかえりもしなかった。走りだした。石造りの堅けん牢ろうな館やかたの外がい壁へきにとりつくなり、砂岩の壁へき面めんの凹おう凸とつを足場にして一気に二階まで達し、硝子ガラスの二重窓を叩き割った。屋や敷しきの中へと飛びこむと、そこは二階の真ん中を貫つらぬく廊ろう下かの端だった。左右の壁かべに獣じゆう脂しのランプが並んでいる。瑠璃繁縷は両手の短剣

でそれらを次々と叩たたき壊こわしていった。その途と中ちゆうで、向こうから軽装の衛兵が駆かけてきた。二人だ。

「××××××！」

「×××！」

　何か叫さけんでいるが、瑠璃繁縷は聞いていない。低い姿勢で飛びこんで、まず一人の膝ひざ頭がしらを左の短剣でくり貫ぬくように斬り裂さき、その喉のど元もとに右の短剣を突っこんで押し斬りながら、もう一人に接近して──Ａｈｈ……！　鼻を削そいで、膝を突き壊して、脇わきの下を斬って、蹴け倒たおすと、また新手がきた。瑠璃繁縷はさらに五つのランプをぶち壊しながら直進して、階段のすぐ手前で新手の三人を手早く効率よく破壊して殺した。

「瑠璃繁縷、おまえ、一人で……！」

　羊蹄シノネの低い声が背中を叩いたが、気にしなかった。瑠璃繁縷は階段を駆けあがった。三階まですぐだった。降り口に衛兵が二人いた。右往左往している。一人は明らかに逃にげ腰ごしだ。かまわずに突とつ進しんした。一人の喉のど笛ぶえを掻き斬ると、もう一人が背を向けて逃げだそうとした。その背中に右の短剣を突き立てて腎臓をえぐってやった。Ａｈａａ……！　脳のう髄ずいが痺しびれる。どんどん世界の有様がよりくっきりと見えるようになってくる。認にん識しきに革命が起こる。

　まるであなたの中にいるかのようだ。

　あなたに抱だきしめられているかのようだ。

　あなたを抱いているかのようだ。

　瑠璃繁縷は、しかし、酔うことはない。足りないからだ。

　もっと欲しい。

　もっと。もっと。もっと。もっと。もっと。もっと。もっと。もっと。もっとだ。

　そして、それよりも、何よりも、あなたに会いたい。

　瑠璃繁縷は渇かわきを抱かかえたまま三階の廊下を突っ走り、角

を二つ曲がる間に四人血祭りにあげて、目的の部屋のすぐそばまできた。ちょうど、寝ね間ま着き姿の男が部屋から出てきて、衛兵に怒ど鳴なりちらしているところだった。その二人の衛兵が順々に瑠璃繁縷を見て、短く声をあげた。寝間着の男もこちらに首を向けた。灯火に照らされた男の顔は少し引きつっていたが、薄うすい髭ひげも、鋭えい角かく的な目鼻立ちも、台形型の額も、人相書きどおりだった。他の身体的特とく徴ちようも合がつ致ちしていた。標的だ。間ま違ちがいない。標的を、殺せ。殺せ。殺せ。殺せ……！

　瑠璃繁縷は標的に向かって猛もう進しんした。衛兵になどかまっていられない。突っかかってきた一人の脇をすり抜けた。盾たてになるべく身を投げだしてきたもう一人の手前で横っ飛びして、壁を蹴けった勢いで標的に襲おそいかかろうとした。だが、標的も甘んじて死の運命を受け入れるつもりはないようだ。必死の形相だった。標的は自分の前に出てきた衛兵の腰こしから短剣を抜いた。それで瑠璃繁縷が繰くりだした左の短剣をかろうじて弾はじき、右の短剣は左ひだり腕うでで受け止めてみせた。

「──おのれ、赤、砂の……！　アッサシンごときに……！」

　さらに、標的は反はん撃げきさえしてきた。しかも、破れかぶれではない。半身に構えて短剣を矢や継つぎ早に突きだしてきた。大おお鷹たか国ペルメ郡の郡都ハウロバ太守オウローは、〝南の獅し子し〟の異名をとる猛もう将しようで、戦場では先せん陣じんを切って剣けんを振ふるうこともあるという。実際、鋭く無む駄だのない剣捌さばきだ。たしかに、すぐれた戦士なのだろう。その片へん鱗りんはうかがえるが、瑠璃繁縷にはすべて見えている。オウローが次にどこをどう突つこうとしているのか、これまでどのような戦いを経験してきたのか、どれだけの命を直接絶ってきたのか、今なんのために戦っているのか。

　オウローは守ろうとしている。

　何を？

　自分の命か。それにしては、捨て身だ。

　オウローは背後を気にしている。かばおうとしている。そこに何かあるのか。半開きの扉とびらの向こうに、何があるのだろう。オウローが出てきた部屋の中に、いったい何が。

「──何を手間取っている……！」

　衛兵たちを相手にしている羊蹄シノネの声に、背中を押されたわけではない、と思う。瑠璃繁縷はオウローの太た刀ち筋すじを見切って、すっと懐ふところに入りこんだ。オウローの右手が短剣を握にぎったまま斬れ飛んで、床ゆかに落ちた。そのときにはもう、瑠璃繁縷の左の短剣がオウローの顎あごの下に食いこんで、右の短剣が左の眼球に突き刺さっていた。

　右手に力をこめた。眼底を突き破る剣先は、まるで瑠璃繁縷そのものであるかのようだった。そうして大事な部分をたやすく食い破り、いのちを破壊することこそが瑠璃繁縷の本領なのだろう。そして、おそらく瑠璃繁縷のすべてなのだろう。Ｈａａｈａｈｈ……！　瑠璃繁縷はかき混ぜた。オウローの脳をかき混ぜた。左の手首を返して、顎がつ骨こつにそって短剣を動かした。一回転させると、顎の下に丸い穴が開いた。それから両手の短剣を引き抜ぬくと、オウローはもう息絶える寸前だった。瑠璃繁縷は息を吐はいた。漆しつ黒こくの仮面の奥でそっと息を吐いて、かすかに首を振った。標的がもはや標的ではないものとなって、後ろに、半開きの扉に倒たおれかかっていった。オウローの身体からだが扉を押し開いた。瑠璃繁縷は反射的に部屋の中へ駆けこみかけた。

　人がいたからだ。

　身長は百二十五から百三十サンチの間だろう。丈たけの長い、たっぷりした薄うす手での衣ころもを着ている。武器を持っている様子はない。肌はだは褐かつ色しよくで、頭とう髪はつと目は黒い。その人間は、オウローの死体をじっと見つめている。あるいは、放心しているのかもしれない。簡単に殺せる。殺す。そう、殺す。殺せ。どうして？　気持ちいいから。命じられているから。誰だれを？　標的を。誰に？　シロクネに。殺せ。いや。あの人間は標的ではない。でも、殺したい。殺したい。殺したい。ああ、そうか──自分は、殺したいから、殺すのか？

「だ、ダメ……！　ジアド、こっちへ……！　早くしなさい……！」

　部屋の奥から叫び声が聞こえてきた。

　声のしたほうへ目をやると、寝しん台だいの脇で女が腰を抜かして震ふるえていた。

　ジアド。呆ほうけたように突っ立って、オウローの死体を見下ろしている人間は、ジアドというのか。ジアド。それは、名前か。

　瑠璃繁縷はジアドを殺すために一歩踏ふみだした。女が狂くるったように大声を出している。どうしても足に力が入らないようで、這はってこようとしている。やめて。どうか。こどもは殺さないでください。こどもは関係ありません。こどもは、どうか。ジアド。ジアド。こっちへきて。殺さないで。死なないで。後ろからも声がする。何をやっている。何をもたもたしているんだ。羊蹄シノネか。そうだ。そのとおりだ。自分は何をやっているのか。殺す。ジアドを殺す。瑠璃繁縷は右手の短剣を振りあげた。やめて。やめて。殺さないで。殺せ。殺せ。早く殺せ。

　ジアドがようやくこちらを見た。

　作り物みたいな無表情だった。

　その両目がうるみだした。

　涙なみだだ。

　泣いている。

　ジアドが泣いている。

「……どうして、こんなこと、するの……？」

　弟が、ね。一番下の弟が、とても、わたしになついていて。ばかな子。どっちも弟だもの。同じくらいかわいいに決まっているのに。でも、弟たちは、わたしの目の前で━、

　殺されたわ。

　兵隊に、殺されてしまったわ。弟は死んだわ。わたしの目の前で。血まみれになって。死んだわ。わたし、悲しいわ。とても悲しくて、寂さびしくて、つらくて、気が狂いそうで、何もかもどうでもよかった。

　瑠璃繁縷は右手を下ろして、泣き叫さけびながらジアドを部屋の奥のほうへ引きずってゆこうとしている女に背を向けた。

　廊ろう下かに戻もどると、衛兵は羊蹄シノネに全員片づけられていた。

　あと二日でハウロバの城じよう壁へきに迫せまろうとしている赤砂の軍に先んじて、街の中に潜せん入にゅうし、太守オウローを殺す。間もなく、別のアッサシンたちも、食しよく糧りよう備び蓄ちく庫こと武器庫の焼き討ちや、跳はね橋ばしの装置を損傷させるなどの破は壊かい工作を開始するはずだ。仕事は終わった。

　殺さなくていい。ジアドを殺す必要はない。

　瑠璃繁縷はもときた廊下を引き返そうとした。

　その肩かたを羊蹄シノネがつかんだ。

　羊蹄シノネは首を振って扉の向こうを示し、押し殺したような声を出した。

「どういうつもりだ、おまえ」

「少し、口数が多い」

「──な……」

「行こう。用はすんだ」

「待て！」

　瑠璃繁縷は待たなかった。羊蹄シノネを振りきって廊下を走った。行く手には衛兵の新手がいる。彼らは屋や敷しき中から集まってきて、なんとしても瑠璃繁縷と羊蹄シノネを殺そうとするだろう。また殺せる。もっと殺せる。いくらでも殺せる。ジアドを殺さなかったぶん、立ち向かってくる兵たちを殺せばいい。それ以上のことは考えなかった。考えても、どうせわからないだろう。

　ただ、殺して、殺して、殺しまくって、あなたに会いたい。

　あなたはまた泣くだろうか。

10

　あの人の膝ひざの上に頭をのせているなんて、なんだか夢みたいだ。

　自分の髪かみの毛をあの人の指がすくって、たまに少しだけ引っぱる。痛くはない。むしろ、くすぐったい。あの人の手にそっと頬ほおをなでられると、やめてもらいたいような、もっとして欲しいような、複雑な気持ちになる。

「羊蹄シノネ。緊きん張ちようしているのかい。身体が強こわ張ばっているね。いいんだよ。楽にしていいよ」

「……でも、勝手に」

「かわいいね。羊蹄シノネ。けれど、自分で自分を制せい御ぎよしきれないのは少々いただけないな。それはよくないことだよ」

「ご、ごめんなさい」

「冗じよう談だんだよ。羊蹄シノネ。怖こわがらなくていいよ。こんなことで罰ばつを与あたえたりはしないよ。わたしはそんなにひどい男かい、羊蹄シノネ？」

「そんな……そんなこと、ありません」

「そうだといいね。羊蹄シノネ。わたしはおまえが大切だからね。大事にしてあげたいんだよ。誰だれよりもね」

「……大事に、していただいています。もう、いっぱい……」

「まだだよ。羊蹄シノネ。まだ足りないよ。わたしはもっとおまえにやさしくしてあげよう。おまえはいい子だからね。仕事もよくやってくれているしね」

「……は、はい……」

　よくやってくれている。そう言ってもらえるのは、嬉うれしい。

だって、すべてこの人のためなのだ。この人のために頑がん張ばっている。この人のためなら、頑張れる。

　でも、素す直なおに心の底から喜ぶことができない。

　思わず、下した唇くちびるの内側を嚙かんでしまった。

　頭をなでてくれていた手が、止まった。

「どうしたんだい、羊蹄シノネ？」

「……え、いえ……」

「話してごらん。何かあるんだろう。話したいことが。違ちがう？」

「……でも……」

「わたしが話せと言っているんだよ。羊蹄シノネ」

　背筋が凍こおりついた。

　いや、背筋だけではない。全身だ。

　今すぐ許しを乞こいたい。逆らうつもりなんてなかった。本当に、これっぽっちもなかった。だけれど、そんなことは望まれていない。謝れなんて言われていない。言われていないことをすれば、嫌きらわれる。嫌われたくない。今、求められているのは、話すことだ。

「……仕事は……やっています。精せい一いつ杯ぱい、やっている、つもりです。でも、まだまだ、で。力不足だから、それで……」

「なんだ。そんなことかい。気に病やむことはないよ。羊蹄シノネ。おまえはまだ若い。ああ。そうか。瑠璃繁縷だろう。おまえは瑠璃繁縷と自分を比べているんだね。違う？」

「……ち、がい……ません」

「羊蹄シノネ。羊蹄シノネ。他ほかの者と自分を比べる必要はないよ。ただ、瑠璃繁縷の仕事ぶりを見ておくのはいいことだけれど

ね。あれはおまえより場数を踏ふんでいる。経験がある。いい勉強になるはずだよ。そのために、わたしはあれとおまえをたまに組ませているんだよ。羊蹄シノネ。あれはすごいだろう？」

　うなずくまでに時間がかかった。でも、すごい。たしかに、瑠璃繁縷はすごい。どこが特別すぐれているとか、何か他にはないものを持っているとか、そういうことではない。ぜんぶだ。すべてが抜ぬきんでていて、追いかける背中が、あまりにも遠い。もしかしたら、自分は一生追いつけないのではないか。そんな疑いが頭をもたげてきて、胸が苦しくなる。

　瑠璃繁縷が前にいるかぎり、自分は一番になれないかもしれない。

　いなければいいのに。

　瑠璃繁縷なんか、いなくなればいい。

　そうだ。

　いなくなってしまえ。

「……まだ、あります。お話ししたい、ことが」

「なんだい、羊蹄シノネ？　言ってごらん」

「瑠璃繁縷は」

　心臓の鼓こ動どうが乱れた。

　迷うことはないはずだ。あの人の指が髪を梳すいている。あの人の掌てのひらが頰から顎あごをなでる。あの人の膝のぬくもりが自分の体温と重なっている。自分は何か間違ったことをしようとしているのか。そんなことはない。言ってごらん。そう言われた。話してもいい。むしろ、話さなければならない。

　それに、瑠璃繁縷はおかしかった。明らかに変だった。

　あんなことは教えられていないはずだ。教えられていないことを、自分で考えてやってはいけない。いけないのだ。

「こどもを、見み逃のがしました」

「……なんだって？」

　あの人の身体からだが硬かたくなった。ああ。怒おこっている。怖い。怖い。鍼はりを打たれる。痛みが。怖い。でも、もうやめられない。途と中ちゅうで話をやめたら、もっと怒る。嫌われる。きっと、とりかえしがつかないくらい嫌われてしまう。

「──お、オウローの……部屋に、いた、こどもと、女を……殺さないで、見逃して、そのまま……」

「そうか。なるほどね。そういえば、オウローはいい夫で、いい父親だったらしいね。妻と、息むす子こと、同じ部屋で寝ねていたのか。下々の者たちのように、こどもまで一いつ緒しよだったんだね。そうだ。妻はアデマ。息子は一人で、ジアド。ジアドか。ジアド……？　で、そのジアドを見逃したって？　どういうことだい、羊蹄シノネ？」

「……はっきりとは、見ていません……でも、一度、殺そうとしたのに……」

「思いとどまった？」

「……女が、やめて、と──助けて、と、殺さないで、と、叫さけんでいました」

「命いのち乞ごいされて、瑠璃繁縷はそれを聞き入れた。つまり、そういうこと？」

「……はい」

「おもしろいね」

　息が止まるかと思った。

　違う。

　正確にいえば、息の根を止められるかと思った。

　あの人の手が、首にかかっている。力はさほど入っていない。絞しめられてはいないけれど、いつ絞め殺されてもおかしくない。

　このまま絞められたら、自分はどうするだろう。どうすればいい

だろう。

　決まっている。

　あの人がそれを望むのなら、受け入れるしかない。

「まったく、おもしろい話だね。羊蹄シノネ。あれはどうしてそんなことをしたんだろうね。そんなことは教えていないはずだけれどね。でもね。羊蹄シノネ。ジアドか。思いあたることがあるよ。もしそうだとしたら、許せないな。許せない。あの女め。道具の分際で。絶対に、許せない。懲こらしめてやらないといけないね。失敗だったのだとしたら、さっさと矯きよう正せいしないとね。そうだろう、羊蹄シノネ？　わたしはおまえには失敗していないね？　だって、わたしはこんなにもおまえを大切に思っているからね。失敗するはずがない。おかしいな。そのはずなのにね」

　あの人の声に、ただ、ひたすらうなずきつづけた。仮に自分も失敗だとしたら、どうなるのだろう。考えたくなかった。考えなくていい。そんなことは、教えられていないのだから。

11

　あなたに会いたい。殺したい。ふれたい。殺したい。抱だきたい。殺したい。じりじりする。弾はじけそうになる。だが、この身が砕くだけ散ることはない。あなたがいるからだ。

　仕事が終われば、あなたに会える。その前に痛めつけられることもある。あなたに会ったあとで、さんざんいたぶられることもある。法則はないと思う。どちらでもいい。あなたに会えればいい。遠い昔の思い出も、少し前の記き憶おくも、何もかもが薄うすらいでいったとしても、あなたに会いたい、この思いだけは消えない。いつもはっきりしている。いつだってあなたに会いたい。命じられたとおりに殺せば、あなたに会える。

　いつの間にか、あなたの感かん触しよくを、あなたの味を、あなたのすべてを感じながら、殺すようになっていた。

　あなたがさわってくれるように、慰なぐさめてくれるように、迎

むかえ入れて動いてくれるように、殺すようになっていた。

　殺すことはあなたを求めることだ。

　殺すことはあなたそのものだ。

　ジナ。

　ぼくはくるっている。

　知っていた。ちゃんとわかっていた。あなたが囁ささやく物語に教えられた。ぼくはこわれている。ぼくはきっとふつうじゃない。おれはおかしい。おれという存在はまともではない。それでもよかった。あなたがいればよかった。ただあなたが欲しかった。殺すのは気持ちいい。殺せばあなたに会える。だったら、殺せばいい。ためらいはなかった。なかったはずなのに。

　ジアドは殺せなかった。

　どうしても殺すことができなかった。

　無理だ。

　扉とびらの鍵かぎを外す音がした。扉が開いた。

　ジナではないと思った。ジナだったら、すぐにわかる。

　ということは、あの男か。シロクネか。そうだ。この匂においは間ま違ちがいなくシロクネだ。

　シロクネは部屋に入ってくるなり、鎖くさりを解いて、瑠璃繁縷の頭を覆おおっていた器具を外した。奇き異いに感じた。扉も開きっぱなしだ。シロクネは瑠璃繁縷の前に立って、無言でじっとこちらを見つめている。表情はない。視線も揺ゆらがない。息をしている様子すらない。

「瑠璃繁縷」

　ようやくだった。

　シロクネは懐ふところから布の包みをとりだし、中に入っていた鍼はりを指でつまんだ。

　いつものことではある。慣れているから、恐おそれはさしてなかった。警けい戒かいもしなかった。身体からだのあちこちに次々と鍼を打ちこまれ、全身の自由を奪うばわれても、今回はこっちが先なのだろうとしか考えなかった。これからシロクネに思いきり痛めつけられて、そのあとジナに会える。少しの間、少しでなくとも、とにかく我が慢まんすればいい。

　だから、シロクネが立ちあがって、いったん部屋の外へ出てゆき、ややあって引きかえしてきたときは、何がなんだかわからなかった。

　シロクネは引きずっていた。荷物でも扱あつかうように、音を立てて、手首をわしづかみにして、人を引きずってきた。

　女だ。

　あの器具をつけられているから、顔はわからない。ただ、器具からはみだしている髪かみの毛は黄土色だった。粗そ末まつな衣服を着ていて、肌はだは透すけるほど白かった。ひどく瘦やせている女だ。誰だれだろう。そんなことは一いつ瞬しゅんたりとも思わなかった。すぐにわかった。わからないはずがない。

　ジナだ。

　ああ、ジナ。

　また会えた。

　でも、どうして。

「瑠璃繁縷」

　シロクネはジナの腹部に爪つま先さきをねじこんだ。ジナは器具をつけられているだけで、手足は自由に動かせる。低くうめいて、腹を抱かかえるようにして丸くなっているジナを、瑠璃繁縷はただ見ていることしかできない。ここだ。ここにいる。ジナ。そう呼びかけたくても、声が出ない。喉のどのあたりにも鍼を打たれた。そのせいか。

「お仕置きをしないといけないね。瑠璃繁縷。なんのことかわかるかい？　わからない？　べつに、わからなくてもいいよ。わからないのなら、今からたっぷりとわからせてやるからね。というよりも

──」

　でも、何を。どうして。シロクネがジナを。

　ジナは首を振ふりながら、何か言っている。呼んでいるのか。瑠璃繋縷を。答えないと。ここだよ。ここにいるよ。ジナ。ジナ。シロクネがジナの右みぎ腕うでをつかんで、身体をうつぶせにさせた。腕がねじあげられた。シロクネはジナの背中に座った。

　やめろ。やめてくれ。

　ジナが痛がっている。そんなことをしたら、ジナが苦しい。

「この女だね。瑠璃繋縷。そうだろう。問題はこの女だ。よかれと思っておまえにくれてやったのにね。おまえのためを思ってね。おまえのしあわせを考えてね。実際、おまえはしあわせだったろう、瑠璃繋縷？　いやなことがあっても、つらくても、この女のことを考えれば、この女を抱だけるから、耐たえられただろう？　わかっているよ。わたしは。ちゃんとわかっているんだよ。瑠璃繋縷。アッサシンの訓練や仕事は過か酷こくだからね。それだけではあまりにおまえがかわいそうだからね。わたしはおまえにこの女をくれてやったんだ。ところが、この女がとんだ食わせものだった」

　やめろ。やめてください。どうか。

「最悪だよ。最悪な気分だよ。わたしの大切な瑠璃繋縷に、この女はいったい何を吹ふきこんだのかな？　羊蹄シノネから話を聞いてね。すぐにぴんときたよ。我ながら勘かんがいいね。手がかりは、そう──」

　ジナが暴れている。懸けん命めいにあらがおうとしているが、あの細い身体だ。アッサシンではないものの、アサシエンとして体術や殺人術などを一通り身につけているシロクネから、逃のがれられるはずがない。しかし、次の瞬間、ジナが動きを止めた。

「ジアド、だ」

　殺せなかった。

　はっきりとではないが、かすかに覚えていたからだ。

　ジナ。

　ああ、ジナ。

　いつか聞かせてくれた、あなたの弟の名前だ。

　ジアド。

　同じ名前だった。

　殺せなかった。

　ジアドが殺されて悲しいと泣いていたあなたのことを思うと、どうしても殺す気にはなれなかった。

「この女がおまえにどんな話をしたのか、くわしいことまではむろんわからないけれどね」

　シロクネはジナの左腕をゆっくりと持ちあげた。

「だいたい想像はつくよ。この女がおまえに話して聞かせただろう物語なんてね。あててやろうか。瑠璃繁縷。白岩の話だろう。自分は白岩の姫ひめ君ぎみで、王都ルエミタージが赤砂の軍に攻せめ滅ほろぼされたとかね。家族のことも話したかもしれないね。あそこの最後の王は、妾めかけを持たなかったわりに子だくさんだった。姫君には兄が二人、姉が三人いたはずだ。それから、弟が二人いた。ジアドというのは、そのうち一人の名前だ。二人のうちどっちの弟かは、さすがのわたしも覚えていないけれどね。瑠璃繁縷。そうだろう。おまえはこの女から聞かされたんだろう。おまえは何を思ったんだい？　何を感じた？　アッサシンの、人殺しの、虐ぎやく殺さつ者しやの、そのためだけに作られたおまえが、何を感じたというのかな？　でもね。瑠璃繁縷。わたしの言うことをよく聞くんだよ。いいかい」

　聞いている。聞くしかない。耳を塞ふさぐことはできないのだ。でも、ジナはどうして黙だまっているのか。抵てい抗こうしても無む駄だだと悟さとったのか。そうかもしれない。そうではないかもしれない。

　シロクネはため息をついて、眉まゆをひそめてみせた。

「おまえはむしろ被ひ害がい者しやだ。おまえはこの女に騙だまされたんだよ」

何を言っているのかわからない。

被害者。騙された。ジナに？

シロクネは喉を鳴らして笑った。シロクネの笑い声を聞いたのはこれが初めてかもしれない。ジナが震ふるえている。泣いているのかもしれない。

「嘘うそだよ。嘘っぱちだよ。瑠璃繁縷。白岩王国にジナという名の姫君はいたけれどね。この女がそのジナ姫だって？　ありえないよ。だって、おかしいだろう。滅んだ国とはいえ、だよ。どうして姫君がこんなところに？　わたしは流る浪ろうのアサシエンにすぎないんだよ？　たしかに、ルエミタージを攻め落としたとき、ダーン公に雇やとわれていたことは事実だけれどね。金はもらったよ。たくさんね。でも、姫君を賜たまわった記き憶おくはないな。とりたてて欲しいとも思わないしね。欲しがっても、くれないだろう。いくらなんでも。いろいろと面めん倒どうなんだよ。王家の血筋というやつはね。だからね。瑠璃繁縷。この女は違ちがう。ジナ姫じゃないよ。ただの奴ど隷れいだよ。買ったんだ。白岩の難民で、もともとは高貴な家いえ柄がらの娘むすめらしいけれどね。姫君なんかじゃない。名前はね。わたしがつけてあげた。奴隷には名前がないからね。ジナ、とね。そう。亡国の姫君からとったんだよ。いい名前だろう、瑠璃繁縷？」

ジナが何か声を発して身をよじった。シロクネはまた一つため息をついてみせると、ジナの左ひだり腕うでをおもむろに前方へ押し倒たおした。折れる音がした。ジナの声がそれにつづいた。ごおおおおおおおおおおおおおお。

「うるさいよ、おまえ。わたしは瑠璃繁縷に教えてやっているんだ。本当のことをね。ああ。そうだ。瑠璃繁縷。嘘つきの顔を見たくないかい？　おまえを騙した大嘘つきの顔だよ。見たいだろう？」

シロクネはそう言うと、ジナの器具を手早く解かい錠じようして外してしまった。ジナは顔を伏ふせようとした。シロクネは許さなかった。左手で髪かみの毛をつかんで、無理やり顔を上げさせた。

「さあ。瑠璃繁縷。じっくり見てもいいんだよ。見たかっただろう。今まで見たことがないはずだからね。これがおまえを騙していた女の顔だよ」

「……ち、が──」

「うるさいと言っているだろう」

　シロクネは、ジナの右腕をねじあげている右手に少しだけ力をこめた。ジナは息をつまらせた。顔がゆがんだ。あれが、ジナ。唾だ液えきと鼻はな汁じると涙なみだでぐしゃぐしゃになっている。ジナ。ああ、ジナ。

　だが、今の瑠璃繁縷には、その名を呼ぶことすらできない。

　すぐそばにいるのに。こんなに近くにいるのに。

　手をのばすことができれば、届きそうな距きょ離りなのに。

「どうだい？　おまえも許せないだろう、瑠璃繁縷？　この女はおまえを騙していたんだ。おまえにわけのわからない、たわけた妄もう想そうを吹ふきこんで、瑠璃繁縷、おまえというわたしの素す晴ばらしい傑けつ作さくに傷をつけようとした。許せないな。許せない。絶対に、許せない」

「……ゆ、るして、ほ……」

「ん？　何？　何か言うつもりかい？　このわたしに？」

「ゆ、るして、欲しく、なんか……」

「馬ば鹿かだな。おまえの意志なんて関係ないんだよ。その出来の悪い頭で考えてみるがいいよ。たとえば、おまえが瑠璃繁縷に抱だかれていたのも、わたしの命令だろう。それどころか、わたしが許さなければ、おまえは食べることも飲むこともできないだろう。生存できないだろう。おまえはわたしが命じることはすべてやらなければならない。そうすることで、かろうじておまえは生きることを許されている。それが大前提だよ。だから、そうだな。わたしが今、命じたことをやってみせたら、生かしてやってもいいよ。おまえを許してやるよ。さあ──」

　シロクネはジナを解放して、立ちあがった。

「裸はだかになって、仰あお向むけになって、股またを開け。そして、どうか許してくださいと哀あい願がんしろ。証明してみせろよ。おまえは所しよ詮せん、自分が生きるために男をくわえこむだ

けの奴隷だよ。相手は瑠璃繁縷じゃなくてもいい。わたしでもいい。誰だれでもいい。生かしてくれるなら、涙を流してよがってみせる。実際、おまえは瑠璃繁縷以外にも抱かれているだろう？　ゾネの兄弟やウディエやケバミにも抱かれたことがあるだろう？」

「や、め―」

　身を起こし、這はうようにしてシロクネにつかみかかろうとしたジナは、だが、呆あつ気けなく蹴けり倒された。

　シロクネはすかさずジナに歩みよって、右手で細い首をわしづかみにし、左手で衣服を引き裂さいた。

「長い間、旅をしているとね。どうしても欲求不満がたまる。これはさけようがない。男はとくにね。アッサシンと違って、そういうのを我が慢まんできない者もいるんだよ。そのために必要なんだ。こういう女もね。わたしは女でも男でもかまわないけれど、たいていの男は女を好むようだからね」

　瑠璃繁縷はただ見ている。

「どうした。さあ。股を開いてみせろよ。たまにはわたしの相手をするのもいいだろう。おまえとは一度きりだ。あのときは、その足の腱けんを切ってやったんだったね。わたしはどういうわけか好きでね。女を傷つけるのが好きでね。だから、女はあまり抱かないことにしている。すぐぼろぼろにしてしまうからね。そういう意味では、羊蹄シノネの育成はわたしにとって挑ちよう戦せんかもしれないね。我慢するのが大変だよ。おもしろいけれどね。いろいろと試ためしているんだよ。どうやったら、わたしが大切に思っているんだということをわかってもらえるか。わたしの愛が伝わるか。まあ、今はどうでもいいか」

　見ていることしかできない。

「おまえはどうでもいい。おまえはわたしの作品ではないからね。もしかしたら、おまえは思っていたかもしれないね。瑠璃繁縷と自分自身とを重ねあわせて、かわいそうな者同士、慰なぐさめあおうとね。とんでもないことだよ。瑠璃繁縷をおまえごときと一いつ緒しよにするなよ。調子に乗るなよ。おまえは違ちがう。瑠璃繁縷とは違う。おまえには固有の価値なんかない。微み塵じんもだよ。それどころか、今や有害だよ。おまえは害虫だ」

　そんなことはないのに。

　違うのに。

　関係ないのに。

　すべてが嘘うそだろうと。

　あなたが何者だろうと。

　あなたが何を思っていようと。

　あなたがいてくれるだけで。

　そう言いたかった。

　伝えたかった。

「しかし、こうして見ると貧ひん相そうな身体からだだね。ちゃんと餌えさを食べないからだよ。本当に役立たずだね。あたりまえか。害虫だものね。おい、害虫」

　シロクネがジナを床ゆかに叩たたきつけた。

　ジナは右手で喉のどを押さえてひどく咳せきこみながらも、シロクネをにらみつけた。

　シロクネがせせら笑った。なんだ、その目つきは。ジナが何か言おうとした。言えなかった。シロクネがジナの頬ほおを殴なぐりつけたからだ。害虫。害虫の分際で生意気だよ。シロクネはもう一発殴った。逆の頬だった。ジナは吹っ飛ばされた。何かわめいた。シロクネがジナの髪かみの毛をつかんでまた殴った。殴った。血が飛び散った。ジナはおかしな呼吸音を発していた。シロクネは商品の具合でも確かめるような手つきで、ジナの顔についたいろいろなものをふきとった。ああ、これはいけないなあ。顔がめちゃくちゃだよ。もっと使えなくなってしまうよ。どうしようね。どうしてくれよう。

　ジナが唾つばを吐はいた。

　吐きかけた。

　唾はシロクネの顎あごあたりにかかった。

　シロクネはそれを袖そでででぬぐうと、両目をすぼめた。

　何するんだよ。

　この害虫。

　シロクネはジナの右目のあたりに拳こぶしを叩きつけた。ジナの鼻を潰つぶした。骨が折れているジナの肩かたを蹴った。ジナの脇わき腹ばらを蹴ったくった。ジナの腰こしを踏ふみつけた。首根っこをつかまえて、ジナの顔面を壁かべにこすりつけた。シロクネが手を離はなすと、ジナの身体が仰あお向むけになって床に転がった。

　ジナは動かなかった。

　しばらくして、ジナの右手が少しだけ持ちあがった。

　何かをつかもうとするような動作をした。

「……い……て……」

　ジナは何か言おうとしていた。

「　き　　」

「る　　　べ」

「　　た　い　　ね」

「い　　」

「　り　こ　」

　瑠璃繁縷は見て、聞いていることしかできなかった。

　動かないのだ。

　身体が動かない。

　声を出すことさえできない。できない。どうしてだ。どうして動かないんだ。どうしてこの身は動かないんだ。ジナは動かないん

だ。右手が床に落ちて以来、ぴくりともしないんだ。どうしてだ。

「──あ」

　シロクネはひとしきり自分の両手を眺ながめてから、ジナを、ジナだったものを一いち瞥べつして、肩をすくめてみせた。

「殺すつもりはなかったんだけれどね。つい、やりすぎてしまったよ。でもね。心配しなくていいよ。瑠璃繁縷。おまえにはまた何かあげるよ。この仕事が終わればね。大金が手に入るし。新しいのを買ってあげるよ。おまえが気に入るようなのをね。瑠璃繁縷。約束するよ。わたしはおまえを大切に思っているからね」

　いらない。いらない。何もいらない。欲しいのはあなただけだ。あなただけだったのに。どうしてだ。どうして。これは、なんだ。ぼくの、おれの、わたしの身体中を駆かけめぐるもの。何もかもが押し流される。目の前が暗くなり、明るくなる。心臓が激しく暴れる。ふう。ふう。ふう。荒あら々あらしい呼吸の音がする。地面が揺ゆれている。世界中が震ふるえている。瑠璃繁縷は気づいたわけではなかった。知らずに動いていた。鍼はりを打たれて動かないはずの身体が動いた。

　立ちあがるのと同時に、後ろ手に手て枷かせで縛しばられている両手の間に身体を通して、手を前に持ってきた。足枷のせいで左右の足を別々に動かすことはできないから、両足で床を蹴けった。ジナを飛び越こえて、シロクネの足あし許もとに飛びこみ、床についた両手を支点にして全身を回転させた。シロクネは足を刈かられて転てん倒とうした。瑠璃繁縷は迷わなかった。転がるようにして部屋から飛びだした。手と両足を交こう互ごに床について、廊ろう下かを突つき進んだ。途と中ちゆう、ジョコロやゴツ、ウディエと行き会ったが、無視した。彼らも啞あ然ぜんとしていたようで、簡単に道を空けた。後ろでシロクネの声がした。

　待て。待つんだ。瑠璃繁縷。どこへ行くつもりだ。

　なぜだか、哀あわれっぽい声だった。

　瑠璃繁縷はむろん待たなかった。逃にげた。他ほかのことは何も考えずに、とにかく逃げた。シロクネの大砂牛車ギヤリカを出てからも、一秒たりとも休まなかった。両手と両足で地面を蹴って走った。赤砂の軍はハウロバの街を包囲していた。大砂牛車ギヤリカの

周りには兵がひしめいていた。獣けもののように駆ける瑠璃繁縷を見て騒さわぎ立てる彼らの存在が、逃とう走そうにはかえって有利に働いたのかもしれない。とにかく、追っ手の気配はなかった。瑠璃繁縷は夕ゆう闇やみの中をひたすら逃げた。

　遠くへ。

　もっと遠くへ。

　瑠璃繁縷を突き動かすものがあった。それが逃げろと瑠璃繁縷に命じていた。

　誰だれもいないところへ。

　シロクネから離れて、赤砂の軍から離れて、ハウロバの街から離れて、砂の海へ。

　夜空が青みがかった闇一色に染まるまで、瑠璃繁縷は走りつづけた。

　銀色の月が砂を白く照らしていた。

　すべてが死に絶えたあとのような景色がどこまでも広がっていた。

　いつ足を止めたのか、いつからこうして立ちつくしているのか、わからない。

　あれからどれくらい時間がたったのか。

　ひょっとしたら、とてもとても長い年月が流れて、地上の生き物は本当にすべて絶ぜつ滅めつしてしまったのかもしれない。

　瑠璃繁縷が最後の個体なのかもしれない。

　ゆっくりとあたりを見まわした。

　遠くに花が咲さいていた。

　月明かりのせいか、真っ白い花だった。

　その花びらにふれたかった。

　瑠璃繁縷は転んだり起きあがったりしながら砂さ漠ばくの花を目指した。

　月が傾かたむいても、花はまだ遠くにあった。

　遠からず月が沈しずんでしまう。

　もう少しだ。

　砂の上に身体からだを投げだして、両手をのばした。

　何もなかった。

　花など咲いていなかった。

　砂がぬれていた。

　あなたの声を聞いた。

　泣かないで。

12

　ダーン公率いる赤砂の軍は、わずか二日間の包囲でハウロバの街を陥かん落らくさせた。

　赤砂の兵による略りやく奪だつや暴行、破は壊かい行動などは、ほとんど起こらなかった模様だ。そのせいもあってか、ハウロバの民たみは、赤砂の軍を歓かん迎げいこそしなかったものの、抵てい抗こうもしなかった。もとより、国境地帯にある街だ。主人が代わることには慣れているのかもしれない。

今後、ハウロバは大鷹国侵略の橋きよう頭とう堡ほとなる。すでに、駱駝メトラダの輜し重ちよう隊たいが長ちよう蛇だの列をなし、大量の食しよく糧りようや武具などを運びこみはじめている。ダーン公麾き下かの砂ア斑ズ犬ゼ師ラ団ンがこの地に駐ちゆう屯とんして、兵力を増強しながら、さらに領土を切りとる機会を虎こ視し眈たん々たんとうかがいつつ、大鷹国の逆ぎやく襲しゆうに備えることになるだろう。

この街の中の、どこだろう。どこだ。どこにいる。

異様な活気につつまれているハウロバに潜せん伏ぷくして、まず大砂牛車ギヤリカを探すことにした。さして手間はかからなかった。何箇か所しよかあたりをつけて、そのうちの一つ、街の北西に位置する大鷹軍の練兵場だった広場の隅すみに、あの大砂牛車ギヤリカが停とまっていた。

だが、不用意に近づくことはできなかった。赤砂の兵が大勢うろついているのはまだしも、大砂牛車ギヤリカの外にアッサシンが二人いた。虎杖イタドリと車前草オオバコだ。普ふ段だんは木で偶くの坊ぼうだが、シロクネに薬を与あたえられれば、並以上のアッサシンとして働く者たちなので、侮あなどることはできない。

また、マエル・ゾネとドエル・ゾネやケバミらが頻ひん繁ぱんに車から出てきて、周囲をうかがうそぶりを見せた。

やはり、警けい戒かいされているのか。そうかもしれない。だとしても、べつにかまわない。急ぐことはないのだ。待てばいい。もしこの街で好機が巡めぐってこなければ、次の街まで追ってゆけばいい。どこまでも、いつまでも、追ってゆけばいい。

そうして、二日たって、三日がすぎた。

その間に、大砂牛車ギヤリカの見張りも何度か代わった。

隙すきは、あるようにも思え、ないようにも思えた。

どういうわけか動けるようになったとはいえ、鍼はりはすべて抜ぬいたし、もちろん手て枷かせや足枷も外したが、どうも身体が重い。ろくに睡すい眠みんをとっていないのと、ほとんど食べていないせいだろうか。不ふ眠みんや空腹には耐たい性せいがあるはずだが、体力が低下していることは間ま違ちがいないようだ。どの程度

落ちているのだろう。はっきりとはわからない。それに、逃走時には何も所持していなかった。現時点でも、武器といえば、拾った長ちよう剣けんと短剣を一ひと振ふりずつ持っているだけだ。こんな状態でどこまでやれるのか。

考えるなと教えられ、思い出を砕くだかれて、何かを考えようにも考えられなかった日々が、なんだかずいぶん遠い。

今は考えてばかりいる。

考えなくてはいけないことが、たくさんあるような気がする。

また夜が訪おとずれた。

その時は、騎き馬ばと馬車の一隊とともにやってきた。

一隊が止まり、馬車が大砂牛車ギヤリカに横づけすると、間もなく青、赤、黒の着物を着て、黒い編あみ笠がさをかぶった女がデッキに出てきた。腰こしの後ろに二振ふりの曲刀がくくりつけられている。鬼おにの角だ。羊蹄シノネに間違いない。

そして、羊蹄シノネにつづいて、あの男が姿を現した。

赤、黄、橙だいだいの着物を身につけ、緋ひ色いろの編み笠をかぶり、腰に雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を提さげて、金の煙管キセルをくわえている。

シロクネだ。

手が、唇くちびるが、震ふるえた。

瞼まぶたを閉じ、深く呼吸をして、目を開けると、震えはおさまっていた。

羊蹄シノネとシロクネは何人もの兵に守られて、馬車に乗りこんだ。数騎が先行して、馬車があとにつづくと、他ほかの騎馬がその周りを取り囲んで走りだした。たいした速度ではない。追いかけられる。隊の規模が大きいので、ルートもほぼ見当がつく。慌あわてる必要はまったくない。目的地もおおよそ予想できている。おそらく、ダーン公が居きよ所しよに定めた建物だろう。前太守オウローの館やかただ。

案の定だった。

騎馬と馬車の群れは、続々と前太守オウローの館の門をくぐっていった。

もはや逡しゅん巡じゅんはなかった。裏手の塀へいを越こえて館の敷しき地ち内に侵しん入にゅうした。建物までの間には鬱うつ蒼そうと茂しげる木立が横たわっている。正門のある正面はもちろん、側面もわりあい開けているが、裏側だけはこのとおりだ。くわえて、勝ち戦いくさの直後だということもある。警備が薄うすい。あるいは、オウローを暗殺したときよりも、侵入はたやすいかもしれない。

ただ、予感があった。

おそらく、彼女もそうなのだろう。

彼女は建物のほうからゆったりとした足どりで歩いてきた。

立ち止まって、待った。

「嬉うれしいよ。おまえとこういう形で向きあうことができて」

彼女は約八メーテル手前で足を止めると、黒い編み笠を脱ぬぎ捨てて、腰の後ろから鬼の角を抜いた。

「おまえのことなんてどうでもいいんだ。おまえがどういうつもりであの人のところから逃にげだしたのか。何があったのか。そんなことは関係ない。この手でおまえを殺せる。一番になれる。それが大事なことなんだ」

やらざるをえないのだろう。前に立ちはだかる以上は、押しのけて進むしかない。まだ若いが、素質のあるアッサシンだ。生半可な相手ではない。

「おまえが死ねば、あの人もおまえのことを考えなくなる。おまえを忘れることができる。忘れさせてあげたいんだ。おまえのことなんか」

羊蹄シノネは鬼の角をだらりと下げて、手の内を読ませまいとしている。とはいえ、同門だ。ともに仕事をしたこともある。何度もだ。互たがいの技わざは知りつくしている。

　それに、羊蹄シノネについて、アッサシンではなく、一人の人間としての羊蹄シノネについて、わかったこともある。シロクネのもとを離はなれてからだ。考えて、いろいろなことを考えて、考えるしかなくて、その中でほんの少しだけ理解した。

　だから、わかる。わかる気がする。羊蹄シノネが何をしようとしているか。どのような心構えでここにいるのか。

　羊蹄シノネが静かに走りだした。鬼の角の切っ先は下げたままだ。こちらも駆かけだした。長剣を持っている右手にも、短剣を握にぎっている左手にも、軽くしか力をこめていない。ほとんど羊蹄シノネと同じ体勢だ。

　互いに真正面からぶつかっていった。

　その瞬しゅん間かんにすべてを賭かけていた。

　長剣が羊蹄シノネの腹部に吸いこまれた。

　鬼の角が皮ひ膚ふを突つき破って背中に抜ける感かん触しよくがあった。

　羊蹄シノネの顔がわずかにゆがんだ。

　その顔が至近に迫せまった。

　額に額を叩たたきつけて、押し倒たおした。

　そうしながら、長剣の柄つかから放した右手で羊蹄シノネの左手首をつかみ、短剣を突き立てた。

　胸のほぼ真ん中だった。

「……瑠璃……繁縷」

　声と一いつ緒しよに、羊蹄シノネの口から血があふれでた。

「……な、んで……」

「相討ち狙ねらいだと思った。だから、こっちも捨て身で。覚かく悟ごが同じなら、勝つのは」

「……そう、だな……おまえ、だ……」

「とどめは」

「……ふ……」

　羊蹄シノネは、笑おうとしたのか。瑠璃繁縷が身体からだを起こすと、羊蹄シノネは両手を胸にあてた。

「……いい……息が、絶えるまで……あの人を……想おもう……」

「わかった」

　瑠璃繁縷はうなずいてから、自分の腹に突き刺さっている鬼の角の柄に手をかけて、慎しん重ちように抜ぬいた。服を破って作った布をきつく腹に巻き、はらわたが飛びだしてこないようにしてさえおけば、痛みは耐たえられる。鬼の角は一ひと振ふりだけもらってゆくことにした。羊蹄シノネにはもう声をかけることも、目をやることもしなかった。きっと、瑠璃繁縷とは口をききたくもなければ、見られたくもないだろう。ただ、立ち去る間ま際ぎわ、羊蹄シノネが何か呟つぶやく声を聞いたような気がした。それはシロクネの名だったかもしれない。瑠璃繁縷を罵ののしる言葉だったかもしれない。いずれにせよ、振ふり返っても、羊蹄シノネの姿はもう見えない。館はすぐそこだ。

　館の中には前と同じ経路で入りこんだ。衛兵は少なかった。二階から三階に上がってあの部屋へと向かった。あの部屋の前には誰だれもいなかった。扉とびらを開けた。薄うす明あかりの中に、あの男がいた。諸もろ肌はだを脱いで、こちらに背中を向けている。部屋の奥に設しつらえられた寝しん台だいの脇わきだ。ジアドとその母親の姿が脳のう裏りに浮うかんだ。あの二人はどうなったのだろう。

「なんだか苛いら々いらしてね」

　シロクネは天てん井じようを仰あおいだ。その両手には雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんがあった。愛用の雄おすのグレアデと雌めすのリレッザだ。血にぬれている。

「わたしは結局、自分の思うとおりにいかないのが厭いやなんだろうね。わたしは誰かに命令されるのが厭だし、わたしの言うことを聞いてくれないものが嫌きらいだ。わたしがとてもとても大切にしているのに、その気持ちを理解せずに裏切るものはとうてい許せな

い」

　寝台は血や肉や骨や臓物で盛せい大だいに飾かざり立てられていた。

　シロクネがようやく振り返って、笑えみを浮かべた。

「わたしのもとに戻もどっておいで。瑠璃繁縷。いいよ。羊蹄シノネのことは。殺したんだろう。大目に見てあげるよ。あれもかわいかったけれどね。また作ればいい。コツはだいたいわかったからね。でもね。瑠璃繁縷。おまえは作ろうとして作れるものじゃない。おまえの素質は百万に一つの稀き少しようなものだよ。わたしはおまえを失いたくない。勿もつ体たいないからね。ひどく、勿体ないからね」

「戻らない」

「どうしても？」

「決して」

「……そう」

　シロクネは深いため息をついて、首を振った。

「残念だな。とても残念だよ。これほど残念なことはないよ。悲しくて、この胸が引き裂さかれてしまいそうだよ。泣きたいくらいだよ。瑠璃繁縷。瑠璃繁縷……」

　自分はこの男が憎にくいのか。何度も自問して、そのたびごとに、憎ぞう悪お以外の感情をみずからの裡うちに見つける羽目に陥おちいった。

　もちろん、憎い。存在を否定して、消し去ってしまいたいほど憎い。

　だが、同時に、シロクネのことを思うと、それが自分自身であるかのように錯さつ覚かくされもした。瑠璃繁縷はがらんどうの器うつわだった。生きる糧かてだった快楽は、シロクネが命じる殺さつ戮りくとジナがもたらしてくれていた。その片割れであるジナを失った。この上、シロクネを失えば、自分には何もなくなってしまうかもしれない。ジナが死んで、おのれの半分が死んだかのよう

だった。シロクネを殺すことは、おのれを完全に殺すことに等しいのかもしれない。

　それでもいい。

　瑠璃繋縷は悲しいほどに昂たかぶっている。

　この男を殺したい。

　全身の細さい胞ぼうが殺意に熱されて沸ふつ騰とうしかけている。

　瑠璃繋縷はこらえきれずに突とつ進しんした。シロクネは受けて立つ構えだ。広い部屋だが、所しょ詮せんは室内だ。一いつ瞬しゅんで間合いに入った。先に右手の鬼おにの角でゆくと見せかけて、左手の短剣を突つきだした。身をかがめてよけたシロクネに、鬼の角を浴びせようとした。シロクネはこれを雌のリレッザで受けた。いや、反りのある雌のリレッザの刃やいばを、鬼の角の刃にそって滑すべらせた。受け流すつもりか。

　違ちがう。

　雄のグレアデだ。

　鬼の角は雌雄一対の短剣に挟きょう撃げきされた。瑠璃繋縷は飛びすさった。

　折れた。鬼の角が簡単に折られてしまった。

「本当はね。瑠璃繋縷。まだおまえに教えていないこともあるんだよ。まだね。秘技というやつだよ。どう、瑠璃繋縷？　戻ってきたら、教えてあげるよ」

「戻らない」

「だったら、また逃にげる？」

「逃げない」

「でもね。どうやって戦うんだい。瑠璃繋縷。その折れた剣と、みすぼらしい短剣で」

瑠璃繁縷は返事代わりに中ほどで折れた鬼の角を捨て、短剣を右手に持ちかえた。二回、深呼吸をした。シロクネの身体からだが急にしぼんだように見えた。そうだ。たとえ瑠璃繁縷が知らない技わざを知っているとしても、この男は羊蹄シノネほど速くない。鋭するどくもない。力強くもない。



小細工は不要だ。低い姿勢でまっすぐ突っこんだ。

雄のグレアデが左から、雌のリレッザが右から襲おそいかかってきて、右の肩かた口ぐちと左のこめかみのあたりを斬きられたが、かまわなかった。怯ひるまずに前進して、喉のどめがけて短剣を突きだした。シロクネはすかさずのけぞって、瑠璃繁縷の右手首に膝ひざ蹴げりを食くらわせた。短剣が吹ふっ飛んだ。その直後だった。瑠璃繁縷の右足がシロクネの左足の甲こうを踏ふみ砕くだいた。シロクネは瞬間、体勢を制せい御ぎょするすべを失った。後ろへ倒たおれそうになって、雄のグレアデと雌のリレッザで瑠璃繁縷を牽けん制せいしながら、とっさに右足で身体を支えようとしたが、その必要はなかった。

瑠璃繁縷はシロクネを飛び越こえて、身体をひねって着地した。

ちょうどシロクネを後ろから抱だきとめる恰かっ好こうになった。

雌雄一対の短剣をかすめとるように奪うばった。

雄のグレアデをシロクネの右肩に、雌のリレッザを左肩に、根元まで突き刺さした。

引き抜ぬくと、シロクネは崩くずれ落ちるように床ゆかに座りこんだ。

「……おまえを、殺せるわけがないね。わたしにはね。できないよ。わかっていたよ……」

シロクネの両肩の傷口から、ごぼごぼと赤い液体がわきだしている。

あれはシロクネの命だ。命が流れだしている。そのうち、つきる。

シロクネは死ぬ。

「……でもね。なんだか、気分はさほど悪くないな。悪くない。いい気分とまではゆかないけれどね。さすがにね……」

瑠璃繁縷は背後からシロクネを見下ろしている。悪い気分とまではゆかないが、いい気分でもない。自分はこんなことがしたかった

のか。こんなことをして何になるのか。ジナが最後に残した言葉の意味がようやくわかった。ジナはシロクネを殺せとは言わなかった。仇あだ討うちをしてくれとは言わなかった。

「……瑠璃繁縷。ああ、瑠璃繁縷……」

　シロクネが肩をかすかに震ふるわせて、低い笑い声を立てた。

「……わたしは自分の思うとおりにならないのが厭いやなんだ。言ったろう。瑠璃繁縷……」

　自分のやったことは、無む駄だだったのか。

　そうかもしれない。

　わからない。

　瑠璃繁縷は死に至りつつあるシロクネを置いて、部屋をあとにしようとした。ジアドは生きているのだろうか。ふと、そんなことを思って、足を止めた。

「……瑠璃繁縷。おまえはもう戻もどってこないんだね。でも、行かせないよ……」

　振ふり返った。

　何をするつもりなのか。とどめを刺すべきか。

　シロクネは両手を持ちあげて、口の両りよう脇わきにそえた。

「……ダーン公が……！　殺された……！　暗殺だ……！　わたしもやられた……！　あの瑠璃繁縷の仕し業わざだ……！　まだここにいる……！　つかまえろ……！」

　この男は何を言っているのだろう。

　瑠璃繁縷は呆ぼう然ぜんと寝しん台だいを見た。ダーン公。そうだ。寝台の上にはダーン公の惨ざん殺さつ体たいがある。シロクネも死のうとしている。

　不意によろめいた。

　自分の腹に目を落とすと、布が赤黒く染まっている。

　肩口とこめかみの傷も、決して浅くはない。

「……ふ……ふふ……瑠璃繁縷。一応ね。用意はしておいたんだ……瑠璃繁縷。わたしのところから逃げたアッサシンがいて、それがわたしの命を狙ねらっている、とね……ふふ……何日も前に……おまえはこれで、お尋たずね者だよ。瑠璃繁縷……わたしはまだしも、ダーン公殺害はまずいね……次世国王候補だよ……ふふ……赤砂は本気でおまえを追うよ……」

　足音が聞こえる。遠くから。下から。近づいてくる。

「……逃げきれるかな……瑠璃繁縷……羊蹄シノネとわたしがつけた傷を背負ったまま……逃げのびられるかな……重いだろう、瑠璃繁縷……それは……わたしと羊蹄シノネだよ……おまえはわたしたちを背負って……逃げないといけないよ……ふふ……」

　瑠璃繁縷は覚おぼ束つかない足どりで扉とびらまでたどりつき、廊ろう下かに出た。右に顔を向けると、三人か四人の衛兵が駆かけつけてこようとしているところだった。雄おすのグレアデを握にぎる右手に力をこめてみた。しっかりした手て応ごたえはなかった。腰こしが宙に浮ういているようなあやふやな感覚があって、膝ひざや足首の関節は今にも外れてしまいそうだった。

　もう、いいか。

　ジナはどこにもいない。シロクネも虫の息だ。間もなく死ぬだろう。この身がうまく動いてくれないのは血が足りないせいだが、それだけではないのかもしれない。血だけではない。何もかもが足りないのだ。何もない。だったら、身体が動く道理もない。

　衛兵たちが口々に何か叫さけびながら、武器を振りあげながら、迫せまってくる。

　瑠璃繁縷はふらふらと彼らに向かっていった。

　ジナ。

「い　て　」

「　き　　」

「る　　　べ」

「　　た　い　　ね」

「い　　」

「　り　こ　」

「生きてね」

「瑠璃繁縷」

「あなたは生きてね」

「瑠璃繁縷」

　──ああ、ジナ。

　あなたは最さい期ごの瞬しゆん間かん、それだけを伝えて。

　砂さ漠ばくだった。

　見み渡わたすかぎりの風景が、

　ひび割れたこの心が、世界全体が。

　乾かわききった砂の海にひっそりと咲さく花だった。

　あなたが、あなただけが。

　あなたはやがて、はかなく絶えて、はらはら散って、この手をぬらした。

　この胸はまだしめっている。

　あなたを何と呼ぼう。

　いまだ名づけることさえできない、この思いを。

　でも、あなたの思いはこの心に刻まれている。

　生きてね。

　瑠璃繁縷はなけなしの力をこめて床ゆかを蹴けった。奔はしった。なんとしても生き抜ぬこうと思った。それがあなたの願いならば、生きよう。この身をあなたが生きた証あかしにしよう。

the 3rd song

男が背中で歌うブルーズ

1

　大グラ食トン小・ア路レイにあるラフレシア風オープンカフェ「プレ・ド・マルタン」は、洒落しやれた造りと厳重な警備が評判で、小金持ちのエルデン娘むすめが大勢訪おとずれる。となれば、当然、彼女ら目当ての不届きな客もいるわけで、彼もその一人なのだが、ぱっと見でそう思わせないのが腕うでの見せ所だ。

　仕立てのいいＭ＆Ｓのスーツに渋しぶい色のネクタイをあわせ、胸ポケットには情熱的な赤いハンカチをあしらう。腕時計はマクスド・ビリー。キンキラキンで少々派手だが、モノはいい。靴くつにも気を遣つかう。マルクセル・ブラン。革かわ靴ぐつならまずここというくらい有名なブランドだ。デザイナーズ・ブランドなどという言葉ができる前から革製品を作りつづけている会社で、いい職人を多数抱かかえている。値段以上の品質を誇ほこるという、とくにエルデンでは珍めずらしいブランドなので、常時品しな薄うすで、直営店で予約を入れてもなかなか手に入らない。極ごく上じようの靴だ。

「──完かん璧ぺきやな。完璧すぎるで、実際……」

　給仕に案内された席は、オープンテラスが見渡せる二人席だ。ええグツド・場所プレイス。ええグツ午後ド・やなアフタいかヌーン。おそらく、セキュリティに配はい慮りよしてのことだろう。プレ・ド・マルタンは店自体が高床で、テラスも地上三メーテルの高さにある。フゥム、ええグツ具合ド・のやジエさしントいそル・ブよ風やリーズ。ムハハ……！

　彼はテーブルの上で両手をにぎにぎしながら、ＯＧＮＯＫのサングラス越ごしにテラスにいる客を観察した。狙ねらいはすぐに定まった。陽光を受けてキラキラ輝かがやくサラサラのローングヘアー。白い肌はだ。上品なナァーチュラル・メイク。花の蕾つぼみのごとき唇くちびる。控ひかえめに伏ふせられた青い瞳ひとみ。愛らしいブルゥー・アァーイズッ……！　あれや。あの子しかおらん。あの子に決めた。

　彼はメニューを持ってきた給仕に「ねえちゃん、アイス・テー頼

たのむわ。ちゃあんと氷入れてな。って、あたりまえやんか、なあ？　氷入ってへんかったら、何がアイスやねんっちゅう話やで、ホンマ」と言い捨てて立ちあがった。あとはもうまっしぐらだった。彼女は一人だ。そらそうやろ。自分でも知らずにわしを待っとったんやからな。つまり、運命っちゅうやつや。彼はすぅっと彼女の横に立って、テーブルの上に右手を出した。手を開くと、握りしめていた秘密の道具が炸さく裂れつした。この日のために、鉄てつ鎖さの憩いこい場ばで買っておいた手品道具だ。恋こいの始まりはいつでもサプライズやで──っちゅうわけで、薔ば薇らだった。一輪の黒い薔薇が出現した。

　彼女の横顔をうかがってみた。おう、驚おどろいとる驚いとる。こらもう成功間ま違ちがいなしやな。ついに、な。苦節ウン年このわしにもやっと……！　いやいや、あかん、あかんで。興奮したらあかん。落ちつけ。ええな？　よし。いったれ。

「フッ。びっくりさせてもうたようやな。すまんのう。せやけど、これも何かの縁えんや。わしと茶ァしばかへんか？」

「……すみませーん」

　予想外の反応だった。彼女は彼を思いっきり無視して手をあげ、給仕を呼んだ。給仕はすぐにやってきた。なんや、えらい早いやんか。そうして彼女に何やら耳打ちされた給仕は、一礼して下がる──のかと思いきや、テラスの隅すみで直立不動の体勢を維い持じしていた巨きよ漢かんの護衛に駆かけよった。巨漢はすぐに動きだした。こっちにくる。ちょっとだけ悪い予感がした。なんだか、逃にげたほうがよさそうな。そう思ったときにはもう、後ろからガッと羽は交がい締じめにされていた。なんやて！　後ろッ……？　叫さけぼうとしたら、口を塞ふさがれた。でかい手だった。かろうじて首を振ふり向かせたら、別の護衛だった。逆サイドにおったやつか！　迂う闊かつやった……！

　──って、なんでわしがこんな目に遭あわなあかんの？

　答えを求めて彼女を見たが、目もあわせてくれなかった。

　おい。なんやそれ。どないやねん！　運命の相手やで！　運命的な出会いになるはずやったんやで……！　それを、それを──なんて抗こう議ぎすることもできなかった。彼は口を塞がれたまま持ちあげられた。太い腕が首に巻きついてきて、息ができなくなり、意識

が飛びかけた。なんでやねん！　なんでこうなってまうんや……！　おかしいやろ！　こんだけバッチリ決めとって！　もしかして、手品がァァァァッ！　手品が悪かったんかァァァァアッ……！　手品がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……。

2

　どんなことがあっても、寝ねて起きればたいてい忘れてしまえるのに、四十九連敗ともなると、さすがに「ま、ええか」とはゆかなかった。珍しく落ちこんでいる自分自身を持てあまして、こんなときは一暴れするしかないと思い、鉄鎖の憩い場近くの「ベンテン・カフェ」を訪れてみたのだが。

「──やっぱり、手品やろな。あれしか思いあたらんしな。うーん……グッドアイデアやと思たんやけどなぁ……」

　どうにも気合いが入らない。壁かべ一面を埋うめつくす同行侵クラ入ツ者カー募ぼ集しゆうの貼はり紙を眺ながめていても、やる気どころかため息ばかりが出る。

「あかんあかん。こんなことではあかんでえ……！」

　頬ほおをぴしゃりと叩たたいてみた。

「──ッッ！　痛いわボケェッ！　何さらしとんのじゃワレェッ！　って、ホンマにワレの仕し業わざやんか！　どないやっちゅうねん、ダァホ！　わしのアホ！　アホアホアホッ……！」

　そんなことを一人でやっているうちに、どっと疲つかれが押しよせてきた。周囲の視線も非常に痛い。咳せき払ばらいをして、今さらかもしれないが、「なんでもないねんで？　わしはごっつぅ正常や」みたいなふりをして貼り紙を一枚一枚確かく認にんする作業に戻もどった。

　無む駄だに頑がん丈じようそうな建物の一階をぶち抜ぬいたベンテン・カフェの広い店内には、朝から晩まで年ねん齢れい性別経験技量様々な侵クラ入ツ者カーたちがたむろしている。なかにはベンテン・カフェで時間を潰つぶすことが日課になってしまっている自

じ堕だ落らくな者もいるが、たいていは仲間捜さがしが目的だ。誰だれが始めたのか、奥のカウンターで馬ば鹿か高い茶を販はん売ばいしている店主が公認しているのか、黙もく認にんなのか、そのあたりは知らないが、貼り紙はそのための手段なのだ。

　たとえば、「Ｄ６メリクル第一迷宮十時～初ニユ心ー者ビーＯＫ定員２名店内北西角頬に×印刺青いれずみありのダンジまで」と書かれた貼り紙がある。その横の「Ｄ11フリアウ逆密林熟練者のみ募集委細面談〝赤い手〟レズリー・ブーイング」は、やや横おう柄へいな文面だが、〝赤い手〟といえば結構名の知れた侵クラ入ツ者カーなので、こんなものだろう。クランのメンバー募集もちらほら見受けられる。ドロップ・バスターズ。知らん。怪かい傑けつ紫むらさき頭ず巾きん。知らんな。創ジエネ世シスのウイ翼ング。聞いたことないわ。ギャプ・ド・レエ。ＳｍＣ。悪党やん。侵クラ入ツ者カー勧かん誘ゆうしてどないすんねん。「女の子募ぼ集しゆう巨きよ乳にゆうかつ容よう姿し端たん麗れいであれば性格問わず」アホか。そんなんわしかて募集したいわ。ちゅうか、アレやろ。性格は大事やろ。どんだけかわいーてもなぁ。性格ブスやったらきっついでホンマ。

　──わからんけどな。想像やけどな。彼女いない歴十ン年やしな！　悪いかボケッ。なんだか頭にきたので、その「女の子募集」の貼り紙を剝はがして丸めてグリグリ踏ふんづけてやった。

　そのあとで、気づいた。「女の子募集」の貼り紙の下に隠かくれていたのだ。「一いつ緒しよに侵クラ入ツ者カーをやってくれる人を捜しています」やて？　ふむふむ。「当方初ニユ心ー者ビーです。お金が必要です。がんばりますので、お願いします。お店のまんなかにいます」ほうほう。それからそれから？

「背は百五十三サンチくらいで三つ編みです。　コヨコ」

　ピキーンときた。

　三つ編み。百五十三サンチ。名前はコヨコ。まあ、十中八九、女の子やろ。しかも、初ニユ心ー者ビーで、お金が必要。これ、アレやん？　事情ありげちゃう？　困っとんのとちゃうん？

　問題の貼り紙を剝がして、もう一度読み返してみた。漠ばく然ぜんとした内容で、もっと具体的な条件なども書いたほうがよさそうに思えるが、素そ朴ぼくで、ひたむきさが伝わってくる文面だ。と

くに、「お金が必要です」の部分には切せつ迫ぱく感が漂ただよっている。わけありとしか思えない。たぶんわけありだ。きっとわけありに違いない。

「せやったら、わしが一ひと肌はだ脱ぬいだげなあかんやろ」

　もちろん、あわよくばコヨコちゃんにも脱いでもらって──なんて不ふ埒らちなことはこれっぽっちも考えていない。そんな不純な動機で人助けをするほど落ちぶれてはいないつもりだ。なんちゅうても、わしが歩むんは漢おとこの一本道やからな。西に困って泣いとるもんがおったら駆けつけて助けてやり、東に寂さびしーて膝ひざ抱かかえとるもんがおったら抱だきしめたって元気づけたる。それが漢っちゅうもんやろ。

「ちゅうわけで、店の真ん中、っと──ぬほっ……！」

　彼女はすぐに見つかった。身長約百五十三サンチ。黒くろ髪かみで、三つ編み。目も黒で、肌はだはチョコレート色だ。額に小さな赤い刺青がある。いわゆる「シルシ」というやつか。オークリッド首長国にそんな風習があることはよく知られている。それにしても──、

「な、なんやろ……この動どう悸き……」

　ドクドクドクドクドクドクドク。心臓がやたらと元気だ。いきなり元気になったのだ。彼女を見た瞬しゅん間かん、脈みやく拍はくが倍以上になった。

　これは、もしかして──恋こい？

　一ひと目め惚ぼれっちゅうやつなんか……？

　イヤッ！　いやいやいや、待てや！　そないな気持ちであの娘こに近づくっちゅうのはあかんでえ！　もっとこう、純じゆん粋すいにな。漢らしくな。そらな。なんやもう、ほっとくんが罪みたいな、はかなげっちゅうんか、あどけないっちゅうんか、ベンテン・カフェにはよう似合わんような、ごっつぅかわいらしい顔しとるけどな。華きや奢しややしな。それでいて、胴どう鎧よろいつけて、剣けん持ってな。肩かたにかけとるバッグがなんやいかにも重そうでな。剣かて、あの体格やったらよう使われへんやろ。そもそも、危ないやろ。あんな娘が一人っきりで、やで？　ここどこやと思と

るん。エルデンやで？　げんに、むっちゃ不安そうやん。あれ、明らかに怖こわがっとるで。きょろきょろ、きょろきょろして──、

　偶ぐう然ぜん、目があって。

　とはいえ、こっちは彼女を見つめていて、彼女は周囲に目を配っていたのだから、それは必然だったのかもしれないが。

　胸を押さえた。そこから心臓が飛びだしてくるのではないかと思ったからだ。

　息がうまくできない。呼吸困難だ。彼女が目をそらそうとしないからだ。

　互たがいの距きょ離りはおよそ十二メーテル。すがるような表情だった。救い主を見つけて、ほっとしているような、でも、まだわからない、本当にこの人は自分を助けてくれるんだろうかと疑っているかのような。だから、言ってあげないと。早く言ってやらないと。せやで。わしや。わしがきみのこと助けたる。大だい丈じよう夫ぶや。わしに任せとけ。けれども、声が出ない。彼女は遠い。

　だから、深呼吸をして、ゆっくりと目をつぶり、開けた。

　彼女はまだこっちを見ていた。微笑ほほえんで、剝がした貼はり紙を掲かかげてみせると、彼女の大きな黒い瞳ひとみがぱっと輝かがやいた。かすかに潤うるんでさえいた。これこそまさしく運命の出会いや、と思った。ついに。ついに！　ついにやで、ついにィィ……！　とうとうッ！　このわしにもツキが回ってきよったァァァッ……！　ガッツポーズをぐっとこらえて歩きだすと、恥はずかしそうに少し顔を伏ふせて彼女も近づいてきた。

　それが物語の始まりだった。

3

　──しかし、まったくもって本当に、涙なみだなくしては聞けない話だった。

「た、た、たったったっ……ぐしっ、大変、うっ、やったな……ぐしっ、す、すまん、わしが、な、泣いた、って、しゃあないのに、な……うっ、うう……」

　情けない。泣くな。泣いたらあかん。漢やろ。漢なんやろ！

　そうは思う。

　思うが、止められない。

　止められるはずがない。

　ベンテン・カフェの奥にあるカウンターで店主が売っている茶は馬ば鹿か馬ば鹿かしいほど高いが、店内には物売りが結構いて、比ひ較かく的手て頃ごろな値段で飲み食いすることもできる。顔見知りの物売りから二人分のアイスコーヒーを買い、店の隅すみにしゃがんで自己紹しよう介かい＋αの会話をしていたら、自然とその話題にふれることになった。つまり、「お金が必要です」の理由だ。

「──あの……でも、わたし、大変とか、べつに思ってませんし……ただ、何も知らないので、どうしていいかわからなくて。それで、ちょっと困っていて」

「せやろなぁ……ぐしっ……ここにくればなんとかなるやろ思て、みいんなエルデンに集まってきよるけどな。実際はそんな甘いもんとちゃうしなぁ……ぐしっ……」

「ほんとに、考えが甘い──ですよね、わたし……」

「ちゃ、ちゃうて。きみのことやないで。きみはアレやん。ちゃあんと腹くくっとるわけやろ。なんとかしたろ思て、貼り紙出しとったわけやし」

「でも、結局、他ひ人と任せですし……」

「他人任せ結構やないか！　そんなん、自分一人でやるのんがつらいんやったら、他人でもなんでもバンバン利用したったらええねん！　たとえば、わしとかな！」

「……カタリさんを？」

「せや」カタリはコヨコの大きな瞳から目をそらして鼻をこすっ

た。コヨコと見つめあうと、どうしても顔が赤くなってしまう。
「……まあ、どれだけ利用価値あるもんかわからへんけどな。これでも、もう四年近くエルデンにおる。アンダーグラウンドにもな、結構もぐっとるんやで。侵クラ入ツ者カーのイロハ教えるくらいやったらわけないわ」

「……でも、他人を利用するなんて……」

「ほんなら──」さすがに少し逡しゅん巡じゅんした。考えてみれば、初対面だ。会ってから数十分しかたっていない。そんな相手にいきなりこんなことを言う漢おとこというのはどうなのだろう。いや。だが、これは運命なのだ。運命の出会いだ。迷うことなかれ。漢ならためらわずにゴーだ。「わしがきみの力になるっちゅうのはどや。なりたいんや。迷めい惑わく……か？」

「そんな」コヨコは大きく目を見開き、力ちからーいつ杯ぱい首を振ふろうとして、アイスコーヒーのカップを取り落としそうになり、慌あわてて持ちなおして顔を伏せた。「──そんな、迷惑だなんて……それどころか、すごく、ありがたいです。でも、見ず知らずのわたしに、どうして……」

　運命だから。

　言いかけたが、ぐっとのみこんだ。そう、たしかにこれは運命的な出会いに違ちがいない。とはいえ、いきなりそんなことを口にしても、「はっ！　そうなんですか。運命だったんですね。納なつ得とくです」みたいなリアクションは期待できないだろう。それくらい、カタリにだってわかる。理想をいえば、やはり、見事コヨコを苦境から救いだしてあげて、それから告げるのがベターだ。運命やったんや、と。カッコよくな。粋ＣＯＯＬにやで。今は我が慢まんや。我慢の子や。

「なして、ちゅうてもな……そら単なる偶ぐう然ぜんかもしれへんけど、こうして巡めぐりおうて、事情聞いてもうた。知らん顔はようできんやろ。特別やない。あたりまえのことやで」

「ここは、サンランド……ですよ？」

「せや。ここはエルデン、法なし、秩ちつ序じよなし、盗ぬすむも奪うばうも殺すも自由のサンランド無統治王国、その首都や。でもな。少なくとも地上に住んどるんは結局人間なんやで。ええやつも

おれば、悪いやつもおる。他ほかの国に比べたったら多少は極きよく端たんかもしれへんけどな。程度の差や。本質は変わらんのとちゃうか。わしはそう思とるけどな」

「わたしは……わからないです。でも、そうですね。悪い人は、サンランドじゃなくても、いますよね。いい人も──」

　コヨコはちらりとカタリを見た。その表情には早くも親しみや信しん頼らいがにじんでいるように思える。カタリは舞まいあがってしまいそうになったが、なんとかこらえて、照れ隠かくしに頬ほおをポリポリ掻かいた。ここはビシッと渋しぶぅーく決めなあかんで。ええか。ええんやな？　おっしゃ。

「わしはただ、思たことを、思たとおりにゆうて、やっとるだけや。自分の気持ちを裏切ることだけはできへんからな」

「自分の、気持ち……」

「そんなたいそうなもんとちゃうけどな。わしにとっては、わしがわしやっちゅうことを証明してくれよる唯ゆいーいつのもんや。他にはなあんも持っとらんさかい」

「何も、ですか？」

「ま、ええやんか。そんなんはどうでもな。くだらんことや。わしのことは気にせんでええねん。今、肝かん心じんなんは、コヨコちゃんのことや」

「あの……」

「ん？」

「コヨコ、でいいです」

「を？」

「呼び方」

「……コヨコ？」

「はい」

　コヨコがにっこり笑った。

　ありえへん、と思った。

　むっちゃかわいい。

　かわいすぎやろ。死んでまうでホンマ。心臓止まるっちゅうねん。わしを殺す気かい！

　━よっしゃ。

　ええやろ。

　もう死んでもかまへん。

　その笑え顔がおを守るためやったら、わしの安い命、ナンボでもくれたるわ！

　持ってけ泥どろ棒ぼうや……！

「あの……あらためて、お願いします。侵クラ入ツ者カーのこと、わたしに教えてください。ご迷惑じゃ、なければ」

「ぼっ、め、迷惑なわけあるかいな」

　危なかった。いつもの癖くせで「ボケ」と言ってしまいそうになった。

　あかん。あかんで。コヨコちゃんの、いやいや、コヨコの前では紳しん士し的にいかなあかん。

　カタリは気をとりなおして、「よっしゃ」と立ちあがり、空のカップを握にぎりつぶしてコヨコに向きなおった。「ほな、善は急げっちゅうやつや。今からちらっと行ってみよか。アンダーグラウンド」

「……大だい丈じよう夫ぶでしょうか？　わたし……」

　コヨコもカタリにつづいて立ちあがったが、やや不安そうだ。

　守ってやらんと、という気にさせられる。

　この娘こを助けてやらなあかん。わしが。わしが！　このわし

が……！　わしがやらんで、誰だれがやるねんっちゅう話や！

「心配せんでええ。わしがついとるからな。それに、今日は見学や。コヨコはただ見とるだけでええねん」

「見ている、だけで？」

「せや。何事も慣れやからな。とりあえず、わしが手本見せたるさかい。侵クラ入ツ者カーっちゅうのんは、こういうもんやってとこをな。バッチリとな。魅せたるわ」

4

　右手に粉ふん砕さい力のある片手用の幅広ヘツドア戦斧ツクスを持ち、左手には突つき・刺さし・防ぼう御ぎょ目的の左手用短たん剣けんを構える。ＤＳ□ドラッグＴＹスター・ＱＮタイクンの鎧よろいは、高い防御性能を保持しながら、高い機動性も追求されていて、シンプルで飽あきのこない洗練されたデザインもいい。

　簡単にいえば、カタリの戦法は攻こう撃げきは最大の防御なりだ。

　攻せめる。とにかく攻める。攻めながら隙すきを見つける。見つけたら攻める。ダメでも攻める。攻めつづける。

　幼いころ、家庭教師が暇ひまつぶしに少しだけ剣術を教えてくれたような記き憶おくはあるが、あまり役に立っている実感はない。だから、すべて実戦を通して身につけた。殺される。やられる。刺し激げきに反応して手が出る。繰くりかえしているうちに、効率的な打だ撃げきを身体からだが覚える。覚えたものを、身体がなぞる。頭で考える必要などない。カタリにとって、戦うために必要なものは気持ちだ。ノリだ。高いテンションだ。熱い魂たましいの脈動だ。やるで！　やったるで！　やってまうでえ……！

　気合いがあれば、なんでもできる。

　やってできないことはない。

「ずおおおおおりゃあああぁぁぁ……ッ！」

　今日のカタリは絶好調だ。

　アンダーグラウンドＤ７地中砦とりでアヴァシー。

　この場所を根城にしている亜あ人じんボーグは、薄うすい灰色の肌はだを持つ異界フリー生物クスだ。体毛はなく、のっぺりした顔には黒豆のような目が離はなれてちょこんちょこんとついている。鼻は小さい穴が二つ空いているだけだし、裂さけ目みたいな口はなんだか笑っているみたいで、見ようによっては愛あい嬌きようがあるといえなくもない。

　ただ、その体色と同じ色の、硬かたくて耐たい久きゆう性せいのあるセルマイトでできた地下の城じよう塞さい都市に住むボーグたちは、見かけからは想像しがたいほど凶きよう暴ぼうだ。というか、異種族に対して徹てつ底てい的に非寛かん容ようなのだ。

　連中は、人間には聴きくことのできない声でコミュニケーションをとり、かなり秩ちつ序じよだった社会的な生活を営んでいるようだが、その実態はよくわかっていない。侵クラ入ツ者カーの大半が足を踏ふみ入れることができるのは地中砦アヴァシー上層の外がい縁えん部のみで、それより先に進もうとすれば、ボーグの軍団と戦争をして撃げき破はするくらいの覚かく悟ごで臨まなければならないからだ。

　従って、カタリとコヨコがいる場所もアヴァシー上層外縁部なのだが、楽な狩かり場だなんて考えれば手痛いしっぺ返しを食うことになる。

　ボーグは手て強ごわい相手だ。その高い知能を裏付けるように、彼らが手に持ち、また身にまとうセルマイト製の武具もよくできている。

　だが、だから、それがなんだというのだ。

「どっせいっ……！」カタリは戦せん斧ぷを振ふるう。「──へりゃあ！」左手用短剣でボーグの剣を受け止めつつ、さらに戦斧を振るう。「でぇぇぇいやぁっ！」もっと戦斧を振るう。「──むおっ！」横合いからきた別のボーグの槍やりをかわす。頬ほおの肉をザックリ削けずられたが、なんのこれしき。「でりゃっ！」お返しだ。戦

斧をお見み舞まいしてやれ。「どおう！」もう一発だ。鎖くさり帷子かたびらに弾はじかれた。ならば、懐ふところに飛びこんで左手用短剣を突き刺してやれ。「せりゃああ……！」そのままそいつを押し倒たおして、すぐに立ちあがって、戦斧を振りまわせ。「じえいじえじいじえいじえいうおおおおおぉぉ……ッ！」

　息はとっくに切れている。

　苦しい。

　めちゃくちゃ苦しい。

　それでも、身体が動く。まだ動く。どんどん動く。もっともっと動けと魂が要求する。

　コヨコが見ているからだ。

　少し離れた物もの陰かげから、コヨコが見ている。見てくれている。そう思うだけで、勇気は百倍、体力は千倍、戦せん闘とう能力は平常時のざっと一万倍にはなる。少なくとも、カタリ自身の感覚としてはそんなかんじだ。ボーグ三体の集団に挑いどみかかったときは、自分でもちょっと無む謀ぼうかと思わないでもなかったが、なぜか自信はあった。やれる。今のわしならいけるやろ。実際、もう二体をセルマイトの地面に沈しずめて、残りはあと一体だった。それも、これでおしまいだ。この一いち撃げきで……！　見たってくれや、コヨコ！

「我流ゥッ！　滅めつ私し奉ぼう公こう斬ざん……ッ！」カタリはボーグが振り下ろした剣を左手用短剣で弾くなり、戦斧で斬きり上げた。やつの股こ間かんから肩かた口ぐちまでだ。一気にズバッといった。そこで手首を返して、首筋に戦斧を叩たたきこむと、ものすごい勢いでビュービュー鮮せん血けつが噴ふきだした。カタリはボーグの血をまともに浴びた。「──フッ。恨うらまんといてくれや。このカタリ・ザ・グレートタイフゥーンに目ぇつけられてもうたのが運の尽つきや」

　終わってみれば完勝だった。カタリは地面に崩くずれ落ちたボーグの前で瞑めい目もくし、短い祈いのりを捧ささげた。どうかこの運命の出会いが、スペシャル・ハッピー・エンドを迎むかえますように。

　振り返ると、コヨコが物陰から飛びだして、駆かけよってこようとしているところだった。やや険しい面おも持もちだ。その手には白い布が握にぎられている。ん？　布やて……？　何をするつもりなのかと考えている間に、コヨコはすぐそばまできて、背せ伸のびをし、カタリの顔を布でぬぐった。それから、ようやく安あん堵どしたように息をついて、表情をやわらげた。

「……怪け我が、ないですよね？」

「お、おお……」

　そうきよったか。まずそれかい。予想外やで。まるで想像しとらんかった不意打ちや。嬉うれしい、嬉しすぎるサプラァーイズ・アタックやないか……！

「だ、だ、だだだ大だい丈じよう夫ぶや。ほれ、このとおりな。ピンピンしとるわ。ナハハハッ！　まあ、わしにかかればこんなもんやで！」

「強いんですね。カタリさん」

「つ、強い？　わしが？　そ、そうか？」

「あ……よくは、わからないけど。なんとなく。見てて、そう思いました」

「強い、か……うーん、どうやろな。せやけど、あれやで。人は強くも弱くもなるもんやからな。そのう、たとえば、たとえばの話やで？　だ、大事な人のためとかなら……な」

「そう……」瞬しゆん間かん、コヨコの黒い瞳ひとみが揺ゆれた。訝いぶかしく思ったが、それがなんらかの疑ぎ惑わくに結びつく前に、コヨコの笑え顔がおに心をとかされた。「──です、ね」

　しかし、思いきって言ってみたのだが、軽く流されてしまったような恰かつ好こうだ。少々残念だけれど、やや先走りの感もなきにしもあらずだったので、これでよかったのかもしれないとも思う。いずれにせよ、九頭レガシオ竜大ス・ノ骨格・インもろともアンダーグラウンドの天てん井じようを突つき破って天まで舞まいあがろうとしていたカタリの心が、ちょっと落ちついた。そうだ。のぼせている場合ではない。侵クラ入ツ者カーの仕事は異界フリー生物クスをしとめて、それでおしまいではない。ある意味、ここからな

のだ。この先がなければ、侵クラ入ツ者カー稼か業ぎようで生計を立てることはできない。

「さて、っと――」

　当然カタリは慣れているし、最初からそれほど戸と惑まどいはなかったが、人によっては陰いん惨さんな作業だと感じるだろう。とくに、心こころ優やさしいコヨコのことだ。異界フリー生物クスに憐あわれみを覚えて、とても見ていられないと顔を覆おおうかもしれない。だが、侵クラ入ツ者カーとはそういう仕事だ。侵クラ入ツ者カーのイロハを教えるというのなら、当然、この作業もつぶさに見せて、慣れてもらわないといけない。「もう一仕事や。ちぃっとやな気分になるかもしらんけどな。つろうても、我が慢まんするんやで」

「……はい」

　コヨコも覚かく悟ごはできているようだ。

　カタリはうなずき返してから、ボーグの死体の前に屈かがみこんで、まずは防具を脱ぬがせにかかった。セルマイトの鎖帷子だ。多少傷いたんでいるが、補修できる範はん囲いだし、売れるだろう。惜おしむらくは、鎖くさりの編みがところどころ甘く、隙すきがある。あまり質がよくない。二千八百っちゅうとこやな。武器は、同じくセルマイト製の長剣だが、ずいぶん刃はこぼれしている。造りも雑だ。これでは安く買い叩かれるのがオチだし、かさばるので、持ち帰るだけの価値はない。

　それより、ボーグが首に巻いている鎖にくくりつけられた物入れだ。ボーグはたいていこのような物入れを所持している。セルマイトを糸状にして、それを編んで作った布製の、薄うすい財さい布ふのようなものだ。実際、その中には彼らの通貨が入っている。もちろん、地上では通用しない貨か幣へいだが、純度の高い上質のセルマイトでできているため、それなりの値段で売れるし、ときにはこんなこともあったりするのだ。

「おお……こら珍めずらしいもんやで」

「なんですか？」

　コヨコがカタリの右肩の上に顔を突きだしてきた。いきなりだっ

たので、びっくりした。それに、意外と平気そうだ。今どきの娘こはこんなもんなんかな。べつにわしかて今どきの若者やけどな。ただ、それならそれで、乗り越こえるべき障害が一つ少ないわけだから、むしろ歓かん迎げいすべきだろう。カタリはボーグの物入れからとりだしたものをコヨコに見せてやった。

「エンゲージ・リングや。ま、わしら人間がそう呼んどるだけで、ホンマの用よう途とはわかっとらへんのやけどな」

「婚エン約ゲージ……指輪リング？」

「ボーグがつけるにしては、サイズが小さすぎやろ。せやけど、形はまさしく指輪っちゅうかんじやし、セルマイトやない、ちっさい石もついとる。赤い石やな。ぱっと見、ルビーに似とるけど──ちゃうな。これは……おっ！　これまたラッキーやで。血のような赤に、葉脈みたいな黒い筋。血星ジグネ曜石ヴイアやんか。竜ドラガ界ンドでしか採れへん、高等魔術の触しよく媒ばいにも使われよる稀き少しよう鉱石や。なんでボーグが──」

「血星ジグネ曜石ヴイア、って……高いんですか？」

「せやな。この大きさやと、魔術の触媒としてはぎりぎり使われへんやろし、多少価値は下がるかもしらん。ゆうても万はいくで。セルマイトの台座もきれいやし、売り手次し第だい買い手次第っちゅうとこはあるにせよ、わしやったら──六万やな。そんくらいでさばく自信はあるで。それだけの品や」

「六万……！」

　コヨコは心底驚おどろいた様子で目をまん丸くしている。ちょっと新しん鮮せんな反応だ。六万ダラーが端はした金がねだとは思わないが、こう見えて稀少物レア・蒐集家ハンターの顔も持つカタリは、これまで結構いろいろなお宝をゲットしてきた。正直、六万ダラーのエンゲージ・リングは普ふ通つうのラッキー程度で、ウルトラ・ラッキーではない。ましてや、ミラクル・ラッキーとは程ほど遠とおい。

　ただ、血星ジグネ曜石ヴイアが亜あ人じんボーグのエンゲージ・リングにセットされていたという点に、好こう奇き心しんをそそられる。稀少物レア・収集家ハンターの会合に持参するなり、その方面の研究家に見せるなりするべきか。そんなことも考えかけていた

のだが、気が変わった。

「コヨコ、手」

「……え？」

「ええから。手ぇ出し」

「は、はい」

　不思議そうな表情のコヨコがさしだしてきた両手は、華きや奢しやな身体からだにふさわしく、ずいぶんと小さかった。その掌てのひらの上に、エンゲージ・リングをぽんと置いてやった。

「やるわ、それ」

　コヨコは目をぱちぱちさせるだけで、何も答えなかった。しばらくしてからだった。

「──でも」コヨコは指輪を見て、カタリを見て、顔を伏ふせた。「……わたし、何もしてませんし。ただ、見てただけで」

「ええっちゅうねん。わしがやるっちゅうてんのやから、問題ないやろ。なんちゅうか、これは、そのう……なんや、ほれ、こ、好意や」

「厚意？」

「せ、せや。せやからな、もらっといたらええねん。いや！　もろてくれ！　頼たのむわ！　これ、このとおりや！」

「そんな！　でも、頼む、なんて……逆、じゃないですか。わたしがカタリさんに侵クラ入ツ者カーのこと、教えてもらってるんだし……」

「ほんなら、授業料と思たらええやろ！」

「それだったら、払はらわなきゃいけないのはわたしです」

「ちいとばかし変わった個人授業なんや！　ええねんて！　それに──」

　カタリはいつの間にか立ちあがっていた。コヨコは小さい。百五

十三サンチ。背せ丈たけはカタリより二十サンチ以上低く、体重も二十キルは軽いだろう。その細い両りよう肩かたに背負っているのだ。たしかに、コヨコはかわいいし、あれは一ひと目め惚ぼれに近かったし、この想おもいが通じればいいと願ってはいるが、それだけじゃない。どうにかしてやりたい。手助けしたい。本当にそう思っている。下心がないとはいわない。でも、この気持ちは本当だ。誰だれがなんといおうと、嘘うそなんかではない。漢おとこが、漢道にかけて誓ちかう。わしはコヨコの力になりたいんや。

「金、必要なんやろ」

　コヨコは顔を上げた。何か言いたげに唇くちびるが動いている。しかし、言葉が出てこない。

「兄貴の薬、買こうたげなあかんのやろが。金貯ためて腕うでのええ医術士に診みせたったら、なんとかなるかもしれんしな。せやから、もらっとき。売り払はろてもええし、なんかのときのために持っといてもええ。どっちにしたっても、あって困るっちゅうことはないのんが金や」

　コヨコは、もう「でも」とは言わなかった。五秒。十秒。いや、もっとかかったかもしれないが、ゆっくりと、だが、しっかりと指輪を握にぎりしめて、カタリに微笑ほほえみかけた。



「……はい。ありがとうございます」

　アスリアナ・ラクスリテ・レナトプーロ・フィルダレスナ・ケルヌブブ・シャロ・インダステ・メルローシャナ。それが集落長ムラオサがつけたわたしの本名で、コヨコは親がつけた呼び名アダナだ。

　わたしはオークリッド五十七部族の一つ、ネリ族のセツの集落ムラで生まれた。

　故郷にはいい思い出がない。わたしの父は、朝から晩まで浴びるように酒を飲んで暴れ、疲つかれ果てると眠ねむり、目が覚めるとまた酒を飲んで、気に入らないことがあると家族を殴なぐる。そんなどうしようもない男だったし、母は母で、男をたぶらかして寝しん所じよに引っぱりこみ、気味の悪い嬌きよう声せいと引き換かえに金をもらうような女だった。父はそのことに気づいていたけれど、母を責めなかった。かわりにお金を要求した。母は黙だまってお金を渡わたした。拒きよ否ひすれば、ひどく殴られることを知っていたからだ。

　わたしは五つ上の兄と身をよせあって、家の隅すみでいつも怯おびえていた。わたしの子守歌は、母の狂くるったようなよがり声か、父の獣けものめいた罵ば声せいだった。たまに、兄がわたしのために歌ってくれた。すると、父が怒おこって兄を殴り倒たおした。わたしは兄に、やめて、と頼んだ。お兄ちゃん、歌うのはやめて。歌わないで。わたしのためなんかに、歌わなくていいから。お父さんが怒るから。兄は歌うことをやめて、かわりにわたしの頭や背中や肩をなでてくれた。

　兄だけがわたしのよりどころだった。兄がいなければ、わたしはきっと生きてこられなかった。兄は必死にわたしを守ってくれた。わたしの盾たてになってくれた。夢のような楽園の話をひっそりと囁ささやいて、わたしを笑わせてくれた。わたしを抱だいて眠ってくれた。いつもわたしのそばにいてくれた。兄がいれば、わたしは幸せだった。

　でも、あの家では、幸福なんか手に入れてはいけなかったのかもしれない。

　大きくなると、兄は働きに出るようになった。父と母が結けつ託たくして、兄を働かせたのだ。もちろん、お金をえるためだった。

兄は黙もく々もくと働いて、給金をすべて父に渡し、夜はわたしを抱いて守って眠った。兄は反はん抗こうしなかった。なぜ？　わたしのためだ。勝手にサイガの市マチで職人の下働きの口を見つけてきた父に「明日から働け」と言われたとき、兄は一いつ瞬しゅん、あらがおうとした。少なくとも、すぐに「はい」とは答えなかった。それを見た父は、兄ではなく、わたしのおなかを蹴けった。わたしは何がなんだかわからなかった。痛くて。苦しくて。吐はきそうで。でも、あとから考えて理解した。「言うことを聞かないとコヨコを痛めつけるぞ」と、父は言葉にせず、行動で兄に伝えたのだ。わたしは人ひと質じちだった。わたしのせいだ。わたしがいなければ。わたしなんかいなければ、お兄ちゃんはこんな家から逃にげだして、どこかで幸せになれるかもしれないのに。思いあまって、ある夜、わたしは兄に言った。お兄ちゃん。逃げて。お兄ちゃんなら大だい丈じよう夫ぶだよ。ちゃんと一人で生きていけるよ。こんな家でもなんとかなってるんだから。外はもっといいところだよ。兄はわたしをぎゅっと抱きしめて、ぽつりと言った。そうだね。逃げようか。二人で。どこか遠くへ行こうか。俺とコヨコで。

　本気だった。計画を立てて少しずつお金を貯めた。でも、運命は初めからわたしたちにつらくあたってばかりだったし、いきなり風向きが変わることを期待するほうが間ま違ちがっていたのかもしれない。それにしても、予想もしていなかった。まさかそんな方法でわたしたちに意地悪するなんて。

　兄が病気になった。

　最初はただの風か邪ぜだと思っていた。兄もそう言っていた。でも、いつまでたっても咳せきが止まらず、間欠的な頭痛、眩暈めまい、慢まん性せい的な倦けん怠たい感は少しずつ兄から体力を奪うばっていった。

　わたしは父と母の前で床ゆかに額をこすりつけて頼んだ。どうかお兄ちゃんを呪医せんせいのところに連れていってください。お願いします。呪医せんせいは集落長ムラオサのお抱かかえで、家長が正式な手続きを踏ふんで依い頼らいしなければ、患かん者じやを診みない。当然のように、父も母も首を縦には振ふらなかった。お前は阿あ保ほか。あんなもの、いくらふんだくられるかわかったもんじゃない。だいたい、病気といったって、タツローのやつ、まだちゃんと働いてるじゃないか。まあ、そのうち治るだろうさ。若いんだしな。そうくると思っていた。

　わたしはすぐにあきらめて、近所の家を一いつ軒けん一軒訪ねて回った。べつに家長なら誰でもいいのだ。わたしの父じゃなくてもいい。

　ところが、彼らは頼たのみを聞き入れてくれるどころか、門もん前ぜん払ばらいし、あるいはわたしを汚お物ぶつのように扱あつかった。くるな、くるな。近寄るな。あの家の娘むすめだ。汚きたない。汚けがらわしい。悪い運が家にまでついてしまったらどうするつもりだ。

　幼いころ、一いつ緒しよに遊んでくれた隣りん家かのモチビは、あんたさ、と、大人びた口調で言った。お兄ちゃんとずいぶん仲いいよね。まだ一緒に寝ねてるの？　嘘うそ。本当に？　それ、はっきり言って気持ち悪いよ。いろいろ噂うわさになってるし。あんたの家がひどいのはわかるけど、兄妹でってのはまずいんじゃない？　集落長ムラオサにそんなこと知れたら、いくらなんでも集落ムラにいられなくなるよ？　あたしは、言わないけどね。誰だれかが言うかもしれないしね。

　わたしは悟さとった。

　ああ、そうなんだ。どのみち、わたしはこの集落ムラにはいられないんだ。居場所なんかないんだ。ここにいるかぎり、死ぬまで運命にいじめられつづけて、苦しんで、痛くて、泣いて、それでも我が慢まんしているしかないんだ。

　そんな人生いらない、と思った。

　わたしには、涙なみだ一ひと滴しずくぶんの価値さえない。

　いてもいなくても同じだ。

　だったら、お兄ちゃんがまだ自分の力で動けるうちに集落ムラを出よう。どうせいらない人生なのだから、何をしたっていい。どうなってもかまわない。とりあえず、逃げよう。息をしているだけで追いつめられているような気持ちになる故郷なんか捨ててしまおう。どこか遠くへ行こう。お兄ちゃんと二人で遠くへ行こう。

　オークリッド首長国を出て、ラフレシアに入り、サンランドへ。

　そして、首都エルデンへ——。

「ただいま」

　ドアを開けて部屋に入ると、痩やせて暗い目をした男が、酒さか瓶びんを手に、くわえ煙草たばこでベッドに寝そべっていた。やめてと言っているのに、灰皿はシーツの上だ。シーツが灰で汚よごれている。禁きん煙えんの約束はどこへいったのだろう。禁酒できないのなら、せめて煙草をやめる。禁煙が無理なら、酒を控ひかえる。何度も交かわした口約束は、だが、そのたびに破られて、コヨコを傷つけ、そうしてできた傷口を塞ふさぐために、彼はまた見えすいた嘘をつく。

　ずるくて、ひどくて、少しだけやさしい嘘を。

「また、飲んでる」

「……やることねーんだよ」タツローはコヨコのほうを見ずに、煙草の灰を灰皿に落として紫し煙えんを吐いた。「暇ひまでさ。なんかだりーし。鬱うつっぽいし。飲めば楽になるかなーって、な……」

「もう、それだけでしょ。お酒」

「だな」

「なくなっちゃいそうだね」

「だから、ちびちびやってる」

「煙草、どうしたの？」

「買ってきた」

「やめるって言ったよね」

「言ったかなー……」

「言ったよ」

　コヨコはため息をついてタツローに背を向け、ドアに鍵かぎをかけた。タツローはわかってくれているのだろうか。この貸し宿の部屋だって、お金を払はらわないと追いだされてしまう。食事にもお金がかかる。何をするのにもお金がかかる。お金がなければ何もで

きない。カタリさんが言っていた。「ここにくればなんとかなるやろ思て、みいんなエルデンに集まってきよるけどな。実際はそんな甘いもんとちゃうしなぁ」と。そのとおりだ。甘くない。そんなことはわかっている。特別な才能でもあれば別なのかもしれないけれど、凡ぼん人じんは何かを犠ぎ牲せいにしないと、食べて寝て生きてゆくことさえままならない。

　──わたし、どうしてこんなところで、こんなことやってるんだろ。

　ギッ、とベッドが軋きしむ音がした。

　瓶を床に置く音。足音。気配。ふっ、と吐と息いきが耳にかかった。

「ごめん」

　後ろから腕うでがのびてきて、首に巻きついてきた。ぎゅっと抱だかれた。お酒と煙草の匂においがする。それから、かすかな体たい臭しゅう。わたしをごまかして、丸めこむ、この人だけの匂い。

「悪かった。もうしねーよ。煙草はあれで最後。今回はマジ。酒は──とりあえず、我慢する。金、きついもんな。わかってんだけど、さ……つい、な。弱いな、俺」

「……本当に、最後？」

「うん。信じろって」

　信じられないよ。

　信じても、無む駄だだって知ってるから。

　でも、この人以外の誰を信じればいいの？

　わたし以外の誰が、この人を信じてあげられるの……？

　コヨコは目を閉じてタツローの腕にしがみついた。

「──ベンテンで、ね。わたしの貼はり紙を見て、一緒に仕事してくれるっていう人が、いて。ごめんね。それで、少し遅おそくなっちゃったの」

「何言ってんだよ。謝るなって。見つかったのかよ。よかったな」

　きっと、タツローも予想はしていただろう。帰りが夕方以降になるときは、だいたいそうなのだ。最初の二、三回は、コヨコがその旨むねを報告すると、跳とびあがって大おお袈げ裟さに喜んでみせたものだが、最近は「よかったな」でおしまいだった。慣れてきている。もうあたりまえだと思っているのかもしれない。でも、タツローなりに気をつかってくれているのかも。大喜びするようなことではないのだし。コヨコだって、まるっきり平気なわけじゃない。

「その人と一緒に、ね。アンダーグラウンドに行ってきて。結構、稼かせいだんだよ。二人だったけど──」

「二人？　野や郎ろうと？　二人っきりかよ」

「だって……」

「いーけど、べつに」

　そう言っておきながら、タツローの声こわ音ねは明らかに不ふ機き嫌げんそうだった。同時に、コヨコを抱く腕に力がこもる。離はなさない。誰だれにもやらない。そんなタツローの気持ちが伝わってくるようなかんじがする。コヨコも思う。離さないで。わたしを誰にもやらないで。

「──で、結構稼いだって？」

「うん……」

　ふと、お金のことが頭をよぎる。お金。そのために、この人は。そんなふうに考えたことは一度や二度ではない。でも、結論はいつも同じだった。

　そうじゃない。少なくとも、それだけではないはずだ。

「二人だったのに、半分どころか、ほとんどわたしにくれて」

「なんだよ、それ。お前、惚ほれられたんじゃねーの」

「わかんない、けど……なんか、いい人みたい。同情、してくれて」

「へえ。とんだお人ひと好よしだな」

「うん……そうかも。で、ね。いろいろ話したら、タツローに、会いたいって。お見み舞まい、したいって」

「はあ？」

「……断り、づらくて」

「いや、断りづらくても断れよ、そんなの」

「でも……」

「前も一回あったけど、あんなのもうやだぜ。面めん倒どうくせーし」

「わかってるけど……」

「わかってんのかよ、本当に」

　タツローはちょっと乱暴にコヨコを突つき放すと、荒あらっぽくベッドに腰こしかけた。こういう流れで二人の間に生じる沈ちん黙もくは、つらい。不安に押しつぶされそうになる。怖こわい。足がすくむ。

　しばらくして、タツローが口を開いた。

　ほっとした。少しの間、死んでいて、今、生き返ったような気分だった。

「いくら稼いだんだよ、今日」

「え……と、九千ダラーくらい」

「へえ、九せ──九千？」

「うん」

「マジかよ。すげーな」タツローの表情が一気に明るくなった。「よし、わかった。連れてこいよ、そいつ。妹をよろしくって、兄貴から挨あい拶さつしとくのも悪かねーよな。印象的に、さ」

「そう……だね」

六万ダラーで売れるというエンゲージ・リングのことを、タツローに言わなかった。忘れていたのだ。違ちがう。そうじゃなくて──「なんかのときのために持っといてもええ」。そうだ。何かのときのために。六万ダラーはコヨコにとって大金だ。いざというときに備えて、隠かくし持っておく。悪くないアイディアだと思えた。それに、血星ジグネ曜石ヴイア。あれは、きれいな石だった。

6

俺の本名はソニー・マシュタリト・イジクンドゥラ・ラフガニー・テソ・アルバニセ・ベルクシャー。タツローは親がつけた呼び名アダナだ。

生まれ育ったセツの集落ムラは、マジでくそったれだった。何しろ、親が最悪だった。親おや父じは飲んだくれで、おふくろは淫いん売ばい。気に入らないことがあると、親父はすぐに俺を殴なぐったし、おふくろは金切り声で意味不明のことを叫さけぶか、わけのわからない説教を飽あきるまでつづけた。俺は気が狂くるいそうだった。いつかあいつらを殺してやる。餓が鬼きのころから、そんなことばかり考えていたように思う。ただ、考えるだけだった。親父は無駄に身体からだがでかくて、おふくろは馬ば鹿かのくせに悪わる知ぢ恵えだけは働いた。生まれたときからやつらにやられっぱなしだった俺は、親父が腕うでを振ふりあげただけで身がすくんだし、おふくろが口を開けば頭の中が真っ白になった。夢の中でなんべんやつらをぶっ殺しても、実際にやつらを目の前にすると、何もできなかった。暴力。罵ば声せい。怒ど声せい。ありとあらゆる手段で行われる八つ当たり。ストレス発散。それらにさらされたとき、どうすれば一番楽か、俺は知っていた。

あらがわないことだ。抵てい抗こうなんてしたら、やつらは逆上する。ただひたすら謝るんだ。

ごめんなさい。もうしません。ごめんなさい。

やつらが満足するまで、そうしてやりすごせばいい。

気がつけば、俺は根っからの臆おく病びよう者もので弱虫になっ

ていた。

　でも、それが俺なりの処世術だった。

　餓鬼のころの俺は、とにもかくにもあの家で耐たえて、耐えて、耐え抜ぬくしかなかった。運悪く集落ムラの鼻つまみ者の家に生まれた俺には、友だちなんてほとんどいなかった。

　一人だけだった。

　コヨコ。

　あいつだけは、なぜか俺に親切だった。分け隔へだてなく俺に接した。お兄ちゃん、と俺を呼んでいた。

　もっとも、五つ下の妹に何ができるわけでもない。少しだけでかくなった俺は、別の処世術を見つけた。なんのことはない。俺の世界はあの家の中だけじゃない。人間はセツの集落ムラだけで暮らしてるわけじゃない。俺はサイガの市マチに出かけていって、エルデンのクァラナド歓かん楽らく街がいとは比べものにならない小さなわびしい盛さかり場ばで酒や煙草たばこを覚えた。似たような境きよう遇ぐうの仲間も見つけた。俺は臆病者で、喧けん嘩かもできなかったし、脅おどされればすぐ土ど下げ座ざしたし、連中の使いっ走りに等しかったけれど、それでも仲間ができて嬉うれしかった。家にはめったに帰らなかった。仲間のねぐらを転々とし、盗ぬすみや恐きよう喝かつなんかに加担して小金を稼かせいだ。もちろん、平へい穏おん無事な毎日とはいえなかった。仲なか違たがいしたり、無視されたり、謝ってまた仲間に入れてもらったり、問題はいろいろあった。でも、俺はそれなりに満ち足りていた。漠ばく然ぜんと、ずっとこんなかんじで生きていければいいと思っていた。そんなことはありえないのに。

　仲間が一人、二人と減っていった。ある者は女と結けつ婚こんするとか言いだして、職を見つけるために堅かた気ぎになった。別のやつは、本格的にその筋の一員となるべく、ちんぴらの俺たちと手を切った。サイガの市マチには学校があった。良家の子女はそこで何年間か勉強して、成績優ゆう秀しゆうな者は役人になれる。それになぞらえて「卒業だ」と仲間の一人は言った。「いつまでもこんなことやってらんねーしな。先ねーし。将来とか大事だろ、やっぱ」と、そいつは分別顔でまずい安酒入りのグラスを掲かかげてみせた。「──俺らの卒業に乾かん杯ぱい」

　気がつくと、俺は臆病者で、弱虫で、一人きりだった。今さら頭を下げて別のグループに入れてもらうなんて、いくら俺でもさすがに無理だった。最後に二人の仲間が「卒業」した夜、完全に居場所をなくした俺は、やむをえず家に帰ることにした。べつに何か考えがあったわけじゃない。しいていえば、家や捜さがしをして、金があったらくすねてやろうとか、その程度だった。俺は依い然ぜんとして親父やおふくろに逆らうことはできなかったけれど、やつらが寝ねている間に金を盗むくらいはできるようになっていた。とはいえ、期待はしていなかった。やつらが持っている金なんてたかが知れている。だったら、どうして……？

　たぶん、俺は離はなれられなかったんだ。

　親父のことも、おふくろのことも、嫌きらいだったし、憎にくんでいたし、殺せるものなら殺してやりたいと思っていたが、同時に、俺にはやつらを殺すことなんか絶対できなかった。

　だって、その気になれば殺やれたはずだ。

　親父もいいかげん衰おとろえていたし、おふくろもすでにただの醜みにくいババアだった。

　でも、俺は知っていた。

　やつらだって、なりたくてああなったわけじゃない。なんの原因も理由もなく、あんなふうになったりはしない。やつらにもいろいろあったんだ。

　たとえば、ネリ族と仲の悪いモロ族出身のおふくろは、親父といっ緒しよになるのを反対されて、自分の両親と縁えんを切った。親父の両親は気のいい人たちだったが、失火で火事を起こしてセツの集落ムラにいられなくなり、それ以来、行ゆく方え知れずだ。評判のいい木工職人だった親父は、火付けの息むす子ことなじられ、職場でさんざんいびられて、ついには親方を殴って仕事を辞やめた。酒さけ浸びたりになったのはそれからだった。その前は、豪ごう快かいでやさしい自じ慢まんの親父だった。荒あれる親父に耐えかねて、おふくろが浮うわ気きしたのもそのあとだった。浮気相手が同じ集落ムラの妻子持ちで、その事実が知れ渡わたると、我が家はめでたく村八分になった。当然、困こん窮きゆうしたが、捨てる神あれば拾う神ありってやつだ。器き量りよう好よしのおふくろにこっそり「援えん助じよ」を申し出る男が何人もいた。おふくろ

は、餓鬼だった俺を食わせるためにも、受けるしかなかった。親父はそのことに憤いきどおり、でも、文句は言えず、酒に逃にげ、おふくろは嘆なげきながら、嬌きよう声せいをあげながら、徐じよ々じよにおかしくなっていって、やがて二人して一番弱い俺に当たり散らすようになった。もちろん、俺にとっては悲ひ惨さんきわまりなかったが──だけど、悪いのは俺の親父とおふくろだけか？

違ちがう。そうじゃない。

全員だ。集落ムラの連中全員が俺を陥おとしいれた。俺は、親父とおふくろを憎みながら、集落ムラの隣りん人じんどもを、誰だれも彼もを恨うらんで、それと一緒に心のどこかでこう思っていた。

かわいそうだ、と。

なんて哀あわれな二人なんだ、と。

俺は昔から二人の寝ね顔がおを見るのが結構好きだった。眠ねむっている二人は俺に危害を加えないからだ。だから、もしかしたら、あの夜も、金をくすねる以外に、そんな気持ちがどこかにあったのかもしれない。でも、結局、俺はあのとき二人の寝顔を見なかったし、もう二度と見ることはないだろう。

帰りついた家のそばでコヨコに出くわした。コヨコは泣いていた。俺を見るなり「あ、お兄ちゃん」と微笑ほほえんだ。その顔は一いつ瞬しゆんでくしゃくしゃになった。俺はたいした覚かく悟ごもなく、投げやりに、思いつきで言った。「そんなにいやなら、逃げちまうか。いっそのこと……」

後こう悔かいしているのかと訊きかれたら、そうだとも違うともいえない。

よくわからない。

ただ、あのまま集落ムラにいても、鳴かず飛ばずどころか、お先真っ暗に近かったことは事実だ。

それよりは、いくらかマシなのか、どうか。

夕方、その男はコヨコに連れられてやってきた。とりあえず、ずいぶんお人好しなんだろうと思っていたが、人がいい以上に調子がよさそうだ。

「まいどまいど！　わしはカタリっちゅうもんですわ！　何？　やかましい？　えろうすんまへん！　なにぶん生まれつきこうですやろ──って、そんなん他ひ人とにわかるかい！　ちゅうわけで、よろしゅうたのんます！」

「……あ、はあ」

　タツローはベッドの上でクッションを背に上半身を起こしている。寝ね間ま着き姿だ。酒も昨日から抜ぬいているし、煙草たばこも極力我が慢まんした。充じゆう分ぶん換かん気きをしたので、ヤニやアルコールの匂においもそれほどしないはずだ。声は低めて、ぼそぼそと力なく呟つぶやくように。適度に咳せきをして、たまに苦しげに胸を押さえる。もともと瘦やせているので、寝間着の胸を少しはだけさせておけば、肋あばら骨ぼねの浮ういた薄うすい胸むな板いたがのぞいて、さらに病人らしく見えるだろう。だが、この男相手にそんな小細工が必要だったのか。思わずそう疑ってしまうほど、カタリは脳天気な男だった。

「それにしてもアレですなぁ、アレってなんやねん、お加減のほうはどないでっか」

「……え、ええ。あまり──」

「いや！　皆みなまでゆわんでもええですわ！」

　皆まで言うなって、お前が訊いたから答えたんだろうが。

「わかります。顔色とか見とったら、やっぱりね。あ！　これね、アレですわ。ケーキですわ。それとね、花。見み舞まいっちゅうたら、花とケーキやろ思てね」

「……あ、ああ、わざわざ、ありがとうございます」いらねーよ。花とかケーキとか。女じゃあるまいし。アホかこいつ。だいたい、甘い物嫌いなんだよ、俺。ケーキなんて食えるか。甘ったるくて気持ち悪い。「……コヨコ、俺はちょっと、食欲がないから……ケーキはお前が食べるといいよ。カタリさんも、せっかく持ってきていただいてなんだけど……よかったら」

「あ、うん」



「そうでっか？　いやぁ、ホンマえろうすんません。せやったら、遠えん慮りよなく」

　遠慮しろよ。てめーはよ。普ふ通つうするだろ。常識ってものはねーのかよ。呆あきれてものも言えないというか、これ以上、カタリとは口もききたくない心境だったが、ココヨが「あ、わたし、お

茶淹いれるお湯、もらってくるね」と外に出て行き、二人きりになってしまった。コヨコのやつ、少しは考えろよ。二人じゃ間が持たねえって。だいたい、何か訊かれて、俺が変なこと答えちまって、話が食い違ちがったらどうすんだよ。そうだ。それはまずい。だとしたら、下手にカタリに喋しゃべらせるより、こっちから何か無難な話を振ふったほうがいい。

「……あの、コヨコは、ご迷めい惑わくをかけてませんか」

「を？　あ、いやいやいや、迷惑なんて！　とんでもないですわ！　まだ見学っちゅうか、見て覚えてもろてる段階やけど、そんな怖こわがったりしとる様子もあらへんし、度胸はたいしたもんです」

「そう……ですか」あたりまえだ。あれでもう、アンダーグラウンドには何度も行っている。さすがに自分で剣けんを振りまわしたりはめったにしないようだし、あの華きゃ奢しゃな身体からだではそもそも無理だろうが、異界フリー生物クスには慣れているはずだ。当然、そんなことを明かすわけにはゆかないが。「……俺も、心配なんです。侵クラ入ツ者カーなんて……コヨコには、似合わないですし」

「同感ですわ。侵クラ入ツ者カーっちゅうんは、まあ、どっちかゆうたら殺さつ伐ばつとした仕事ですやろ。あんなかわいい—あ、やあ、その、他意はありまへんで？　見たまんまっちゅうか、客観的な事実っちゅうか……」

　わかりやすい男だ。やっぱり、そうか。カタリはコヨコに惚ほれている。下心があって親切を装よそおっているというわけだ。助すけ平べ野や郎ろうが。離はなれ目で魚みたいな顔をしてるくせに。昨日会ったばかりのくせに。俺は餓が鬼きのころからコヨコを知っている。あいつだけは俺にやさしかったし、俺をかばってくれたし、小さいあいつは「大きくなったら、お兄ちゃんのお嫁よめさんにして」と言ってくれた。「大きくなったらね」と俺はうなずいた。まさか、あんなことをコヨコが忘れずにいたなんて思いもよらなかった。俺は、もちろん、ちゃんと覚えていた。だって、あのころ、俺に話しかけて、俺に笑いかけて、俺を慕したってくれるやつなんて、あいつしかいなかった。忘れるはずがなかった。ああ、あんなこともあったよな。たまにそう思い出しながら、俺はなんの望みも希望も抱いだかずに醜みにくく年をとって、とるにたらない、くだらない死に方をするんだろう。コヨコが結けつ婚こんするらし

いと聞いた日も、そんなことを思ったような記き憶おくがある。

「……俺が、こんなことになってなければ──コヨコに侵クラ入ツ者カーなんて、やらせなくてすむんですが……」

「あ──わし、何も、そないなつもりでゆうたわけや……」

「いや、でも……事実、ですから。俺が、病気になんかならなければ……」

「なんや、その……難しい病気みたいで」

「はい……」

「医術士には診みてもろたんですか？」

「え……」

　どう答えるべきか。そのことについて、コヨコはカタリに何か話しているのだろうか。だが、不治の病といっておきながら、診てもらっていないというのも不自然だ。でも、その不治の病とやらの病名は？　そこを突つっこまれたらどうする？　カタリは魚顔なりにえらく真ま面じ目めで気づかわしげな表情を作っているが、大おお袈げ裟さすぎるような気もする。もしかして、探さぐりを入れているのか。だとしたら、コヨコの話と矛む盾じゆんすることを言ってしまったらまずい。ただ、こんな質問でつまるのも変だろう。どうする？　いや、もう迷っている暇ひまはない。賭かけだ。

「……あ、はい。完治する見こみは、薄いと……それに、治ち療りようするには、大金が……症しよう状じようをやわらげる薬も、高くて……」

「医術式ではよう治らんっちゅうことですか。ふむふむ……」カタリが腕うで組ぐみをして考えこむ仕草をしたので、ちょっとどきっとしたが、どうやら大だい丈じよう夫ぶのようだった。「──なるほど。わしは専門家やないさかい、ようわからへんけど、そないな病気もぎょうさんあるみたいやしね。で、薬にも金が」

「え、ええ」

「そらつらいわなぁ。せやけど、もう心配せんといてください」

「……はい？」

「わしが」カタリは自分の胸を拳こぶしでドーンと叩たたいてみせた。「力になります。コヨコさんのことは、わしがガッチリバッチリ面めん倒どうみさしてもらいますわ」

「……はあ」

　なんだよ、それ。つまり、あれか？　コヨコのことは自分がなんとかしてやるから、俺は不治の病とやらで安心して死ねってことか？　我が慢まんしているつもりだったが、さすがに不ふ愉ゆ快かいさが顔に出てしまったようだ。カタリは慌あわてて両手を振った。

「ちゃ、ちゃいますがな！　言い方が悪かったんかな、ええと、そうやなくて──わしがこう、バビッとサポートしたってね、コヨコさんが危険な目に遭あわんようにね、ちゅうのも、アレですやろ、コヨコさんは自分の力でお兄さんを救いたいっちゅうか、そんな気持ちでおるみたいですやろ、せやからね、わしはあくまで、それを手助けさしてもらうっちゅう形のほうがええんちゃうか、とか……」

「ああ」

　ようするに、この男はできるだけコヨコにいい恰かっ好こうをしてみせたいのだ。少々回りくどいが、惚れた弱みを利用する機会は今後いくらでも巡めぐってくるだろう。それに、昨日、コヨコは九千ダラー稼かせいだ。今日はいくらだろう。まだ聞いていないが、もしその調子でコンスタントに稼げれば、一巡じゅん月げつで二十七万ダラーになる。この貸部屋の家賃が一巡月で二万ダラーだから、余るなんてものじゃない。酒は飲み放題。煙草たばこも吸い放題。コヨコの目を盗ぬすんでクァラナド歓かん楽らく街がいに遊びに行くことだってできそうだ。あそこにはまだ一回しか行っていないが、すごかった。コヨコにばれて喧けん嘩かになったけれど、あんな経験ができるなら、いくらでも喧嘩してやる。ただ、先立つものがない。病人のふりをしているだけで、この男とコヨコがクァラナド遠えん征せいの軍資金を稼いでくれるというのなら、悪くない。いい話じゃないか。

「……すみません……縁えんもゆかりもない方に、そこまで……」

「いやいやいや、縁はありますがな！　赤い糸が、こう、わしの小

指と一って、何ゆうてんねん、わし！　そうやなくてですね！」

「……そう、ですね。縁は、あるのかもしれませんね。このエルデンで……コヨコ、いい人と、巡りあったのかもしれないな……」

「やはっ！　ええ人なんてそんな、ねえ！」

「あの……」

「へいっ？」

「俺からも、お願いします」

　どうせ、コヨコがこいつになびくことなんて絶対ない。あいつは、俺がサイガの市マチでろくでもない連中とつきあっていても、道で声をかけてきたあいつを無視しても、俺を忘れなかった。あいつは親が決めた相手と無理やり結婚させられても、俺のことが頭にあって、結局、旦だん那なと床とこ入りしなかったと言っていた。結婚して寝ねてないなんて嘘うそくさいが、実際、嫁とつぎ先の家があいつの実家に猛もう抗こう議ぎし、訴そ訟しよう沙ざ汰たになりかけたことは事実らしい。オークリッドでは、集落長ムラオサの仕事の半分が裁判だといわれるくらいで、そんな馬ば鹿か馬ば鹿かしい訴そ訟しようも珍めずらしくないのだ。

　とにかく、コヨコは俺と一いつ緒しよに逃にげて、俺が何度へこたれても見捨てず、尻しりを叩いて、エルデンくんだりまできた。俺がクァラナドで有り金ほとんど使い果たしたときも、コヨコは許してくれた。俺が好きだからだ。何がいいのか知らないが、コヨコは俺に心底惚ほれてるんだ。

「こんなこと、頼たのんでいいのかわかりませんが……コヨコのこと、守ってやってください。お願いします」

「はっ！　はいっ！　もっ♪　ちろーん♪　ですがな！　ガハハハハハッ！　もう超ちよう巨きよ大だい船せんに乗ったつもりでおったってください！　オニイサン！」

　なんだか、最後の「オニイサン」が「お兄さん」ではなく「お義兄にいさん」に聞こえてとてつもなく不快だったが、ぐっとこらえてカタリと握あく手しゅした。しかし、コヨコのやつ、早く戻もどってこいよ。これ以上この魚野や郎ろうと二人きりなんて、冗じよう談だんじゃねえ。

7

「過去は振ふり返るためにあるのではない。顧かえりみず前を向いて、明日をつかみとるためにあるのだ」（『カタリ語録第１巻』より）

　思わずそんな名言を考えついてしまうくらい、充じゆう実じつした毎日だった。連敗記録を伸のばすためだけに生きていたかのようなあの日々は、いったいなんだったのか。だが、まるで無む駄だだったとは思うまい。あの苦く闘とうがあって、今がある。とにもかくにも、今日、カタリは幸せなのだ。昨日も幸せだったし、一昨日おとといも幸せだったし、その前も、その前も幸せだった。ここしばらく、ずっと幸せなのだ。きっと、明日も幸せなのだ。

「しっかし、待つ時間っちゅうのは、こないに楽しいものやったんやなぁ……」

　ベンテン・カフェで、コヨコを待つ。約束している九時半の一時間前には到とう着ちやくして、だいたい十五分前にはやってくるコヨコをひたすら待つ。今か今かと待ち焦こがれる。お、あれちゃうか。いや、ちゃうな。あれか？　ちゃうな。おお！　……いや、ちゃうな。ドキドキしながらそんなことを繰くりかえしているのが、たまらなく楽しいのだ。稀少物レア・蒐集ハントよりも楽しいことが世の中にあったとは。

　この恋こいに乾かん杯ぱい。愛よ永遠なれ。

　カタリは目を輝かがやかせてきょろきょろしている。もう九時十五分だ。そろそろコヨコが現れてもいい時間だが、ベンテン・カフェを訪おとずれる大勢の侵クラ入ツ者カーの中にコヨコの姿は見あたらない。まあ、な。こーゆうこともあるやろ。そらそうやで。毎日毎日判を押したみたいに同じ時間なんてことあるかいな。そんなふうに余よ裕ゆうぶっていられたのも、九時二十分までだった。

　遅おそい。遅いで。遅すぎや。

　たしかに、約束の時間まであと十分あるものの、いつもと違ちがう。その事実がカタリを不安にさせる。何かあったのではない

か？　たとえば、オニイサンの容よう態だいが急変したとか。途と中ちゆうで暴漢に襲おそわれたとか。暴漢……？　待てやおいシャレにならんでそれやばいんちゃう？　ちゅうか、普ふ通つうにありえるやん？　──二十五分。いよいよ落ちつかなくなってきた。こうなったらベンテン・カフェを出て、コヨコを捜さがすべきか。だが、行き違いになってしまう可能性もある。どうする？　どうすればいい？　どないしよ？　カタリは頭を抱かかえて「おおおおおお！」と叫さけんだ。つん、つん、と何かが背中をつついた。

「……をよ？」

　振り向いたら、そこにコヨコがちょこんと立っていた。

「むほばっ！　こ、コヨコ！　いつの間に……！」

「え、と……ちょっと前から。なんだか、考え事してるみたいだったから、邪じや魔ましちゃいけないかな、と思って」

「あ、や、お、そ、その、そおんなことないねんで？　考え事とかな、似合わへんやろ、わしには、実際、な？　ちゅうか、わしが何したっても、コヨコに声かけられて邪魔とかありえへんて！」

「そうなの？」

「あたりまえやがな！」

「そうなんだ」コヨコはにっこり笑った。「──ほんとは、ね。カタリさんを少し驚おどろかせようとか、そんな気持ちもあって。こっそり後ろから近づいてみたんだけど」

「ぬは！　狙ねらいド的中やな！　びっくりしたわ、もう！」

「あ──」と、コヨコは思い出したように頭を下げた。「今日はちょっと遅くなっちゃって、ごめんなさい」

「な、何ゆうてんねん！　約束は九時半やで。まだまだ、ほれ、一分以上あるがな！」

「そうだけど、いつもより遅かったから、心配させちゃったかなって、思って。カタリさん、やさしいから」

「ぶぉぉぉだぁぁれがやさしいてそんなお前じぶんあれやでぜんぜ

んな？　そんなことないっちゅうねん普通やで普通もうめっちゃ普通すぎて鼻血どばーてな？　何ゆうてるんか自分でもようわからんけどな？」

「それに、おもしろいし」

「ぐぶおっ！　おもろいて！　おもろいてゆわれてもうた！　大変や！　わしの頭ん中で大規模地ち殻かく変へん動どうがぁぁぁ……！」

「……ちょっとおもしろすぎるかも？」

「えろうすんまへん。調子に乗りすぎてもうたわ。わしの最大の欠点や……」

「でも、いいところがたくさんあるから」

　コヨコの笑え顔がおはいつでも光り輝かがやいていて、いい匂においがして、甘い味がする。最初のころは、さすがに会話が嚙かみあわないこともあったが、最近ではぴったり息もあっている。それよりも何よりも、このうちとけた雰ふん囲い気きはどうだ。いいムードだ。まるで恋こい人びと同士のようだ。

　もしかして、コヨコも、わしのことを……？

　つい、そんなふうに思ってしまう。

　そう考えるだけの材料はそろっているような気がする。

　だって、見るがいい。コヨコが肩かたにかけているバッグを。いつもよりふくらんでいる。

　あれは。

　あの中身は、もしや──、

「あ、これ、ね」コヨコがカタリの視線に気づいて、バッグをぽんと叩たたいてみせた。「お弁当、作ってきたの。あんまりおいしくないかもしれないけど……」

「いや、うまいやろ」カタリは自信満々で断言した。「他ほかの誰だれでもない、コヨコが作ってくれよったんやで？　そんなんむっ

ちゃうまいに決まっとるやんか」

「だと、いいんだけど」

「大だい丈じよう夫ぶやて。わしがぜぇんぶきれいさっぱり平らげてコヨコの料理は激ウマやっちゅうのんを証明したるわ。いやぁ、ラァーンチタイムが楽しみやなぁ。はよ昼にならへんかなぁ。こらもうアレやな、昼まで気合い入れてバリバリ仕事せえっちゅうことやな！　おっしゃー！　行くで、コヨコ！」

「うん」

　カタリはうなずいたコヨコの背中を抱だくようにして歩きだした。自然にそんなことをしてしまい、気づいてから、ええんか、こないに接近してええんか、わし！　と自問する。それくらい二人の距きよ離りは縮まっているのだ。いいかんじだ。連敗記録が途と切ぎれる時が本当に訪れてしまいそうだ。ベンテン・カフェを出る直前で「よう、カタリじゃねぇか」と声をかけてきた知人にも、むしろ運命の相手コヨコを見せびらかしてやりたいくらいだった。

「おう、ファルコーネのオッサンか。どないしたん。鉄のアイアン心臓ハーツソ協会サエテイの会長はんが直々に勧かん誘ゆう活動かい」

「いや、別件だ。〝赤い手〟の野や郎ろうに野暮用があってな」

　ロドリゴ・ファルコーネはかなり名の通った侵クラ入ツ者カーで、稀き代たいの稀少物レア・蒐集家ハンターでもある。当然、すぐれた戦士でもあり、褐かつ色しよくの肌はだに長めの黒い巻き毛、生気がみなぎる精せい悍かんな顔立ちという風ふう貌ぼうを裏切らない剛ごう毅きな男だ。カタリとは年こそ離はなれているが、稀少物レア・蒐集家ハンターの会合で意気投合して以来、たまに情報交こう換かんをする仲になった。とはいえ、キャリアも実力もまだまだ別次元だ。傍はた目めにはファルコーネが若造にいろいろ教えてやっているようにしか見えないかもしれない。

「まあ、お前ならうちに入れてやってもいいぜ、カタリ」

「冗じよう談だんポイやで。ライバルがアタマ張っとるクランに入るボケがどこにおんねん」

「ひよっこのくせしやがって、この俺をライバル呼ばわりか」

「あたりまえや。わしはまだまだこれからの男やで。オッサンはもう落ちてくだけやんか。そのうち余よ裕ゆうで追い越こしたったるわ」

「百年早えってんだよ、糞くそ餓が鬼きが」

　そう言いながらも、ファルコーネの目は愉たのしげに笑っている。本気にしていないのだ。やむをえないのかもしれないが、少々腹立たしい。だって、未来のことなんて誰にもわからないではないか。げんに、永遠につづくのではないかと思われた連敗記録にも、こうして終しゆう止し符ふが打たれようとしているのだ。せやろ、コヨコ──って、どないしたん？　コヨコの様子が変だ。眉まゆをひそめて、カタリの陰かげに隠かくれようとしている。まるで、誰かの視線から逃のがれようとしてでもいるかのようだ。視線？　誰の？　ファルコーネの……？

　カタリはコヨコをかばうように身体からだをずらして、ファルコーネの表情をうかがった。

「なんやねん、オッサン。わしのツレになんや用でもあるんかい」

「ん？　ああ、いや……」

　ファルコーネはコヨコから目をそらして、首を傾かたむけた。何を考えているのか、読めない表情だ。それはそうか。名声の陰で、狙ねらった獲え物ものを手に入れるためなら、人的な犠ぎ牲せいも顧かえりみず、策さく謀ぼうを巡めぐらすことも厭いとわないとの評判もある。単純な男ではない。

「カタリ。ちょっとつきあえ」

「ほえ？」

　それにしても、いきなりそうくるとは思わなかった。ファルコーネは意表を突つかれてぽかんとしているカタリの首に腕うでを回し、ぐいっと引っぱりながら、コヨコに「悪いな、お嬢じようちゃん。ちょっとだけ借りるぜ。すぐに終わるから心配するな」と声をかけた。有う無むを言わさぬ強ごう引いんな手口だった。そうしてカタリをベンテン・カフェの外まで引きずりだすと、ファルコーネはやけに真しん剣けんな顔つきになった。

「カタリ。お前、あの女とどういう関係だ」

「へ？　どうゆうも何も……ちゅうか、いきなりなんや」

「女か。お前の」

「ちゃ、ちゃうがな。そうなったらええなぁーとは思とるけど……って、なんでオッサン相手に打ち明け話せなあかんねん」

「もしかして、ここで知りあったのか」

「な──」

「やっぱりな。カタリ、忠告してやる。あの女はやめておけ」

「ど──」

「俺はお前の根こん性じようを買ってる。だから忠告してやった。あとはお前が決めろ。くわしいことが聞きたいなら、俺のところにこい。ただ、な──まだ若いお前にはわからねぇかもしれねえが、人間ってやつは弱い。生きるためなら、なんでもする。それだけは覚えておけ。いいな」

　ファルコーネはそう言い捨てて、店内へと戻もどっていった。出入り口なんて気の利きいたものがないベンテン・カフェは、鉄骨だけで支えられた建物の東と南の面から好きなように出たり入ったりできる。ファルコーネの後ろ姿は間もなく他の客にまぎれて見えなくなったが、彼を見送っていたのはカタリだけではなかった。なぜ気づかなかったのか。

　カタリがいる場所から五メーテルと離れていない鉄骨の陰に、コヨコがいた。

　聞いていた……？　まさか。どうして。

「コヨコ」

　名を呼ぶと、コヨコはびくっとして振ふり返り、ぎこちない笑え顔がおを浮うかべた。

「──あ、遅おそかった……から。あの……なんの話だったの？」

「え……あ、おお、べつに、な。たいした話やないねん。お、男と男の話や。ちょっとな、女の子にはな……」

「なんか、いやらしいかんじ？」

「ちゃ、ちゃうて！　ぜんぜんいやらしいことあらへんがな！」

「否定すると、かえってあやしいよ？」

「いや、ホンマやて！　じ、じつは、その、稀少物レア・蒐集家ハンターの会合のことでな。もとはとゆうたら、あのオッサンともそこで知りおうたんやで。こ、今度の会合でな……」

「カタリさん、嘘うそが下手」

「う、嘘ちゃうて！」

「ほんとに？」

「お、おう！　ホンマや、マジで！」

　胸が、ずぐん、と痛んだ。それが、コヨコに嘘をついたせいなのか、それとも、ファルコーネの話のせいなのか。カタリにはわからなかった。

8

　━━あの女はやめておけ。

　いやな予感はしていた。あの男の人の目。鋭するどい目。何もかもを見み透すかしているかのような目。あの目に見すえられた瞬しゅん間かん、鉛なまりのかたまりをのみこんだみたいな気分になった。苦しい。でも、のんでしまった。吐はきだせない。わたしはどんどん鉛をのみこんで、その鉛はわたしの中にたまっていって、わたしは少しずつ重くなっていって、いつかわたしは身動きがとれなくなる。

　お弁当なんか作ってこなければよかった。料理なんかしたから、いつもより遅くなった。いつもどおりだったら、あの男の人と行き会うこともなかったはずだ。そうしたら、こんな気持ちになることもなかった。いや、もとはといえばカタリさんのせいだ。アンダー

グラウンドで、休きゆう憩けい中、食事の話になったとき、カタリさんがあんなことを言ったから。「わしはオール外食やな。自分で作られへんし。知らんのや。料理とかな。見たこともないしな」「お母さんとか、作ってくれなかったの？」「ないなぁ。おらへんし」「……え？」「わし、親の顔もよう知らんねん」「あ……ごめんなさい」「お？　ええて、ええて。気にせんといてくれ。親おらへんくても、べつに困ることもないしな。わりと気楽なもんやで？」

　コヨコにはよくわからない。

　タツローと違ちがって、コヨコの家はごく普ふ通つうだった。父がいて、母がいた。年の離はなれた姉が二人いた。父は真ま面じ目めに働いて、母は家のことをしっかりやっていた。母の料理は、見た目はそこそこだったけれど、おいしかった。母はしばしばコヨコを手伝わせて、料理を教えた。「いつか旦だん那な様に作ってあげる日がくるんだからね」と口くち癖ぐせのように言っていた。「奥さんが作ったご飯がおいしければ、旦那様はちゃんと家に帰ってくるものなんだよ」と。そうなんだ、とぼんやり思っていた。

　もしかして、お弁当でも作ってあげたら、喜ぶかな？

　単なる思いつきだった。

　でも、考えだすと、少し心が躍おどった。

　タツローは偏へん食しよくが激しくて、あれは嫌きらい、あれは食べられない、あれはまずいと、何を作ってもケチをつける。だから、最近はもう作らない。お金をあげて、好きなものを食べさせる。タツローもそのほうがいいと言う。

　誰だれかのために、料理を作る。

　カタリさんなら、何を作ってもおいしいおいしいと喜んでくれるだろう。残さず、ぜんぶ食べてくれるだろう。作り甲が斐いがある。

　コヨコはタツローの目を盗ぬすんで前の日に材料を買っておき、早起きして、貸し宿の台所を使わせてもらい、久しぶりに料理をした。なんだか、自分が普通の女の子みたいで、気分がよかった。相手が誰とか、そういう問題じゃなくて。ううん。本当なら、タツ

ローのために料理を作りたい。おいしく食べて欲しい。でも、それは叶かなわない。タツローはわたしのことを何もわかっていない。わかってくれようともしない。他人を騙だまして、平気なわけがないのに。そんなことさえ、タツローはわかっていない。

「昨日ゆうといたけどな。今日はコヨコにも前に出てもらうで」

　カタリさんはもういつもと変わらない。平静を装よそおっているだけかもしれないけれど、そこまで器用な人だとは思えない。

　馬ば鹿かみたいに正直で。まっすぐで。少しうざったいくらい、一生懸けん命めいで。わたしの嘘をぜんぶ信じて。泣いてくれて。毎日、稼かせいでくれて。わたしに剣けんを教えてくれて。練習のときは真剣そのもので。

「……ちょっと、怖こわいけど」

「大だい丈じよう夫ぶやて。わしがいてる。何があっても守ったるさかい」

「うん。ありがとう」

　いい人だ。

　わたしの笑え顔がおは作り物だけれど、そうじゃなければいいのにと、たまに思う。

　わたしは、この人を、騙している。

　でも、この人のことなら信じられるのに、と思う。

　信じてもいい人なのに。

　たぶん、誰にとっても信ずるに値あたいする人なのに。

　──でも、遅いよ。

　最初から手て遅おくれだよ。

　わたしの胸が、ずぐん、と痛む。わたしの作り物の笑顔が崩くずれそうになる。わたしは必死でとりつくろう。わたしは言い訳する。

でも、ね。

でも、このお弁当は、本当に、丁てい寧ねいに、がんばって、作ったんだよ。

嘘うそじゃないよ。

おいしいって、言ってもらいたくて。喜んで欲しくて。

ただそれだけを、願って。

9

「……なーんか、変だよな、あいつ……」

ベッドに転がって、酒さか瓶びんを片手に煙草たばこをふかす。振ふり返ると、ここしばらく、そんなことしかしていない。かなり暇ひまだが、コヨコのやつ、王立銀行に口座を作って、そこに金を入れちまいやがった。王立銀行には本人確かく認にんの装置があるので、名義人以外が口座の金に手をつけることは基本的にできない。コヨコも学習したというわけだ。毎日飲み食いできる程度の金はくれるが、クァラナドで遊ぶなんてとうてい無理だ。くそ。やべーな。たまってるわけでもねーのにやりてー。どうする？　いや、どうするも何も、方法なんて一つしかないのだが、そんなことばかりしていると、いいかげんむなしくもなる。そうだ。考えろ。コヨコのことだ。

「気づかれねーとでも思ってんのかよ、あいつ。こそこそ弁当なんか作りやがって……」

それだけじゃない。

たまにカタリのことが話題に出ると、ふっ、と、コヨコの表情がやわらぐ一いつ瞬しゆんがある。

たとえば、「心配しなくていいよ。ばれたりしないよ。あの人、すごく単純で、馬鹿」みたいなことを言いながらも、けなしているかんじがしない。むしろ、誉ほめているようにさえ聞こえる。た

だ、そんなことでいちいち目くじらを立てるのも大人げないから、「へえ」と軽く流してやると、「そういえば、あの人──」って、おい、まだつづくのかよ？

あのな。聞きたかねーんだよ。そんなくだらねー、どうでもいい話。つーか、むかつくんだよ。なんだ、あの人って。その呼び方。タツローの様子を見て、コヨコもやがて口を閉ざすが、今度は会話がなくなる。共通の話題がないのだ。だから、何を喋しやべればいいかわからない。タツローも、おそらくコヨコも。俺たちって、いったいなんなんだ……？

俺のこと、好きなんじゃなかったのかよ。

俺が好きだから、一いつ緒しょに逃にげてきたんだろ。

臆おく病びよう者もので弱虫の俺を元気づけて、俺のために稼いで、俺に笑いかけてくれるのも、俺が好きだからだろ。

違ちがうのかよ？

──だけど、さ。

「どこがいいんだよ、俺の……」

わからない。

さっぱりわからない。

親おや父じとおふくろの奴ど隷れい同然だった俺。サイガの市マチでろくでなしどものパシリだった俺。酒の勢いで連中の一味の不細工な姉貴を抱だいちまって、みんなに馬鹿にされた俺。そんな屑くず連中からも見放された俺。剣もろくすっぽ使えない俺。誰だれのことも守ってやれない俺。自分のことさえ守れない俺。暇で身体からだを持てあましてこの部屋で猿さるみたいに自分で自分を慰なぐさめてばかりいる俺。口先ばかりの俺。

クァラナドに行ったことがばれた日、俺はコヨコの前で土ど下げ座ざして「わかった！　侵クラ入ツ者カーやってみるよ、稼ぐって、稼いでみせるって、な？　任せろよ」とつい言っちまった。しょうがなく、ベンテン・カフェで同行者を募つのって、アンダーグラウンドへ。結果は無残だった。何もできず、大おお怪け我がをしただけで終わった。まあ、同行者は気のいい連中で、つたないな

がらも応急手当してくれて、宿まで送ってくれた。コヨコは俺にすがりついて泣いてたっけ。あのとき、同行者の中に結構いい女がいて、「妹さん？」なんて訊きいてきたもんだから、俺は思わず「あ、ああ」なんてうなずいて。あとでコヨコにつねられたが、俺はあれで思いついた。「──そうだ、妹だよ。妹」「……え？」

　俺にはいいところなんて一つもない。俺はコヨコを利用しているだけだ。コヨコは結局、俺の言うことをなんでも聞くからだ。だいたい、「不治の病に冒おかされた兄のために侵クラ入ツ者カーを志す妹」なんて馬鹿げてる。馬鹿げすぎてると俺だって思う。「嘘ってのはさ、それくらいのほうがいいんだよ。かえって真実味が増すんだって」「……そういうもの？」「ああ。間違いねーって」何が間違いねーだ。俺は本気にしてなかった。まさか、コヨコがマジでやるなんて思ってなかった。コヨコが間ま抜ぬけなジジイ侵クラ入ツ者カーの同情をひいて三千ダラーせしめてきたときは、おいおい、と思った。そのジジイもジジイだけどな。コヨコ、お前もすげーぞ。ありえねーぞ。そこまでやるか？　──そこまで、俺が好きなのか？

　変だよ、お前。

　俺が好きだなんて、おかしーって、絶対。

　たしかに、隣となりの家のコヨコは俺にとって救いだった。コヨコの結けつ婚こん話を聞いたときはショックだった。でも、あたりまえだよな。餓が鬼きのころの約束なんてな。俺もあのころとは違うし。女も一応、何人か抱いたし。好きでもない女を、ただやりたいってだけで、機会があったからってだけで。俺にはそんな資格ねーよな。じつはお前を好きだったなんて、言えねーよ。思ってねーし。嘘だし。それなのに、コヨコは言ってくれたんだ。「ずっと好きだったんだよ」って。国境を越こえる前の夜に。コヨコは目をつぶった。俺は抱こうとした。やれ。やれ！　やっちまえ！　据すえ膳ぜんってやつだろ……？　いや。違う。ダメだ。俺には抱けない。抱いちゃいけない気がした。

「──コヨコは、あいつが好きなのか……？」

　まさか、と思う。だが、否定しきれない気もする。もやもやする。たまってるんだ。いや、そっちのほうじゃなくて。ストレスだ。パーっとやりたい。発散したい。そのためには、やっぱり、金だろ。金が必要だ。もう夕方だが、どうせコヨコはまだ帰ってこな

い。日ごとに帰宅時間が遅おそくなってきている。そのぶん、やつと一緒にいる時間が長くなってきてるってことだ。俺を放ほうっておいて。俺を一人にしやがって。

　タツローはベッドから身を起こした。煙草たばこはとっくに根元まで燃えつきて、灰がそこらに散らばっている。吸い殻がらを灰皿に放り、酒をぐびりと一口飲むと、度胸がついた──と思ったのだが、酒さか瓶びんを床ゆかに置いて、ベッドの下にもぐりこみ、ココヨコのバッグに手を伸のばしているうちに、心臓がドクドク暴れだした。まったく、どうしようもねー臆病者チキンだな、俺……。

　だが、バッグに指の先がふれた。つかんだ。引っぱった。引っぱりだしてしまった。もう引っこみがつかない。開けて、中を調べた。下着。服。生理用品。薄うす汚よごれた人形。これ──そうだ。餓鬼のころ、親に買ってもらったとかいって、「お兄ちゃんに、ココヨコと一緒にお名前考えて欲しいの」とか、なんとか。俺も馬ば鹿か正直にいくつか候補をひねりだして、結局、その中からココヨコに選ばれた「チカコ」が人形の名前になった。まだ持ってたのかよ。マジかよ。物持ちがいいやつだな。こんなもの、持ってんじゃねーよ、馬鹿。馬鹿が……。

　心が揺ゆらぎかけたが、首を振ふって深呼吸をしたら、少し落ちついた。人形なんか知るか。金だ。ココヨコのことだ。何かのときのために、きっといくらか隠かくし持っているに違いない。ああ見えて、しっかりしてるんだ。金。あるだろ。ねーのか。探せ。金。その金でクァラナドでも行って、女でも抱けば、ちょっとはすっきりするだろ。ココヨコは──怒おこるかもな。怒るよな。いいかげん、ブチキレるかもな。でも、いい。それで嫌きらわれるなら、それでもいい。そのほうがいいかもな。ココヨコにとっては。俺よりは、あの魚みたいな顔をした野や郎ろうのほうがマシかもな。それで、楽しそうなんだろ？　弁当なんか作りやがって。俺の前では我が慢まんしてんだろ？　むかつくんだよ。そういうのが一番むかつくんだ。

　だから、俺は探す。金を探す。ある。たぶん、ある。ほら、あった。

　これだろ。布につつんである。ハンカチか。中身は硬こう貨かだ。丸くて──いや、違う。

　これは、環だ。金じゃないのか……？

　包みを開けてみた。

　指輪だった。

　赤い石がついている。よくわからないが、結構高そうだ。コヨコが実家から持ちだしてきたのか。そうかもしれないが、とにかく初めて見た。

　なんだ？

　これはなんだ？

　胸がむかむかする。

「なんだよ、これ」と呟つぶやいてみた。

　その問いに答えるようにドアが開いた。

「ただい――」

「おかえり」

　タツローはやけに冷静だった。コヨコは絶句して大きく目を見開いている。見ている。タツローの掌てのひらの上にあるものを。指輪を。

　そうか。そうかよ。そうなんだな。

　タツローは指輪をぎゅっと握にぎった。

「高く売れそうだな、これ」

「……それ、は、何かのときのために……」

「お前さ」

　タツローは立ちあがってコヨコに近づいていった。

　ああ、なんか、あれだ。足あし許もとがふらふらする。目の前がゆらゆらしてる。そうか。俺は冷静なんかじゃない。動どう揺ようしてる。しまくってる。苛いらついてる。コヨコはうつむいている。本当は、バッグを勝手に開けたことに対して激げき怒どしてもいい。「何してるの！」と俺を張り倒たおしたっていい。その権利

が、コヨコにはある。でも、そうしないのは、そういうことだろ。もらったんだろ、やつに。それを、大事に持ってたんだろ。

「お前、さ……！」

　タツローはコヨコを部屋の中に引っぱりこんで、乱暴にドアを閉めた。その瞬しゅん間かん、一気に弾はじけた。何も考えられなくなって、気がつくと身体からだが動いていた。タツローは思いきりコヨコを突つき飛ばした。

「──きゃっ……！」

　床に倒れこんだコヨコを見下ろしたら、少しだけ胸がすっとした。違う。泣きたくなった。何やってんだよ。なんだよ、俺。むしゃくしゃして、指輪を床に叩たたきつけた。床を蹴けって、ベッドの脚あしを蹴って、壁かべを殴なぐって、自分の頭をガスガス殴った。それでも気がすまなくて、でも、これ以上どうしたらいいかわからなくて、床に座りこんだ。壁のほうを向いて、膝ひざを抱かかえた。

　どれだけの時間、そうしていたのかわからない。

　コヨコはずっと泣いていた。泣いている声がした。俺も泣きたかったけれど、涙なみだなんか出てこなかった。俺は考えていた。考えて、考えた。あらゆる手段を考えた。答えなんか出なかった。でも、一つだけはっきりしたことがあった。

　一人はいやだ。一人になりたくない。コヨコが離はなれていくなんていやだ。耐たえられない。

「……お前、さ」

　ようやく涙が出てきた。

　一人きりになることを想像した途と端たん、にじんできた、薄うす汚ぎたない涙だった。

「あいつのこと、切れよ。次で、終わりにしろよ。俺の容よう態だいが悪くなったとか、なんか適当なこと言って、最後にたんまり金むしりとって、もう会うな。絶対、会うな。会わないでくれよ。頼たのむよ……頼むから、さ……」

　コヨコはしゃくりあげながら、うなずいてくれた。

　それが本心かどうかなんて、俺にはわからないけれど。

10

　唐とう突とつだった。ただ、何かが起こって、状じよう況きようが変化するかもしれない。そんな虫の知らせはなきにしもあらずだった。

「……あの、ね。お兄ちゃんの容態が、急に、悪くなって――」

　コヨコは待ち合わせの時間より十五分早く現れた。弁当は持っていなかった。申し訳なさそうな表情で、カタリと目をあわせようとしない。

「そばに、ついててあげないと、いけないから……それで、わたし、もう……」

「あ、そ……っか。せやな。あはは」

　自分でも空々しい笑い声だと思った。そもそも、笑うところではないような気もする。

「いや、そらアレやで。ついててやらなあかんで。病人っちゅうのんは、ただでさえ心細いもんやろ。おそらくな。わしは病気したことないからわからへんねんけど」

「……うん。わたしも、そう思って」

「な、なんやねんな。そう落ちこむなて。いや、そら落ちこむやろけど、コヨコがしっかりしとったらな、な。タツローはんのこと、元気づけてあげなあかんのやろ」

「うん……そう、だよね」

「せやで。つろうてもな。笑わなあかんで。そんで、耐えきれへんくなったら、思いっきり泣いたったらええねん。そしたら、すっき

りするやろ。また笑えるやろ」

「カタリさんは……そうやって、いつも笑ってるの？」

「何ゆうてんねんな！　わしは、アレや。生まれつき脳天気やさかい、つらいとか苦しいとか、な……そんなん、ようわからへん。アッハハハハ！　ほっといても毎日元気いっぱいで、元気すぎて困るくらいでな！　コヨコにも分けたってやりたいくらいやで！」

「もう、分けてもらってるよ。いっぱい」

「そ、そおかぁ？　まだ足りてへんちゃうん？　せ、せやから、な……アレやで、わしは結構ここらにおるからな。なんかあったらな、貼はり紙出してくれよったらええねん。また、元気、分けたるさかい」

「……うん。そ、だね」

「ホンマやで」

「うん」

　コヨコは顔を上げて微笑ほほえんだ。

　どこか苦しそうな、弱々しい笑みは、だが、一瞬で消えた。

　コヨコはカタリに背中を向けた。

「──ありがとう。今まで、いろいろ」

「な、なんやねんな。水くさい。ええっちゅうねん。そんなん、べつに」

「でも、ありがとう」

「お、おう！」

「……ごめん、ね」

　なんで謝るん。そう問う前に、コヨコは歩きだした。離れてゆく。ゆっくりと。じつに、ゆっくりと。カタリの希望的観測かもしれないが、まだ迷っているかのように。別れを惜おしんでいるかのように。立ち止まれ！　どうか振ふり返ってくれ！　もう一度だ

け、コヨコの笑顔が見たい……！　カタリは祈いのった。それでいて、その祈りが通じるとは思っていなかった。

　だから、コヨコが足を止めて振り向いたときは、心底から驚おどろいた。

　両手を前に突つきだしたポーズで、「振り～か～えれ振～りかえ～れ」と念を送っている最中だったから、余計だった。

「──あの……」

　コヨコは、だが、くすりともしなかった。顔は強こわ張ばっていて、声も低かった。

「お兄ちゃんの病気を、治すのに……お金が、いるの。昨夜、医術士さんに診みてもらったら、そう言われて。お金があれば……治るかもしれないって。でも、大金で……」

　全身から力が抜ぬけた。

　奈な落らくの底に突き落とされたような気分だった。

　それなのに、口が勝手に動いていた。

「ナンボいるん」

「……ひゃ、百万、ダラー」

「そらたしかに大金やな」

　わし、何するつもりなんかな。アホやで。真性のアホや。なんでなん？　そないなことする必要あるか？　ないな。たぶん、ないわ。ないかもわからん。せやけどな。

「──よっしゃ。百万やな。他ほかならぬコヨコの頼たのみや。わしが聞かんで誰だれが聞くっちゅう話やろ。任しとき」

「……え」

「行こか。銀行」

　わしは信じたいんや。コヨコを疑いとうない。せやったら、信じなあかんのや。誰がなんとゆおうと、わしはわしを曲げたりせえへ

ん。それが漢おとこや。漢の道やろ。ちゃうんかい、ボケ。

11

　──どうして、だろう。まさか、あんな馬ば鹿かげた話を信じたとは思えない。不治の病だなんて言っておいて、いきなり治るかもしれないとか、百万かかるとか、まったくふざけている。悪ふざけがすぎる。自分でもそう思う。違ちがう。そうじゃなくて。

　わざと、だ。いくらカタリさんでも、あそこまで言えばわかるだろう。騙だまされていたんだって、気づくだろう。わたしの目的はお金だったんだって悟さとるはずだ。そして、怒おこるに違いない。わたしに罵ば声せいを浴びせる。殴なぐるかもしれない。当然、わたしを嫌きらいになる。憎にくむ。恨うらむ。それでいい。そうして欲しい。いっそ、そのほうが気が楽だ。わたしは楽になりたかった。それだけだった。それなのに。

　コヨコは鉄てつ鎖さの憩いこい場ばの公園で、ベンチに腰こしかけてカタリを待っている。カタリは今ごろ第一王立銀行で金を下ろしているだろう。戻もどってくる前に、姿をくらましてしまおうか。でも、足に力が入らない。たくさん分けてもらったはずなのに、元気が出ない。さっきかけてもらった言葉が頭をよぎる。「つろうてもな。笑わなあかんで」そうだ。笑うんだ。無理だ。笑えない。考えてみたら、最近、タツローの前で笑っていない気がする。タツローのそばにいても笑えないのに、こんなときに笑うなんて、できるはずがない。だけど、変だ。

　カタリさんと一いつ緒しよにいたときは、わたし、笑っていた。



「……わたし、タツローが、好き」

　そう呟つぶやいてみた。本当だ。嘘うそじゃない。嘘じゃない、と思う。

　だって、隣となりの家のお兄ちゃんはいつも一人で。寂さびしそ

うで。暗い目をしていて。でも、やさしくて。大きくなると、わたしをさけるようになって。それでもしつこく声をかけたら、「お前さ、あんまり俺にかまうなよ。変な目で見られたくねーだろ」「大だい丈じよう夫ぶだよ」「大丈夫じゃねーって」「そう、かな……」「そうなの。お前は俺とは違うんだから、さ」

　なんて悲しいことを言う人だろうと思った。

　でも、タツローも悲しそうだった。

　タツローはいつも悲しそうだった。

　ずっとあのまま悲しい表情で生きてゆくんだろうか。そう考えると、胸が張り裂さけそうになった。道ですれ違うたび、たまに忍しのびこむようにして家に帰るタツローの姿を見かけるたび、心臓が、きゅっ、と縮んだ。親が決めた相手と結けつ婚こんすることになったとき、ふと、タツローはどんな顔をするだろう、と思った。傷つくだろうか。寂しく感じるだろうか。しばらくまともに話もしていなかったのに、なぜか確信があった。きっとタツローは、苦しそうで、でも、どこかあきらめたような悲しい顔つきで、ため息をつくに違いない。コヨコは知っていた。昔、タツローは、両親に家から追いだされると、いつもコヨコを待っていた。自分の家の前で、膝ひざを抱かかえて座りながら、隣の家からコヨコが出てくるのをじっと待っていた。あたりまえだった。だって、タツローに声をかける人なんて、コヨコしかいなかったんだから。

　タツローはいい人じゃない。怠なまけ者だし、臆おく病びようだし、弱虫だし、自分勝手だし、すぐ怒るし、いかがわしい店に行ったりもしたし、本当にどうしようもない。わかっている。

　カタリさんはいい人だ。いつも明るくて、おかしいことばかり言って、笑わせてくれて、楽しくて、一いち途ずで、正直で、頼たより甲が斐いもある。すごくいい人だ。でも──、

　タツローが一人になったら。また一人になったら。タツローは、どうするだろう。どうなってしまうだろう……？

「コヨコ」

　不意に後ろから肩かたを叩たたかれた。はっと息をのんで振り向くと、もっと驚く羽目になった。

血の気が引いた。

12

不安だった。コヨコのやつ、うなずいてはみせたものの、あの野や郎ろうと逃にげちまうつもりじゃねーのか。コヨコを信用できないわけじゃない。むしろ、俺は俺を信用できない。自信もない。だいたい、もしコヨコがあの野郎を選んだとしても、腕うでずくで連れ戻す力なんか俺にはない。ことによると、最近、あの野郎と剣けんの練習をしていたらしいコヨコのほうが、俺より強いかもしれない。つまり、何がどうなっても、俺は受け入れるしかないってことだ。おかげで、よりいっそう不安なんだ。

だから、コヨコを尾び行こうした。ベンテン・カフェでのやりとりをこっそり見ていた。なんだか、事情があって離はなれなきゃならない恋こい人びと同士みたいな雰ふん囲い気きで、むかついた。

もういい。金のことはいい。あとは帰ってきてくれればいい。二度とあいつとは会うな。それでいい。そうしたら、ぜんぶ水に流してやるから。この期ごに及およんでそんなことを考えていたタツローから五メーテルと離れていない場所で、コヨコは立ち止まり、金の件を持ちだした。しかも、百万ダラーって。おい。十万か二十万でいいだろ。百万はやりすぎだろ。いくらなんでも、百万はねーよ、百万は。

それにしても、金額のことすら打ちあわせていなかった自分たちの杜ず撰さんさはどうだ。そもそも、コヨコは何度もベンテン・カフェで馬鹿な侵クラ入ッ者カーをひっかけて、たいした額ではないが、金をせしめてきた。考えてみたら、やばいんじゃねーの？　コヨコはちょっと頑がん固こで度胸があるだけのまっとうな家で育った普ふ通つうの娘こだから、迂う闊かつでも仕方ないけれど、俺は？　少し頭を働かせれば、わかるはずなのに。コヨコはずいぶん危ない橋を渡わたってきたということだ。今まで何事もなかったのは、きっとただ単に運がよかったからだ。今回の件だって、カタリがブチキレればおしまいだ。つーか、キレるって。百万だもの。百万って。コヨコそれはねーよ馬ば鹿かやりすぎだって。

　ところが、カタリの返事は「任しとき」だった。

　──え……？

　あの、ひゃ、百万ですよ？　桁けた間ま違ちがってない？　嘘だろ……？

　嘘ではないようだった。タツローが呆ぼう然ぜんとしている間に、カタリとコヨコはベンテン・カフェから出て行ってしまった。もちろん、あとを追った。どうやら二人はすぐ近くの鉄てつ鎖さの憩いこい場ばへ向かう模様だった。カタリはコヨコを公園で待たせて、銀行へ。もしかして、金を下ろすつもりか。百万。マジか。百万だぞ。疑うだろ、普通。アホか？　真性か？　まあ、それならそれで、こっちは万ばん々ばん歳ざいだけど、な……。

　公園のベンチに座ってカタリを待っているコヨコの様子が、なんだかおかしい。自分の肩をぎゅっと抱だいて、うつむいて、苦しそうで、つらそうで、今にも泣きだしそうで。どうしたんだよ。百万だぞ、百万。しばらく遊んで暮らせるじゃねーか。もう誰だれかを騙だまくらかす必要もない。良心の呵か責しゃくっていうのかな。コヨコはもともといいやつだし、そういうので悩なやんでたかもしれねーけど、それともおさらばだ。百万を元手にして、商売を始めるって手もある。そうだ。アイスクリーム屋でもやるか。お前、好きだろ、アイスクリーム。コヨコに売り子をやらせれば、きっと売れるだろうし。我ながら名案じゃないかと思った。だが、忘れてはいけない。ここはサンランド無統治王国で、その首都エルデンなのだ。

　木こ陰かげから顔を出しているタツローの視線の先で、誰かが後ろからコヨコに近づいていった。

　男だ。三人いる。全員侵クラ入ツ者カー風の身なりで、真ん中の一人は、金きん髪ぱつを短く刈かって、ちょっと薄うすぼんやりした顔をしているが、ものすごくガタイがいい。

　そいつの手が、コヨコの肩を叩いた。コヨコの名を呼んだようだ。は？　名前を……？　知りあいか？　待てよ、短たん髪ぱつで身体からだがでかいやつの話を、前、コヨコの口から──、

　たしか、スティーブ、とかいったか。コヨコが例の不治の病に冒おかされた兄の話をしたら、目を赤く腫はらして、何度かアンダー

グラウンドに同行してくれたという間ま抜ぬけだ。ただし、稼かせいだ金は人数割りだった。なんだケチくせーな、と思ったことを覚えている。

　もしかして、あいつか。あれがスティーブか。

　コヨコはびくっとして振ふり向き、その顔が、凍こおりついた。

「……おい。なんか、雲行きが……」

　あやしいどころではない。男はコヨコの両りよう脇わきに手を差しこんで、軽々と持ちあげた。コヨコは抵てい抗こうしない。いや、できないのだ。そりゃそうだ。あれだけの大男だ。あらがったって、どうにもならない。それに、ここはエルデンだ。大声を出したところで、助けてくれる物好きがいるかどうか。実際、なんだなんだヒューヒューと、おもしろがって囃はやし立てる声や口笛は周りからあがっているが、止めようとする者なんて誰もいない。なんだよ。畜ちく生しよう。おい、助けろよ。誰か助けてくれって。だって、俺じゃあ━無理だろ。コヨコがどこかへ連れ去られようとしているのに、手をこまねいてそれを見ているだけってのは、さすがにどうかと思うけれど、俺が行ったって、何ができる？　何も。何もできない。できねーけど、さ。

「コヨコ……！」

　俺は弱いけど。俺は臆おく病びようだけど。俺はろくでなしだけど。俺は能無しの役立たずの屑くずだけど。でも、いや、だからこそ、俺は黙だまっていられない。コヨコしかいないんだ。今の俺には、コヨコしか。タツローは木陰から飛びだして、スティーブたちを追った。

13

　下向きの三角形と上向きの三角形を組みあわせた「相克Ｃ世界Ｗ象徴Ｓ図案Ｍ」が浮うき彫ぼりにされている百万ダラーＺＧ合金貨なんて、そうそう持ち歩くものじゃない。だが、緊きん張ちようはしていなかった。それどころか、カタリは合金貨をひょいと放ほうってはつかみ、放ってはつかみしながら歩いていた。世間広しと

いえども、百万ダラーをここまでぞんざいに扱あつかう者はめったにいないだろう。しかも、オメガバンクに預けてあるいくつかのお宝を除外すれば、この百万ダラーはカタリのほぼ全財産だ。それなのに、ぜんぜん惜おしくない。

「ま、金は天下の回りもんや」

　もともと、金銭に対する執しゆう着ちやくは薄いほうだ。なければないでなんとかなるし、なんとかならなければ野垂れ死ぬだけ。わしがいななっても、誰も困らんしな。天てん涯がい孤こ独どくっちゅうんは気楽なもんや。せやから、どんな結果になりよっても、わしはわしを曲げへん。そないな生き方もできる。これはこれでええもんやで。せやろ？　だから、なぁ、泣くなて。泣いたらあかんて。カッコ悪いやんか。そろそろコヨコが待っとる公園に──ら？

「おらへんやないか」

　そういう可能性も考えていなかったわけではない。ただ、妙みようだ。さっきよりもずいぶん人が多い。なんだか騒さわがしい。何かあったのか？　胸騒ぎがした。

「ちょっと、すんまへん──」カタリは通行人をつかまえ、できるだけ気持ちを落ちつけて尋たずねた。「そこのベンチに座っとった女の子、どこに行ったか知りまへんか。こう、ちっこくてな、肌はだはチョコレート色で、三つ編みで……」

「僕の名前を一度で覚えることができたら、教えてあげてもいいですよ」

「名前？」

「ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒです」

「ほえ？　ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ？」

「おめでとうございます」線が細くて眼鏡めがねをかけた気のよさそうな男は、にっこり笑って西のほうを指さした。「彼女なら、男性三人に連れられてあっちへ行きましたよ。お連れの方なら、早く見つけてあげたほうがいいのではないですか。何やら物ぶつ騒そうな雰ふん囲い気きでしたからね」

「──な、なんやてぇっ！　い、急がな！　すまんな、眼鏡のニーチャン、おおきに……！」

「どういたしまして」

　カタリは走った。西。西の方向。えらく漠ばく然ぜんとしているが、余計なことは考えなかった。どこや。どこにおんねん。魔導兵がうろついている鉄てつ鎖さの憩いこい場ばから離はなれたということは、コヨコに危害を加えようとしているに違ちがいないのだ。急げ。鼻を利きかせろ。耳を傾かたむけろ。空気の流れを読め。勘かんを働かせろ。むしろ本能だ。本能の赴おもむくままに駆かけろ。ひたすら駆けろ。そうして環かん状じよう通の手前あたりまできたときだった。小道の入り口の前にしゃがみこんで、その先をうかがっている痩やせた男がいた。ピィーンときた。

　ここか。ここやな。カタリはその男におおいかぶさるように身を乗りだして小道を見た。いた。男が三人いる。うち一人はやたらとでかい。コヨコは彼らに取り囲まれて、壁かべに背中を押しつけている。男たちに激しい口調でさかんに何か言い立てられて、震ふるえているようだ。

「──コヨコ……なんちゅうこっちゃ！」

「ほんと……マジやばいって」

「やばすぎやで！　ちゅうかな、お前じぶんもな、通りがかりかなんか知らんけど、黙って見とらんで助けるとか救うとか救助するとかあるやろ！　漢おとこやったらな──って、お……？」

「あ」

　見上げた顔に見覚えがあった。ありまくりだった。

「……なんでお前じぶんがここにおんねん」

「え……いや、なんつーか、その……」

「まあ、ええわ」

　本当は、よくはない。ぜんぜんよくなんかないが、今はそれどころじゃない。

　カタリは「おっしゃ」と気合いを入れて走りだした。何か事情があるのかもしれない。あの連中にも言い分があるのかもしれない。よくわからないが、関係あるか、ボケ。問答無用じゃ。カタリはダッダッダッダッダッダッ走って跳とんだ。一番手前にいた出っ歯の男がこっちを向いた。そのほっぺたに狙ねらいを定めた。「我流ッ！」さあ、思いっきり食くらうがいい。渾こん身しんの力をこめた、グレイト・タイフゥーンな飛び蹴げりを。「━超救助レスＱ蹴げりィィィエッ……！」

「ぶっ！」「━うご！」「ずおっ……！」出っ歯は見事に吹ふっ飛んで、真ん中のでかいのとその向こうの堅かた太ぶとりしたやつも巻き添ぞえにした。カタリはスタッと着地し、吃驚びつくり仰ぎょう天てんしているコヨコの腕うでを引っぱって自分の後ろにかばい、首の骨をポキキッと鳴らしてみせた。

「おどれら、男が三人がかりで女の子囲みくさりよって何さらしとんのじゃ、ボケェ！」

「……て、てめえ……」一番最初に起きあがったのはデカブツだった。堅太りもすぐに立ちあがって出っ歯を助け起こした。デカブツは、だが、まだ状じよう況きようを把は握あくできていないようで、目を白黒させている。あの一発がきいているのだろう、出っ歯もふらふらしていて、ただ一人、堅太りだけが怒ど髪はつ天を衝つく勢いで突つっこんできた。「何さらしとるてそりゃこっちの台詞せりふじゃ！　いてこますどこんガ━」ッツン、と、その顎あごに頭ず突つきを見み舞まってやった。あっちは突とつ進しんしてきたところだったし、こっちも猛もう進しんしたので、すごい衝しよう撃げきだった。堅太りは仰あお向むけにバッタンと倒たおれたが、カタリの額もパックリ割れたかもしれない。でも、痛いだのなんだのといっている場合じゃない。ようやくデカブツがカタリを敵だと認にん識しきしたようだ。くる。大おお股またで近づいてくる。うほっ。でかっ。二メーテルあるんちゃうか。そんな大男の丸太のごとき右足が、唸うなりをあげて襲おそいかかってきた。ブオンッ！　とっさに伏ふせてなんとかよけたが、あんなもの食くろたら死んでまうがな！　もっとも、相手は大きいぶん、足あし許もとが弱そうだ。カタリはデカブツの左足につかみかかろうとしたが、阻そ止しされた。出っ歯だ。出っ歯の前蹴りが待ちかまえていたのだ。「━ぐっ！」カタリは肩かたのあたりを蹴られてひっくり返った。その腹部にデカブツの巨きよ大だいな足がドッシリめりこんだ。「おぼあぁっ……」「━カタリさん……！」

「なんだ、てめえ。コヨコの知りあいか」

　デカブツはコヨコを一いち瞥べつしてから、カタリを踏ふんづけている足に力をこめてグリグリした。

「……ぐう、あっ……」

「まさか、不治の病とかってのに罹かかってるっていう兄貴じゃねえよな。似てねえしな。じゃあ、なんだ。俺みたいにコヨコに騙だまされたクチか」

「……だ、誰だれが、騙さ、れ──」

「ひでえ女なんだよな、実際。かわいそうだと思って、アンダーグラウンド何回も連れてってやって、稼かせぎまで分けてやったのにな。人の純情踏みにじりやがってな」

「つってもよぉ」と、出っ歯が顔をしかめて頬ほおをなでながら口を挟はさんできた。「いきなり『俺の嫁よめさんになってくれ』はねえよな、スティーブよぉ。普ふ通つううひくって」

「う、うるせえぞ、カール！　お、俺は、俺の嫁さんになれば、ぜんぶ解決すると思ってな！　小さい女はでかくて強い男と結けつ婚こんするのが一番幸せだからな！」

「ンな幸せ聞いたことねえよ」

「いいんだ！　とにかくコヨコはな、『考えさせて』って言ったくせにな、待ち合わせにこなかっただろ！　考えるってことは普通オーケーかもしれねえと思うだろ！」

「思わねえよ……」

「俺は思ったんだ！　それだけでもひどいのにな！　話によるとな、コヨコはな、別の男相手にな、同じようなこと何回も何回も繰くりかえしてるっていうだろ！　許せねえ！」

「ははあん。つまり、義ぎ憤ふんってやつか」

「そうだ！　その、馬ば糞ふんだ！」

「義憤、な。まあ、ようするに私し怨えんなんだろうけどな。女に

はずいぶん騙されてっからなぁ。お前」

「う、う、うるせえぞ、カール！　こ、こんな小さい女なら、そんなことしねえと、思ったのにな！」

「大きさは関係ねえよ。小さくたって、タチの悪い女はいる。でも、そういう女には、しっかりお仕置きしてやらねえとな。やられたら十倍にしてやり返す。そいつがエルデンの流りゅう儀ぎだ。そうだろ、スティーブ？」

「そ、そうだ！　コヨコ！」スティーブはさらに足に体重をかけてカタリを失神寸前に追いこみながら、コヨコを指さした。「──て、てめえなんか、もう俺の嫁さんにしてやらねえぞ！　めちゃくちゃにして、飽あきたらクァラナドに売り払はらってやるからな……！」

「まあ、同じ手口で似たようなこと繰りかえしてりゃ噂うわさにもなる。しかも、のこのこ目立つ場所うろついてやがったのが運の尽つきだ。──セオドア、いつまで寝ねてやがる。起きろ、馬ば鹿か」

「……あ、ああ。いっつつ……」

　出っ歯のカールにうながされて、堅太りのセオドアものっそりと起きあがった。

　三人はそれぞれカタリを蹴け飛とばしたり踏んづけたりして、声を出すこともできないコヨコに近づいてゆく。もう包囲しようとしている。

　どうにかしないと。そう思うのに、力が入らない。

　全身がキシキシ軋きしんでいる。シクシク痛む。

　同じ手口で。

　似たようなことを。

　何度も。

　別の男相手に。

　タチの悪い女。

　そんな言葉が頭の中をぐるぐる回っている。

　ああ……やっぱりそうなんか。そう……やろな。わかっとったけどな。カッコ悪いなぁ。何やっとんのやろ、わし……。本気になってな。こんなザマで。アホちゃうか。やってられへんわ。せやけど、な──、

　あのクソドアホどもがゆうとるだけや。コヨコの口から聞いたわけやない。

　それに、コヨコは謝っとったやんか。「ごめん、ね」て。

　タチの悪い女が、なんで謝るん。

「そんな怖こわがるなよ」カールがコヨコの顎あごをつまんで笑った。「命までとろうってんじゃねえんだからよ。まあ、いい勉強だと思ったらどうだ。長いかどうか知らねえが、人生、ときにはこういう経験も必要──」

「うわあああああああああぁぁぁぁ……！」

　なんや。なんやねん。カタリは目を瞠みはった。あれは……？　瘦やせぎすの男。誰や？　あいつか。あいつや。タツロー。タツローや！　不ぶ恰かつ好こうな走り方で駆かけてきて、カールに組みついていったのは、他ほかの誰でもない、まぎれもなくタツローだった。

　ただ、表情は必死だが、腰こしは引けまくっていた。タツローはカールにあっさりふりほどかれ、殴なぐり倒たおされたところを、スティーブとセオドアに袋ふくろ叩だたきにされた。無様としかいいようがないが、やつらの注意が完全にタツローに向いた。カタリはその隙すきにド根こん性じようで跳とび起きて、まず後ろからカールの股こ間かんを思いっきり蹴けりあげた。「どりゃ！」「──もごっ！」間を置かず、今度はセオドアの股間を容よう赦しやなく蹴りあげた。「だあ！」「──ぐぷっ！」大事なブツ潰つぶしたるくらいの意気込みで放った蹴りは、果たして、カールとセオドアを悶もん絶ぜつさせた。スティーブが振ふり返って「むおう？」と首を傾かしげたのはその直後だった。馬ば鹿か力ぢからだが、とろくさいやつだ。カタリは、やつが憤ふん怒ぬの形相になって腰の剣けんに手をかける寸前に、懐ふところへ飛びこんだ。「──我流ゥッ！」右手にはあるものを力ちからーいつ杯ぱい握にぎりしめている。百

万ダラーＺＧ合金貨を。「秘拳昇竜ミリオン・ダラー・ベイベェェャァァッ……！」そして、全身をバネにし、回転しながら跳びあがって放った。すべてをかけた会心の一いち撃げきだった。ＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＭＢ……！　クリーンヒットだった。拳こぶしの骨もバキバキ砕くだけたが、スティーブの顎を粉ふん砕さいした手て応ごたえも間ま違ちがいなくあった。カタリの手から百万ダラーがこぼれ落ち、さすがのスティーブも崩くずれ落ちるように倒れた。白目を剝むいている。やったか。百万ダラーの威い力りよくやな。カタリは合金貨を左手で拾い、額の傷から流れてきた血を袖そでででぬぐった。

「漢おとこやったらな……漢やったら、何があろうと、一度は嫁よめはんにしたろ思た女を悪あしざまにゆうなや、ボケ。そんなん、漢ちゃうやろ。漢の道っちゅうのんは──」

「……ぬ、ぐぐぐ」

「って、立つんかい！」

　見れば、カールとセオドアも股こ間かんを押さえながら「て、てめえ」とか「こ、この野や郎ろう」とか呻うめいている。スティーブも目の焦しよう点てんが定まらないまま立ちあがろうとしているし、このままではまずい。カタリは合金貨をポケットに突つっこんで、左手でコヨコの腕うでをつかんだ。

「逃にげるで！」

「──で、でも……！」

「でももヒモも──」

「タツローが！」

　コヨコはカタリの手を振り払って、ボロ雑ぞう巾きんみたいな有様になっているタツローに駆けよった。正直、泣きそうになった。号ごう泣きゆうしてもええんちゃうかと思った。だが、あいにくカタリは漢だった。「──ぬえええい！　どけや、埒らちが明かんわ、ボケ！」カタリはタツローを無理やり引っぱり起こして肩かたを貸す体勢になって走りだした。コヨコは何も言わずについてきた。なんでやねん。ホンマ何さらしとんねん、わし。アホや。天下一のドアホや。あっはははー。もう笑うしかないな。笑わろてごまかすしか

ないがな。それより、走ろか。走って、走って、走って、息が切れても、痛くても、苦しくても、走って──どれくらい走ったかわからない。

　気がつくと、カタリは鉄てつ鎖さの憩いこい場ばにほど近い路地で、走るというより歩いていた。タツローも、カタリの少し後ろをヒュウヒュウいいながら自力でよたよた歩いていた。コヨコは最さい後こう尾びだった。最初に力つきて地面に倒れこんだのはタツローだった。コヨコもそのそばに座りこんだ。カタリは前を向いて、立っていた。ここで大の字になって眠ねむってしまいたい気分だったが、立っていた。右拳がひどく痛んだ。いいかげん、黙だまって痛みを我が慢まんしているのが馬ば鹿か馬ば鹿かしくなってきたころ、コヨコが口を開いた。

「……ごめん、なさい。わたし──」

「ええて」

　カタリは振り向かなかった。

「なぁーんもな。ゆわんでええ。聞いたかてどもならんしな。ええねん」

「で、でも……」

「ええっちゅうとるやろが」

　カタリは左手でポケットを探さぐり、合金貨を見つけて、握にぎった。

　それを、前を向いたまま、後ろに放った。

　合金貨は地面に落ちて、チャリン、といい音を立てた。

「やるわ、それ。好きに使つこてや」

「……え」

「げ。ひゃく、ま──」

　タツローが仰ぎよう天てんしている。ざまあみさらせ。少しだけ胸がすっとした。これで前に進める。そんな気がして、カタリは実

際に足を一歩踏ふみだした。よっしゃ。大だい丈じよう夫ぶや。

「タツローはん」

「……な、なんだよ」

「しっかりな。頼たのむで」

「て、てめーなんか、に……」

「ほな、さいならや」

　カタリは左手をヒラヒラ振って歩きだした。

　笑え顔がおを作ってみた。

　せや。つらいときはな。笑うんや。笑て、笑て、笑い倒したれ。ガハハハハハッ。これが漢や。これでこそ漢っちゅうもんやろ！　いやぁ、今のわし、えろうカッコえええんちゃう？　最高ちゃう？

　なんだか、気分が上向きになってきた。そのときだった。

「──カタリさん……！」

　なんで呼ぶん。コヨコ。やめろや。ここはわしが渋しぶく決めて去るシーンやねんで？　しかも、笑とるんやで？　笑て去る漢やで？　それなのに、なんでや。なんで──涙なみだがにじんでくるんや。ひっく、ひっく、ゆうて、しゃくりあげて。だ、ダメや、と、と、止ま、らん、わ、わし、もう……！　もう……！

　カタリは駆かけだした。走りながらおいおい泣いた。泣きじゃくりながら走った。あばばばばおばぼば奇き声せいを発しながら走った。好きだった。振ふり返ってみれば出会ってからたいした日数はたっていない。でも、好きだった。一いつ緒しよにすごした時間が楽しかった。コヨコも楽しんでくれていたと思いたい。好きだった。なんでもしてやりたかった。何をしても惜おしくなかった。好きだった。未熟で稚ち拙せつで一方的な恋こいだったかもしれないが、好きだった。好きだ。今だって好きだ。だから、思う。心底から思う。幸せになって欲しい。誰だれとでもいい。最愛の人と幸せになって欲しい。けれど、本当は──一緒にいたい。もっと顔を見たい。笑顔を見たい。手料理が食べたい。好きだ。好きだ。コヨコ、わし、お前のこと、めっちゃ好っきやねん……！

「あああああああああぁぁぁ──ッ……！」

　思いっきり叫さけんでみた。

　つまずいて、すっ転んだ。

　大の字になってやった。

　鉄鎖の憩い場の公園の真ん中だった。

　かなり変な目でじろじろ見られている。ひそひそ囁ささやきあっている者がいる。「うるせえぞ、クソ野郎モウフオ！」と叫ぶ者もいる。好きにせえや。なんとでも言えばいい。なぜか、何も感じない。安らかではないが、静かな気持ちだ。もう、どうでもいいか。何もかもがどうでもいい。そんな気分だ。カタリはぐずんぐずん痛む右手の甲こうを額にのせて、ゆっくりと目を閉じた。しばらくそのままでいた。声をかけられなければ、いつまでもそうしていたかもしれない。

「おい」

　目を開けると、浅黒い肌はだをした男の黄玉トパーズの瞳ひとみがカタリの顔を見下ろしていた。

「大丈夫か」

「……んぁ、あ、おお」

「そうか。それならいいが」男は後ろ頭をボリボリ掻かきながら、片方の眉まゆを大おお仰ぎようにつりあげてみせた。「──まあ、ちょっと気になっただけだ。じゃあな」

　それだけ言うと、男は背中を向けて行ってしまった。ちょっと気になった？　人のことは言えないが、物好きな男だ。いや、それより──むくっと起きあがったカタリは、自分の胸の底から何かがむっくむくとわきあがってくるのを感じていた。原因はわかっていた。あの男だ。男の全身鎧よろいだ。濃のう紺こん色で、橙だいだい色いろの炎フアイ模ヤーパ様ターン入りという、とんでもない派手さだが、あの素材。もちろん、布ではない。金属でもなさそうだ。だったら、なんだ……？　さらに、背中の大たい剣けん。琥こ珀はく色いろの波打つ剣身なんて見たことがない。斬きれ味もすごそうだが、装そう飾しよくも素す晴ばらしい。単純な値打ち物以上の価

値がありそうに思える。

　あれにさわりたい。調べたい。くわしく知りたい。

　知らないと気がすまない。

「──ちょ、ちょっと待ってえな……！」

　カタリは男を追いかけた。男はかなり背が高くて大おお股またたったが、全力疾しつ走そうですぐにつかまえることができた。

「む？　なんだ。何か用でもあるのか」

「あるで！　大ありや、ありまくりやで！」

「ふむ。しかし、用はいいが、お前、怪け我がしてないか」

「そんなんどうでもええわ！　その鎧！　そして、その剣！　どこで手に入れたん？　買こうたんか？　拾ったん？　見つけたん？　名前は？　由来は？　値段は？　なんでもええから教えてえな！　頼むわ！」

「悪いが、それは教えられん。そういう約束でな」

「約束ってなんやねん！　誰と約束したん？　どこで約束したん？　どないな約束やねん？　なんでもええ、どんな些さ細さいなことでもええから、教えてえな、お願いや！」

「そう言われてもな」

「せやったら、名前！　お前じぶんの名前、教えたってくれ！　名前くらいええやろ！　な！　ちなみに、わしはカタリゆうもんや！　よろしゅう頼たのんますわ！」

　とりあえず、お近づきになって、少しずついろいろと聞きだしてゆく。そんなプランがカタリの頭の中にあった。それだけだった。そのときは考えもしなかった。

「俺か？　俺の名は──」

　この奇き妙みような風ふう体ていの男とのつきあいが、こんなに長くなるだなんて。

「トマトクンだ」

the 4th song

小さな恋と裏切りのエレジー

1

—ざまあみろ。

ざまあみろっていうんだ。

子し爵しやくはたぶん死んだ。殺された。外げ道どうでもラフレシア第三帝てい国こくの貴族だった男が、薄うす汚ぎたない、ケダモノ同然の、下げ賤せんな野や盗とうどもに襲おそわれて、奪うばわれて、殺された。あはははははは。ざまあみろ。可お笑かしい。こんなに可笑しいことってない。あの男が死んだ。この世からいなくなった。嬉うれしい。すごく嬉しいよ。最高の気分だよ。だって、もう二度とあんたの顔を見ることはない。あんたの声を聞かなくていい。あんたの匂においも嗅かがなくていい。あんたにふれられる気色悪さとも永遠におさらばだ。

僕は—、

そうだ。僕でいいんだ。自分のことを「わたし」なんて呼ばなくていいんだ。上品ぶったうざったい喋しやべり方も、意味不明な貴族的所作とやらも、頭の悪そうな貴婦キヤツ人ト・ウ歩きオークも、いらない。もういらない。ざまあみろ……！

イシュタル・アガメムノ・ド・ゴードン。ゴードン子爵。最後に笑ったのは、僕だ。あんたじゃない。あんたはこのゲームに敗北した。僕は勝ったんだ。その結果、僕はこうして雨のなか、膝ひざを抱かかえて笑いながら—死ぬ、のかな。

それでもいい。あのままよりはいい。ずっと心に誓ちかっていたんだ。あの男だけは、必ず、絶対に破は滅めつさせてやるって。そのとおりになった。満足してる。だから、もういい。僕は疲つかれた。ずいぶん歩いたし。おなかも—すいてるのかな？　どうかな。わからない。身体からだが動かない。この雨の冷たささえ感じない。どうでもいい。とにかく、ざまあみろ！　僕はもう笑い声をあげることすらできないけれど、心の中で笑ってやる。死ぬまで笑ってやる。あはははははははははは！　あんたのことが嫌きらいだった。これ以上ないくらい大嫌いだった。憎にくかった。呪のろ

わしかった。そのあんたがいなくなった。こんなに嬉しいことはない。ざまあみろ……！

　でも、本当は、わかってる。わかってるんだ。

　あんたがいなくなったところで、何一つとりもどせない。僕が失ったものはすべて失われたままだ。子爵に殺されたこどもたちの無念を晴らした？　僕は彼らに仲間と見なされてもいなかったのに？　僕は一人だった。最悪なことに、特別だった。僕は子爵の特別な飼い犬だった。こどもたちは僕を無視した。僕を恐おそれるこどもたちがいた。僕を羨うらやむこどもたちさえいた。

　どちらにしても、僕は一人だった。

　僕は一人で戦って、勝った。

　そして、一人で死のうとしている。

　笑われるべきは、僕かもしれない。

　だって、こんなにもみじめだ。

「……何……やってるんだろ……」

　雨に呟つぶやいてみた。

「そこで何をしている」

　雨が答えた。

　いや、訊きき返された。

　雨に……？

　違ちがう。

「ぼくは目が見えないのだが、そこにいるきみを感じることはできる。きみは人間のようだ。ぼくは傘かさをさしている。雨が降っているからだ。きみは傘をさしていない。雨がきみをぬらしているだろう。この雨は当分やまない。きみはどうやら疲れているようだ。衰すい弱じゃくしている。ぼくはそれを感じる」

　苦労して顔を上げた。

雨の中に男が立っていた。

背が高くて、瘦やせている。顔はよくわからない。まだ若いようにも見えるし、三十歳くらいにも見える。目を閉じているせいかもしれない。左手で傘をさして、右手に持っているのは杖つえだろうか。ここは魔ま術じゆつと官能の街カリオサークだ。魔術士か。

「すまない。ぼくは話がうまくない。だから率そつ直ちよくに言うことにする。きみはこの雨にとけてしまうまでここにいるつもりか。この路地裏に。軒のき下したを見つけられなかった野の良ら猫ねこのように。それがきみの望みなら、ぼくの介かい入にゆうする余地はない。ただ、きみがやむをえずそうしているのなら、雨宿りをするための場所を用意することくらいできる。ぼくは魔術師マギヴィンセント。迷めい惑わくでなければ、きみの名を教えて欲しい」

2

まったく見えないというわけではない。ただ、ほとんど見えない。

この目は光を感じる。光を遮さえぎるものがあれば、影かげとして感じる。

だが、物体の輪りん郭かくを視覚でとらえることは叶かなわない。色もわからない。

最初にそのことを察したのは父だったという。

魔ウイ導ザー士ドデウス。またの名を魔術博士ミゲロ・ラプソルド。百九歳にして、自身の研究を引き継つがせるべく、金で雇やとった女に子を産ませた男は、息むす子こが盲もう目もくに近い弱視だということを知って絶望し、失意のうちに魔術原理主義者たちの手にかかって惨ざん殺さつされた。愚おろかな父だ。

たしかに、ヴィンセントの目はほとんど見えない。

しかし、見ることができる。

　タクティル・ヴィジョン。触しよく視し。望んだとしても持ちえない、いかなる原因で発生するのかさえ定かではない〝超越者オーバの業ラーツ〟の一種。ヴィンセントがそれを授さずかっていたことに、父はとうとう気づかなかった。気づきようがなかった。

　気づく前に、父はヴィンセントを見限って、捨てたのだ。

「──魔術師マギヴィンセントだな」

　相手は三人か。すでに日は暮れている。街中で、人通りもあるが、このカリオサークでは魔術士同士の争いなど珍めずらしくない。余人が邪じや魔ますべきものではないということも、誰だれもが理解している。

「いかにも」ヴィンセントはマリアンヌを我が身のそばに引きよせて、杖の先で石いし畳だたみを軽く叩たたいた。「ぼくは魔術師マギヴィンセント。きみたちは何者だ」

「我らはロデムの角笛団」

「我らは魔導王の再来を希こいねがう」

「魔術師マギヴィンセント。師は魔術師マギマガロ。師の先師は魔ウイ導ザー士ドデウス。相そう違いないな」

「間違いない。ぼくの師は魔術師マギマガロだ」

「では、問う。魔術師マギヴィンセント」

　三人のうち一人が前方に、二人が後方に位置どっている。進みでてきたのは前の一人だ。

「貴公を魔術師マギと呼ぶに値あたいする者と認めたのは誰だ。貴公、弟で子しは幾いく人にんいる。貴公にとっての魔術とはなんだ」

「ぼくにとっての魔術とは、力。弟子はここにいる」ヴィンセントは顎あごでマリアンヌを示してみせた。「一人だ。何度かたわむれに魔術の基き礎そを教えたことがある」

「たわむれ、だと……？」

「ぼくはこのとおり目が見えない。日常生活に支障はないのだが、それでもやはり不便はある。彼女にはそのあたりを手伝ってもらっている」

「ただの端はし女ためではないか！」

「言葉に気をつけてもらおう。ぼくは彼女に給金を渡わたし、彼女はその対価として相応の仕事をしているだけだ。上下の別はない」

「なぶるか、我らを……！」

「そのようなつもりはない」

「だったら、答えよ、魔術師マギヴィンセント！　いったい誰が貴様を魔術師マギと認めたのだ！」

「ぼく自身だ」

「──僭せん称しようしたな、若造……！　貴様のごとき力なき者が魔術師マギを名乗ることは、魔術に対する冒ぼう瀆とくだ！」

「ぼくにその力がないというのなら、試ためしてみるか」

「もとよりそのつもりだ！　我々との決けつ闘とう、受けてもらうぞ！」

「拒きょ否ひする理由はない」ヴィンセントは右側の建物を背にして、マリアンヌを後ろにかばう恰かつ好こうになった。「一人ずつか。それとも三人いっぺんか。ぼくはどちらでもかまわないのだが」

「我々を愚ぐ弄ろうするのか！　古来、魔術士の決闘は、一人の魔術士と一人の魔術士が真正面から互たがいの魔術を競きそい、力ある者が力なき者を屠ほふる神聖なる儀ぎ式しき！　むろん、一対一だ！」

「なるほど。一人目が勝てなくとも二人目で、二人目も敗れたら三人目が、というわけか」

「──貴様……！」

　とりわけ前の一人が怒ど髪はつ天てんを衝つく勢いで激怒してい

る。ヴィンセントはそれを感じる。最初の相手はどうやら彼のようだ。三連戦。相手の力量次し第だいではあるものの、魔力は無む尽じん蔵ぞうではない。たやすくはなかろう。勝利の確信はない。敗れるかもしれない。

　それでも、ヴィンセントは逃にげるわけにはゆかなかった。

　さしたる実績もなく、強力な後ろ盾だてもないままに魔術師マギを名乗れば、血気盛さかんな魔術士や、ロデムの角笛団のごとき魔術原理主義者たちが、こうして辻つじ勝負を挑いどんでくる。すべて承知の上でこの道を選せん択たくしたのだ。

　魔術とは、力。

　力こそが、魔術。

　ぼくは父とは違ちがう。

　ヴィンセントはジャケットのポケットから触しよく媒ばいをとりだして、魔術のための特殊なチヤネ精神集中リングに入った。

3

　ぼくは魔術師マギヴィンセント。迷めい惑わくでなければ、きみの名を教えて欲しい。

　そう問われて、とっさに答えた。

　マリア……、

　マリアンヌ。

　━偽いつわりの名を。

　それは、子し爵しやくの供をするときに使っていた偽ぎ名めいで、子爵がつけた。

『お前は美しい。お前のすべてが比類なく美しい。俗ぞく世せの汚お物ぶつがお前の名を呼ぶことを私は決して赦ゆるさないだろう。

よって、私はお前に仮の名を与あたえる。マリアンヌ。俗ぞくな名だが、それでもお前の美しさは微み塵じんも損そこなわれない。塵じん界かいの穢けがらわしい外気にふれても、お前は枯かれるどころかよりいっそう輝かがやき咲さき誇ほこる。私の愛、私の神秘、私のすべてよ。いついかなるときも、お前は特別なのだ』

　習慣なのか。こびりついているのか。剝はがれないのか。落とせないのか。消すことはできないのか。

　魔術師マギヴィンセントの屋や敷しきはカリオサークの郊こう外がいにある。家屋自体も大きいが、とにかく庭が広い。一面に樹木が生おい茂しげっていて、ちょっとした森のようだ。

　くわしいことは知らないが、この屋敷はヴィンセントの父親の遺産らしく、家の中の状態からしても、以前はそれなりの数の使用人がいたのだろう。定期的にやってくる庭師は、先代からのつきあいだと言っていた。

　しかし、今、この屋敷で暮らしているのは、二人だけだ。屋敷の現在の所有者である魔術師マギヴィンセントと、マリアンヌという名の使用人が一人。ヴィンセントは使用人とは呼ばないが、住みこみで掃そう除じだの洗せん濯たくだの炊すい事じだのをして金をもらっているのだから、どう考えても使用人以外の何ものでもない。

　ただ、手に職があるわけでもない、まだ十四歳のこどもにとっては、そう悪くない境きよう遇ぐうではある。いや、悪くないどころか、恵めぐまれているといってもいいくらいだろう。何しろ、仕事はべつにきつくないし、住む場所にも、着る服にも、食べる物にも困らない。何より、ここには子爵がいない。

　自由、なんだ。

　僕は誰だれにも支配されていない。

　支配されずに、生きている。

　なんだか、信じられない。

　子爵を陥おとしいれることばかり考えながら、従順な飼い犬のふりをして、一いつ瞬しゆんたりとも気を抜ぬかず、ずっとあの外げ道どうが油断する隙すきをうかがいつづけていた。張りつめていたんだ。限界なんかとっくに超こえていた。

　子爵の友人の豚ぶた野や郎ろうに出す酒にあの薬物を混入させたときは、正直、ほとんど捨て鉢ばちだった。もちろん、好機だという認にん識しきはあった。たくさんの人間が子爵の屋敷に集まることはめったになかったからだ。子爵の母親、エウクデア・モウンロール伯はく爵しやく夫人の六十七回目の誕生日。ラフレシア第三帝てい国こくでは、六十七歳の誕生日を〝歓ジユ喜ルドのブレ日ジール〟として盛せい大だいに祝う。貴族だけの風習だ。人間的な情など欠片かけらも持ちあわせていない男だったが、表面的に正しい貴族として振ふるまうことには妙みようにこだわっていた。あの潔けつ癖ぺきな老ろう婆ばの前でなければ、子爵自身とは親しくないどころか、どちらかといえば子爵を快く思っていない貴族たちの前でなければ、意味がなかった。そうでなければ、子爵はたぶん、あらゆる手段を駆く使しして事件をもみ消そうとするだろう。

　子爵の屋敷で供された飲み物を口にした人物が死亡するという、事件。

　あくまで、それは事故ではなく、事件だ。

　事件はただちに警察隊に通報されて、子爵の屋敷が家宅捜そう索さくを受ける。子爵の書しよ斎さいから死因の薬物が発見される。前々から囁ささやかれていた子爵が外道の錬れん金きん士しであるという疑ぎ惑わくが真実味を帯びる。それだけではない。子爵が多数のこどもたちを飼育して、調教していた事実もやがて暴あばかれ、太華アルマ饒京ンドナを騒さわがせるゴシップになるだろう。それらがどのような法に違い反はんして、子爵がいかなる罪に問われるのか。そんなことは些さ細さいな問題だ。どうでもいい。そんなものは単なるきっかけだ。どうせ叩たたけば埃ほこりはいくらでも出る。子爵の行状が一部でも明らかになれば、蟄ちつ居きよ程度ですむとは思えない。監かん獄ごく行きか。よくても、爵しやく位い剝はく奪だつ、財産没ぼつ収しゆうのうえ、首都から追放されるか。いずれにしても、プライドの高い子爵にとっては耐たえがたい屈くつ辱じよくだろう。

　とはいえ、すぐに処分が下されるわけではない。その間に、子爵は裏切った僕を殺すだろうか？　それでもいい。もとより相あい討うち覚かく悟ごだ。この身一つ、命一つで、あの腐くされ外道を道連れにできるのなら、安いものじゃないか？

　そうはならなかった。

　子爵はその夜のうちに逃にげだした。

　僕と、ごく少数の供の者だけを連れて、子爵は逃げる道を選んだ。

『やってくれたな。よくもやってくれた。だが、それで私から逃のがれられるなどとは考えないことだ。私はお前を逃がしはしない。私は決してお前を離はなさない。なぜなら、お前は私の愛であり、私の神秘であり──私のすべてだからだ。今や名実ともにそうなったのだ。お前を失えば、私はお前を永遠に手に入れるかわりに、すべてを失うことになる。失うわけにはゆかないのだ。私はお前を逃がさない。そして、私はお前を赦ゆるさない』

　──ああ。

　僕はもう解き放たれたはずなのに、この手が重いんだ。足が重いんだ。頭が重くて仕方ないんだ。これは子爵の怨おん念ねんだろうか……？

　考えたくない。何もしたくない。ぬるま湯のようなこの暮らしが心ここ地ちいいわけでもない。でも、どうすればいいのかわからない。進みたいのか。戻もどりたいのか。何を変えればいいのか。せめて、この服を脱ぬぎ捨ててしまうべきか。魔術師マギヴィンセントが馴な染じみの仕立屋に作らせた、いかにも女性の使用人向けといったかんじの服を。

　そうだ！

　脱いでしまえ！

　やだ！

　いやなんだ、こんな服……！

　だって、僕はもう、着たい服を着たいように着ていいはずじゃなかったのか？

　僕は脱ぐ。服を脱ぐ。ここは、僕の部屋。魔術師マギヴィンセントの屋敷にある、僕の部屋だ。外出の用があって、そのついでに外で夕食をすませ、帰り道の途と中ちゆう、魔術士たちに襲おそわれて、ついさっき戻ってきた。もう今日やるべき仕事はない。僕は。

　あてがわれた部屋に、僕は、一人でいる。

　僕は。

　やっぱり、今も飼われているようなものなのか？

　いや。違ちがう。べつに、強制されたわけじゃない。魔術師マギヴィンセントは、もしあてがないのならと、おそらく親切心から申し出てくれて、僕は実際、あてなんか何もなかったから、それを受けた。生きるために、とりあえず受けるしかなかった。

　僕には力がない。一人で道を切り開いてゆくための力がない。意欲もない。結局、誰かの庇ひ護ごを受けるしかない。しょうがないじゃないか。それでいいんだよ。楽な生活じゃないか。楽で何が悪いの？　悪くない。ぜんぜん悪くない。掃そう除じも洗せん濯たくも炊すい事じもだいぶ慣れてきた。女物の服なんかもっと慣れている。女性らしい仕草や喋しゃべり方は完かん璧ぺきに仕込まれている。

　子爵に。

　あの男に。

　もうどこにもいないはずなのに、あの男の息づかいをすぐそばに感じる。

　気持ち悪い。吐はき気がする。

「マリアンヌ」

　──びっくりした。

　振り返ると、開け放たれたドアの向こうにヴィンセントが立っていた。いつの間に。まったく気づかなかった。まあ、もともと、ヴィンセントはあまり足音を立てないで歩くし、ドアを開けるときもそっと開ける。特とく殊しゅな感覚を持っているとはいえ、やはり目が見える人とは違うので、聴ちよう覚かくに頼たよっている部分もあるのだろう。外界の音を拾いやすくするために、自分では極力音を立てないようにしているのかもしれない。それはいいのだが、部屋に入るときはノックくらいしてもらいたい。悪意はないみたいだけれど、やや不ぶ躾しつけというか、エチケットを知らないところのある人だ。

「突とつ然ぜん、声をかけて、まずかっただろうか。どうやらきみはひどく動どう揺ようしているようだ」

「……ま、まずい、といいますか」

「まずくなかったのだろうか」

「い、いえ、まずいといえば、まずくないこともないのですけれど……」

「そうか。やはりまずかったのか。それでは出なおすことにしよう」

「あ、いえ──しょ、少々、待っていただけますか。今、その──着き替がえをしていたところだったので」

「なるほど。それは申し訳なかった。だが、気にすることはない。ぼくはこのとおり目が見えないので、きみが裸はだかだろうと、服を着ていようと、さわらなければわかりはしない」

「さ、さわ……？」

「そう。直じかにこの手でふれれば、かなり鮮せん明めいなイメージが頭の奥に描えがかれる。これだけ離れていると、きみがそこにいるということ、きみの様子などがぼんやりと感じられるだけだ。ところで、きみの着替えがすむまで、ぼくは外に出ているべきだろうか」

「で、できたら、そうしていただいたほうが」

「そうか。それでは、出ていることにしよう」ヴィンセントは踵きびすを返そうとしたが、途中で動きを止めた。「──マリアンヌ」

「は、はい……？」

　とっさに、脱ぎ捨ててベッドの上に置きっぱなしにしてあった衣服を手にとって、それで身体からだの前面を隠かくした。まさかそんなことはないだろうと思う。今までヴィンセントがそんなそぶりを見せたことはない。でも、万が一ということもある。ヴィンセントは、やけに落ちついていて、三十歳くらいにも見えるが、まだ二十一歳だという。こっちは「マリアンヌ」のときの癖くせで十六歳と言ってあるけれど、見境のない男はいくらでもいる。信じるに足

る人間なんて、いくらもいないのだ。用心するに越こしたことはない──のだろうが、なんだか変だ。

「マリ、アンヌ」

「はい……？」

「ぼくは──」

　と、ヴィンセントはいきなり膝ひざをがくんと折って、床ゆかに両手をついた。

「……すま、ない……」

「え？　え？　ちょっ──と、ヴィンセントさん……？」

「うん」

　ヴィンセントはうなずくなり、ばたんと倒たおれてしまった。なぜ？　どうして？　わけがわからなくて、半分混乱したままヴィンセントに駆かけよると、逆になんで気づかなかったのか不思議に思った。外は暗かったし、ヴィンセントは屋や敷しきについてすぐ「今日はもう休むといい」と言い残して足早に自室へと引きとったので気づかなかったが、こうして明かりの下で見ればすぐにわかる。

　怪け我がだ。

　左手に何か布を巻いているが、ひどい巻き方だし、血がにじむどころか、ぐっしょりぬれている。顔色も悪い。結構汗あせをかいている。おそらく、決けつ闘とうで負った傷だろう。その場に居合わせたので、無傷ではないと知ってはいたが、こんなにひどかったなんて。だいたい、こんな有様で平静を装よそおう必要がどこにあるのか。我が慢まんせずに、医術士でも呼べばよかったのに。

「ヴィンセントさん？　大だい丈じよう夫ぶですか。声、聞こえますか」

　呼べば、小さな声で何やら返事はする。なんとか起きあがろうとしているようだ。放ほうっておけば、そのうち自力で立ちあがって自室に戻もどるかもしれないが、さすがにそれは忍しのびない。

　さわりたくは、ないけれど。

　ふれるのが、いやだ。

　人が、怖こわい。

　気持ち悪い。

　でも、そうも言っていられない。やむをえず、思い切ってヴィンセントの両りよう脇わきに手を入れて、ぐっと持ちあげてみた。意外と軽かった。背は高いものの、かなり痩やせているからだろう。けれど、これからどうすれば……？　困り果てて、迷っているうちに、ヴィンセントが身動きした。状じよう況きようを把は握あくして、自分でどうにかしようとしたのか。その気持ちはありがたいが、タイミングが最悪だった。

「──あ、や……」

　ヴィンセントを抱かかえた体勢のまま、バランスが崩くずれた。

　後ろに倒れる。倒れてしまう。だめだ。立てなおせない。やばい。後ろ？

　後ろって──ドア……？

　ドアは、閉まって──、

　しまった。

　がん、と音がした。

4

　ぼくは母親を知らない。父親とも親子と呼びうるような関係ではなかった。

　幼いころは、父の弟で子しであり、ぼくの師である魔術師マギマガロが、唯ゆい一いつの慕したわしい存在だった。ただ、彼は魔術士には珍めずらしい人格者だった。彼には弟子が大勢いたし、師の

息むす子こであるからといって、ぼくだけ特別扱あつかいするわけにはゆかなかった。ぼくもそれを望まなかった。

　ぼくは肉親の情というものを知らない。ひとのぬくもりを知らない。それらを欲ほつしたこともない。

　どのみち誰だれもぼくを理解することなどできない。触しよく視しで感じるぼくの世界は誰かの世界とは重ならない。

　ぼくは一人だ。

　一人きりだ。

　それでいい。

　それでもかまわない。

　ぼくには魔術がある。

　ぼくは力が欲しい。ぼくは父とは違ちがう。魔術理論になどさして興味がない。魔術は力だ。力なき理り屈くつには意味がない。価値がない。

　いつだったか、魔術師マギマガロがぼくを伴ともなって父のもとを訪おとずれた。ジョナサンには才能があります、と魔術師マギマガロは言った。ジョナサン・グッドオール。ぼくの本名だ。父は書物に目を落としたまま、短く答えた。書もろくに読めぬ者に用はない、と。魔術師マギマガロは重ねて言った。ですが、ジョナサンには不思議な能力があるのです。たしかに目はほとんど見えぬようだが、そうとは思えぬほどつつがなく日常生活を送ることができる。古来、盲もう目もくの魔術士も大勢いましたし──父は遮さえぎった。余が求むるは魔術の原理だ。完かん璧ぺきな理論だ。それを書に著あらわし、後世に残して、魔術史に名を刻む。いずれにせよ、その者では余の手伝いはできぬ。ゆえに、マガロ、汝うぬにゆだねた。その者の扱いについては、もはや余の関知するところではない。汝うぬの好きなようにするがいい。

　そののちに、魔術師マギマガロがぼくに言った。我が師を──御尊父を恨うらまないでやってくれ。あの方はお前が憎にくいわけではない。ただ、あの方は完璧主義者なのだ。ああしてご自身を、周囲をも追いこまずにはいられぬほど生き真ま面じ目めな御お方かたなのだ。

つまり、それは、ようするに、ぼくが完璧でなかったから悪いということか。

では、完璧とはなんだ？

父は完璧などではなかった。それは間違いない。

ぼくは力を欲する。

わかりやすい、力を。

証明したい。ぼくは間違っていない。ぼくは。そのために、ぼくは。そのためだけに。

音がする。

静かな音だ。

ひんやりしている。

それでいて、あたたかい。

安らかだ。

気分が落ちつく。

とても苦しいのだが。

左ひだり腕うでが痛い。どうやら血を失いすぎたようだ。

正直、決闘とはいいがたい決闘だった。それでも、二人までは魔術のぶつけあいで容易に打ち倒たおすことができたのだが、三人目ともなるとやや疲つかれが出た。読みが外れ、タイミングが遅おくれた。相手の詠えい唱しようは予想より早かった。発動したのは、初歩的な要素魔術である火か玉ぎよくだった。ヴィンセントは集中を維い持じしたまま、左腕一本でそれを防いだ。そして、すかさず雷らい咬こう撃げきを叩たたきこもうとしたときだった。相手が突つっこんできた。ヴィンセントの直感によると、明らかにもっとも魔ま力りよくの弱い男が三番手だったことの理由がそこにあった。彼の役割は明確だった。一人目、二人目でヴィンセントを斃たおすことができればよし。さもなくば、確実に、どのような手段を用いてでも、標的をしとめる。魔術士としての力量は低いが、組織への

忠誠心がきわめて高く、身を賭として使命を果たしてみせる。それが三人目の男だった。

　しかし、彼は失敗した。

　ヴィンセントの身体からだには何種類かの防衛動作が刷りこまれている。三人目の男がナイフを突きだしてくると、火傷やけどを負った左手が自動的に反応して、これを受け止めた。そのときにはもう、雷咬撃の準備は調ととのっていた。至近距きよ離りで発動させた。雷撃が相手の眼球と脳を焼いた。三人目の男は呆あつ気けなく死んだ。ヴィンセントは魔術師マギたることをみずからの力で証明した。左手に負った傷は出血のわりに痛みはさほどでもなく、深手ではないようだった。外がい套とうを巻いて止血し、帰宅した。自室に戻もどって、しばらくしてからだった。痛みがひどくなってきた。決けつ闘とうの昂こう揚ようが痛覚を麻ま痺ひさせていたのだろう。

　それから、ぼくは━自分で手当てをした。傷を洗って清潔な布をあてがい、数種の薬品を服用した。痛みは薄うすらぐ気配もなかった。さらに、貧ひん血けつの症しよう状じようが現れた。触視によると、火傷による火ぶくれの上に鋭えい利りな刃は物ものによる創そう痍いが重なっていた。血管の吻ふん合ごう、傷口の縫ほう合ごう等の処置が必要かもしれないと思った。むしろ、医術式が適当だろう。屋や敷しきから多少距離はあるが、昔からつきあいのある医術士の診しん療りよう所じよがある。

　それで、ぼくは━本日二度目の外出だと考えながら、身み支じ度たくをしようとしたのだが、手が自由にならず、足あし許もともおぼつかず、独力で診療所までたどりつくのは困難だと判断した。気が引けたが、やむをえず、マリアンヌに同行を頼たのむことにした。そこまでは明確に覚えている。

　このぬくもりは記き憶おくにない。この音は？

　とくん、とくん、とくん、と、いつまでもつづく、この音はなんだろう。

　知っている。

　これは。

「……心音だ」

　ひとが生きている証あかしだ。

　誰だれが？

　このぬくもりの正体は？

　ヴィンセントは触しよく視しで感じた。

　肌はだ。人間の皮ひ膚ふ。その下の薄い皮下脂し肪ぼう。筋肉。温度。それらが渾こん然ぜん一体となって形づくるイメージは、立体的で、入り組んでいて、離はなればなれでありながら、完全にとけあっている。ヴィンセントはそれを知っている。

「──マリアンヌ……？」

　どうやら、マリアンヌが仰あお向むけに倒れていて、その上にヴィンセントが覆おおいかぶさっている恰かつ好こうのようだ。ヴィンセントの頭部は、マリアンヌの胸部の上で右を向いている。マリアンヌの心音がよく聞こえるのも道理だ。

　しかし、なぜマリアンヌは裸ら形ぎようなのか。

　いや。そうだ。着き替がえ中だと言っていた。

　着替え……？

　裸形？

「ぼくは……もしかして、とても破は廉れん恥ちなことをしているのではないか」

　呟つぶやくと、忸じく怩じたる思いがこみあげてきた。なんたることだ。裸形の女性にのしかかり、その肌を肌で感じている。しかも、相手の女性は気絶しているか、意識が朦もう朧ろうとしているようだ。同意がないということだ。よくわからないが、そのようなことは双そう方ほうの同意のもとに行われるべきではないか。そもそも、ぼくはそのようなことを望んでいたわけではない。マリアンヌも同様だろう。これは不幸な事故だ。

　ヴィンセントは上半身を起こした。

　なぜだか、惜おしい気がした。

「……何を……ぼくは……」

　求めてなどいなかったはずだ。

　ひとのぬくもりなど。

　それは所しよ詮せん、えられるはずがないもので。

　だから、欲しいと思うことすら、ぼくには許されないもので。

「マリアンヌ。ぼくの声が聞こえるのなら返事をして欲しい。マリアンヌ」

　さっき、同じように、マリアンヌに呼ばれたような覚えがおぼろげにある。

　ぼくはどう答えたのだろうか。

　マリアンヌは身体の一部分をかすかに動かして呼吸を乱すだけで、声らしきものはもらさなかった。

「……医術士に診みてもらわねば」



　ひょっとしたら、頭でも打っているかもしれない。あまり動かさないほうがいいのだろうか。そうはいっても、このままにしておくわけにはゆくまい。ヴィンセントはマリアンヌを抱かかえあげようとして、思いとどまった。これ以上、彼女の肌に直接ふれるべきではない。それは彼女の同意なく行われるべきではない。

それに──どうしてか、彼女にふれることを考えただけで、心が揺ゆれるのだ。

激しく、揺れるのだ。

ヴィンセントはマリアンヌの部屋に入り、ベッドのシーツをはぎとって、それでマリアンヌをくるんだ。大事に、大切に、丁てい寧ねいに、くるんだ。自分の怪け我がのことは頭になかった。シーツにつつまれたマリアンヌを抱だきあげてベッドに運ぶ作業も、さして苦ではなかった。それから、外出の用意をしている間は多少きつかったが、つらかろうと、頭がふらつこうと、全身がだるかろうと、這はってでも行かねばなるまいと思った。

今はとにかく、マリアンヌが気がかりだった。

5

──気がついたら、シーツにくるまれた姿でベッドの上に寝ねていて、かなり焦あせった。慌あわてながらも、ちゃんと服を着て屋敷の中を捜さがしまわったが、ヴィンセントはいなかった。途と方ほうに暮れていたら、近くで診療所をやっている老医術士が屋敷を訪おとずれた。

「ヴィンセントさんはうちで休んでもろうてます。怪我も軽くはないんですが、それより失血による衰すい弱じやくがひどうてね。それでも、屋敷に戻もどるとゆうて聞かないものですから、事情をお尋たずねしたら、屋敷に怪我人が一人おるとおっしゃるもので、こうして儂わしが参った次し第だいですが」

「そう……ですか。夜分遅おそくに、お手間をとらせてしまい、申し訳ありません」

「それはべつにええですが。商しよう売ばい柄がら、こないなことには慣れとりますからな。ところで、怪我人はどこです」

「わたし──のことだと思います。その……転んで、少し、気を失っていて。でも、もう大だい丈じよう夫ぶです」

「ああ、いや、それはいかん。一応、診みさせてもらうよ。打ち所なんかが悪いとね。あとあと大変なことにならんともかぎりませんよ」

　結局、応接間に通してたんこぶを治してもらうだけですんだが、枯かれ木のように痩やせた老医術士はかなり疲つかれている様子だった。せめて一息ついてもらおうと、熱いお茶とお茶菓が子しを用意して出すと、老医術士は「年はとりとうないもんですな。気持ちはまだまだ若いもんに負けんつもりですが、身体からだがついてこんですわ」とぼやきながら、それでもうまそうに飲み食いした。
「──儂はヴィンセントさんのことは赤子のころから知っとってね。親おや父じさんが変わり者だったし、ずいぶん苦労されたと思うよ。目が見えんのは、触しよく視しとゆうんだったかね。あのおかげで、さして不便はないようだが。この広い屋や敷しきで一人きりだとゆうんで、心配はしとったんだ。あんたがきてくれて、だいぶ助かっとるでしょうな」

「……いえ、たいしたお手伝いもできませんで」

「そうはゆうても、一人じゃないとゆうだけで違ちがうもんだよ。それに、さっきもずいぶん血相変えとった。ヴィンセントさんも、あんたのことを頼たよりにしておるんでしょう。いや、こどものころから、あまり感情を表に出さん子だったでね。珍めずらしいよ」

「そう……なんですか」

「あんた、まだずいぶん若いようだが、そうとうな別べつ嬪ぴんさんですからな」

「そんなことは……」

「いや、あの子は──失礼、昔の癖くせです、ヴィンセントさんは目がほとんど見えん。少なくとも、儂らの見え方とは違うはずだ。何を隠かくそう、親父さんに頼たのまれてそのことを検証したのは儂なんだよ。いずれにしても、あんたの顔形を見てどうこう思っとるわけじゃなかろう」

　この老人はいったい何を言っているのだろう。どうこう思っている？　わけがわからない。いや、わからなくはないけれど、そんなこと考えたくもない。気持ち悪い。反へ吐どが出る。この気持ちを表情に出さないようにこらえるだけでやっとだ。

慣れているけれど。

何を感じても何を思っても、微笑ほほえみさえ浮うかべて黙だまっている。ずっとそうして耐たえていた。

今もそうしている。もうそんなことはしなくていいはずなのに。

「あんた、その髪かみ、地毛なのかね」

「はい」

「いや、ずいぶんとまあ、きれいな赤い色をしとるでな。その目もたいそう珍しい色だ。あの子は、だがね、色はわからんそうだよ。触視とやらで、あの子はいったい何をどのように見ておるのかな」

「わたしにはわかりません」

「そりゃそうだろうな。いや、いろいろとくだらんことをゆうた。忘れとくれ。儂はそろそろおいとまするよ。ヴィンセントさんは一日うちで休ませるで、あんたももう戸と締じまりして寝るといい」

老医術士が帰ったあと、玄げん関かんのドアに施せ錠じようして、食器を洗ってから、自室に戻った。ベッドにもぐりこんでみたものの、なかなか寝つけず、無む駄だに数をかぞえてみたりした。

妙みように寂さびしかった。寂しさを感じると弱くなるから、いやだった。一人になりたいと思った。一人でなんでもできるようになりたい。強くなりたい。強くないと、きっと生きていけないんだ。誰だれかを平気で傷つけられるほど、強く。誰かから何かを奪うばってしまえるくらい、強く。

やさしさや思いやりなんて、いらない。そんなもの、欲しくない。

6

あれ以来、どうにも気まずいのだ。ヴィンセントとしては、もっと正確に自身の心情を把は握あくしたいところなのだが、やはりこ

の気持ちは「気まずい」としか表現しようがないのだ。

　マリアンヌには謝罪した。結果的には単なる局所的な水すい腫しゆだったようだが、負傷させてしまったこと、着き替がえの最中に部屋のドアを開けたこと、それから、裸形の彼女に接せつ触しよくしてしまったこと。とくに、最後の点については、彼女が意識を失っている間の事故だったため、詳しよう細さいな説明が必要だと思い、記き憶おくしているかぎりの経けい緯いを話した。マリアンヌは聞きながらそうとう動転していた。この目が見えなくてよかったと心底から思った。マリアンヌにもそのように言ったのだが、彼女は戸と惑まどっていた。何か訊ききたそうにしていた。

　そのことが今も引っかかっている。

　何か問いたいことがあるのなら、率そつ直ちよくに問うて欲しい。答えられることならば、ぼくはなんでも答える。だが、問うどころか、それ以後、マリアンヌの口数が極きよく端たんに少なくなった。何か悩なやみでもあるのだろうか。ぼくがまずいことをしたのだろうか。したのだろう。ということは、すべてぼくのせいか。ぼくは何をどう謝罪すればいいのだろう。わからない。わからないのだ。ぼくには何もわからない。

　先日、魔術師マギマガロが突とつ然ぜん来訪した。どうやら、ロデムの角笛団の三人と街頭で決けつ闘とうした件を聞き及およんだらしい。魔術士にしては稀け有うなほど利他的で、義ぎ理り堅がたい好人物である魔術師マギマガロは、ひとしきりヴィンセントの身の上を案じてから、「ロデムの角笛団には気をつけるのだぞ。カリオサークに数ある魔術原理主義組織の中でも、あの者どもはもっともタチが悪い。名と力のある魔術士はおらぬようだが、若い蛇へびのように執しゆう念ねん深く、老いた狐きつねのごとく卑ひ劣れつな連中だ。なんなら、私の弟で子しの中から数名お前のところへやってもよいが──」

　その申し出は、だが、丁てい重ちように断った。

　ぼくは父とは違う。それと同時に、我が師マガロとも違う。

　マガロのように大勢の弟子を抱かかえて、彼らを導き、育成するなど、ヴィンセントには不可能だ。触視で世界を見るヴィンセントのことを、他人が理解できるはずはない。すなわちそれは、ヴィンセントが他人を理解できないということも意味する。

　どうせ、ぼくには人のことなどわからない。

　一番身近にいるマリアンヌのことさえ、まるでわからないのだ。

「ヴィンセント。お前は一人ではない」去り際ぎわに魔術師マギマガロが言った。「お前は一人きりで二十一年の時を生きてきたわけではないのだ。まだ決して長いとはいえぬお前の人生は、多くの者の助けがあり、支えがあって、今、こうして形をなしておる。そのことをゆめゆめ忘れるでないぞ、ヴィンセント。僭せん越えつながら、御ご尊そん父ぷはそのことがおわかりにならなんだ。人を遠ざけ、孤こ高こうの中で、誇ほこり高い、しかし、無残な死を遂とげられた。厚かましいことと承知してはいるが、お前には御尊父と同じ道を歩んで欲しくない。あの道は厳しすぎ、険しすぎる。誰にも、何にも報むくいられずとも、おのれの中だけで信しん賞しよう必ひつ罰ばつを完結させ、ただひたすら高みを目指す道は、超ちよう人じんのみが耐えうる隘あい路ろだ。私の勝手と知りつつ言うが、お前が御尊父のように苦しみ悶もだえる姿は見とうないのだよ」

　魔術師マギマガロはやさしい人だ。

　魔術士としては、やさしすぎる人だ。

「……だが、やさしさは力にならない。ぼくには不要なものだ」

　呟つぶやいてみた。

　朝食の最中だった。

　視線を感じる。

　マリアンヌだ。

「すまない。手が止まっていたのは、考えごとをしていたせいだ。きみの料理に非があるわけではない」

　マリアンヌは何も言わずに少しだけ頭を下げたようだ。

　彼女はなぜ頭を下げたのだろう。

　あの仕草の意味するところは謝罪だろうか。

　だが、彼女が謝る必要など微み塵じんもない。

「きみの料理の技量は、徐じよ々じよに向上していると思う」

　ぼくは何を言っているのだ。

「──とても、助かっている。最初は、きみに行くあてがなさそうだったので、見通しが立つまで、宿を提供するつもりで……そうはいっても、正当な対価としてでなければ、お互たがい気まずいと──」

　そうだ。

　気まずいのだ。

「……とにかく、そのようなつもりで申し出たのだが──もしよければ、ずっとここにいてもらってもかまわない。それは……もちろん、きみ次し第だいということになる。ただ、きみがいろいろやってくれるようになってから気づいたのだが、仕事はわりあいたくさんあるようだ。とはいえ、この間のようなこともあるし──必ずしも安全な職場とは言いきれない。やはり、きみ次第だろう。もともと、一人でなんとかなっていたのだから、きみが何かを見つけて、ここを去っても──おそらく、ぼくは大だい丈じよう夫ぶだ。いや、おそらくではなく、大丈夫なはずだ」

「はい」

「……そうか。そうだな。もうずいぶんたつのだし、きみの人生計画というか、先々のこともあるだろうし──」

「は……はい？」

「いや、いいのだ。そうか。それで、いつ出てゆくのだろう」

「え？　いえ、それは、べつに……」

「まだ決まっていないのか。そうか」

　肺の中の空気がいっぺんに吐はきだされた。

　なぜだか、ぼくは安あん堵どしているようだ。

「──そうか。それなら……いいのだ。いいというのは、つまり、決まるまで、ここで働いていてかまわない。いや、このような言い方は傲ごう慢まんだろうか。働いていて欲しい。ぼくは、先ほども言ったように、助かっている。きみがいてくれて、なんというか──」

　嬉うれしい。

　そう。

　嬉しいのだ、今、ぼくは。

「──なんというか……つまり、以前よりも、よほど人間的な生活を送っているように感じられる。魔術士にとって、人間的な生活が必要なのかどうかについては、なお議論の余地があると思うのだが──すまない。マリアンヌ。きみは困っているようだ。ぼくはそれを感じる。きみを困らせるつもりはなかった。謝罪させて欲しい。申し訳ない」

「い、いえ……そんな」

「すまない。きみはよくやってくれている。ぼくはきみの働きに報いるすべを知らないのだ。魔術士というものは、概がいして常識がないといわれる。そのとおりだろう。正直、ぼくは、きみに支し払はらっている給金が適正かどうかさえわからない。不足ではないだろうか」

「わたしは……あまりお屋や敷しきから出ることもありませんし、いくらいただいても、使い道がありませんから」

「そうか。いや、だが、金はいつか必要になることもあるだろう。あって困るということはないはずだ。給金は今までの倍にしよう」

「倍……ですか？」

「まだ少ないだろうか」

「いえ、そうではなくて」

「足りなければ遠えん慮りよなく言って欲しい。そうだ。きみにも欲しいものくらいあるのではないだろうか。妙みよう齢れいの女性であれば、衣服や、装そう飾しよく品ひんや、化け粧しよう品ひん

など、心引かれるものはいくらでもありそうだ。何か欲しいものがあるのなら、買ったほうがいいと思う。あいにくぼくは魔術以外に興味はないのだが、求めるものは違ちがえど、欲ほつする気持ちは一いつ緒しよだろう。それとも、違うのだろうか」

「どう……でしょうか」

「すまない。ぼくは一方的に喋しやべっている。聞き苦しいだろうと思う。ぼくは話がうまくない。きみも──相手が、ぼくのような者でなければ、会話を楽しむこともできるのだろう。気まずい──そう、気まずい思いをさせて、すまない」

　マリアンヌはまた無言で頭を下げた。彼女の困こん惑わくが伝わってくる。彼女の困惑がヴィンセントには苦い。つらい。胸が締しめつけられる。そういえば、マリアンヌが笑っているところを感じたことがない。もしかしたら、笑え顔がおを浮うかべることはあるのかもしれないが、ヴィンセントの触しよく視しには「笑い」として認にん識しきされない。

　マリアンヌは笑うことがあるのだろうか。彼女を笑わせることはできないのだろうか。

　ヴィンセントは止めていた手を動かして朝食を終えた。ナプキンで口の周りをぬぐっていると、その間に食器が下げられ、かわりにテーブルの上に茶が用意されていた。今までそれをあたりまえのことのように思っていたのだ。慣れていた。しかし、マリアンヌはいつか去るだろう。それもあたりまえのことのはずなのだが。

「もう寒い季節だ」

　マリアンヌが旅立つとしたら、あたたかくなってからだろうか。

「外がい套とうを──新しい外套を買わなければならない。一着駄目だめにしてしまった。マリアンヌ、きみも外套なりコートなり必要ではないだろうか。近いうちに仕立屋を呼ぶ。ついでに、きみも何かあつらえてもらうといい」

「……ありがとうございます」

「礼は不要だ」

　なぜなら、マリアンヌは本心から感謝などしていない。外套も

コートも欲しくないが、雇やとい主の申し出を断って機き嫌げんをそこねるのも面めん倒どうだから、やむをえず頭を下げてみせた。おそらく、それだけなのだ。ぼくは望まれもしない親切を押しつけて、断ることも許さない、横暴な人間なのだ。

　だから、何者かが玄げん関かんのベルを鳴らすと、マリアンヌはほっとしたように一礼して、軽い足どりでこの場をあとにした。

　ぼくといるのが苦痛なのだろう。

　マリアンヌは早く旅立つべきなのかもしれない。きっと、そのほうがお互たがいのためなのだ。

　だが、そう考えると、ひどく息が苦しくなる。

　ひょっとして、ぼくはそれほどまでに一人になりたくないのだろうか。

　孤こ独どくには慣れているはずなのに。

7

　奇き妙みような風ふう体ていの客だった。帽ぼう子し、外套、衣服は目の覚めるような青と黄で、いやに踵かかとの高い靴くつを履はき、～型の杖つえを持っている。顔は白しろ塗ぬりで、色の濃こいサングラスをかけて、黒い口紅をつけているので、人相がよくわからない。たぶん、靴のせいで十サンチ以上、上うわ背ぜいが水増しされているから、実際はかなり小こ柄がらなのだろう。背せ丈たけだけでなく、幅も厚みもない。やけに肩幅が広いように見えるのは、小さい頭と、肩パッドのせいに違いない。

　もしかして、女性だろうか。

　だが、名乗って来意を告げた声は、身体からだに似合わず、低く、太かった。

「我が名はエドガー。師は魔術師マギマガロ。師の先師は魔ウイ導ザー士ドデウスだ。魔術師マギヴィンセントにお会いしたい」

日ひ頃ごろ、ヴィンセントの屋敷を訪おとずれる者は決して多くない。最初はこの屋敷がカリオサークの中心からかなり離はなれた郊こう外がいにあるせいかと思ったが、やがてそうではないことに気づいた。

寝しん食しよくと、魔術の研究及および訓練、それから、どうやら唯ゆい一いつの趣しゆ味みらしい散歩と、数日おきに買い物に出かける。それがヴィンセントの生活のすべてだ。ヴィンセントの辞書には、人づきあいという項こう目もくがないらしい。使用人としては、面めん倒どうな仕事が増えるだけなので、来客などないに越こしたことはないが、ヴィンセントにとってはどうなのか。

自分のことを棚たなに上げて、そんなことを考えたこともある。

だから、エドガーと名乗った客人の口から魔術師マギマガロの名を聞いて、少々の驚おどろきとともに、かすかな安あん堵ども覚えた。すぐに、ばかばかしい、と思った。

ヴィンセントは、雇い主としてはたしかに悪くない。あのとき、ヴィンセントに拾われていなければ、行き倒だおれになっていただろうから、恩人でもある。でも、それだけだ。

だいたい、助けてくれと頼たのんだわけでもない。使用人の仕事だって、こっちからやらせてくださいとお願いしたわけじゃない。ぜんぶ、相手が自由意思にもとづいて勝手にやったことで、言いだしたことだ。それがたまたまこっちにとって都合がよかったから、話に乗ってやった。

つまり、自分に利があるかどうか。人はいつもそこを敏びん感かんにかぎわけて判断する。誰だれだってそうだ。自分以外のことを考えたって、損をするだけなんだ。不安な夜、寂さびしい夜に、僕が抱だきしめて、頭をなでて、慰なぐさめてあげたこどもたちのことを思い出せ。子し爵しやくの罠わなにたやすく嵌はめられた彼らは、何を囁ささやきあっていた？　『あいつ、他人にかまいすぎだろ』『スパイなんじゃない？』『そういえば、知ってる？』『え？　そんなのって……』『気味が悪いわ』『気持ち悪い』『近づかないようにしようよ』

べつに、彼らのことを恨うらんでいるわけじゃない。

むしろ、感謝している。

　彼らは教えてくれた。そんなものだ。人間なんてそんなものなんだ。だったら、僕は自分で自分を守るしかない。他人を信じて、裏切られて、傷つくなんて、馬ば鹿かげてる。

　もっとも、応接間で向かいあったヴィンセントとエドガーは、再会を喜びあう様子もなく、会話さえ途と切ぎれ途切れだった。

「久しぶりだね、ヴィンセント」

「ああ」

「それだけか。相変わらずだ」

「そうだろうか」

「そうだ。君は変わらない」

「…………」

「いや、変わったこともあるな」

「そうか」

「あるさ。君が使用人を雇やとうとは」

「彼女は使用人ではない」

「メイドの服を着ているじゃないか」

「服の意い匠しようについてはよくわからないが、それは心外だ。違ちがう服を仕立てさせよう」

「ふん……」

「…………」

「メイドでなければ、なんなんだ」

「彼女の立場になんらかの呼び名をつけることに意味があるとは思えないのだが」

「女に興味があるとは知らなかったよ」

　ヴィンセントはため息をついて口をつぐんだ。だが、エドガーは止まらない。

「しかも、こんな若い女に。人形みたいな顔をして。まだ餓が鬼きじゃないか。同門では一番疎うといやつだと思っていたのに、わからないものだな。で、どうだ。女を覚えて、未知の世界でも見えたかい？　いや、君は目が見えないのだったな。見えるというよりは、感じるといったほうが正しいのか。覚えたては大変だというしね。どうせ、朝も昼も晩もそのことばかり考えているんだろう」

　でも、なんだか——この人は、変だ。

　エドガーは指でテーブルをトントン叩たたきながら、何かに取り憑つかれてでもいるかのように、下げ劣れつなことを喋しやべりまくっている。だんだんと声がうわずってきて、しきりと唇くちびるを舐なめる仕草にも落ちつきがない。

　と、不意にエドガーがこちらに顔を向けて、鼻先で笑ってみせた。

「餓鬼は餓鬼なりに、無む駄だに美しい、淫いん売ばいの顔をしているよ。君はヴィンセントにいくらで買われたんだい？　この男は親の遺産で金だけは持っているからね。おおかた大金をちらつかされて股またを開いたんだろうが、まあ、その年でよくやるものだ。知っているか。淫売は淫売を生む。君は淫売の血を引いているし、君の子も淫売になって、淫売を生むのだ。自分の身体からだくらいしか売るものを持たない寄生虫以下の屑くずが、殖ふえて、殖えて、殖えまくる。まったく、汚けがらわしいね。汚らわしいったら——」

「エドガー」

　ヴィンセントの声は乱れていなかった。それでいて、激しい怒ど気きをふくんでいた。

　なぜだか、それを感じた。

「ぼくとマリアンヌはそのような関係ではない。彼女を侮ぶ辱じょくするのはやめてもらおう。どうやら、きみの精神はひどく不安定のようだ。用があるのなら早くすませて、今日はもう休んではどうだろうか」

「……不安定？　不安定だと？　私が、私の精神が、不安定……？」

「ぼくの推測なのだが、きみは精神ブレイ開放ンクラ剤ツカーを過か剰じように摂せつ取しゆしているのではないか」

「黙だまれ。黙れよ、ヴィンセント。過剰オーバー摂取ドーズだと？　私が……？　何を根こん拠きよにそんなことを。ふざけるのもたいがいにしろ」そう言いながらも、サングラスの位置を直すエドガーの手が小刻みに震ふるえている。かなり動どう揺ようしているらしい。「……ヴィンセント。ヴィンセントめ。お前というやつは、いつもそうだ。いつもそうだった。お前はまだ私の前を歩いているつもりなのだろう。自分が先んじていることを疑っていないのだろう」

「そのようなつもりはない」

「見えすいた嘘うそを、痴しれ言ごとを、妄ぼう言げんを吐はくな。態度に表れているんだ。お前が私をどう思っているか。見下して、見くびっているのだろう。馬鹿にするな、ヴィンセント。わからないと思うか」

「きみが誤解しているということしか、ぼくにはわからないようだ」

「誤解？　誤解だって？　おい。ヴィンセント。まだそんなことを言うのか。いいかげんにしろよ。言っただろう。私を馬鹿にするな。耐たえがたいんだ。耐えがたい。本当に、我が慢まんならない。ヴィンセント。私は、お前を……許すことはできない。絶対に」

「ぼくはきみに何かしたのだろうか」

「したさ。した！　当然だ！」エドガーはテーブルをバンッと叩いて立ちあがり、さらに声を荒あららげた。「──魔術師マギを僭せん称しようしたな、ヴィンセント！　むろん、それがどういうことかわかっているのだろうな！　魔術師マギマガロの門もん弟ていとして、私は常にお前と比ひ較かくされてきた！　人一倍、血のにじむような努力をしていたくせに、人前ではそれを見せようとしない、しかも触しよく視しというオーバラーツを持つお前は天才呼ばわりされて、私は凡ぼんオさい扱あつかい……！　くだらない。くだら

ない。じつに、くだらない。魔術とは力だ。比較だと……？　ふふ。あはは。あの温室の中で比べられるものか。誰だれも知らないくせに。私の力を知らないくせに。だから、思い知らせてやるよ。ヴィンセント。魔術師マギヴィンセント。ロデムの角笛団を知っているか」

「……なぜ、きみがその名を」

「我らは魔導王の再来を希こいねがう」

　エドガーは胸むな元もとから首くび飾かざりを出してみせた。ヴィンセントには見えないだろうが、細い鎖くさりに角笛をかたどった金細工がぶら下がっている。

　それは、この前、夜道でヴィンセントに決けつ闘とうを挑いどんできた三人組が首に下げていたのと同じ物だ。



「残念ながら、私はまだ団の中では新しん参ざん者ものでね。お前が三人殺してくれたおかげで、ようやく私に順番が回ってきた。私は魔術師マギのお前を殺して、正々堂々、魔術師マギを名乗る。ヴィンセント。嫌いやだとは言わせない。私との決闘、受けてもらうぞ。三日やろう。せいぜいその淫売と別れを惜おしむがいい」

8

　翌日、また魔術師マギマガロが屋や敷しきを訪おとずれた。

　エドガーの件だった。

　師は、数すう巡じゆん月げつ前にエドガーがロデムの角笛団に加盟したらしいと伝えにきたのだが、当然、ヴィンセントにとっては既き知ちの情報だった。

　もっとも、二日後の早朝に弟で子し同士が相争うなどと聞いたら、師はさぞかし心を痛めることだろう。ヴィンセントはあらためて厳重な警けい戒かいをうながす師にうなずいてみせ、決闘についてはあえて口にしなかった。

　ただ、師が帰り際ぎわに気になる言葉をもらした。

「御ご尊そん父ぷのことだがな。確実ではないのだが、じつは──いや、いいのだ。忘れてくれ」

　しかし、それ以外はわりあい平へい穏おんな日々だったといってもいいだろう。

　あるいは、マリアンヌが平素と変わらない態度でいてくれたからかもしれない。

　決闘前日の午前中に、アール・ベルアノンの仕立屋を呼んで、自分の外がい套とうと、マリアンヌの新しい衣類とコートを発注した。マリアンヌは気がすすまない様子だったが、いずれここから旅立つにしても、着る物は必要だろう。どうせなら、丈じよう夫ぶで持ちのいい服がよいのではないかとヴィンセントが提案すると、マリアンヌも異議は唱えなかった。来年は男装風の女性服が流行する模様だと仕立屋が言うものだから、それはちょうどいい、着回しのきく服を何着かお願いすると頼たのんだ。できるだけ急がせることにした。ヴィンセントの外套は、以前と同じ型のものがあるとのことだったので、すぐに持ってこさせた。準備といっても、それで終わりだった。もとより、魔術は力、力こそ魔術、力なき魔術士など無価値と考えるヴィンセントは、いついかなるときでもぞんぶんに

魔術を使えるよう、物理的な面でも、精神的な面でも、備えはしている。今さら特別な用意など不要なのだ。

　とはいえ、夕食は早めにとった。明朝は何も食べずに決闘へとおもむくつもりなので、これが最後の食事になるかもしれない。そう考えても心は揺ゆるがなかった。ただ、現実問題として、敗れれば死ぬだろう。死ねばヴィンセントの存在は失われる。蘇そ生せい式があるとはいえ、死者が這はっていって施せ式しきを望めるわけではないし、そもそも、「勝者には栄えい誉よとそれに浴するいくばくかの未来を、敗者にはただ永遠の死を」が正式な「決闘デユエル」の習わしというものだ。どのみち、魔術による死は、遺体を蘇生不能の状態に陥おちいらせることが多い。エドガーの力量も侮あなどるわけにはゆかない。ぼくは明日死ぬかもしれない。だとしたら、やっておくべきことがある。

「マリアンヌ。きみに話しておきたいことがあるのだが」

　マリアンヌは拒こばまなかった。いつもどおりだった。そこで、一いつ緒しよに茶を飲むことにした。マリアンヌにはダイニングの椅い子すに座っていてもらい、ヴィンセントが茶を用意した。マリアンヌがいないころは、自分の面めん倒どうは自分で見ていたのだ。マリアンヌが食器等の配置を変えていなかったこともあって、たやすい作業だった。やはり、ぼくは一人でも大だい丈じよう夫ぶだろう。しかし、マリアンヌは平気だろうか。そのことだけが気にかかるのだ。

「ぼくは明日敗れるかもしれない」

　だから、やれることはやっておこうと思う。

「エドガーはもともと力のある魔術士だ。それに、ぼくの推測では、精神ブレイ開放ンクラ剤ツカーと呼ばれる種類の薬物を過か剰じように摂せつ取しゆしている。エドガーの目は真っ赤に充じゆう血けつしていなかっただろうか。肌はだが異常に乾かん燥そうしていたとか」

「……サングラスを、かけてらっしゃいましたので。それから、お化け粧しようを━顔を真っ白に塗ぬって、黒い口紅をつけてらっしゃいました」

「たぶん、副作用をごまかすためだ。誰にでも現れるわけではない

のだが、急激に増量するとたいていそのようになるらしい。エドガーはそのせいで心身ともにきわめて不安定だろう。かわりに魔術士としては限界を超こえた能力を発揮しうる。ぼくに勝ちたいのだ。師のもとで学んでいたとき、エドガーは何度もぼくに近づいてこようとしたのだが、ぼくは避さけた。ぼくには不要だったからだ。エドガーはぼくを憎にくむようになった。あの憎ぞう悪おをずっと感じていた。ときに憎しみは力となるようだ。ぼくは勝つかもしれない。負けるかもしれない。五分と五分だ」

　茶を飲んだ。どうやら、マリアンヌが淹いれてくれた茶のほうがおいしいようだ。

「ぼくが死んだら、父から受け継ついだ財産のすべてをきみに譲ゆずろうと思う」

「──え……？」

「この屋敷と家財道具一式、それから、いくらかの金品、王立銀行に預金もある。ぼくには子も兄弟もいない。友人もいない。きみ以外に遺産のもらい手が思いつかないのだ」

「でも……」

「むろん、ぼくが敗れると決まったわけではない。最善をつくすつもりだ。ぼくの父は魔術理論の構築に心血をそそぎ、一時期はそれなりの名声もえたのだが──そう、きみにも読んでもらっただろう。ミゲロ・ラプソルドの著書を」

「はい」

「あれがぼくの父だ。父は上古の精せい霊れい魔術に回帰し、混こん沌とんとしながらも、精神性に富み、信しん頼らいと協調、反目と闘とう争そうにあふれた要素精せい霊れいの世界を描えがきだした。父は要素精霊を擬ぎ人じん化かさえしていた。それがやがて批判されるようになった。現代魔術の思潮からすると、父の思想はロマンチックすぎたのだ。なおかつ父は理論のみを追い求めて魔術の実じつ践せんをおろそかにした。魔ウイ導ザー士ドを名乗りながら、魔術原理主義者などに殺されたのだ。師が父の遺体を見せてくれなかったし、どの組織も声明を出していないので、くわしいことはわからないのだが、そういうことになっている。いずれにしても、魔術士としては最低の部類に入る、屈くつ辱じよく的な死に他

ほかならない。父の名は地に堕おちた。ぼくも父は間ま違ちがっていたと思う」

　そう。父は間違っていた。

「魔術は力だ。力をふるえない魔術士に価値はない。しかし──」

　だが。

「父の理論は、本当に間違っていたのだろうか」

　妙みようだ。

　今まで誰だれにも言ったことがないし、言う必要もないと考えていたのだが。

　結局、平常心ではないということだろうか。

「ぼくは確かめたいのだ。ぼくの魔術はすべて父の理論をもとにしている。ぼくは要素精霊たちを友として、彼らとふれあい、語らって、彼らの力を借りる。ぼくには人間の友はいない。だが、友はいる。だから、ぼくは寂さびしくなかったのだ。ぼくは力が欲しい。もっと力を。そうすれば、ぼくは証明できるだろう。父が正しかったことを。ぼくは老いた父に何もしてやれなかった。失望させることしかできなかった。ぼくはいつか父の汚お名めいを雪すすいでやりたいのだ」

「……それなら」

　マリアンヌがぽつりと言った。微笑ほほえんでくれたように感じた。気のせいだろうか。

「勝たないといけませんね、明日」

「そうだな」

　ヴィンセントは深く息を吐はいて、微笑んでみた。

「きみの言うとおりだ」

決けつ闘とう。負ければ死ぬ。知らない。どうでもいい。勝手に死ねばいい。関係ない。関係ない、はずだ。それより、いつまでこんなことをやっているつもりなんだろう。らっしゃいましたので。らっしゃったので。なんだよ、あの言葉づかい。すっかりメイドが板についちゃって。気持ち悪い。なまじ要領がいいせいだ。子し爵しやくにも──あの腐くされ外げ道どうにも、お前は覚えがいいとか、よく言われた。ろくな取り柄えじゃない。あげく、淫いん売ばい呼ばわりされて。屈辱には慣れているから、我が慢まんすることはできる。でも、平気なわけじゃない。いやだ。いやだ。ああ、やだ、やだ、やだ。日増しにいやになってくる。

遺産……？　冗じよう談だんじゃない。重すぎる。やめて欲しい。いらない。何もいらないのに。何も期待しないで欲しい。何も思わないで欲しい。なんだか、息苦しくてたまらないから。僕には無理だから。あんたたちが見ている、感じている僕は、違うから。それは、僕じゃない。

僕は欺あざむいてるんだ。誰も彼もを騙だましてるんだ。そうやって子爵を陥おとしいれた。ざまあみろ。僕の十八番なんだ。僕はそうやって背中から刺さすのが大得意なんだ。薄うす汚ぎたないんだ。卑ひ怯きようなんだ。それなのに、どうして？　野や盗とうの一人が馬車から子爵を引きずり下ろしたとき──子爵は僕をかばおうとして、それで──僕は、笑いながら、ざまあみろと思いながら──僕の心臓に、見えない何かが突つき刺さった。

あの痛みはなんだろう？

恐きよう怖ふ？　極度の緊きん張ちよう？　それとも、哀あわれみ？　罪悪感……？

明朝、魔術師マギヴィンセントが魔術士エドガーに敗れて死んでしまったら、僕の心臓はまた痛むだろうか。

どうでもいいはずなのに。

勝手に殺しあえばいい。

遺産？　もらっておけばいい。お金はいくらあっても困らない。なければ飢うえ死にするしかない。くれるというのなら、喜んでも

らっておけばいい。それでいいじゃないか。

　それでいいはずなのに。

　気持ち悪い。ヴィンセントの態度が明らかに変わった。子爵のもとで、他の貴族のそういう目にさらされたことがあるから、なんとなくわかる。汚けがらわしい。豚ぶたどもめ。気持ち悪い。本当に、吐き気がする。所しよ詮せん、雄おすってそういうことしか考えられないのか。汚きたない。汚い。汚い。思い出す。貴族たちのあの目つきを。なまっちろい手を。上品ぶった下げ劣れつな顔を。

　気持ち悪い。何もかもが気持ち悪い。

　何より━━そんな脂あぶらぎった視線を集めてしまう、僕が。

　僕の存在自体が、一番気持ち悪い。

　暗い部屋の中で、ベッドの上に丸まって、逃にげだしたい、と強く思った。

　窓が、割れた。

10

　魔術士の決闘には不文律の掟おきてがある。簡単なことだ。魔術のみによって雌し雄ゆうを決する。それは法ではない。誰が定めたわけでもない。だが、魔術士は力を欲ほつし、その力の証明を求めて魔術士と争う。魔術で相手を上回ることができなければ、そもそも決闘する意味などないのだ。

　ただ、ロデムの角笛団の一人はその掟を破ってみせた。魔術師マギマガロも、彼らを指してもっともタチが悪いと評していた。魔術原理主義組織でありながら、決闘で魔術以外の手段を用いる卑ひ劣れつな者たちだということは理解していた。

　いや、わかっていなかったのだ。あるいは、彼らの一味になりはてたとはいえ、同門のエドガーがそこまで堕だ落らくしているとは考えていなかった。

レイクラルモン庭園通りを見下ろす早朝五時の空は、まだ暗い。

「エドガー。マリアンヌを放せ」

「ふはは。怒おこっているのか、ヴィンセント」

エドガーの他ほかに、ロデムの角笛団の者だろう魔術士が二人いる。その二人がマリアンヌを拘こう束そくしているらしい。マリアンヌはなんらかの手段で行動の自由を奪うばわれ、声を出すこともできないようだが、生きているし、意識もある。ヴィンセントはそれを感じて少しだけ安あん堵どしていたが、エドガーが指し摘てきしたように、憤いきどおりは静まっていない。

今から六時間ほど前だ。物音で目が覚め、マリアンヌの不在を知った。最初、みずからの意志で出て行ったのかと思ったが、部屋の窓まど硝子ガラスが割られていて、もみあった形けい跡せきも室内にあった。ヴィンセントはマリアンヌを捜さがした。捜して、捜して、捜して、ロデムの角笛団の、エドガーの仕し業わざに違ちがいないと、ようやく思いあたったのではない。そんなことは最初から察しがついていた。

だが、心のどこかで否定したかったのだろう。

やっと自分を納なっ得とくさせて、ここにきた。

決闘の場所に。

「そうだな。ぼくは多少、いや、かなり腹が立っている」

「嬉うれしいよ、ヴィンセント。私はずっとお前を怒らせることさえできなかった。お前は無表情で、私には興味もないといった態度で、いつも私を無視した。私はお前が感情をあらわにしているところを見たかったんだ。いい気分だ」

「そんなことのために、マリアンヌを拉ら致ちしたのか」

「いいや。それだけじゃない。勝つためさ」

「くだらない小細工を弄ろうせずとも、勝機はきみにもあった」

「きみにもあった……？」

　エドガーの声に、全身の気配に、怒ど気きがみなぎった。

　どうやら、引っかかってくれたようだ。

「そうかもしれないな。いくらかはね。ただ馬ば鹿か正直に挑いどんだとしても、私にだって勝ち目くらいはあっただろうさ！　そうやって、お前は……！　いつも私を軽く見て！　しかも、冷静に、落ちつきはらって見下していたんだ！　わかっているのか？　それは、最大級の侮ぶ辱じよくだ！　その屈辱が私を狂くるわせた！　私が堕おちたくて堕ちたと思うか、ヴィンセント！　違う！　お前のせいだ！　お前がいなければ、私は……！　わた──」

「款暗Ｊａｘｉｓ嘔劾磊」

　ヴィンセントはエドガーの怒ど声せいなど聞いていなかった。特殊なチヤネ精神集中リングに入って、魔術の準備を進めていた。そして、呪じゆ文もんを詠えい唱しようし、発動させた。雷らい咬こう撃げきだ。ヴィンセントの杖つえから放たれた一条の雷かみなりが、マリアンヌを拘束している二人の魔術士のうち一人を直ちよく撃げきした。そのときにはもう、ヴィンセントは駆かけだしていた。目の見えぬぼくに迷いはない。残った魔術士はひどく狼ろう狽ばいしている。やすやすと間合いに入ることができた。杖で思いきりぶん殴なぐった。一発。二発。魔術士は倒たおれたが、まだかすかに意識がある。情けは無用だ。喉のどを靴くつの踵かかとで踏ふんづけて体重をかけると、彼は「ぉご」という声をもらして人事不省に陥おちいった。

「マリアンヌ、大だい丈じよう夫ぶだろうか」

　思わずマリアンヌを抱だきしめた。ふれてしまった。

　彼女は後ろ手で縛しばられ、猿さる轡ぐつわをはめられている。急いでそれをほどいた。

「……すみませんでした」

「なぜきみが謝るのだろう。謝るべきはむしろぼくのほうではないか」

　答えながら、ヴィンセントはマリアンヌを背中にかばいつつ、エドガーに向きなおった。

「邪じや魔ま者ものは排はい除じよした。エドガー、ぼくは逃げも隠かくれもしない。決着をつけよう」

「……決着？　決着だと……？　黙だまれ、ヴィンセント。よくも……よくも、私の……想定外のことを。まったく、お前はどこまでも私を裏切ってくれる。それで私を出し抜ぬいたつもりか。それで……おのれ……！」

「マリアンヌ。下がっていて欲しい」

　ヴィンセントはマリアンヌを後退させた。

　魔術士の決けつ闘とうは、一いつ瞬しゅんで勝敗が決する。最初の読みあいと、あとは単純な力比べ。ようするに、それだけだ。エドガーの精神はそうとう乱れている。それと同時に、かなり強い魔力を感じる。何をしてくるつもりなのか。エドガーは火の要素精せい霊れいと相あい性しようがいい。離はなれていてもひしひしと肌はだに感じるあの魔力からして、大きな魔術で一気に片をつける気か。おそらく、紫し火か炎えん籠ろう。エドガーが御ぎよしうる魔術のなかで、もっとも強力な炎霊Ｒｉｇの要素魔術だ。しかし、あの状態では、精神を集中させるのにやや手間どるだろう。なおかつ、紫火炎籠の呪文は長い。ヴィンセントは、キングダム・イズルハなどで採れる鉱石イキシシュタロと、錬れん金きん術じゆつで生成されるリハ石をジャケットのポケットからとりだした。精神を集中させる。無。空くう洞どう。下層エレメンタルプレーンに精神接続。あっという間に満たされる。訓練によって刻みこまれた呪文が口をついて出た。

「簒爛Ｄｅｘｕｓ叛紋婁」

　雷霊Ｘａｗがイキシシュタロとリハ石を一瞬で食くらいつくした。ヴィンセントが持つ、暗黒大陸でしか見られないハクロケイという木でできた杖の先には、透とう明めいな石が埋うめこんである。その石めがけて雷が落ちた。雷は石を経由してエドガーに襲おそいかかった。轟ごう雷らい槍そうは、現代要素魔術の傑けつ作さくの一つである爆ばく雷らい索さくを創出する過程で生みだされた魔術だ。爆雷索ほど洗練されておらず、自在に制せい御ぎよすることはできないが、エドガーは魔術の準備に入っていて動けない。たった一つの動かない的に命中させるだけならば、なんとかなる。威い力りよくは雷咬撃の数倍。魔力の消しよう耗もうはそれ以上。これで決める。ヴィンセントが決意をこめて放った渾こん身しんの

一撃が、エドガーをとらえた──かに見えた。

「……消えた？」

　そうだ。消えた。雷はたしかにエドガーを撃うったはずなのに。だが、あの瞬間、何か音がしなかったか。砕くだけ散るような音が。わからない。どういうことだろう。

　いずれにせよ、エドガーは倒れていない。それどころか、もう魔術を発動しようとしている。ヴィンセントの頭の中に、突とつ然ぜん、外界の様子がありありと映しだされた。見える。音が見える。空気の流れが見える。心が見える。マリアンヌが怯おびえながら、心配しながら、こちらを見ている。エドガーは解放しようとしている。あれは殺意だ。憎ぞう悪おだ。精霊だ。炎霊Ｒｉｇだ。紫火炎籠。くる。エドガーはやるつもりだ。ぼくを。

「ＤｅｏｌｄＭｅｌｄ湛禮致眞ＭｏｎｒｅｙｄＭｅｙｒａｙ縫炎媚炎ＡｇＮａｇＭｅｇＤＡ穿燈婆」

　違ちがう。

　なぜだ。どうしてだ。

「──よせ、エドガー……！」

　ヴィンセントは飛んだ。飛ぶように走った。マリアンヌ。立ちすくんでいるマリアンヌを思いきり突つき飛ばした。間に合った。きた。魔術だ。紫火炎籠は、さながら鞭むちのごとく燃えあがる炎霊Ｒｉｇの紫し炎えんで標的を絡からめとり、焼きつくす魔術だ。紫炎の数や大きさは術者の力量次し第だいだが、とにかく、無様に転がってでも、這はってでも、逃にげなければならない。離れるのだ。離れなければ、焼け死ぬ。熱い。熱い。ぼくは燃えているのか。衣類が。皮ひ膚ふが。肉が。焦こげる匂においがする。ぼくは悲鳴をあげたかもしれない。地面に身体からだを押しつけて火を消そうとしながら、みっともなく泣き叫さけんだかもしれない。しかし、なぜだ、エドガー。どうしてマリアンヌを狙ねらったのだ。轟雷槍はなぜ効かなかったのだ。わからない。触しょく視しはもうきかない。暗い。暗い世界だ。それでも、エドガーが近づいてきたことには気づいた。

「ふはは……ははははは。ヴィンセント。みじめだな。でも、驚お

どろいたよ。まさか轟雷槍を使ってくるなんてね。難しい魔術じゃないか。強力な魔術だ。まともに食らっていたら、死んでいたな。そのために用意したんだ。宝ほう珠じゆだよ。〝盾たてのヤンジャ〟。お前も聞いたことくらいあるだろう？　要素精霊の力を吸収してくれる。魔導師マジスタイプシラと機メカ術ニス師タイニ・ガーゴイルが共同で製作した幼ベイビ宝・ー珠ジエムだ。今の一回で壊こわれてしまったけどね。高かったのに。九十万ダラーもしたんだ。大損だよ」

「……な……なぜ……」

「その淫いん売ばいを狙ったかって？　わからないのか。意外と馬ば鹿かだな。結果がぜんぶ物語っているじゃないか。お前自身を狙うより、お前が惚ほれてる淫売を狙ったほうが効果的だ。その淫売が死ねば、お前は死ぬほど苦しむ。淫売をかばってお前が死んだら、淫売はあとでゆっくり殺せばいい。どう転んでも、私にとっては愉ゆ快かいだ」

「……マリ……アンヌには……手を……」

「嫌いやだね。この期ごに及およんで、私がお前の頼たのみを聞くと思うか？　思わないだろう？　それなのに、お前は私に哀あい願がんするんだ。その淫売を見み逃のがしてくれと。本当に腹立たしいな。頭にくるよ。頭にくる！」

　頭を蹴け飛とばされた。靴くつの爪つま先さきか。マリアンヌが悲鳴のような声をもらした。これは痛みだろうか。後こう悔かいか。この感覚は。

「──お前をもっといじめてやりたいよ。お前を怒いからせて、それでもどうしようもないんだということを思い知らせて、絶望を味わわせて、殺してやりたい」

　この感覚は、なんだろう。エドガー。エドガー。ぼくは──、

「ふはは。そうだな。そうだ。ヴィンセント。知っているか。お前の父親のことだよ。私にとっても師の先師にあたるわけだな。魔ウイ導ザー士ドデウス。彼を殺したのは誰だれか。知っているか、ヴィンセント」

　ぼくの──父？　父、だと……？　なぜ、父が？　父、を……？

「ロデムの角笛団だ。団長マスター・ヘイム率いる魔術士八名が、お前の父を殺した」

「……な……に……？」

「お前の父は、老いぼれのくせに勇ゆう敢かんに戦ったそうだよ。魔術でね。ロデムの角笛団の八人のうち、五人が斃たおされた。最後はやむをえずマスター・ヘイムら三人が剣けんで刺し殺さつし、魔術で遺体を焼いた。ただ、さすがに決けつ闘とうの果てに敗死したようには見えなかったらしくてね。表向きロデムの角笛団はデウス殺害の事実を認めていないが。でも、私はその話を聞いて思ったんだ。いくらすぐれた魔術士でも、小人の剣ごときに敗れ去る。じゃあ、魔術の力とはなんだ？　くだらない。くだらないよ。魔術なんて阿あ呆ほらしい。げんに、私より才能のあるお前が、こうして死にかけている。お前が信じている力なんてこんなものだ。お前は愚おろかだ」

　ぼくは、愚かだ。

　たしかに、そうかもしれない。

　だって、ぼくは今、当時百十八歳の父が、魔術士八人を相手に戦い、五人までを討ち果たしたと聞いて──、

　ぼくは、ひどく嬉うれしい。

　父は理論だけの人ではなかった。立派な魔術士だったのだ。父とぼくは、結局のところ、同じ道を歩んでいたのだ。ぼくは父のあとを追っていたのだ。そのことがやけに嬉しいのだ。

「……あり……が……とう……」

　自然と感謝の言葉が口をついて出た。

　図らずも、それがエドガーを逆上させてしまった。

「ああ？　何……？　ありがとう？　なんだよ、それは。いったいどういう意味なんだ、ヴィンセント。ええ？　お前──いいかげんにしろよ。私を馬鹿にするのもいいかげんにしろ。許さないぞ。私を──虚こ仮けにして。ふざけるんじゃない。やっぱりお前はそうか。そうなのか。いいさ。わかったよ。見せてやるよ。お前に見せつけてやる。私はもう、お前が知っている私じゃない。私の力はお前よ

り上だ。その力で、お前の大事な淫売を殺してやる！」

「……や……め……やめろ……！」

　ヴィンセントはなけなしの力をふりしぼってエドガーの足にすがりつこうとした。だが、この身体はあまりに鈍どん重じゆうだ。動かない。うまく動いてくれない。ああ、マリアンヌ……！　逃にげてくれ！　お願いだから逃げてくれ！　エドガーの言うとおりだ。きみが殺されるなんて、耐たえられない。ぼくはどうなってもいい。でも、きみには生きていて欲しい。一年だ。きみは一年もぼくのそばにいた。きみはどこか近寄りがたかった。ぼくたちの間の距きよ離りは最初のころとさして変わっていない。ぼくがたわむれに魔術を教えても、読書をすすめても、きみの態度はほとんど変わらなかった。屋や敷しきの中も、きれいに掃そう除じされながら、家具等の配置は基本的に変わらなかった。静かだった。穏おだやかだった。それでいて、ほのかにあたたかかった。ぼくはその空気を愛した。その空気を作ってくれたきみを好ましく感じていた。きみがいつか旅立つことを考えると、落ちつかない気持ちになった。きみがいる。きみが、ぼくのそばにいる。いつの間にか、それがあたりまえになっていた。あたりまえなどではないのに。

　マリアンヌ。

　つまり、ぼくは、きみを失いたくないのだ。

　その一心で、なんとか両手でエドガーの足をつかんだときには、もう遅おそかった。

「ＮｉＬＩＬＮｕｍＭｏＬＳｅＬＺｅＬ我申子浄化閻魔也」

　その呪じゆ文もんは。長く、複雑で、特とく徴ちよう的な暗号化を施ほどこされた上古ハイ高位ロメ語オンの呪文は。

　まさか、と思った。エドガーはそこまで到とう達たつしているのか。もっとも扱あつかいにくい要素精せい霊れいのうちの一つとされる炎霊Ｎｉｇを手なずける、もしくは、服従させるまでに。

　藍あい色いろ炎えん上じよう。

　猛たけり狂くるう藍色の猛もう火かで標的を焼きつくす、超ちよう高等要素魔術だ。

　ヴィンセントは絶ぜつ叫きょうした。やめろ！　やめてくれ！　頼たのむから、やめてくれ！　頼む、お願いだ……！　マリアンヌを焼かないでくれ！　燃やさないでくれ！　殺さないでくれ！　それくらいなら、ぼくを殺せ！　どうか、ぼくを殺してくれ……！

「ＤａｇｅｌｉｓＦｏｎｄＶｏｎｄ真藍蓮往還涅槃王ＳｅｖｅｎＮｅｖｅｎＸ＋Ｘ」

　だが、呪文の詠えい唱しようは止まらない。足を引っぱったくらいでは、エドガーの集中を乱すことはできない。駄だ目めだ。駄目なのか。もう間に合わないのか。

「喪━慧━手━翅━痲━衛」

　間に合わなかった。藍色炎上が発動した。

　燃えあがった。

　エドガーが。

「……逆流リバース……？」

　ミゲロ・ラプソルド流に言えば、気き性しようの荒あらい要素精霊たちの力を借りようとして、失敗したときに起こる現象だ。狙ねらった相手ではなく、自分自身に向けて魔術が発動する。ヴィンセントはのっそりと転がってエドガーから離はなれながら、焼け焦こげたジャケットのポケットに手を突つっこんだ。触しよく媒ばい。無限凍土産の氷石の欠片かけらと、防水耐たい火か布ふでつつんだハクバネ草。「……ヴィンセン……トォォォ！」エドガー。きみは。「くそぉ……熱い……熱い熱い熱いぃぃぃ……！」自分自身の力を量り間ま違ちがえた。きみは冷静ではなかった。「━た、助けて……くれ……！　誰か！　ヴィンセントォォッ……！」炎ほのおに焼かれるきみを、哀あわれんでいるわけではない、と思う。だが、今になってようやくわかったのだ。ぼくがきみにしたことの意味を。ぼくはきみを拒きよ絶ぜつした。それどころか、無視して遠ざけた。きみはそれでもあきらめなかった。ぼくも同じ態度をとりつづけた。たしかに、きみを狂わせたのはぼくかもしれない。ぼくは集中する。ときに精神は肉体を超ちよう越えつするのだと信じて。

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷

獄」

　我が友たる水霊Ｈｙｄと時霊Ｘｅｏよ、お願いだ、どうかエドガーを焼きつくそうとしている炎霊Ｎｉｇを静めてくれ。ぼくは祈いのりをこめて縛ばく氷ひよう獄ごくを発動させた。

　マリアンヌの声が聞こえた。ぼくの名を呼ぶ声が。

　ぼくは満ち足りた気分で闇やみに落ちた。

11

「──儂わしも年だでな。何度もこりゃ駄目かと思うたが、手を貸してくれた知りあいの医術士らの腕うでがようて、応急処置がいい具合にできたのがさいわいだった。怪け我がの程度が程度だで、完治までにはまだいくらか時間はかかるであろうが、峠とうげは越こえたよ」

「そう……ですか」

「いや、あんたが駆かけこんできて話だけ聞いたときは、そりゃもういかんだろうと思うたが。魔術による火傷やけどはタチが悪うてな。それがもとで死ねば、蘇そ生せいも叶かなわんことが多い。弱気になっとったところに、やるだけやってみてくれとえらい剣けん幕まくであんたにゆわれて、間か一いつ髪ぱつ、医術士の精神を思い出した。年ばかり食って、情けない話よな」

「いえ……わたしは、べつに……」

「謙けん遜そんすることはない。あんたは治ち療りようの間、ヴィンセントさんを何度となく元気づけてもくれた。もう一人の、おなごの──なんといったかな、エドガーさんか。やれ、魔術士というやつは、マナだのカナだのおかしな名前がいくつもあってわけがわからんが、あっちのほうもどうか一いつ緒しよにとあんたがゆわなけりゃ、ここに運びこみはしなかった。魔術師マギマガロさんもあんたには感謝しとったよ。そりゃそうだろうて。何しろ、あの御ご仁じんにとってみれば、あんたは弟で子し二人の命の恩人なわけだからな」

真ま面じ目めにつきあっていると、老医術士の話はいつまでも終わらない。それはもう学習していたから、あとは黙だまってやりすごし、時機を見計らって老医術士の診しん療りよう室しつを辞した。

このホーエングラム診療所には、所長の老医術士マフ・ホーエングラムの他ほかに、見習いの医術士が何人かいて、入院患かん者じやを収容するための病室も五つある。今、四号室にいるはずのエドガーとは一度も顔をあわせていない。彼女も──そう、エドガーが女性だということは、ホーエングラムに聞かされて知ったのだが、彼女も会いたくなどないだろう。そもそも、なぜヴィンセントは、藍色の炎につつまれた彼女を縛氷獄で救おうとしたのか。まったくわからないし、わかりたくもない。理解する必要もないと思う。

エドガーはヴィンセントを殺そうとした。ヴィンセントはそんなエドガーを助けた。その事実は当事者二人だけのものだし、その意味は二人がそれぞれ受け止めればいい。あとは勝手にやってくれればいい。僕には関係ない。これで──今日で、本当に、完全に、関係なくなる。

五号室。

ノックをせずに入った。

ヴィンセントはベッドの上で上半身を起こして、窓のほうへ顔を向けていた。顔色はだいぶいいようだが、もともと痩やせていたのに、以前よりさらに肉が落ちた。火傷はもう治っているものの、焼け焦げた毛もう髪はつはいったん剃そり落とされたので、まだ丸まる刈がりに近い。なんだか、怪我人というよりも、病人みたいだ。死病に冒おかされて、一人で静かに終わりの時を待っている。そんなふうに見えて、一いつ瞬しゆん、心が揺ゆらぎそうになった。

「マリアンヌ」

ヴィンセントがこちらに向きなおった。その面おもてにほっとした表情が浮うかんでいる。

返事をしそうになって、こらえた。

「──マリアンヌ。どうしたのだろう。きみだということはわかっている。ぼくの目はこのとおり見えないが、きみを感じることはでき

るのだ」

　治療中、ヴィンセントは何度も危き篤とくに陥おちいった。一いつ般ぱんに、火傷は体表面積の三割に及およぶと生命の危機にさらされるというが、ヴィンセントの場合は四割にも達し、循じゅん環かん系だけでなく、複数の臓器にも障害が起こって、脳まで深刻な損傷を受けかけていた。手を握にぎって声をかけてやってくれと医術士に求められ、応じた。あの状じよう況きようで拒きよ否ひできる者はいないだろう。あくまで、仕方なく、だ。やりたくてやったわけじゃない。まあ、一応、恩人だし、雇やとい主でもある。義理というやつもあるから、屋や敷しきの仕事をこなしつつ、毎日見み舞まいにきた。意識が戻もどってからは、話くらいはした。お加減はいかがですか。そうですか。お大事になさってください。それでは、また明日おうかがいします。

「マリアンヌ」

　でも、もうそろそろいいはずだ。

「──マリアンヌ。なぜ答えてくれないのだろう。ぼくはひどく不安だ。ぼくは……こうして臥ふせっているせいだろうか。初めてなのだが、一人でいることがとても苦痛のようだ。気がつけば、きみを待ちわびている。ぼくはいったい……どうしてしまったのだろう」

　知らないよ。

　知ったことじゃない。

「マリアンヌ。お願いだ」

　やめて。やめてよ。やめて。聞きたくない。聞きたくないんだ。

「ぼくのそばにきてくれないだろうか」

「いやだ」

　冷たく言った。

　一つ深呼吸をした。

「──やめてくれない？　マリアンヌ、マリアンヌってさ。そんな名前で、僕を……僕を呼ばないでくれる？」

「僕……？」

「ああ、そうだよ。僕の名前は違ちがう。それは僕の名前じゃない。あんただって似たようなものだろ。なんだか知らないけど、魔術士は名前をいくつも持ってるじゃないか。それと一緒だよ。マリアンヌってのは、僕がもう捨てた名なんだ。いやなんだ。嫌きらいなんだ。その名前で僕を呼ぶな」

「……だが、マリアンヌ……」

「呼ぶなって言ってるだろ？　なんでわかんないのかな。ばか？　それに、勘かん違ちがいしてるみたいだからはっきりさせとくけど、僕は女の子じゃないから」

「な──」

「女じゃないって言ったんだよ。僕は言ってないよね？　一言も。僕が女だなんて。まあ、最初はそう思われてるほうが都合がよさそうだったからさ、黙ってたんだけど……いいかげんね。我が慢まんの限界ってやつ？　本当は、ずっと、ずっと……気持ち、悪くて」

「……そう、だったのか……？」

「あんたの目が──目が、節穴だからさ！　節穴どころか、あんたは目が見えないんだから！　だから──わかるはず、ないんだよ。所しょ詮せん、あんたなんかには。騙だまし──やすくてさ。いいカモだったよ。世間知らずで、金の価値も知らなくて──何も、知らなくて、結構稼かせがせてもらったからさ。もう……いいかなって、ね。だって、あんたときたら、もう僕にベタ惚ぼれでさ。動けるようになったら、いつ襲おそわれるかわかったものじゃないしね。冗じよう談だんじゃないよ。気持ち悪い。気持ち──悪いんだ、マジで」

「……きみは……泣いているのか？」

「泣いてなんかない！　ふざけるな！　どうして僕が泣かなきゃならないんだ！」

　僕は袖そでで顔をぬぐった。この服はヴィンセントがアール・ベルアノンに作らせたものだ。女性用だけれど、男装風で、旅をするのには悪くない。それら衣類や生活道具など、荷物はもうまとめてある。今までの給金は王立銀行に預けてあるからいいとして、ヴィ

ンセントの書しよ斎さいにあった現金も盗ぬすんで懐ふところに入れた。護身用に使えそうなナイフも背負い袋ぶくろにつめてある。行き先もだいたい決めた。



首都エルデン。

　僕はあの街に帰る。

　忌いまわしいあの街へ。

　すべてを失った街へ。

　そこで、僕はとりもどす。

　僕自身をとりもどす。

　僕は生きる。

　一人で生きてゆく。

　必ず生きていってみせる。

「さよなら、魔術師マギヴィンセント」

　僕は目を閉じ、耳を塞ふさいで、駆かけ去る。もう彼の姿を見たくない。彼の声を聞きたくない。彼のことなど忘れてしまおう。僕は一人で生きてゆくんだ。一人きりで生きてゆくんだ。

　そうすれば、誰だれのことも裏切らずにすむだろうか。

　誰も傷つけずにいられるだろうか。

a coda

「やっぱしアレやな。メシは大勢で食ったほうが百倍うまいな。ガッハハハハハ！」

「それはまあ、たしかにまったくそのとおりだなって、僕も思うんだけどさ……」

　マリアローズは向かいのカタリを一いち瞥べつして、テーブルに目を落とした。サフィニアが持ってきてくれた鍋なべの中で、牛肉や野菜やトーフ、シラタキなどがぐつぐつ煮にえている。おいしそうだ。実際、おいしいし。問題はテーブルのあちこちに散らばっている小さな白い物体だ。

「食べながら喋しやべってご飯はん粒つぶ飛ばすの、やめてくれる？　汚きたないから。魚菌きんに汚お染せんされちゃったらどうするんだよ。責任とってくれるわけ？」

「セーキニィーン？　わしの辞書にはそないな言葉、載のっとらへんなあ。食いもんか？」

「あ、ごめん。ついフツーに人間相手みたいな感覚で話しちゃって。そりゃわかんないよね。人間じゃないもんね」

「これでもいちおう最低半分は人間じゃボケェッ！」

「え。嘘うそ。半分も？」

「うっ、よ、四分の二ぃくらいは……」

「ソれ・半分。脳モ・半分」

「わかっとってゆうたんじゃダァホ！　せやったら、ええわ、せめて三分の一──」

「……それは……ずいぶん大きく……出ましたね……」

「大きぃ出て悪いんかい！　おお、サフィニアァッ！　ちゅうか、どこが大きいねん！　わかったわ、ほんだら、五分の二や！　あろ？　増えとる？　五分の二ぃーイコール十五分の六やから、三分の一は十五分の……もうええわ！　四分の一や！　こんくらいええやろ！」

「いいっていうか。きみが四分の一って言うなら、きっとそれくら

いなんだろうね」

「よっしゃーッ！　どや！　見事に勝ちとったでえ、四分の一ィィッ！　それなのに、なんでやろ。えらい悲しいんや。せつないわ。ちゅうか、むなしいわ……」

「わたしも、聞いててかなり情なしやけないわ……」

「うぅ、うぐぐぐぐぐぅ……」

「ま、そんなに落ちこまないでよ。なんかもう、すっごいうざいから」

「マァァリアロォォズ！　お前じぶんがそもそもの原因やろが、お前じぶんが！　ちゅうか、うざいて！　ナンボなんでも、そういう言い方はないやろ！」

「──そう、だね……」

　マリアローズは静かに箸はしを置いた。

　カタリが口を尖とがらせて眉まゆを八の字にした。

「な、なんやねん、いきなり」

「ごめん。僕が悪かった。ちょっとだけだけど。謝るよ。許して」

「お、りょ？　な、そんな、な、べつにわしは……」

「うん。そうだよね。やっぱり僕はちっとも悪くないよね。じゃ、そういうことで、謝罪撤てつ回かい。全面的にきみが悪い」

「アホか！　なんでそうなんねや！」

　唾つばを飛ばし、顔を真っ赤にしてつめよってくるきみは、気づいているだろうか。

　いつもではないけれど、たまに怖こわくなることがある。何気なく口にした言葉の一つ一つが、態度が、たとえばきみを、仲間を傷つけるかもしれない。知らずに傷つけているかもしれない。

　不意に胸がぢくんと痛んで、謝ってみせたら、カタリが妙みようにうろたえて、安心する。おかしそうに笑ってくれているユリカ

や、サフィニアや、穏おだやかに微笑ほほえんでいるピンパーネル、スキヤキの肉ばかりをもりもり食べているトマトクンを見て、ほっとする。

　誰も傷つけたくないんだ。誰よりも、僕は自分自身を傷つけたくない。傷つきたくない。

　あのころから変わっていないんだ。

　相変わらず、僕はずるい。

　卑ひ怯きようで、臆おく病びようだ。

「マリア」

　ユリカが顔をのぞきこんできた。

「ほら、しょこのお肉、煮えてるわよ。どんどん食べないと」

「──あ、うん」

「ピンパーネルも、ちゃんと食べてる？　取り皿じやらの中、お野や菜しやいばっかりじゃない」

「はイ……」

「ナッハハハ！　何を隠かくそう、わしがよそったったんや！」

「もう、どうしてしょんなことしゅるの？　こどもじゃないんだから」

「いい・デス。あとデ」

「あ、あとで、なんやねん。仕返しかァッ！　仕返しするつもりなんかァァッ！　あかんでえ、それはあかん！　お互たがい大人なわけやしな、ここは理性的に、話しあいで解決せな！」

「……カタリさんと、では……話にならないような……」

「話に実がないんだよね。徹てつ底てい的に。だから、いくら話しても無む駄だっていうか」

「何ゆうてんねん、実ぐらいあるがな！　ぷりっぷりやで！　ちな

みに、赤身か白身かっちゅうたら、そら白身や！　上品で淡たん泊ぱくな味わいながらも脂あぶらのっててな！」

「身じゃなくて実だよ。実。わかる？　だいたい、言ってるそばから、信じられないくらい実がなさすぎだし。きみの話」

「正直な。わしもそう思わんでもない……たまーに、やけどな……」

「まあ、いいんじゃないか」

　トマトクンが牛肉をのみこむように食べて、首の骨をボキボキ鳴らした。

「内容のある話ばかりでも疲つかれるだろう。くだらなくてもいいさ。どんなことでも、遠えん慮りよしないで言いあえるってことが大事なんだろうしな」

「せやけど、遠慮しなさすぎっちゅうのもな。どうかと思うけどな。昔からゆうやろ。親しき仲にも礼れい儀ぎありっちゅうてな！」

「もし、お前の心に何かが突つき刺ささって、それが本当に痛かったら――」

　トマトクンはまた牛肉を食べた。

「とりあえず、痛い顔をしてみせればいい。それで誰だれも気づかなかったら、泣き叫さけぶんだな。そこまでしても無視するやつは、少なくともこの中にはいないはずだぞ」

「ホンマかぁ？　どうもアレやけどなぁ。日ひ頃ごろのわしの扱あつかい考えるとなぁ……」

「いないよ」

　さらりと口をついて出た。

「バカじゃないの。いるわけない――」

　気がつくと、皆みなの視線がマリアローズに集中していた。耳や頬ほおが熱くなった。

「……って、僕は思うけど。みんなだって、そう思う……よね？」

「はイ」ピンパーネルは誰よりも先に、似合わないくらい力強くうなずいてくれた。

「いないと思うわ」ユリカの笑え顔がおはお母さんみたいだった。

「……いません……絶対……」サフィニアはしっかりとマリアローズの目を見つめてくれた。

「ふむぅ……」カタリは腕うで組ぐみをして首をひねった。「せやったら、問題はアレやな。わしの場合、なんや心にグサグサ刺さりまくりよっても、そんな痛ないっちゅうことやな。むしろ、微び妙みように快感っちゅうか」

「……変態、ですね……」

「気持チ悪い・デス」

「ちゅっこまれしゅぎて、とうとうおかしくなっちゃったのかしら」

「──てゆうか、トマトクン！　お肉食べすぎ！　いつの間にかなくなっちゃってるし！」

「む？」

「……ワタシ、ほとンど・食べテ・ナい……」

「あ、あの……まだ、お肉は、冷蔵庫の中にあるので……」

「おっしゃ、ほんだら、わしがとってきたるでえ！」

　カタリが椅い子すを蹴けって駆かけだすと、白い巨きよ大だい生物を従えた巨きよ漢かんがぬっと居間に入ってきた。

「ぬう……！　何やらよい匂においがすると思ってきてみたら、スキヤキではないか！　拙せつ僧そうをさしおいて、スキヤキとは！」

「きゅう」

「そもそも、スキヤキとはだな──」

「や、蘊うん蓄ちくはいいから。だいたい、ユリカがわざわざ祭さい壇だんまできみを呼びにいってくれたのに、何言ってもうんともすんとも答えなかったっていうから、僕らだけで始めたんでしょ」



「まったく記き憶おくにないが」

「しょんなに心配しなくても、今、カタリがお肉をとってきてくれるから。トワニングのぶんも、ちゃんとあるわよ」

「くう……」

「あ、きゅーのぶんもね」

「……お肉以外の具材も、持ってきたほうが……よさそうですね……」

「うむ。そうだな。このぶんだと野菜なんかもぜんぜん足りんな」

　見れば、トマトクンはあれだけあった牛肉を食べつくすだけでは飽きたらず、他ほかの具材をも全ぜん滅めつさせようとしている。仕方ないので、マリアローズはカタリを追った。サフィニアとユリカもついてきた。僕は卑怯で、臆病だ。傷つきたくないから、いっそ一人きりで生きてゆこうと心に決めた日もあった。でも、みんなと出会って、いろいろなことがあって、こんな僕でも自分の中に小さな勇気を見つけることができた。それを決して捨てまいと思う。たとえどんなことがあっても、前を向いて歩いてゆこう。

『薔ば薇らのマリア Ver2 この歌よ届けとばかりに僕らは歌っていた』了

あとがき

　僕のところにかかってくる電話は、たいてい仕事がらみか、間ま違ちがい電話か、無言電話です。そう、無言電話が結構多いのです。ときには数日おきにかかってくることもあります。ナンバー・ディスプレイなどというしゃれたサービスの提供は受けていないので、同じ人か別々の人かはわかりません。でも、パターンが決まっていて、僕が「はい、もしもし」と言うと、数秒後に切られてしまいます。「はい、もしもし」だけです。名乗ってもいないのに、切られてしまうのです。あなたは誰だれですか。たったそれだけのことを尋たずねるための時間さえ、僕には与あたえられません。仕方なく、僕は想像するのです。年ねん齢れいはいくつくらいだろう。性別は。何をしている人だろう。何が目的で僕なんかに無言電話をかけてくるのだろう。いや、目的なんてないのかもしれない。ただなんとなく、たまたま僕の電話番号をプッシュしただけかもしれない。でも、ただなんとなく無言電話をかける人なんているのだろうか。暇ひまなときはそんなことを考えて時間を潰つぶしています。「で？」と訊きかれると、とても困ってしまうので、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ無限大の愛と感謝をこめつつ、『VII』での再会をお約束して、さっさと筆を置くことにします。あとがきは苦手です。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア Ver2

この歌うたよ届とどけとばかりに僕ぼくらは歌うたっていた

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア Ver2　この歌よ届けとばかりに僕らは歌っていた』平成19年2月1日初版発行

平成20年9月25日6版発行

BOOK☆WALKER